
Dark plant

神崎ミア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dark plant

【Nコード】

N3438M

【作者名】

神崎ミア

【あらすじ】

機械人形が生活をとみにする世界。ある時を境に人形は暴走を始める。凶暴化した人形を駆逐するための組織、レイディアンの軍人である主人公は己が出生の秘密を知る…。

プロローグ

真っ白な病室は、清潔感を感じさせた。

女はじつと窓を見つめて、自分の胸に抱いた子供をときどきあやすように揺すった。

病室のドアが開く。大きな花束を抱えた男は、女のすぐ側に腰掛けて花束を渡した。

「おめでとうございます、あいつも喜んでました」

「そうなの？ふふ、まああの年で初めての弟ですものね」

「名前を考えたそうですよ」

「あら、どんな？」

「この子の名前は…」

強い風が流れ込む。新しい命に命名された瞬間、母親はふっと目を細めて微笑む。

「いい名前…」

dark plant

新兵、リックは派遣された廃墟にて、迷子になっていた。

今回リックが任命されていた仕事は、この廃墟付近で凶暴な熊が出没することから

近隣住民の苦情を解決するという雑務だった。

兵士なりたてのリックは上官と二人組んで熊の捜索にあたっていた

が、枝分かれした道で別れてからというもの、すっかり迷子になってしまったのだ。

「もと来た道すらわからないよ…。」

途方に暮れたリックは無闇に歩き回るのをやめ、その場へたりこんでしまう。

肩に担いだ銃を下ろし、一応は熊を警戒して辺りを見渡した。もちろん、熊どころか人すらいない。

薄暗い林から時々カラスが声をあげるぐらいだった。

「俺、このまま死ぬのかな…。」

そうぼんやり呟いた時、少し高い声が、それに答えるようにして返ってきた。

「そうなれば、末代の恥だな」

リックは聞きなれないその声に耳を澄まし、おどおどと立ち上がった。

声すらするものの、姿は見えない。

「誰だっ!？」

古いライフルを構え、リックは瓦礫を足で避けながら少し体制を低くした。

心臓は実戦に不慣れなため、高く打ちつけている。

「姿を見せる!」

そう叫んだ瞬間、リックの喉元に冷たい何かが押し付けられた。廃墟の中は薄暗いので、見えはしないがリックは恐らくナイフだろうと推測した。

持っていた銃を捨て、リックは大人しく両手を挙げて背後を確認しようとして顔を上げた。

「背後をこつも取られるなんて、鍛錬が足りん証拠だ」

すつとナイフが離され、掴まれていた両腕もあっさり開放され、リックは驚いてふりかえった。

「それとあまり叫ばん方がいい。敵に自分の場所を教えているようなものだ」

「えっ？」

ぽっかりと穴があいた廃屋の天井から、月明かりが差し込む。

リックの背後を取って、両手を組んで立っていた人物は年齢にして十五、六。

そこそこ身なりのいい格好をした、少年であった。

「どうした？」

「き、君っ？どうしてこんな廃墟に……いや、それ以前にさっきの一体何だい？」

「僕はお前が阿呆みたいな顔をしていたから背後にまわってみただけだ。もう少し軍人として自覚を持ったほうがいいぞ」

ツンとして返す少年の態度にも不服だったが、何よりリックは軍人である自分が民間人らしき少年に易々と背後を取られて降伏させられるなど、返す言葉もなかった。

しかしながら、少年はこの地域に詳しいのではと思いつき、憤りを

抑えて少年に尋ねた。

「あのっ、君はここら辺の子？この先の枝分かれした道は分かる？」

「いい質問だ」

「えっ？」

「使える物は極力感情を抑えてまでも使うべきだ。したがってお前の質問は今の状況において正しいといえるな」

「えっと…そう？」

「自分の危機にはプライドを捨てるべきだ」

何気取りかは分からなかったが、リックの考えをたやすく見抜いた少年は、上から下までぐるりとリックを見つめ、踵を返した。

「では、案内してやろう」

そう言ってリックに合わせるでもなく、少年は歩き出した。

ぽかん、と口をあけていたリックは、遠ざかっていく少年に駆け足でついていった。

一話

「お前は、どうしてこの町が廃墟になったか知っているか？」

少年突然の質問に、足場の悪い下ばかり注視していたリックは思わず足を止める。

もう一度リックが聞き返す間もなく、少年は同じ事を尋ねた。

「どうしてこの町が廃墟になったか…、分かるか？」

「いや、知らないけど…ねえ、お前はやめてくれる？俺は君より年上なんだしさあ…」

「じゃあ、名前を教えてください」

「俺はリック。リック・ウィーゲル。君は？」

「…僕は、ロイル…」

「そうか、改めてよろしく」

リックはさわやかな笑顔と共に、少年、ロイルに右手を差し出した。ロイルは暫くその右手を見つめていたが、やがてすぐに背をむいてとげとげしく返した。

「僕はそうゆう馴れ合いが嫌いなんだ」

リックは一度差し出した行き場のない右手をそつと下ろし、生意気なガキという言葉と共に唇をきゅっとかみ締めた。

「この町は、数年前最初に人形が暴走した町だといわれている。おかしい話だ人間が作ったものだというのに、未だに世の中は殺戮兵器の言いなりだ。」

ロイルがそう呟くのを、リックは感慨深く聞いていた。彼にもまた、思うことがあったのだ。

「…そうだよね、俺も両親を殺されたんだ…俺はいいところのお坊ちやんでさ、しかも長男だったんだ。ほら、そうゆう生まれの長男はなにかと期待されるんだ、それで仕方なく、軍人に…ねえ！」

リックはロイルの側まで駆け、片方の腕をやんわり掴む。

ロイルは嫌そうな顔をしてリックを見上げたが、腕は振り払わなかった。

「君、夢はある？」

「夢？」

「俺はね、あるよ。仇をとりたいんだ…両親の…。今回の任務が終わったら俺、レイディアンに入隊するんだ！」

「…正気か、お前」

「えっ？な、何でだよ？だってレイディアンは人形駆除の特殊部隊だろ？合ってるじゃないか」

「いや、そういうことを言っているんじゃない」

ロイルが言いかけた瞬間、廃墟に広がる林から、大きな叫び声が聞こえて二人はハッと息を止めた。

いくつかの発砲音が響き、リックは思わず体が震えた。

「サジユ曹長の声だ…！た、助けに行かないと…！」

「待て！リック！」

ロイルの制止を振り切り、リックは走り出した。肩に提げていたライフルを構え、銃声響く林を駆け抜ける。

ロイルは暫く啞然として立ち止まっていたが、すぐさまリックを追って走り出した。

一話

サジユは、負傷した右腕を庇いながらはぐれた新兵を捜し、藪に身を隠していた。

ライフルに弾を装填しつつ、サジユは辺りを見渡した。

薄暗い林には、昔この町に住んでいた何百もの人間の慰霊碑があった。

いまでも花を供えるものがあるのか、手入れされていて綺麗だった。しかし、サジユにとつては視界を遮るものに過ぎず、体制を低くしたままサジユは動き始めた。

当初は、熊の捜索だからと甘くみていた自分の誤った判断をサジユは後悔していた。

この林はもつと違う何かが隠れている。血がにじむ右腕をぎゅっと服で縛りつけ、サジユは息を殺して神経を澄ました。

微かに、草がざわめく音がする。

サジユは立ち上がって、向かい来る人影にライフルを向けた。

黒い人影は、サジユが銃を向けているとは知らず堂々と姿を現した。大きな月が出ているにも関わらず、林は鬱蒼としていて人物の顔が良く見えない。

サジユは視線を凝らし、徐々に近づこうとした瞬間、その人影を遮るようにすつと何か割り込み、サジユは思わずライフルを下ろした。

「ロ、ロイルくん？」

「…今、お前を狙っている人物を見つけた」

「えっ？」

「多分、お前の上官じゃあないか？銃を下ろせ、両手を挙げろ」

リックは半信半疑にライフルを地面に下ろし、両手を挙げた。

ロイルはリックが両手を挙げたのを確認し、自分も大きく両手を挙げる。

「ウィーゲルか？」

サジユは突然両手を挙げた人物をよく見つめ、

念のためライフルを構えたまま尋ねた。側には見ない少年が一緒だったが、

リックの情けない声を聞き、サジユは安心して肩を撫で下ろした。

「は、はいっ！サジユ曹長！ご無事で何よりです！」

「よかった、あまり別行動をしない方がよかったな、そっちの少年は？」

「あ、はい。この廃墟で迷子になっていたのを保護しました！」

すぐさま凍てつくようなロイルの眼光がリックに突き刺さったが、

ロイルはそのまま反論することなく無言で腕を組んだ。

「曹長、お怪我を…」

「あ、ああ。ここは思っていたより危険みたいだ。一度隊を組みなおして…」

「…そうも言ってる暇はないようだぞ」

ロイルがそう呟いた瞬間、林の木々を割り箸のようにいとも簡単になぎ倒し、

地響きを揺らして数体の人形が眼前に飛び出した。オートマタ

「に、人形！」

「いかな、私達には手におえん…、私が囿になるからお前達は早く…！」

そう言う間もなく、ロイルは自分の何倍のあるサジユを軽々飛び越え、

先陣切つて人形オートマタに切りかかった。

サジユは突然のことに驚いて一瞬動きが止まったが、慌ててロイルを追った。

「な、何しているんだ！君みたいな子供がかなう相手じゃないんだぞ！」

「ろ、ロイルくん！」

どこから出したのか、いつの間にか彼の両手は二本の刀が握られており、

まるで演舞を舞うような素早さで人形オートマタを切り付けてゆく。

サジユはやや混乱しつつも、ロイルのサポートをしつつ、リックに振り返った。

「おい、お前は援軍を要請にこの下の町に行くんだ！」

「で、ですが曹長、彼は民間人では…」

「だからだ、あの少年を怪我させるわけにはいかん、早く行け！」

「はいっ…！」

リックは何度か心配そうに振り返りつつ、近隣の町目指して走り出した。

ここから町まで結構な距離があったが、先ほど咄嗟に武器を捨ててしまつて丸腰の

リックには、こうする他なかった。

廃墟を抜けた先、門前に馬車が停めてあるのを見つけた。

リックは急いで馬車へと駆けていき、どうにかして町まで送ってくれないか

頼んでみることにした。

貴族の馬車らしく、従者がついた立派なものだったが、リックは躊躇なくドアを開いた。

「あ、ああ、あのっ、この下の町まで連れて行ってくださいませんかっ?!」

突然見知らぬ男がドアを開けたにも関わらず、中で座っていた男はうつすらと笑みを浮かべて

静かに尋ねた。

「どうか、なさいましたか？」

「俺の上官と民間人の少年が人形オートマトンに襲われていて、援軍を…！」

貴族らしい美しいいでたちの男は上品に笑みをたたえ、焦りきったリックに

シルクのハンカチを寄越した。

「民間人の少年は、生意気で、不遜な態度の少年でしょう？」

「えっ？」

「彼なら、放っておいても大丈夫ですよ…！」

「そ、そんな?! アンタ保護者? 子供が死んでもいいの catt?!」

「いいえ、何故なら…！」

三話

サジユは信じられない物を見たように目を見開いた。

足元で大破した人形オートマタを調べるロイルは援軍を待つことなく数体の人形オートマタをほとんど一人で片付けてしまった。サジユは改めてロイルをまじまじと眺め、尋ねる。

「君は、何か特別な訓練でも受けてるのかね？」

「勿論だ、僕は軍人だからな」

「ぐ、軍人？君のような子供が…！」

「一つ、言いたいことがある」

「な、何だね？」

あらかた人形オートマタを調べたのか、部品をばいっ、と投げ捨てたロイルはサジユを見つめて不機嫌そうに答える。

「僕はお前より階級が上だぞ」

「な、何を馬鹿なことを」

「本当だ。調べたければついてこい」

「一体どこに？」

ロイルは満面の笑みを浮かべて、切り立った岩の上にひょいっ飛び乗った。

「僕らがレイディアン要塞、アクアドームへ」

「ロイルくんが、レイディアンレディアンの軍人？」

レニは突然の来訪者、リックにここに来た経緯を説明していた。半信半疑のリックは、疑わしげにレイディアンレディアンの証明書に視線を走らせていた。

レニはロイルがここに、人形オートマトンの残党があると報告を受け、派遣されてきたことを説明した。実際に、人形オートマトンの残党は現れたものの、やはりリックはその全てが理解できず、
絶えずサジユのことが気がかりだった。

そんなリックの前に、ロイル達が現れたのはその数分後だった。

「よ、よくぞご無事で…！」

サジユを迎えたリックは、なんとなくサジユの雰囲気の変化に気づき、眉をしかめた。

押さえていた右腕は綺麗に手当てされており、表情はふてくされていた。

「どうかされましたか、曹長？」

「いや、何でもなし。遠路はるばる、ご苦労様です、レニ中尉」
「えっ？」

「いえ、そちらも任務ご苦労様です。私どもはこれからもう一軒任務がありますが、司令部までご同行なさいますか？」

「そうさせてもらおう」

リックは一人状況が理解できず、サジユとレニの顔を代わる代わる覗き込んだ。

ロイルはそんなリックを見つめ、やがて声を掛けた。

「お前、レイディアン入隊を希望しているんだってな」

「えっ、ああ、そう、だけど…」

「サジユ曹長、こいつはアクアドームまで同行させてかまわないか？」

「は？」

「ご意思のままに」

その言葉に、ロイルは薄く笑った。

「つまりは今の陸軍を入隊したばかりだが、クビだそうだ」

「えっ、ええ?!」

「これからよろしくお願いしますよ、リックさん」

ぼん、と景気よく肩を叩かれたリックは

夢のレイディアン入隊が叶い、なんとも複雑げに頂垂れた。

やっとなれたばかりの陸軍生活を突然たった一人の少年に解雇されたりツクの受難は、

これから始まりだった…。

第一章 栄枯盛衰の地

馬車は、大人三人と少年一人を抱え、苦しそくに軋み揺れていた。先ほどから会話の一つもない馬車の中は妙な空気に満たされており、慣れないリックは不安げにサジユの表情を窺うばかりだった。

ふと、今まで一言も話さなかったロイルが、思い出したように顔を上げサジユを見つめた。

「熊のことだが、任務の遂行を阻止してきたため僕が処分しておいた。もう一度部隊を向かわす必要はないぞ」

しれっとした態度で元々彼らが負っていた任務をこなしていたことを告げ、

再び腕を組み視線を落としたロイルを、サジユは複雑げに見つめ口を少し開いたが、またすぐに閉じた。

軍人としてのプライドを傷つけられたのか、サジユは苛立った雰囲気のまま

馬車に同行している。本当ならば歩いてでも世話にはなりたくなかつたろうが、

自身が怪我をしているのもあり大人しくしている様子だった。

「曹長、そんなに気を悪くしないでください、ああ見えてもロイルさんなりの気遣いなんですよ」

レニが、そんなサジユの心情を読み取り、そつとサジユに耳打ちする。

ロイルは少し不服そうにレニを見やったが、別段何を言うわけでもなく頭を下げた。

「いえ、めつそうもない…、しかしレニ中尉とその…ロイル殿はどうゆうご関係で？」

サジユが、自分に向けられた話を逸らそうと尋ねた質問は一瞬の静寂を生んだ。

もしや聞いてはいけないような事だったのかと、サジユが思わず口をつぐむと、ロイルが呆れたようにレニを見た。

「なんだ、今の奇妙な間は。僕はこの男とパートナーなんだ。」

「いやあ、わたくしから口にするのはおこがましいかと思ひまして…。」

「パートナー…？」

少し和らいだ空気に、リックは馬車に乗ってから初めて声を上げた。レニはふつと笑んで、丁寧な答える。

「私達レイディアンのメンバーは、常に二人一組に分かれて行動しているのです。もつとも、よほど大きな仕事ですと何組か組んで行動を取りますが、基本は一組です。私とロイルさんがそうであるように」

「でも、レニさんはあの時馬車に居たじゃないですか」

「ええ、ロイルさんが優秀っていうのもあるんですが、この二人一組の班には意味があるんです。もう一人がもしも死んだら、その死体を回収する仕事があるからです」

「えっ？」

リックは思わずロイルを見る。

組んだ腕に顔をうずめて表情は見えないが、おそらく無表情だろうとリックは思った。

自分の見た目より幼い少年が、先陣に出て死を覚悟しているなど、情けなく感じた。

「まあ、心配なさらなくても。ロイルさんならきつと素晴らしいパートナーを見つけてくださいますよ」

「…レニ」

「あ、あのっ、何で死体を回収するために人が必要なんですか？翌日回収したら…」

「ふふ、まあ今全て勉強しなくとも、嫌でも知らされますよ。さあ、見えてきましたよ。」

「イヴンか…」

馬車は、決められた轍に車輪を走らせ、ゆっくりと目的地の町、イヴンの錠前で止まった。

ロイルとレニは馬車を降り、中の二人に返った。

「リックさんはここに居て下さい。曹長は先に司令部まで送って行きますので」

「えっ？俺も連れて行って下さい！俺だって軍人ですから！」

「済みませんが、中には入れません。この町は今、伝染病が流行っていますので」

「ですが…」

ロイルはため息一つ、レニの肩を叩き踵を返した。

レニはロイルに何を言われたわけでもなく納得すると、

リックに向かった。

「では、これは命令です。ついてきた時は厳しい罰を与えます」

「そん…レニさん…」

「…返事を」

「…イエス、サー」

力なく返事したリックを一瞥し、もう背中が見えないロイルを捜してレニは走り出した。

残されたリックは、門の柱を強く拳で殴りつけ、その場に座り込んでしまう。

「くそっ、あんな子供に何ができるっていうんだ…」

二話

かつて、この地は貴族が避暑に訪れる行楽地であった。

冬はコテージを利用しにくる登山客も多く、イヴンはいっしょに憧れの町として有名となり

栄華を誇っていた。

そんなイヴンが衰退し始めたのは、避暑に訪れていた貴族の一人が伝染病に罹ったのが発端となり、病気は瞬く間にイヴンを侵食していき、

繁栄した半月ほどを思わせないほど、荒れ果てた。

あまりに死ぬ数が多く、いっしょにイヴンには数え切れない骸が積みあがり

いっしょにイヴンは死の町として、カラス以外寄り付くものはなかった。

ロイルは荒れた町並みを一望し、目を細める。

外部から全く人が来なかったイヴンは、異色な客人をじっとした視線で追っている。

ものすごい死臭が鼻を突き破り、脳をも侵す勢いで充満する。

片隅にはウジをついばむカラスがひしめき、奪い合い、事のすごさを物語っていた。

「ここに、コアが埋まった人形があると、情報が寄せられました。」
「しかし酷いな。こんな所で調査した我が軍の情報部隊は流石の腕だな。」

ロイルとレニは平然とした顔でイヴンの調査を開始し、

二人は今回はリックがいることから、調査を二度に分けて行うことにした。

「コアの人形の特徴は、やたらに綺麗な外見をしたやつだ。最近のは精巧で人と区別しにくい。気をつけるよ」

「はい、ロイルさん」

しばらく歩いたところで、町は大きく開けた場所になる。

その中心に大きく構えた彫刻には、イヴンは永遠にと刻まれていた。ロイルは彫刻を見上げ、刻まれた文字を指でなぞった。

「永遠…か。皮肉だな」

「ロイルさん、向こうは行き止まりみたいですよ」

「よし、なら向こうを少し見て回って、今日はもう引き上げよう。足手まといがいることだしな」

そうロイルが歩みを進めた途端、カツン、とロイルの足元に小石がぶつかる。

咄嗟に刀を構えたロイルは、背後からおそるおそる小石を投げた人物の首元に刃を向けた。

「ロイルさん、」

「お前は…」

ロイルが刀を向けた先にいたのは、お世辞にも綺麗なとはいいがたい人形だった。

からだのあちこちを破損し、内部の精密機械をさらして、立っているのがやっつとだというばかりの風体で、ロイルをにらんでいた。

「ジャンクか、僕はジャンクを手にかけるほど残虐じゃあない、失せる」

壊れかけの人形に、ロイルはもう一度背中を向ける。
しかし人形はこりずにその背中めがけて小石を投げた。
暫くは我慢していたロイルも、我慢しかね、足を止めた。

「聴覚機能も破損しているのか？おい、」

「ロイルさん、あまり相手になさらないほうが…」

「ジャンクに虚仮にされて黙っているだと？おい、」

人形はロイルが足を止めたのと同時に投石をやめ、ロイルをじつと見つめた。

ロイルは何か意図があるのかと、ゆっくり人形に近づいていった。

「お前、名前はあるのか？」

ロイルの言葉は分かるのか、人形は首を振る。

レニはロイルの顔を心配そうに見つめていたが、ロイルは何となく人形の面差しが知り合いの少女にしている事が、気がかりだった。
少女の人形は、ロイルの手を取り、指で文字をなぞった。

「わたしたちをほっといてください？」

「…やはり他にも人形が^{オートマタ}」

「音声機能が損傷しているのか…。安心しろ僕はお前たちのジャンクには興味がない」

しかし、何が納得いかないのか、少女のような人形は首を振るばかりで

ロイルの腕を離そうとしなかった。

レニとロイルは顔を見合わせ、仕方なく一度帰還するべく、少女に直った。

「なあ、僕達はもう帰ることにした。だから大人しく離すんだ」

少し考えていた様子の少女は、ゆるく指を離し、ロイルを見上げた。

「…じゃあな」

ロイルは少女の頭をなで、元来た道に戻ろうと歩き出した。

三話

リックは一人、崩れた城壁の前にもたれかかり何時間と帰還しない二人を待っていた。

足元に転がる小石を蹴り、リックは本日何度目かのため息をつく。リックが蹴った小石は浅い水溜りに波紋を広げ、その微かな音のみがリックの耳を通過していく。

しかも、司令部に向かった馬車が到着することもなく、退屈したりツクの胸には

レニとロイルへの疑心が渦巻いていた。

もし、ここに待機させているのは嘘で、自分はここに置き去りにされたのではないだろうか。

そうすれば自分がああ命令を守っている必要はないのでは。そう考え始めた。

一度疑心してしまえば、なんとなく人の心にはその考えが巻き付くもの。

リックは覚悟を決め、イヴンの門をくぐった。

ゆっくりと歩くうち、耐え切れないほどの腐臭がまず、鼻についた。思わず袖で鼻を覆ってはみるが、全く役目を果たさないほどの強烈な臭いに

少しばかり後悔し始めたリックだったが、その真相を確かめるべく、確実に一歩一歩踏み出す。

思わず気を失いそうな自分を叱咤し、両手は硬く握られていた。

歩くうち、リックは町の開いた場所に差し掛かり、その中心の彫刻の側に、腰を下ろして一息つくことにした。

(それにしてもすごい町だな…)

人間の姿はない。

廃屋の上を我が物顔で過ぎ去るカラスが、時々リックを見下ろして行っっては

すぐ見えなくなる。

足元には肥えてふてぶてしい表情のねずみが走って行くなど、

ロイルが言うように伝染病がいつ襲い掛かってもおかしくないほど衛生状態は最悪だった。

しかし、肝心のロイル達の姿が見当たらない。

やはり置き去りにされているのかと大きく項垂れたその時リックの眼前に大きな影がかかった。

「ロイル…」

人の気配に気づいたリックは、ロイルが来たのかと急いで顔を上げた途端、

見上げた人物に小さく悲鳴をもらしてしまふ。

「お前…、あのチビと男の仲間か？」

身長、二メートルはある大男。

がっしりとした体系に、くぼんだ頬と目。

まるで岩のような出で立ちに、リックは言葉が出なかった。

「来い」

リックの返事を待つことなく、男はリックの胸元を強く引き寄せリックを肩に担いで歩き出した。

意識が薄れる中、リックは自分の行動の軽率さを反省して、呟く。

「ごめん…、ロイルくん…」

門前まで戻ってきたロイルは、通信機で仲間に馬車を呼んでもらうよう要請をしていた。

日は少し傾き、辺りの雲を一面オレンジに染めている。

レニは見当たらないリックを捜し、その辺を歩いていたが、呼びかけても

姿が見えないことに、疑問を抱き始めた。

「僕だ。馬車を一台頼む…何？知らんランガーにでも頼め」

「…ロイルさん、ちよつといいですか？」

「何だ、今頼んでいるからお前はあいつを捜して…」

「その、リックさんが行方不明なようです…」

「何だと？」

その言葉に思わずロイルは受話器を置いてレニに返った。

困惑した様子のレニに、ロイルは舌打ちする。

「ええい、面倒なやつだ。恐らく命令を無視して探検ごっこさなかだろつが、あいつはどうやら方向音痴らしい」

「捜しますか？」

「お前はここに居てくれ。僕が捜してくる。あと、トレストウーヴ

エにもう一度連絡してくれ
「分かりました」

レニが通信機に手をかけるのを見てから、ロイルは再びイヴンの中へ走り出した。

薄暗いイヴンは生き物のように濃い霧を発生させ、招かれざる客を迷い込ませるように深く闇に包まれていた。

四話

「ウイーゲル、おい、返事をしろ！」

辺りは、先ほどまでは無かった濃霧に包まれていた。門前で待機していたはずの新兵、リックを捜して歩き回っていたロイルは、その視界の悪さに搜索を阻まれていた。

霧の中、無闇に歩くのは戦場であるこの場所では死を連想させたが、それも仕方のないこと。

ロイルの搜索の打ち切りは、方向音痴のリックの死を招く。

しばらく歩いた所で、ロイルは再びあのモニュメントがある場所まで来たことに気づいて足を止めた。

「ウイーゲル！」

返事は無かった。

先ほどまで、いやに静かだったイヴンの町は、霧の発生とともに何かざわめいているように思える。

それは明確な音ではなく、心理状態を不安にさせるような得体の知れないなにかだった。

ロイルはふと、足元に何か光っているのに気づいて、しゃがみこんだ。

拾い上げると、それは支給される見習い兵士の制服のボタンだった。メッキが少しはげたその安っぽいボタンを握り、ロイルは言い知れない不安を抱えた。

「これは…、陸軍の紋章…」

陸はライオン。雄雄しいその姿が刻まれたボタンをポケットにしまい、ロイルは再び走り出した。

リックは、鈍い痛みを覚えて体をゆっくり起こした。

全身を襲う倦怠感は、自分がどこにいるのかという感覚を麻痺させていたが、

次第に冴えてきた頭が、急速に身の危険を知らせていた。

リックは慌てて立ち上がるつもりだったが、どうやら両手を拘束されているようで

上手く身動きが取れなかった。

部屋は薄暗い。リック以外の人間の気配は感じなかったが、荒れ果てた室内は牢獄のようだった。

柵格子が目の前に広がり、申し訳なさそうに小さな便器が崩れて側に転がっている。

強い嘔吐感に苛まれたリックはその場に身を屈めて吐瀉してしまった。

「…ここは一体何処なんだ…？」

ふと、格子の向こうから小さく会話が漏れていた。

リックはすぐさま自分を連れ去った男の声だと気づき、息を殺して会話に耳を澄ました。

「それじゃあお前は、何も見てないんだな」

相手の返事はない。

恐らくは返事をしているのだろうが、リックの耳には聞き取れなかった。

「仕方ない。様子を見るんだ。お前はあの男を監視しているんだ、いいな」

しばらくして、階段から誰かが降りてくる足音が聞こえ、リックは咄嗟に

気絶したままのふりをして背中を向けた。

じっとしていると格子が開く音が聞こえ、背中に何者かの気配を感じた。

どうやら先ほど、リックが吐いてしまったものを淡々と片付けているようだった。

リックは思い切って声を掛けた。

「あ、あのっ」

背中を向けていたため、表情などは分からなかったが、驚いたらしくたわしを落とす音が微かに響いた。

「俺、ただあこに居ただけなんだ。なあ、帰してくれないか。あんな達には何もしない」

返事は無い。

作業を再開したらしく、床をこするたわしの音が再び響いた。リックは会話を止め、どんな人物がいるのか確かめようと顔を逸らすと、

それに気づいたのか、バケツを持ち上げ背後の人物は足早に牢獄から出て行ってしまった。

辛うじて見えた小さな背中をぼんやり見つめて、リックは綺麗になった床に視線を落とした。

「…子供…？」

五話

しばらく歩いていたロイルは、霧の奥に光を見つけて身を屈めた。このイヴンは随分前に伝染病が蔓延してからは人が住んでいなかった。先ほど出会った少女以外に人形は見かけなかったが、万が一と瓦礫に隠れたロイルは、現れた人物に息を飲んだ。

(なんだあの男は…)

片手にランタンを持った男は、巨軀で霧を突き破って現れたようにずっしりとした両足を踏みしめ、何かを探るように歩き回っていた。

どうやら人を捜している風だったため、尾行が難しく、しばらく動向を追っていたロイルは更に隠れて男を監視した。

男はあらかた歩き回ると、来た方向へとゆっくり帰ってゆく。数メートル距離を置いていたロイルは不審なこの男の後をつけ、すばやく走り出した。

男は建物の入り口で周囲を気にして振り返り、ロイルに気づくことなくその建物に入っていった。

男の死角になりそうな高い屋根の上からその様子を窺っていたロイルは、一つの確信に至り、屋根から飛び降りた。

「あの男、ウィーゲルの所在を知っていそうだな…」

落ちていた白い布をじっと見つめて、ロイルは小さく呟いた。

帰宅したりジリアは、愚鈍なオリビアの行動にまず、腹を立てていた。

普段からオリビアの行動はゆっくりで、自分より体の小さいオリビアがこうものろまであることが、リジアには我慢ならなかった。持っていたランタンの火を消し、行方をくらませたオリビアをリジアは吠えるように呼びつけた。

「オリビア！このろまめ…！一体何処にいる?!」

おどおどと荒れきったキッチンから顔を出したオリビアは、機嫌のすこぶる悪いリジアに怯えながら室内に入った。

「おい、お前！一体いつになったら俺の服を直すつもりだ？三年前から穴が開いたままだ！今日はいい布が見つかったから直しておくように言っただろっが！」

オリビアはただ頷いているだけで、リジアの怒りの歯止めにはならなかった。

よほど腹が立ったのか、近くにあった小さな椅子は、リジアの腕が振り下ろされ、粉々に塵となった。

「貴様もこうなりたくなかったら、すぐに、今すぐ取り掛かるんだ！」

オリビアは何度も頷き、破れたリジアの服と、新しい白い布をひったくり

再びキッチンへと姿を消した。

あらましを窓からのぞいていたロイルは、しばらく腕を組んでリジアの動きを窺っていたが

そのままリジアは床に寝そべり、動かなくなった。

オリビアと呼ばれていた少女。その姿にロイルは見覚えがあった。

（勝手口は向こうか…）

そっとその場から離れたロイルは、キッチンを目指し、その場を後にした。

オリビアは言いつけ通り、リジアの服を裁縫していた。

視力が著しく低下していたため、その作業は困難を極めていた。

針に糸はまともに通らず、縫い目はがたがた。完成までは時間がかり、歪であった。

ロイルはゆっくりと窓から降り立つと、そっとその少女の背後に回り、刃物を突き立てた。

「お前の音声機能が損傷しているのは知っている。おとなしくしろ」

体をこわばらせるように突っ立ったオリビアの耳にそう囁き、ロイルは刃物をしまつて少女に向かった。

「どうしてあんな男の言いなりなんだ、オリビア」

名前を言われて、オリビアは咄嗟に後ずさつて背中を打ち付けた。名前は極力関わらないようにするため、ないのだと伝えていたからだ。

そんなオリビアの表情を読み取り、ロイルは右手を差し出した。

「教えてくれ。何があつたのかを」

差し出された右手をじっと見つめて、オリビアはそつと指先を走らせた。

六話

獄中にもかかわらず、少しまどろんでいたリックは格子の鍵が開かれた音に気づき、目を覚ました。再びあの子供らしき人物がやってきたのかと体を起こすと、そこにいたのは見慣れた生意気な少年の姿があった。

「ろ、ロイルくんっ？」

「しっ、大声を出すな馬鹿者」

「助けに来てくれたの？」

ロイルに返事はなかった。黙々と腕の縄を解くロイルに、リックは開きかけた口を一度閉じて、もごもごと収まらない口調で謝罪を述べた。

「ごめん、ロイルくんがダメだと言ってたのを無視して…その、迷惑かけて」

「…僕は、お前みたいな奴がへらへら戦場で命を落とすのを沢山見てきた。もう少し自分の命を大事にするんだな…」

どんな辛辣な言葉が返ってくるかと覚悟していたリックに掛けられた一言は呆気ないものだった。

リックは安堵の息をつき、もう一度謝罪を述べて頂垂れた。

一気に緩んだ気が、涙まで誘う。

「本当にお前は戦闘に不向きな男だ」

あまりのリックの情けなさに返す言葉もないのか、ため息交じりに

そうロイルが呟いた。

「でも、なんで此処が分かつたんだい？」

急な階段を一步一步慎重に進みながら、リックはロイルに尋ねた。少ない明かりを頼りに歩いていたロイルは一度振り返り、唇に人差し指を立てた。

「今、オリビアが時間稼ぎをしてくれている、急いで此処を離れるぞ」

「オリビア？」

「…説明が面倒だ、行くぞ」

上に向かうにつれ、明るくなっていくのをリックは目を細めて見つめる。

奥には何か言い争う二人の影がぼんやり窺えた。

「何なんだ、この出来は！」

「……………」

「こんな簡単な事もできないのかお前は！」

酷く罵声を浴びせれる小さな背中を不安げに見ていたリックは、ロイルに肩をつつかれ、そっと側を離れた。

後ろ髪をひかれる思いで何度も振り返れば、ついに何かが割れる激しい音が響いた。

「ええい、もういいわ！お前みたいなジャンクにはもう用がない！
来い！」

リックは、自分の悪い癖だとわかっていながら、ついに二人の前へ飛び出してしまった。

眼前に広がったのは、自分をさらった大男が少女の髪をひっぱり今割れたであろうピンを振り下ろさんとする現場だった。

ロイルは破天荒に無茶をするリックに舌打ちし、自分もまた二人の前に躍り出た。

「お前は今日捕まえた…！」

「やめろ！そんな小さな子をいたぶっていいと思っているのか！」

リックは勢いだけで、リジアに飛び掛った。

流石の奇襲に、ひるんでしまったリジアの手から、オリビアが離れた。

離れたオリビアは急いでリックを制止しようと、細い腕で止めに入った。

「くそつ、何なんだ今日は！」

ぶん、と大きく振りかぶったりリジアの両腕は強くリックをなぎ払った。

狭い廃墟の中で身動きの取れなかったリックは、そのままコンクリートの壁に激突する。

その隙をつき、光の速さでリジアに飛び掛ったロイルは、両手に携えた刀を振り上げる。

意識が薄れる中、ロイルの名を呼んだリックはゆっくりと意識を手放していった。

刹那、何が起こったのか理解できなかったロイルは、ぐったりとした少女の人形が体にもたれかかり、ハッと二人から刀を引き抜いた。

体中の部品を撒き散らし、少女はその全ての機能を停止し、ごとりと床に倒れこんだ。

リジアはぼつかりと開いた腹をさすり、弱弱しく少女だった部品を蹴り飛ばした。

「…オリビア」

「全く、ジャンクの分際で…」

リジアの開いた腹から、詰めていたような部品がジャラジャラとあふれ出していた。

その流れ出た部品を拾い上げ、ロイルはその部品がリジアの物ではないことに気がついた。

ふと、オリビアが崩れた場所に手を伸ばす。そこには探し求めていたコアが埋もれていた。

「…お前は、オリビアの部品を搾取して生き延びていたジャンクだったのか…」

「違う、俺はジャンクなんかじゃ、ない」

「僕は普段ジャンクを手に掛けるほど残虐じゃない」

「やめる、助けてくれ、おでは…」

「だが、ウィーゲルもさらって殺すつもりだった危険な人形を生かしては置けない」

「…だずげで…」

「生まれてきたことを、後悔しろ」

勢いよく振り下ろされた刀は、他の人形の部品を波のようにさざめかせ、リジアもまた機能を停止して動かなくなった。

「それでもオリビアはお前を、大事に思っていたんだ……」

「逃げるだど？」

差し出した右手に記されたのは、短い言葉だった。リックの牢獄の鍵を開けっ放しのロイルの手に握らせ、オリビアは深く頷いた。

「しかし、お前はあんな奴といたいのか、僕と来れば……」

オリビアは静かに首を振る。

鍵が握られていた方の反対の手をそっと取り、オリビアはその手のひらに

自分の思いを記す。

リジアは私がいないと死んでしまいます。私の命である人が救われるなら

私はそれで構いません。さあ、牢獄は下の階。私がりジアの気を引きますから

そのすきに逃げてください。

「…すまない」

オリビアは破損した顔を少しだけゆがめた。それはオリビアの精一杯の笑顔であった。

ようやく意識を戻したリックは、馬車に揺られていた。

驚いたリックが急いで体を起こすと、鋭い痛みが駆け巡る。レニはリックをもう一度横たわらせて、リックを見下ろした。

「リックさん、貴方の行動はとても褒められたものじゃありませんね」

「あ、は、はい…すみません…」

「しかし、目的も果たせたことですし、そう、その勇敢さは評価に値しますね」

「あ、あのっ」

「…残念ながらあの幼児タイプの人形は大破しました。しかしそのおかげでコアが見つかったので、もうイヴンには調査に行かなくて済みました。」

「…えっ？死んだんですか？」

「はい、人間で言うところの死にあたります」

レニの淡々とした説明に、リックは絶望感を覚えた。自分が助けたかった対象が憎い人形だったからか、少女を助けられなかった無力

さか、今のリックには分からなかった。

ふと、ロイルを見やる。恐らく人形を破壊したのは彼だったが、なんとなくリックは聞きだせずにいた。

ロイルはそんなリックの視線に気づいたのか、本に視線を落としたまま呟いた。

「お前の軽率過ぎる行動に、僕はめまいがするぞ」

「う、ごめ…」

「不愉快だ、二度とあんなことがないように」

やたらと棘のある言葉で締めくくったロイルは、その先言葉を発することはなかった。

リックは渦巻く複雑な感情を整理できないまま、遅れてはいと返事をした。

しかしこの後、この言葉に深い意味があったことをリックが知るのは随分先の話である。

第二章 深海の要塞

馬車に揺られる間、リックはこれまでのことを整理していた。

熊探しに出かけていただけの新兵だった自分が、人形に命を狙われ、少年に助けてもらった。

そして事がいくつか運び、気づけば仮にもレイディアン軍人として今、再スタートを切っていた。

めまぐるしい此処のところの状況に、リックは精神も肉体も疲労しきっていた。

体が横たわっているため、少し寝てしまっただが、まだ目的地には到着していないようだった。

「退屈そうですね」

「あの、これから行く場所って？」

「レイディアン本部、アクアドームですよ」

レニは早くも退屈していたリックの心情を読み取り、気さくに声を掛けた。

見た目、自分より年上そうなレニは、リックにとってロイルより絡みやすかったのは言うまでもない。

「アクアドーム？」

「はい。侵攻が不可能であるように海の中に作られた要塞で、我々の本拠地ですね」

「ええっ？海の中？」

「ええ。見れば一番理解しやすいと思います。着いたら手続きがありますので、私達についてきてください」

リックには想像もつかなかったが、レニが言うような要塞ならば、確かに敵が攻めてくることはない。

世界の敵、人類の罪の遺産でもある人形も、流石の海の中までは侵略は不可能かもしれない。

次第に、リックはどんな場所か想像をめぐらせ、胸が躍った。

「そういえば、上着…剥ぎ取られちゃったんですね」

レニのその言葉に、リックは改めて自分の姿を確認した。

確かに上着は体から消え、代わりにロイルの深緑色をした軍服が掛けられていた。

「そう、みたいです」

「レイディアンでは制服が支給されるので心配しないで下さい。デザイン性は前の上着よりはありますが…」

「そういえば、ロイルくん、上着のリボンは？」

ロイルは面倒そうに顔を上げると、ずるりと薄いピンク色のリボンをスラックスのポケットから引きずり出した。真ん中は金のロザリオが輝き、一見するとかわいらしいそれを、ロイルは胸につけていたのだ。彼の趣味に口は出せないが、はつきり言って深緑とそのリボンは合わなかった。

リックが見たのを確認したのか、ロイルはまたそれを深くポケットにねじ込んだ。

「あれは、ロイルさんの大事なものらしいですよ。私も良くは知らないのですが。」

「そうなんだ？」

「…うるさい、けが人は黙っている。あとレニ、お前もだ」

レニは肩をすくめ、リックに笑い掛けた。

先ほどのおどろおどろしい雰囲気はなくなったロイルに、リックは少し安心し、

その笑みにゆるく笑って返した。

やがて馬車はゆっくりと一晩かけて進み、アクアドームを目指していった。

一話

三人の眼前には、夜のおだやかな波を湛える大海原が広がっていた。

潮風が緩やかに頬を撫で、夜空はうるさい程星が瞬いていた。リックは想像していた景色とは随分かけ離れた一般的な海を眺め、レニを見上げた。

「あの、アクアドームにはどうやって行くんですか？」

「今ロイルさんが門を開けてくれるよう頼みますから、そこから海底に下りていくんです」

「はあ……」

「まあ、百聞は一見にしかず、とも言います。見れば分かりますよ」

仲間との通信が終わったのか、通信機をしまつて立ち上がったロイルは、波打ち際まで歩いていった。静かな海は依然、何の変化もなかったが、少し波が高くなった。

リックはこれから何が始まるのかと息を飲んで海の様子を窺った。すると、小さな地震が小刻みに体を揺らしているのにだんだん気づいてくる。

少しずつ揺れが大きくなる中、リックは目の前に広がるその信じられない光景に

圧巻されてつい、悲鳴にも似た声が漏れた。

「う、海が……」

「その昔、この世界には今より発達した文化が栄えていたという説があります。これは神話をモチーフにして作られた昔の人の遺産、

でしょうね」

まるで、道をつくるように海は二つに裂けた。

大きな海の壁は規則的に流れていたが、その流れはまるで時間が止まったように思えた。

轟音が響き、裂かれた海の中には、深海へ続く階段がほの暗く地下に伸びている。

リックは感嘆の声を終始上げっぱなしで、ロイルに続き、階段を下りた。

階段から続く通路は透明なトンネルになっていて、魚達が悠悠泳ぐ姿が見える。

空から降り注ぐ月光が夜の海をぼんやり照らし、それは幻想的な空間だった。

「すごい……」

「このアクアドームはつい最近建設されたものですが、基礎は海底都市があったとされる場所から頂いています。この仕組みもどうなっているのか、その実私達には分からないんです」

「そうなんですか……」

「そして向こうに見える大きなドーム型の建物が、アクアドームです」

曲がりくねった通路の右手には、透明な壁から見える建物があった。リックは壁に顔を近づけ、その建物に目を凝らしてみた。此処から見ても十分その大きさの窺える巨大な建物が、静かな海底では異彩を放っていた。

「僕は、ランガーにコアの解析を頼んでくるから、レニはウィーゲルを連れてアイリーンの所まで行ってくれ」

「はい、分かりました。そうそう、トレストウーヴェさんがロイルさんにお話があるそうですよ」

「…放っておけ、面倒だ…」

ロイルは額に手をやり、大きいため息をついた。

やがて、要塞の門が大きく口を開き、三人を迎える。リックはこの先何が待っているのか期待と不安を込めて、ゆっくりと門をくぐった。

門をくぐるとそこは、要塞と呼ぶにふさわしくない大きな街が広がっていた。

皆が活気に溢れ、夜の海の中だというのに街は明るくまるでお祭りの最中であるような賑わいがあった。リックは初めて見るもの全てに目を輝かせ、出店の一つ一つを楽しそうに眺めた。

リックがいた国は城があり、城下に同じ規模の街があったが、こんなに活気ある街など見たことがなかった。

「どうして要塞に街が…」

「ここに住んでいるのは、皆レイディアン軍人のご家族ですよ」

「えっ？」

「家族までもが、死を覚悟しながらもそれでも一緒に暮らしたい。そんな方々がこうして作って街になりました」

「あの、レイディアンってそんなに大変なんですか？」

「人形の暴走は、一般の軍人には止めることができません。向こうは痛みの知らない最強の軍なのですから。それに対抗するべく軍人は死を覚悟して当然なんです」

リックは、もう一度街を見渡した。

誰もが幸せそうで、一見すれば人形が引き起こした惨劇が遠い昔のことだったようにさえ感じた。

でもそれがレニの言うように死を覚悟してまでの生活だというなら、この異常なまでの活気ある街が随分悲しいものだと思った。ふと、リックの頭に死んだ両親が浮かぶ。

厳格な父に穏やかな母。その命を無残に奪っていった心無き兵器。ここに居る皆が抱えている痛みを、リックは深く胸に刻んだ。

三話

レイディアン中枢、それはアクアドームの真ん中に街を見下ろす巨大な建物にあった。

軍基地であり、宿舎でもあるその建物に入ったリックは、見た目に反して室内が驚くほど質素で飾り気のない姿に驚いて辺りを見渡した。

まず、入ってすぐ窺えるホールには、ロイルと同じ深緑の軍服を身にまとった軍人が数人いる。

各々が仕事や休憩時間を過ごしているのを通り過ぎ、三人は施設内のエレベーターに乗車した。

「ここが、レイディアンの基地ですか」

「そうなりますね。ここは地上三十五階の大きな建物で、そのほとんどが軍人の宿舎になってます」

「端にあつた小さい建物は？」

「訓練場です。実戦に出られるのはごく僅かですから、皆さん切磋琢磨しておられるのです」

「へえ…」

「人事じゃあないんだぞ」

「う、うん…ロイルくんもあの訓練場で鍛えてたの？」

「勿論だ」

やがて、チン、と軽快な音と共に扉が開き、ロイルがエレベーターから降りた。

「僕はランガーのところに行ったら部屋に戻る。後は頼んだ」

「はい、おやすみなさいロイルさん」

ロイルの華奢な背中を見つめ、やがてみえなくなると、リックは深く息をついた。

レニはくすりとそんなリックに微笑み、声を掛けた。

「ロイルさんには慣れませんか？」

「え、えっと、その、はい…俺、ロイルくんより年上なのに守られてばかりで怒らせちゃうし…情けないなって…」

「ロイルさんもああいう態度ではありませんが、本当は人一倍寂しがりやさんなんですよ」

「ええ？あのロイルくんが？」

「まあ、人が見ているのはその人のほんの一面であることが多いものです、これから慣れていけばいいんですよ」

リックは納得いかないまま、あいまいに苦笑する。そんなリックの肩を叩き、レニはもう一度笑顔を向けた。馬車より酷く揺れるエレベーターの中で、リックはレニの言葉を何度も反芻していた。

ランガールの私室を前に、ロイルはやたらとそわそわしてドアノブに触れた。しかし肝心の回す手は汗ばみ、変に緊張して上手く回せない。一度、自分を落ち着かせるべく大きく深呼吸した時、ドアは向こうから開けられた。

「あら、ロイルお帰りなさい」

ドアの前でにっこりと優しい笑みを浮かべた女性を前に、心の準備ができていなかったロイルは上ずった声で答えた。

「…ただいま、マリア…」

部屋はマリアのおかげで随分前に比べればとても綺麗になっていた。

ロイルは落ち着かない様子のまま言われたソファ―に座り、主のいない椅子に視線を遣った。

マリアは机に積み重ねられていた分厚い本の山を本棚に戻しながら、ロイルがアクアドームに居なかったこここの所一週間の話を尋ねた。

「それで、今回の任務は長かったのね。何か変わった事でもあったの？」

「ああ、新人が増えたんだ。もと陸軍新兵の役立たずだが…」

「そうなの、その方…ご家族は？」

「…先の戦争で亡くなっているらしい」

「…そう」

マリアの細い指先が、真っ白なポットに添えられる。並々と注がれる紅茶をぼんやり眺めて、

ロイルはゆっくり口を開いた。

「…ところで、ランガーは？」

「ランガー様は今、外に出かけているわ。アイリーン様の所かしら」

「何？それならとんだ無駄足だったな」

「そんなこと言わないでロイル…、用が無くても来て欲しいのに」

「……………ば、僕はランガーが大嫌いなんだ、なるべく来たくない」

すこし紅潮した顔をそむけ、ロイルが呟く。マリアはトマトのようなそのロイルの頬に笑顔を浮かべて、ロイルの前に紅茶を差し出した。

「ランガー様は、ロイルを本当の息子のように思っているのよ？」

「…気色が悪いな、そんなわけないだろあの男が」

「ふふ、どうかしらね」

ロイルは、出された紅茶を一気に飲み干すと、立ち上がって踵を返した。

マリアは驚いてロイルを引き止める。

「ロイル？もう帰るの？ゆっくりしていったら？」

「僕は仕事の途中だから、もう行く。すまなかった」

マリアは残念そうにドアを開くと、ロイルを送り出す。

きびきびと歩き出したロイルはふと足を止め、振り返らずに小さく告げた。

「…また来る」

その言葉にマリアはふっと微笑み、ロイルが見えなくなるまで手を振って見送った。

四話

エレベーターは最上階で止まった。少し酔い気味だったリックはおぼつかない足取りでエレベーターから降りると、壁にもたれ掛かっつてうずくまってしまった。

レニは慣れた手つきでそんなリックを抱え上げ、大きな無垢の扉を叩いた。

「入れ」

中から声がし、レニは失礼しますと一言述べてドアを開いた。

中は、リックが想像していたものとは違い、また他の部屋から比べて明らかに豪華であった。

天井の真ん中を居座るシャンデリア、開けた窓の外からは夜空の代わりに美しい夜の海が広がっている。社長室、と呼ぶのにぴったりなその派手な部屋の中心には装飾が細かい木のデスクとワインレットに輝く革張りの椅子が背を向いていた。

「先日、レイディアン入隊希望の新兵がいたので連れてきました。手続き、お願いします」

「…分かった」

ぎし、と椅子が回転し、その高そうな椅子に足を組んで座っていた人物を見て

リックは思わず顔が熱くなるのを感じた。

その美貌は一度みれば忘れられないほどのもので、肉感的な美女であった。

組んだ足から覗く黒レースとガーターベルトが扇情的で、口元のほ

くろは女の色香を感じさせた。

バストは申し分なく、またそれを誇示するようにおしげもなく晒されていた。

黒い豹の肌掛けをかけなおし、その女性は上から下まで舐めるようにリックを見つめた。

「しかし頼りのなさそうな若者だな…、よく来た、私はアイリーン・ベイツ。このアクアドームの総司令官だ」

先ほどまでのエレベーター酔いはどこへやら。ぴしっと背筋を伸ばしたリックは遣りどころの無い目を白黒させていた。

「此処に来た新人に、私はいつも尋ねることがある」

「な、何でしょう？」

「お前は戦うのかそうではないのか、聞こう」

「えっ？」

アイリーンは椅子から降り、リックを見据えた。

「ここでは、二人一組のパーティーを組んでもらう。もう片方は叩き、もう片方は情報を集める、が決して片方が死んでもあだ討ちしてはならない。戦ってはいけなくいきまりを作った」

「な、何故、二人で戦ってはいけないのですか？」

「何故なら片方が死ねば、その死体を回収しなければならないからだ」

「そ、そんな事のために…？」

「そんな事ではない。我々レイディアンにとっては重要なことなのだ」

アイリーンはリックの側までくると、その顔を見下ろし人差し指を目の前に振り下ろした。

鼻先すれすれで止まったアイリーンの指を見つめて、リックは息を飲む。

「死体は人形達の糧となる。どんなことがあっても回収しなければならぬんだ、さあ、お前はどうかんだ？戦えるのか？」

アイリーンの強い口調は出会った頃のロイルを彷彿させた。

リックはこれまでのことを何度も考え、成り行きでレイディアンに入隊したとはいえ、

覚悟を決めて答えを導き出した。

「俺は、戦いたいです……」

五話

ランガーは、その日いつにもなく苛立った様子でアイリーンの元を訪れていた。

エレベーターの中でも苛立ちが抑えられないランガーは、足を始終揺さぶっては不機嫌さを自分で抑えようとしていた。しかし、アイリーンの部屋に着いた時には既にそんな努力は忘れ、半ば強引に扉を開け、開口一番に文句を並べ立てた。

「アイリーン！貴様、あのゴミ粒が帰ってくる時は連絡しろとあれほど念を押しただろうが！」

怒りに我を忘れていたランガーは、先客にも気づかず、アイリーンのたわわな胸元を引き寄せ、そのまま殴りかかるのではとさえ感じられる剣幕で掴み掛かった。

レニは頭の煮えきったランガーに存在を示す為、横目でランガーを見やり咳払いをした。

それによろやく気づいたのか、ランガーはハツとしてアイリーンから手を離れた。

「なんだ？ゴミ粒のパートナーか…それにその青年は…？」

ゴミ粒？リックは突然嵐のようにやってきた男を見上げ、ぼかんと口を開きっぱなしにして収まりきらない頭の中の情報を整理し出した。恐らく、この男が呼ぶゴミ粒というのはロイルのことだろうとは推測はできたものの、肝心の誰なのかは分からなかった。よく見れば端麗な顔をした男で、顔半分を覆い隠すマスクをしている。男はじつ、とリックを、見つめる。

「なんだ、新人選考していたのか。で、外と中、どっちになったんだ？」

「今それを聞いていたんだ馬鹿者…！」

「はん、知ったことか。そんなことはない、俺は今日ロイルが帰ってくることを聞かされてないどういふつもりだ全く、のこのこ部屋に来てくれたらどうする、この牛女！」

「そんな下らない苦情に付き合っている暇はない、今度にしろ」

アイリーンは大きいため息をつき、自分の椅子に深く腰掛けた。男ランガーは舌打ちの後、アイリーンの机に一枚の封筒を投げつけた。

「カミュとマリアの調査結果だ、今月もこれといった異常はない」

「じくろつ」

「あと、今度こそあいつが帰還する前日は見えよ？」

ランガーはそのまま服のすそを翻し、アイリーンの部屋を後にする。去り際、レニの真横を通過したランガーは、レニに声を掛けられ少しだけ立ち止まった。

「ロイルさん、今日帰還したのであと三週間はここに居ますよ？」

「…それが何だ」

「いえ？別に」

リックはあまりに冷たいレニの声音に、思わず背筋が冷たくなるのを感じた。ランガーはそのまま立ち去り、エレベーターの音が鳴るのが遠く聞こえたが、ランガーの異常なまでのロイルへの嫌悪も気がかりだった。アイリーンはさて、と髪を指先で払い、疲れたような表情でリックに返った。

「折角の話が台無しだな、では戦うことで良いのかな？」

あまりに突然話を中断されたため、一瞬何を聞かれたのか分からなかったリックは、遅れて戸惑いながら返事をした。

「は、はい！よろしく…お願いします」

エレベーターを降りたランガーは、その先の通路でロイルが向こうから歩いてくるのを見つけ、足早に歩き出した。ランガーがロイルの脇を通り抜けるか否かでロイルが重々しく口を開いた。

「…コア」

「トレストウーヴェに渡しておけ、後で受け取る」

「今渡したいんだが」

ランガーは面倒そうに振り返り、ロイルを見た。ロイルはうつむいたまま、コアを握った腕だけ出して何も言わなかった。ランガーは眉を上げ、ロイルの手に握られているコアを受け取ると再び歩き出した。歩きながらランガーはロイルに告げる。

「何でもいいが、俺の部屋に勝手に入るなよ」

「……。」

「…これはあくまで俺の優しさの忠告だということを忘れるなよ、」

「ゴミ粒」

立ち止まったままのロイルは、ランガーが居なくなった廊下でぼん、と胸に一度しまった言葉を呟いた。

「僕がゴミ粒ならお前は塵だな、…ランガー」

誰に聞かれることもない言葉が冷たい廊下に響き、ロイルはまた自室へ戻るために歩き出した。

六話

自室に戻ったロイルは、疲れきった体をベッドに沈めた。彼はアクアドームに帰還すると眠りに入ったまま三日程過ごす。任務中は滅多に睡眠を取らないためか、研ぎ澄ましていた神経を使いきるためか、この寝ている間の記憶はロイルにはなく、誰にもこの間はロイルを起こす事ができない。

その為、アクアドームでの作業はほとんどこの睡眠の前に終わらせたかったロイルは、コアをランガーに渡せて一安心していた。リックのことが気がかりだったが、ロイルが意識を保っていたのはベッドに倒れこんで数秒だけであった。

すっかり夢へと深くもぐっていったロイルは、その後やはり三日間眠りこけた。

「ここが、貴方のお部屋です」

レニに案内された部屋を一望し、リックは思っていたものより綺麗で安堵のため息を漏らした。部屋には硬そうなベッドに縞模様のカバーがかかった布団が敷いてあり、そのすぐ上には小さな窓。

向かいには古い机と、クローゼットがあった。

突然来ることになった為、まだ陸軍の駐屯地に荷物を置きっぱなしのリックはクローゼットの中の制服を借りることにした。

「食堂は一階です。お風呂は共同で、トイレは各階に二つ。足りないものがあればおっしゃってくださいね」

「はい、ありがとうございます」

「では、私はこれで」

「あ、レニ中尉!」

「…普段はさん付けで構いません…何か?」

「あのっ、ロイルくんのお部屋ってどこでしょう?」

本当なら、ランガーが何者なのか聞いてみたかったが、なんとなく聞いてはいけないような気がしたリックは、もごもごとロイルの部屋を訪ねてしまった。

レニは薄く笑い、返答する。

「今、ロイルさんはお休み中だと思えますよ。一度眠ると三日はおきないので…。一応場所ですが二十階の奥にあります。一般の新兵は通れませんが、話をつけておきましょう」

「ありがとうございます…あの、ロイルくんってやっぱりえらい人なんですか?」

「まあ、そうですね。レイディアンでの階級は少佐になります」

「うへえ?!」

「プライベートでは特に敬語なんかは要らないでしょうし、今まで通りでいいんですよ」

ロイルの階級に青ざめたリックに、レニは少し笑って、部屋のドアを開けた。

不安げな表情のリックに振り返り、レニが尋ねた。

「無理やりレイディアンに入隊させられて、困っているのですか?」

リックはしばらく逡巡して、首を振った。

「まだ…分からないんです。でも夢だったのは、確かなので…」

「慣れてくれば、気持ちに整理もつくでしょう。遅くまでご苦労様でした。明日の朝は鐘が鳴るのでその時間に起床してください。」

「はい」

「それでは」

ばたん、とレニが閉めたドアを見つめ、リックは大きく息を吐き出し、その場に倒れこんだ。

何度も夢見ていたレイディアンと、現実の差に少なからずショックを受けたリックは大きく伸びをして窓を見上げた。

空がない景色の違和感に未だ慣れないリックはそっとカーテンを引き、疲れた体をきしむベッドに預けるのだった。

六話（後書き）

主人公が次第にリックのようになってきましたが、実はこの物語の主人公はロイルなんです…。都合がいいのでリックを使いすぎて主人公っぽくなってきました…

第三章 罰と清掃員

翌日、レニに言われた通り鐘の音で目覚めたリックは、慣れない深緑の制服に腕を伸ばした。

陸軍に居た頃、真っ白な新兵の制服だったが、レイディアンは夜目立たない色で

誰かが着ていたお古のその制服は丈が少し長かった。

ふと、リックはポケットに紙切れが入っているのに気がついて、手にとってみる。

四つ折りにされたその紙は、開くと写真のようだった。

一人の少女が眩しい笑顔でこちらを見ている。写真は何度も開かれて見ていたようで、折り目の部分が白くスジになっていた。捨てるのも気が引けたので、その写真をもう一度しまったリックは、硬いベッドに腰を下ろした。

すると、そのタイミングを見ていたように、ドアが軽くノックされる。

「リックさん？開けますよ」

ワインレッドのジャケットに、胸元をシルクのリボンで結つたいかにも貴族らしい美しい出で立ちのレニに、リックは少し目を丸くした。背中の長い髪がするりと動いたび揺れていて、女性であれば卒倒するような優しい笑みでレニはリックに返った。

「わあ、レニさんの服はいつもすごいですね…制服はいいんですか？」

「ええ、合うサイズがないんです。それより、シップ持ってきました。先日の痛みはどうですか？」

「あ、はい。休んだ分だいぶマシになりました。」

人形に打ち付けられた痛みが引かないリックのため、レニは持ってきたシップを備え付けてあった机に置いた。リックは立ち上がって礼を述べ、早速打撲したうでに包帯でシップを巻きつける。

「それから、リックさんには少し任務があります」

「えっ？いきなりですか？」

「まあ、任務というより、処罰と言えば納得いくかと…」

その言葉に、すっかり忘れていたイヴンでの出来事を思い出し、リックは青ざめた。

門の前から動けば処罰されると言われていたのに行動し、拳句ロイルに助けられていたリックは、深く反省して頂垂れた。

「は、はい…その、何をすればいいんでしょうか」

「アイリーン様とご相談して、怪我をなさっていることもあり、アクアドームの清掃をお任せすることにしました」

「えっ、掃除？」

「はい」

その後、一階のホールに来るように言われたリックは、手渡された作業着片手に呆然と立ち尽くしていた。レニはホールに清掃を教

えてくれる人が来ると言っていたが、リックが一階で突っ立ったまま一時間が経過しようとしていた。

（おかしいな、レニさんがこんなシヤレにならない嘘をつくような人だとは思えないし…）

リックは辺りを見渡す。行き交う軍人達が横目で自分を見ていくものの、誰一人として清掃員らしき人物がホールを差し掛かることがない。困ったリックが受付に尋ねてみようかと歩き出した瞬間、リックは何者かに服のすそを引っ張られて振り返った。

「君、何してんの？」

振り返った先にいたのは少年であった。身長はロイルより五センチほど小さく、鼻に貼られた絆創膏が印象的な少年で、くちやくちやとチューインガムを噛んでいた。

リックは思わずしゃがみ込み、苦笑いをして少年に尋ねてみる。

「あ、ねえ、ここで清掃員の人を捜しているんだけど…君は知らないかな？」

「ん？ヴァレスの事かな？もしヴァレスを捜してるなら諦めた方がいいかも」

「ええっ？何で？」

「だってえゝヴァレスはすごい方向音痴だから」

リックは眉をしかめた。少年が言うようにその清掃員が方向音痴だというなら、筋金入りで方向音痴のリックでさえこうして来れたというのにおかしいはなしである。そもそもこの少年は誰なのかすら分からない。またロイルみたいに軍人だと言い出されても困るので、

リックはひとまず少年から離れることに決めた。

「ふうん、そうか。なら少し捜してみてくるよ」

「あ、待って」

リックがそう立ち上がって背を向けると、少年は再びリックの服を掴んだ。

「あれ、ヴァレスだよ」

少年が指差す方向へ、リックは面倒そうに視線を遣る。すると、視線を追った先には、ホールの階段の手すりでも今にも落ちてしまいうな青年がぶら下がっていた。

リックは驚いてすぐさまホールの階段を駆け上がり、青年に手を伸ばした。

「だだだ、大丈夫ですか?!」

「あはは、ありがとう。電球のほこりが気になって手を伸ばしたらすべっちゃって」

リックは青年を引き上げ、大きくため息をついた。

「あの子が見つけてなかったら大怪我ですよ?あなたがレニさん…じゃなかった、レニ中尉が言っていた清掃員の方ですか?」

「うん、そう。俺、君の処罰の清掃を指導するため、ここに呼ばれていたんだけど…いやあ、この基地ってひろいでしょ?迷子になっちゃってさあ」

「あの、清掃員なりたてなんですか?」

「いや?これで三年目だけ?」

「……………」

青年は体のほこりを叩き、改めてリックに向き合つと、はにかんだ笑みを浮かべて右手を差し出した。

「俺、ヴァレス。ヴァレス・ブラックモア！」

「俺はリック・ウィーゲル、リックでいいです。」

「うん、よろしく、リック！」

リックはこれから始まる清掃活動に一抹の不安を覚えながらヴァレスの手のひらをぎこちなく握り返した。

一話

昨日深夜。制服を着たままぐったりと横たわって眠るロイルの部屋に足音が響いた。

薄暗い室内を真っ直ぐ歩くその足音はロイルの前でぴたりと止んだ。その足音の主はじっとロイルが眠っている姿を確認し、しゃがみこんだ。

「こんな形で会う時は、俺はどうしたらいいんだ……」

誰に言うでもなく、低い声が呟く。もちろん返事はない。規則的な寝息だけが聞こえる室内で、恐らく男であろう人物はため息をついた。

そして、何をするでもなく、また立ち上がると部屋を後にする。そして室内は再び、ロイルの生きている証の音だけが響いていた。

作業着に着替えたリックは、つなぎの腰の部分にベルトを通しながら、ヴァレスに清掃の仕方をおおまかに教わっていた。ヴァレスは陽気な性格で、その合間合間に下らない冗談や、今まで見た可愛い女の子の話など、思わず笑ってしまうような話を盛り込んでリックを楽しませていた。

ホールで出会った少年は、リック達がフロアに下りた時にはもう居なかった。

リックは何となく、少年のことを尋ねてみた。

「あの男の子は誰だったんです？」

「男の子？」

「ほら、ヴァレスが落ちそうになった時指差してた……」

「ああ、カミュのことかい？あの子は、ここの職員だよ」

やっぱり、とリックは苦い顔をした。ロイルといい、その少年カミュといい、

若い、それも十代前後の少年達が前線で戦ったり仕事しているなど、ここぐらいのものだとリックは内心毒ついた。それなのにいい年をした自分はまだひよつこの新米で、そんな少年達が上司で先輩なんて何だか納得いかない思いが未だあった。

「あの子……いくつなんです？」

「ん？さあ……いくつなのかなあ……俺にはちょっと分からないや」

「えっとじゃあ、ロイルく……少佐は？」

「ロイル？同じ年だよ」

リックはしばらくその短い言葉を繰り返して頭で唱え、我が耳を疑った。

見たところ、身長も高くすらつとした印象のヴァレスの推定年齢は二十五、六は確実だろう。

それに比べてロイルに抱いた印象はやはり少年で、年にすれば十五、六。丸々一回りも違って見えた。

「少佐は一体いくつなんです？」

「はは、まあいいじゃないか、ロイルもそのほうがミステリアスだろ？」

「はあ……」

答える気はないらしく、軽く流されたリックはロイルと別れたエレベーターでのことを思い出していた。本当にミスティアスな少年だ、そう思った。レニが言うリックを見たことのないロイルの一面を知れば、少しはこの胸のつかえも和らぐのだろうか…。リックの中では一番の気がかりであるロイルの存在。まだ何も知らない自分が、リックは齒がゆく思えた。

「ヴァレスは少佐の事を知ってるんですか？」

「あー、うん。昔ね、パートナーだったんだ、ここの軍人でさ」

リックは驚いてヴァレスを見つめた。こんな天然で頼りなさそうな青年が、ロイルのパートナーを勤めていたとは信じがたい話だった。リックはもし、今レニから自身がパートナーになったらどうなるのだろうかと、一瞬考えてすぐその想像は掻き消えた。

「それで、親友だった。俺は今でもそうだと思っているけどね」

「どうしてやめちゃったんですか？」

「…色々…あつてね…。ああ、それはそうと早く掃除にかからないと！徹夜で掃除なんて御免だからね！さあ、行こうか」

その質問は、地雷だったのか。少し遠くを見つめたヴァレスから笑顔が消えていた。悪い雰囲気を一掃するように、後半明るくい口調に戻ったヴァレスは、バケツとモップ数本を手に取り振り返った。

「はい、君の。早く罰が終わるといいね！」

また妙なひっかかりを残したまま、リックはおどおどとモップを受け取った。

にこにこまた調子を取り戻したヴァレスは、リックの背中を大きく叩いた。

「さ、最初はアイリーンさんのお部屋からだよ」

そう言いながら作業着から、大きな地図を引つ張りだしたヴァレスは、逆さまのままアイリーンと書かれた場所を指差す。リックは無事最上階まで行けるのか不安に思いつつも、その楽しそうに拳を拳げるヴァレスの背中を追って、歩き出した。

三話

アイリーンの部屋を一度訪れたことのあるリックは、密かに胸を高鳴らせていた。

二人は無事アイリーンの部屋の前までやってくると、その大きな扉の前で深呼吸を繰り返した。

「実はさ、アイリーンさんと会うとすごく緊張すんだ…」

「…分かります、その気持ち」

普段清掃にはあまり来ないのか、ヴァレスも落ち着きなく歩き回ると覚悟を決めてそのドアをノックした。だが、二人の期待に沿えるような返答はなく、ヴァレスは首を傾げてもう一度ノックをした。

「アイリーンさん？清掃の者ですが…」

しかし、そのノックにも返答はない。意を決してドアを数センチ開けば何のことはない。部屋の主は不在だった。リックは少なからず落胆し、女好きであるヴァレスは大きなシヨックをそのまま表現して嘆いた。

「ああ…！中々会えない女神だというのに…！仕事しろってことなんだろうね…掃除しよっか」

「…はい…」

その場に崩れて、何か大変なことでもあったかのように嘆くヴァレスの体を起こし、リックはバケツに入った水に注意しながら部屋に入った。部屋は相も変わらず派手だったが、つい先日アイリーンの

部屋に来たばかりのリックは目が慣れてきていた。

ヴァレスはすぐに清掃に取り掛かり、まず天井に吊るされたシャンデリアを細かく掃除し始めた。

専用のブラシでほこりを取り除きながら、布で磨いていく。その手際はさすが三年も清掃員をしているだけはある。リックは簡単な窓磨きを担当し、改めてまた窓の外を見遣った。

外は暗い。太陽の明かりはほんの少しで、ドームの周りをぐるぐると小魚が回遊していた。ぼおつと外を眺めていると、リックはヴァレスに肩をつつかれ注意を促された。

「さ、手を動かしてよ。俺がレニに怒られちゃう」

「あ、すみませんっ」

「外、慣れない？まあ、当然か。空がないんだもんね」

「はい…不思議です。俺、前は陸軍の兵士だったので…」

「俺も来たばかりの頃はそうだったな…ロイルは違ったけど」

「どう違ったんですか？」

「あいつ、すぐくはしゃいでたな…海が好きなんだって」

「はしゃいでた…？」

今からは想像も出来ないことだが、ヴァレスはしんみりとした表情で窓を見つめる。

その言葉に冗談は感じられなく、リックはまた余計なことを聞く前にさつと窓を磨いた。

「この後はランガールの部屋で、訓練場の掃除。今日はそれでおしま
いかな」

「…そう、ですか」

「さあて、名残惜しいけど行きますか！」

水が濁ったバケツに視線を落として、リックは初対面でのランガー

の事を思い出していた。
もう一度会うとは思ってもみなかったが、何となく部屋に居ないで欲しいと願った。

「もお、どうして伝言聞いたまま寝ちゃうわけ！？」
レニは、普段と変わらぬ落ち着いた様子で少女を見遣った。丈の短いスカートを翻し、足踏みを繰り返す少女へ、レニは淹れたばかりの紅茶を振舞う。
少女は不服そうな表情でレニを見た。

「馬車を呼ぶ以外にアタシには用が無いっての？」
「今回の調査は少し手間取ったんですよ。恐らく疲れていらしてたんでしょう」
「いっつもそうよね、顔の少しも出してくればいいのに…」

少女は出された紅茶をすすり、たえず口から漏れるため息を飲み込んだ。
レニは座っていた椅子から立ち上がると、側にあつた棚からお菓子をとり出して封を開けた。少女はぼんやりとその姿を見つめている。空っぽの皿にざらざらと流し込むようにビスケットを入れ、少女の前に置く。数枚手に取りかじり始めた少女の向かいに座り、レニはゆるく微笑んだ。

「おいしいですか？」
「…別に。でもこれロイルのお菓子でしょう？」
「ええ。もう古くなってきていましたのでお出ししました」

「…アンタねえ」

しらっと笑顔でとんでもないことを言うレニを睨み付け、食べかけのビスケットをそのままに少女は立ち上がった。窓の外を見つめた。レニの部屋の離れからは、ロイルの部屋がある基地がうつすらと見えた。

「どうして、ロイルはアタシ達に何も教えてくれないんだろ…そう、思わないの？」

レニはティーカップに手を伸ばし、少し経ってから答えた。

「私は、ロイルさんが何を思っているかがあの方の命令に従うまでです」

「ふーん、冷たいのね」

「…いいえ、信じているんですよ」

少女は再び視線を外に移した。基地と、ドーム型の屋根にわずかに届く日光が青い影を伸ばしている。不規則に揺らめくその青に視線を移したまま、あの大きな瞳の青を思い出していた。

四話

ランガーの部屋にたどり着いた時には、時計の針は既に夕方を指していた。なんとか無事には着いたものの、二人そろって方向音痴だった為近くの兵士に場所を尋ね尋ねここまでやってきた。その間も、ヴァレスは明るく兵士に話しかけ、他の兵士達もヴァレスには好感を持っている様子だった。

ヴァレスは掃除用具を隅に置き、ドアをノックした。

「掃除に来ましたー」

「あ、はいどうぞー！」

若い女性の声と共にドアが開く。リックは少し息を吐き、失礼しますと小さく断つて中に入った。リックの願い虚しく、自身の机で仕事をこなしていたランガーが、書類から顔を上げて二人を見つめた。リックは視線を感じて、急いで掃除に取り掛かった。

「ごめんなさいね、普段からあまり片付けないものだから…」

「いいんですよマリアさん！この方が片付け甲斐があるってもんです！」

ヴァレスはにこにこ話しかけられた女性の会話に答えながら、積まれた書類や本をまとめ始めた。リックもぎゅぎゅうに本が詰まった本棚へ悪戦苦闘していたが、ランガーはその様子を少し観察し、再び視線を書類へと戻した。

「ランガーも久しぶり、あんまりここの部屋を掃除させないのによく許可したね！」

「…命令だからな」

素っ気無い返事をしたランガーは、異国の服を引きずり席を立った。今しがた片付けたばかりの棚からお構いなしに本や書類を引きずり出すと、その場で黙読をはじめた。

ヴァレスは肩をすくめて違う場所の片付けを再開し、リックは躊躇いながら引き続き棚と向き合った。

「…お前は…ロイルの部下になったのか」

ふと何かを思い出したように呟かれたその言葉は、どうやらリックに向けられているのだと気づく。リックは辺りを一度見渡してからおずおずと答えた。

「まだ…分かりません…」

「…そうか。」

「まあ、じゃあ…あなたがこの前ロイルが言っていた新兵さん？」

「…ロイルに会ったのか？」

「あ、ええ…ランガー様に用事があると…昨日」

「あのゴミ粒…」

本を勢いよく閉じ、ランガーは大きくため息をつく。女性　マリアはそんなランガーの様子に戸惑い、その後はリック達の作業を黙々と手伝った。ランガーは閉じた本を来客用のソファアに積み上げると、自分の机に腰掛け、足を組んだ。

「もういい、次の作業に移れ」

「えっ、でもランガーさっき始めたばかりだよ？」

「いいつつってんだろ。さっさとその小汚い掃除用具を持って次の場所に行け」

「もう、じゃあ行こうかリック…」

リックはそうまでしてランガーはロイルの話が嫌なのかと首を傾げた。昨日からこの男の顔には不機嫌そうな表情しか張られておらず、リックの中の印象は無愛想な姿で怖い印象だった。

マリアは申し訳なさそうにドアを開けると、二人を送り出すべく、マリア自身も外に出た。

別れ際ヴァレスはマリアに執拗なアプローチを送り、笑顔で再びエレベーターに乗車した。

今まで気にはなっていたが、聞けなかったランガーのことをリックは思い切って尋ねてみた。

「あの、ランガーさんは何者なんですか？」

「ああ、怖かった？」

「い、いや、あの…」

「ランガーはね、このアクアドームの中で情報や科学を専門にしているアイリーンさんの参謀みたいな奴なんだけど…あんなぶっきらぼうだからさ、同じ性格のロイルとは気が合わないみたい」

「そう、なんですか…あの女性は？」

「マリアはランガーの身の回りの世話とかしてるみたい。たまにロイルの仕事の手伝いもするらしいけど…」

「はあ…」

「まあ、よっぽどの事がないと関わらない人物だから気にすることはないよ、さ、次は訓練場に行こうか」

リックはそうであって欲しいと願いながら、今日一日を共にしたモップを握り締めた。

憂いに満ちたランガーのあの顔が頭から離れず、絶えずリックは落ち着くことなくエレベーターの天井を見上げるのだった。

五話

訓練場は、宿舎を兼ねた基地から少し離れた場所にあった。そこそ迷子になりそうな場所ではあったが基地から長い渡り廊下が続いており、もう一度迷子になりつつも二人はその渡り廊下を歩いていた。リックはヴァレスから手渡された水を飲みながら、その訓練場から少し離れた場所に別の離れがあるのに気づき、ヴァレスに指を指して尋ねた。

「あの訓練場の側の建物は何ですか？」

「ああ、あれはアイリーンさんやランガーの家がある場所だよ」

「えっ？あの施設には住んでないんですか？」

「あはは、ロイルが特殊なだけで、アクアドームのお偉いさんはみんなあここに住んでいるんだ」

リックはなるほど、と呟きもう一度その建物を見遣った。周りには植木に囲まれておりその様子全ては見えないが言われてみれば風格を感じさせる造りで、アイリーンやランガーがあこの宿舎に泊まっているよりはずっとイメージ通りではあった。

「もしあの幹部達に用事があるならあこが確実に会えるかもね…」

「はあ、まあ俺みたいな新兵には雲の上ですね」

「さあ、それは君次第さ」

ヴァレスはリックの肩を叩き、再び歩き出した。

腕の時計を見れば夜に近かったが、ぼんやりとした海底は時間の流れすらどこかゆるやかにしてしまったように、朝とそれほど変わらない顔で街を見下ろしていた。

「清掃にきましたー」

訓練場は蒸し暑かった。この空間そのものが海底にあるため、少し肌寒く思っていたリックはあまりの温度差に驚いた程だった。素振りを繰り返す兵士たちの間から、そのヴァレスの声に気づいた青年が訓練場の向こうから歩いて向かってくるのが分かった。

「ブラックモア。ご苦労、さあ来たまえ」

髪は七三。長いまつげがかなり目立つ青年は、何やらイメージに合わせたような口調でヴァレスを招いた。服は制服と同じデザインだったが、色が異なっており、この青年が身に纏っていたのは薄い紫色の軍服であった。今まで清掃活動していてそんな色の軍服を見たことのなかったリックは思わずその軍服に釘付けになった。

「んん？君が処罰を受けた新人くんか、初めましてようこそ。私はルイス・フォスター。階級は大尉だ」

リックの視線に気づいたのか、さらに青年は聞いてもない自己紹介を始めた。

姿も圧巻ながら、多弁でもあるようで、今まで彼が過ごしてきた戦歴の話をしていたが、リックの耳と頭には今ひとつ残らない長い武勇伝だった。

ヴァレスはそんなルイスに慣れているのか、うんうんと適当に相槌しながら、彼もまた右から左に言葉を流しているようだった。

「今日はあの忌まわしい男が不在の為、私が新人の指導に当たって

いる。君も是非私の指導を受けたくば言ってくれたまえよ」

「はあ…」

「さあ、君たちにお願ひしたいのはこの部屋だ」

ぱつとドアを開け、すぐにルイスは鼻を覆った。それもそのはず。長い間掃除されていなかった更衣室の空気は最悪に悪く、また異臭が嫌に鼻を刺激する。

思わず顔をしかめたリックは、平然と笑顔のヴァレスを見上げた。

「こりやすごい！」

「実に不衛生極まりない。頼む、綺麗にしてやってくれ」

「はいはい、任せて」

バケツに新しい水をくみながら、ヴァレスはリックに換気するように促す。

汗の臭いで気持ちが悪くなるような室内は、少し入っただけでめまいがしそうだった。

「普段はハーゲンが担当する部署だ、ブラックモア、ちゃんと叱っておいてくれたまえ。私はこんな不潔な部屋は御免だ」

「んあー、ロイルも潔癖だから触れなかつたんだろぅな…」

(ロイルくんのことだったのか…)

ロイルは随分敵が多いらしく、この高慢そうなルイスもまた、ロイルのことを良く思っていない。

何となくそれはリックにも理解できる。何故ならリックもルイスとは合わないだろぅし、ロイルとも気が合いそうになかったからだっ

た。
掃除を始めて数分。部屋は幾分かマシになり、息苦しいほどの悪臭

も薄らいでいった。

リックは兵士が利用しているロツカーを整理し、少しづつ荷物をずらしながら中も丁寧に拭く。

その間ヴァレスは床に水を撒きながらくまなくモップを走らせた。

「でもサルイス。なんで皆そんなにロイルが嫌いなんだい？ いい奴だぞあいつは」

「君は万人のことが許されるのだろうか、私はあの男の根本、全てが気に入らないのだ」

「わっかんないなあ…ねえ、リック。君はどうだい？」

嫌なところで話を振られたものと、リックは少し苦い顔をした。ロイルについての評価はいまいちつけがたく、嫌いかと聞かれればそうでもなく、好きかとも聞かれても困る。正直なところ、苦手なのだった。

「俺は…命を助けてもらったし…悪い人とは思えませんが…」

「そうだろ？俺はもっと、ロイルのことを皆分かってくれたらなっ
て思うのに…」

「ヴァレス…」

「ふむ、君がそれだけ友人を大切にしているんだ。ハーゲンもそれ以上のことを望んでないだろう」

以外にいい人なのか？とリックは澄ました顔をしたルイスを見つめた。

ヴァレスは照れくさそうに笑み、動かしていたモップと手を止めた。

「君はもしかしてロイルのことをホントは認めているのかい？」

「馬鹿も休み休み言え！」

踵を返し、訓練に戻ったルイスを見つめ、ヴァレスは声を立てて笑った。

止めていた手を再び動かし、ヴァレスはリックに声をかけた。

「あいつも、中々いい奴だろ？ロイルの出世を妬んでるだけなんだ」

「はい…不思議な人ですね…」

「ふふ、確かにちょっと変だけどね」

訓練所の清掃が終わると、ヴァレスはリックから作業着を受け取り、帰り支度を始めた。

リックは何だか、ヴァレスと一緒に居た時間が名残惜しく、最後にこんなことを尋ねた。

「あの、また会えますか？」

「ああ、もちろん。お疲れ様。レニからは今日一日でお仕舞いって聞いてたから寂しいよ」

「…ありがとうございます…」

最後鼻声まじりのリックに、ヴァレスは笑って軽いハグをして別れた。

第四章 少女マリル

薄暗い室内は、無数に管を伸ばす大型の機械の照明によって支えられていた。

その室内の真ん中。蛇のように混み合った回線に埋もれるようにして少女がいた。カタカタとキーボードをひっきりなしに叩いては、側の書類に目をやる。しかし少女の健闘虚しく機械は電子音を鳴らして同じ言葉を繰り返す。

『システムエラー。システムエラー。』

少女は大きく伸びをして、機械の電源を落としてため息をついた。

「あらら、休憩が必要なんじゃないんですか？」

「あの方が毎回こちら側に贈り物ウイルスを送って下さるんだ…嫌がらせかなあ」

「兄さんは意地の悪いお方だから」

「はあ…」

少女の背後から現れた少年は、真っ黒になった液晶を覗き込んで少女にココアを渡した。

少女は手渡されたココアに口をつけ、書類を少年に渡す。

「これ、あの方に渡しておいてよ。僕はもう一度駄目なら疲れたから少し休むよ。」

「あーはいはい。この書類は大事だからねえ」

「また拗ねる。いいから頼んだよ。」

「はい、じゃあお休みイナーシャ」

背中を向け、ひらりと手のひらを振った少年を見つめ、少女 イナーシャは再び機械の電源をつけた。目の前に広がる文字の羅列の前に、イナーシャは指先を叩きつけるようにキーボードを打つのだった。

リックは清掃活動後、ルイスの新人訓練に参加するようになっていた。

レニに罰が軽すぎるのではと自ら示唆したものの、彼は独特の笑みを浮かべて十分償われたと言ってその後は何の連絡もなかった。

清掃後、何をしたらいいのか特に命令もなかったため、リックの足は自然と訓練場へと向かっていた。ルイスは自分を頼ってきたのがよほど嬉しかったのか、リックに親しげに話しかけてきては同じような武勇伝を延々と聞かせた。

二日間はそうして過ごし、リックは次第に他の兵士とも打ち解ける生活に慣れを感じ始めていた。

そんなある日、清掃活動から三日後のことだった。

「あーあ、明日からはフォスター大尉じゃないのかー…出るのが億劫になるよ」

「あの人の話は長いけどソフトでやり易かったのになあ」

二人の兵士が話し込んでいるのを耳にして、リックは何となく会話に参加してその二人に尋ねた。

「どうしてフォスター大尉じゃなくなるんだい？」

「ああ、リック。お前は来たばかりで知らないだろうが、ここの指揮はハ・ゲン少佐が担当しているんだ」

「その訓練がやったら厳しくてさ…これぐらい出来んとはたるんだる！とか一括されて…何様なんだよホント」

リックはその様子がなんとなく想像し易く、腕を組んで仁王立ちしたロイルが指導している姿を思い浮かべた。会ったなりに背後を取られて軍人の何たるかを説教されたリックは、引きつった笑みを浮かべた。

「しかも明日は海軍の新兵との合同訓練で、海軍の軍人がアクアドームを視察に来るらしい」

「俺たちは人形殲滅の為の特殊部隊だから、他の軍から少し馬鹿にされてるって聞いたんだ」

「えっ？陸軍ではそんなことなかったのにな…」

リックが陸軍に入隊したのは昨年のことであった。両親の強い希望によって入隊を果たしたが、故郷であった国が人形の手により陥落し、両親共亡くしてからはそのあだ討ちを誓ってレイディアンを夢見ていた。どんな組織であるのかよく把握してなかった自分を今更後悔していたが、ロイルと出会って数日間。リックはレイディアンへの失望はなかった。

子供すらその手に刀を持ち戦うこの世界の厳しさを実感し、己を叱咤する。来て間もないリックだったが、外部の反応がいかにこの組織の強さを知らないのかと思うと、リックはこみ上げるものがあった。

「馬鹿にされる組織なんかじゃないと思うのにな…」

「おお、新米言うね！それは皆思ってることさ。まあ、ハーゲン少佐の訓練は嫌だけどね」

「海軍のひよっこ共も目が覚めるだろうよ」

「…ねえ、そんなにきついのか？」

リックの質問に、兵士二人はにたつと嫌な笑みを浮かべた。

その不気味な笑顔に何の意味があるのか分からないリックの背中には冷たい汗が知らず流れていた。

(そういえば、あれから三日。そうか今日は起きているのかな…)

レニから一度眠ると三日は目を覚まさないことを聞いていたリックは、今日がそろそろ起きる頃なのだと思い出した。訪ねてみようとは思っていたものの、少しわだかまりがあつたリックは訓練に打ち込みながら、ロイルにはなんとお詫びしようかと考えるばかりだった。

二話

夕方、訓練が終わり一息ついたリックはエレベーターの中に居た。レニから以前、ロイルは菓子が好きだと聞いていたリックは機嫌取りになればと友人の兵士から少しお金を借りて街で棒つきのキャンディを数本買ってロイルの私室へと向かった。かさかさとし動きするたび音をならす紙袋をしわがつくほど抱きしめ、二十階で止まったエレベーターから勇気を出して降りた。

ロイルの部屋の前の通路には、二人の兵士が門番をしていた。兵士はリックを引きとめ声を掛けた。

「ここはロイル・ヴァン・ハーゲン少佐の私室だ。見たところ新兵のようだが何の用だ？」

「あ、あの。レニ中尉から聞いてませんか？俺、リック・ウィーゲルです」

「ああ、君がウィーゲルか。承っている、入れ」

道を塞いでいた兵士が避け、リックは礼をして間をすり抜けた。

廊下から部屋へは一直線で、リックは大きく息を吸って部屋をノックした。

「あの、ロイルくん？俺、リックだけど…」

するとドアがすぐさま開き、リックはドキッとして顔を上げた。

しかしそこに居たのはロイルではなく、色素の薄い銀髪をした少女が、高いヒールで上がった身長で見下ろしていた。

リックは驚いて何から訪ねようかと口をぱくぱくさせていると、少

女は落ち込んだ様子でリックに告げた。

「ロイルなら居ないみたいよ。またお墓参りに行ったみたい」

「…お墓参り…?」

「そ、帰ってきたら必ずあこに行くもの。あーあ、また逃しちゃった。」

落胆しきった少女はわざと体を猫背のように丸めてため息をついた。リックは少女の背後から部屋を覗き込んでみたが、確かにロイルは見当たらなかった。

くるん、とぶどうの房のようなカールされたツインテールが揺れ、少女は顔を上げてリックを見つめた。

「誰だか知らないけども、墓参りしている時にロイルに会わない方がいいわよ」

「はあ…機嫌が悪いつてことですか?」

「まあそんな感じだけど正確には落ち込んでるみたいだからそっとしてあげるのと一緒かしら…」

少女は突然リックの手にしていた紙袋に手を突っ込むと中から鮮やかな赤色のキャンディを引っ張り出した。

「そんでもって、今のアタシと一緒によ!」

と、何故か憤慨した様子でそのままキャンディを奪うとそのままロイルの部屋を後にした。

リックは無理やり手を突っ込まれた紙袋と少女の背中を見遣り、呆然と立ち尽くした。

「…何だったんだ…あの子…」

帰還すると必ず訪れる教会へ足を運び、ロイルは墓地を歩いていった。アクアドームでは、人が死んでも埋葬することができないので、その死体は腐らないよう加工されて特殊な方法で埋葬されていた。ロイルはいつも買う花屋からその少女が好きだった花を両手に抱えるほど購入しては手向けていた。

ロイルが目的の墓標まで歩いていると、その姿に気づいた一人のシスターが駆け寄ってロイルの背中を軽く叩いた。

「やあ、ロイルさん。また来て下さっていたんですね」

「…シスター、ケイ…相変わらず元気だな」

「それがわたくしの取り得ですからね。今日もマリルの墓参りですか？」

「…ああ」

「花、預かりますよ」

ケイに花束を渡したロイルは、胸元のロザリオに触れて花束を見遣った。

「ピンク色が好きだったそうだ…」

「ああ、そうなんですか。小さい女の子ですものね、それでこのガベラを…」

ケイは持っていた花を目を細めて見つめた。花の香りがふんわりと漂い、ケイはロイルに直った。

「もう、許してあげてはどうです…?」

「…僕は、一生許しを得ようなんて思っただけだなんて思っていない…」

「でもあれから、あんなに明るかった君がこんな風になって…わたしは心が痛い…」

「…あなたが痛める必要はない。」

「ロイルさん。神は許しを請うものをお許しになる。君も本当は解放されたいのではないですか?」

「もう、放っておいてくれないか…あまりこの話をしたくない」

ケイが何かを言う前に、ロイルはケイの脇を通り抜け、歩き出した。風に揺れ、花弁を散らすガーベラをそっとおろしてケイは苦しそうに眉を寄せた。

「まだ君は、あの事件を自分のせいだと責め続けているんですね…」

三話

墓地から戻ったロイルは、エレベーターの壁にもたれかかり嘆息する。

墓地に行けば何度もこみ上げる虚しさがロイルを苛み、ロイルは両腕をぎゅっと抱きしめた。

二十階にたどり着く直前、エレベーターのドアが開いた。ロイルはハツとしてもたれかかっていた壁から離れて入ってきた人物を見つめて、苦い顔をした。

「ああっ！ロイル！」

「…トレストウーヴェ…」

口にくわえていた飴を噛み砕き、少女はロイルへ指を指す。エレベーターにつかつかとヒールを鳴らして入ってきた少女はロイルの柔らかな両頬をつねった。

「レニにアンタに話があるからって伝言頼んだのに無視したわね！」

「やめろ、離せ」

ぱっと片手でトレストウーヴェの手を払いのけたロイルは、ため息をつく。

トレストウーヴェは払いのけられた手を不服そうに見つめ、ロイルに向かった。

「あと、昔みたいにとっティって呼んでよ」

「…何の用だったんだ」

愛想の悪いロイルにもう、と悪態をつけトレストウーヴェはロイルの隣に並び、その横顔を見つめた。

「帰った時ぐらいは、顔を見せて欲しいの…だってロイル忙しいでしょ？パートナーの決まっていないアタシは実戦でロイル達の役には立てないし…」

「…お前は、戦うより雑務をしていた方がいいんじゃないのか？」

「そりゃ戦いたくはないわよ！でも、アタシは…、」

突然口をつぐんでしまったトレストウーヴェに、ロイルは眉を上げてその顔を見つめた。

ロイルの視線を感じたトレストウーヴェは横目でロイルを見遣り、咳払い一つして赤らめた頬を両手で覆った。

「何でもないわ！とにかく約束だからね、いい？」

「…考えておこう」

エレベーターはあっという間に二十階に到達する。

別れ際、忘れかけていた事を思い出したトレストウーヴェは、ロイルを引きとめ声をかけた。

「そつえばお客さんが来てたわよ」

「誰だ？」

「えーつとね、鼻にそばかすつけた男の子だったと思うけど…見たことない人」

「鼻にそばかす…？」

ロイルの脳裏に浮かんだ一人の人物。何故わざわざ部屋までやってきたのかの合点はいかなかったが、なんとなくその理由を模索しながら歩き出した。

ドアが閉まる直前。もう背中を向けてしまったロイルを見つめて、トレストウーヴェは寂しげな表情をし、ドアが閉まった。

ロイルは、部屋の前でうずくまる青年を見下ろし、本日何度目か分からないため息をつく。

青年は疲れていたのか、お菓子屋の紙袋を抱いたまま熟睡しており、舌打ちをしたロイルはその肩を揺さ振って青年を起こした。

「ウーゲル、おい、起きろ」

「う…、ロイルくん…？帰ってきたんだ」

まだ寝ぼけた様子のリックを引つ張り、近くのソファァに預けると、ロイルは上着を脱いで呆れた顔をした。

「僕の部屋は託児所じゃあないんだぞ」

「うっ、起きる、起きるからそんなに揺さ振らないで…」

再びロイルに容赦なく揺さ振られて起きたリックは、改めてロイルの部屋を眺めた。

部屋は、必要最低限のものしかないシンプルな部屋だった。アイリオンやランガーの部屋がごちゃごちゃしていたため、より一層そう感じられる。

部屋の一番奥はガラス張りで、ちょうど建物が見えないロイルの部屋からは、アクアドームの夜景とドームから見える海が一望できる。そのすぐ側の大きめのベッドに腰掛けたロイルはインナーとスラックス姿でリックに向き合っている。

「何の用だ」

「あ、あのねっ…」

がさつと背中に敷いていた飴の袋を取り出し、リックはおずおずとそれをロイルに差し出した。

「何のつもりだ」

「この前…の、謝りたくてきたんだ…。助けてくれてありがとう。それとこれ、一本取られちゃったけど」

「…ふん、レニの入れ知恵か」

大人しく紙袋を受け取ったロイルは、中身を確認して鼻を鳴らした。自分の脇にその紙袋を置いたロイルは立ち上がって戸棚を漁り始めた。

「まあ、お茶の一つぐらいは出してやる。飲んだらすぐに帰れよ」
「ありがとう…」

紅茶の缶を開けながら、ロイルは少し微笑んだ。初めてそんな表情を見たリックは、意外さを感じてロイルを見つめた。

柔らかい笑みだと、雰囲気まで違って見えた。

「何をじろじろ見ている？気色が悪いな」

「あ、ごめんっ…なんだかロイルくん笑ってた方がいいなって思っ
て…」

「…大きな世話だ」

いつもの表情と雰囲気に戻ったロイルに、リックは苦笑する。

やがてロイルが淹れたお茶が運ばれ、側にはカラフルなマカロンが差し出された。

「ねえ、ロイルくん…聞いてもいいかな？」

「なんだ」

マカロンをひよひよいと口に放り込みながらロイルはリックに返った。

リックは紅茶の入ったカップを見つめて、ゆっくりと間を置いて訪ねる。

「誰のお墓に行ってたのかなあつて…」

「……………」

「ご、ごめ、聞いちゃ駄目だった？」

「…四年前…」

「えっ？」

「四年前、僕が担当した任務で亡くなった少女がいたんだ」

突然声音が変わったロイルにどきまぎしたリックだったが、

ロイルはさほど怒った様子もなく、一面ガラスの窓を見遣った。

「その少女は僕の判断ミスで死なせてしまった唯一の人間だった」

リックは手をつけようとしていたカップから手を離してロイルを見た。

その瞳が見つめる先は、深い彼の悲しみを包み込むような深海が広がっていた…。

三話（後書き）

ついにロイル中心の話にできました…ここからは少し長いお話になります。そしていつにも増して暗いです…。

四話

四年前
：

「はい、ヴァレスの負け〜！」

「おい、ロイルもう一回だも一回！俺さっきから負けてばかりだよ〜！」

新品の制服に身を包んだ少年二人が、小さな産業の栄えた村へ列車で向かっていた。

木々の間をすり抜けながら走る列車は、各駅停車しながら少しずつ目的の村の駅を目指す。ロイルは自分の手札と山を掻き分け、笑顔でヴァレスにトランプを渡すように手を差し出した。

「駄目〜！ほらほらトランプ戻して。僕たち遊びに来たんじゃないんだからね！」

「はいはい、ほら。それにしても誰も乗ってないしつまんないよな」

「田舎だからね。僕たちの初仕事にはふさわしい場所だよ？産業が活発で明るい村なんだって」

「人形回収を促さなきゃいけないけど田舎だよ？都会じゃもうみんな人形なんて誰も持ってないのに…。」

「愚痴らない！」

全てのトランプをまとめると、ロイルは透明なケースにそれをしまし鞆に戻した。

窓の外の景色は久々の陸地を映し、ロイルは物珍しそうにじっと窓を見つめる。

ヴァレスは退屈そうにあくびをすると、座席に背中を預けて腕を組

んだ。

「俺たち、訓練頑張ってきたのにまだこんな任務ばっかでき、出世なんかできんのかな？」

「僕は出世なんか興味ないよ…これからの恩返しになればいいだけだから」

「そんなこと言って、ロイルが一番出世したりして」

「やめてよ、もう」

おどけたのヴァレスの背中を叩き、ロイルは微笑む。

撥水加工されたつるつるの制服のボタンをしきりに触り、ロイルは初任務に胸を高鳴らせていた。

ヴァレスは体のたるさを感じて目を覚ました。

薄暗い車内は駅員のろうそくの火によって少しずつ明かりが灯されていった。ぼんやり揺れるランプの炎を眺めて、向かいに座り眠ったままのロイルを揺さ振った。

「ロイル、俺今停まっている駅でトイレ借りてくるよ、君は？」

「うあ…うつん待ってる」

「そうか」

座席を立ち上がったヴァレスを見つめて、ロイルは再びまどろみ始めた。

ふと、隣の座席を見遣る。

眠気がまわる頭でロイルは、少女がうずくまって座っているのを見つけた。

「…君、どうかしたの？」

どうやら少女は泣いているようだった。

何があったのか尋ねてみると、少女はより一層わんわんと泣くばかりでロイルはようやく目を覚まして少女の元まで歩き出した。

「どこか痛い？お母さんや…お父さんは？」

「…お姉ちゃんと、はぐれたの…」

嗚咽を漏らす少女がようやく呟いた言葉に耳を澄まし、ロイルは困り果てた。

声を掛けた手前、放っておくわけにもいかず一先ずロイルは少女の頭を撫でて落ち着かせることにした。

「お兄ちゃんが一緒に捜してあげようか？」

少女が顔を上げる。幼いその顔は不安げに歪められ、目許はぱんぱんに腫れ上がっていた。

「…いいの？」

「うん、もちろん。君、名前は？」

「マリル、」

少女はようやく笑顔を見せた。

頬と目を赤くした少女は涙の引いた両目をこすり、ロイルの制服を掴んだ。

「そうか、マリル。僕はロイル。よろしくね」

「うん、ありがとうロイル！」

「君のお姉さんはこの列車に乗っているんだよね？」

「きっとそう、私言いつけを破って勝手に飛び出してきたから向こうも捜しているかも」

「そうなんだ…なら、僕も謝ってあげるから一緒に姉さんの所に戻ろう」

小さなマリルの手を握り、ロイルはにっこりと笑顔を向けた。

マリルはロイルの手を握り返し、彼が聞こえないような小さい声でそっと呟いた。

「…ごめんね…」

五話

ヴァレスが戻った時、荷物を残し座席は空っぽだった。ひよっとしてロイルもトイレに立ったのかと荷物をどけると、下にはノートを切り取ったメモが残されていた。

「女の子のお姉さんを捜してきます…？何だそりゃ」

走り書きされたメモに視線をやり、ヴァレスは首を傾げた。そして同時に、しかし…と独り言を続ける。

「女の子のお姉さんを捜しになんて羨ましいでやんの」

と余計な一言を呟いた。

列車は八両繋がっていた。ロイル達が乗っていたのは六両目で、一等車が手前の並びだった。流石に貴族でもない二人は一等席に入る訳にもいかず、三等以下周辺で捜索に当たった。

ロイルはマリルの姉のことを何一つ知らないので、姉の特徴を尋ねた。

「ねえ、お姉さんはどんな人なの？」

「髪は黒くて…ポーに…テールにしているの。背が高くてロイルより年上だと思う。」

「そっか、名前は？」

「…マリエル」

「マリエルさん…何だか名前似てるね」

「…そう、かな？」

列車はどこもすかすかだった。こんなすかすかな列車で迷子になることがあったのか、確かに姉らしき女性の姿は見当たらなかった。あらかたの車両を見回り、ロイルはマリルを見遣った。

「ねえ、マリル。君のお姉さん見当たらないみたいだけど…本当にこの列車についてきたのかな？」

「…分からないの…。私…私…」

「わああ、泣かないで！あ、そうだ、飴…好き？」

ロイルは制服のポケットに両手をつっこみ、ごそごそと中身を漁った。

やがてロイルがもう一度両手を出した時には、両手いっぱいには飴が握られていた。

マリルは泣き止み、ロイルの手の中で輝くお菓子を見つめて、感嘆の声をあげた。

「わあ…すごい…」

「食べる？ここの飴はすごくおいしいんだよ！」

ロイルから飴を手渡されたマリルは包みを破き、その大きな飴玉を口いっぱい頬張った。ロイルは泣き止んだマリルにほっとして、自分も持っていた飴を口に入れる。

マリルはきゅっとスカートのすそを握り締めてロイルを見上げた。

「もしかしたら、お姉ちゃん…まだ村にいるのかも」

「この列車にはやっぱり居なかったしね…」

「私、帰ろうかな…」

うつむいたマリルから呟かれた言葉に、ロイルは目を細めて柔らかいマリルの頭を撫でる。

「何があつたのかは知らないけど…家出は駄目だよ。僕もついていつてあげたいけどお仕事があるから…君はどこに住んでいたんだい？」

「カーラン村：」

「えっ？本当？実は僕らもそこに用事があつたんだ！」

マリルは驚いて顔を上げた。

ロイルは再びマリルの手を引き、ヴァレスと座っていた座席へ案内する。

「折角だから、一緒に行こう？最近は何騒だし女の子だけじゃ大変だろうし…」

「で、でも…」

「大丈夫！僕のパートナーはすごくいい人だから、きっとマリルも気に入るよ」

ロイルはそう言ってマリルの手を握ったまま背を向いた。

マリルはそんなロイルの背中を見つめ、焦ったように開いた左手のつめを噛んだ。

列車が動き出す。

体が左右自由効かない常態で歩く二人の中の思惑は、既にこの時すれ違っていた…。

六話

ヴァレスは中々戻らないパートナーを心配し、落ち着きなく足を動かしていた。何度もドアの方向を振り返るが、人がやってくる気配など感じられなかった。しばらくして、ロイルが戻って来た時、その手に握られた小さな存在に、ヴァレスは顔をしかめた。

「おい、何リトルレイとのん気にデートしてんの。遊びに来てるんじゃないって言ったの誰だよ」

「迷子だったんだ」

「ふうん？こんにちわレイ。俺はヴァレス！君のお名前は？」

マリルは思わずロイルの背中に隠れた。初対面でもロイルには人見知りしなかったマリルがどうしたのかと、ロイルは後ろに振り返って苦笑した。

「ほら、この人が僕の言っていた友達。どうしたの？怖い？」

マリルが素直にうなずき、ヴァレスは肩を落としてうなだれた。

「おいおい、ロイル！彼女に俺の変な話したんじゃないよな！？」

「ええっ？そんなことしてないよ、ヴァレスの尖った目がいけないんじゃない」

「失礼な！生まれつきだよっ！」

くすつ、と声を立てたのはマリルだった。ロイルとヴァレスは顔を見合わせ、大げさなほど笑った。

「あはは、よかった〜笑ってくれて、ねえねえロイル、さっきのトランプでまた遊ぼう!」

「トランプ、好き?」

「…うん!」

こうして三人は打ち解け、ぼんやり明かりを灯す夜の列車の中でトランプをカーラン村に到着するまで飽きることなく続けた。

列車はカーラン村の駅にゆるやかに滑り込み、停車した。

薄暗い森が迎える湿った空気の村は、がらんとしていて人の気配を感じなかった。

終着ともあり、ロイル達三人のみが駅に降り立った。

「ここがカーラン村?なんか話とは違うなあ…」

「三日前に調査隊が来てたんだろー?まさか間違ったんじゃないのか?」

「マリル、ここがカーラン村だよね?」

ロイルは背後にいたマリルに振り返った。しかし彼女の姿はなく、ロイルは驚いて辺りを見渡した。

「あれっ?マリル…?」

「あれ?さっきまでロイルの後ろに居たのにな…?」

「ううん、迷子になったのかなあ?マリルー!マリルー?」

「ロイル、とりあえず中に入って捜さないか?一足先に帰ったのかも」

「…うん」

苔が生したレンガ造りの駅は無人で、明かりの一つもなかった。
ロイルは不気味に客人を出迎えるその駅を眺めて、不安になりながらも、改札をすぎて村の門をくぐるのだった。

ロイルは、村の様子に啞然として立ち尽くした。

村はつい最近、活発に産業を勤しんでいたとは思えないほど朽ち果て、荒れていたのだった。言うなれば廃墟で、人の気配など皆無だった。ヴァレスは落ちていた女の子のぬいぐるみを取り、苦しそうな顔をした。

「こんな…ことって…」

「ロイル、ここ、本当に活発な村だったのか？こんなに荒れ放題で…調査隊がさぼったんじゃない…」

「違う、ヴァレス。よく見て…」

酷い荒れようの家屋から、こぼれた大型の鍋が転がっていた。

ロイルはその鍋にこびりついたスープを指先で掬い、今にも泣き出しそうな声で告げた。

「…温かい…ここはつい最近人形に襲われたんだ…僕たちがもっと早くここに来ていれば…」

「…でも、居た所で俺たちに何か出来たことは…あったのかな…」

「僕らは軍人だぞ？！民間人のこの人たちを逃がすことだって出来たさ！…もう過ぎたことを言っても仕方ないけど…」

「…！マリル、危ないんじゃないのか…？」

ハツとしてロイルは跳ね上がるように立った。いつの間にかいなくなつた少女の笑顔を思い出し、ロイルは拳を握つた。

「無事でいて…、マリル…！」

森を抱えた小さな村は、製糸工場があつた。

村の女はその製糸工場で働き、男は外に出稼ぎに向かう。家事や子育ては人形に任せ、村は働く人々の活気があつた。列車は都市を行き来する男たちの交通手段として利用されて忙しなく動き、皆が大変ながらも楽しそうに暮らす村だつた。

そして、そんな村にアトキンズ一家がやってきたのは、製糸工場が盛り上がりついていた最中のことであつた。

貴族だつたマリルの父、クリスは避暑地であるイヴンが衰退したのを期に新しい別荘をここ、カーラン村に移したのだつた。クリスの性格は大雑把で、自分勝手であることが多かつた。

別荘を建てる際、側の製糸工場が気に入らなかつたクリスはその工場丸々買い取り、数日後には跡形もなく取り潰してしまつた。

もちろん女性の仕事はなくなり、昔のような快活さは無くなつた。しかしその分男が働くようになり、都市に出向いた男たちは人形の混乱を村に伝えて、今まで人形の役目であつた家事などは、本来の妻が担うことになり、村は明るさと豊かさを取り戻した。

唯一、アトキンズ家を残して。

レイディアンの調査隊がやってきた時、村人はみな口を揃えて言った。

「うちは、産業の盛んな明るい村ですよ」

それは精一杯のアトキンス家への抵抗だった。

七話

切り立った丘に、城のように立派な豪邸があった。

ロイルはマリルは探す傍ら、一軒一軒潰れた家を見て回ったが、まだ息をした人の姿や、村民の死体さえも見当たらず、どこか不気味さを感じていた。

ヴァレスは丘のそばから戻ってくると、その屋敷に明かりがあることをロイルに伝えた。

「生存者は見当たらなかったのか？」

「うん、何も無い…不思議なほど…」

「あの屋敷、怪しいな…近づいたら明かりが灯っていたんだ」

「…マリル、どこにいるんだ…」

二人は、丘にのぼり屋敷のすぐそばの生垣に体を沈めて様子伺った。

伸び放題の生垣はもう何年も触られていないことがよく分かった。

ちくちくと腕を刺す生垣を退けながら、正面入り口を見つめる。

ちょうど二階の窓からもれた光がぼんやり入り口を彩っていた。

「本当だ、誰かいるのかな…」

「人形が潜んでいるのかも…、一度レイディアンに連絡を…」

「…あ、誰か出てきた！」

通信機に手を掛けていたヴァレスは、ロイルに頭を押さえつけられ、そのまましゃがみこんだ。

中から出てきた人物はしきりに辺りを見渡し気にしているようだった。

ロイルはよく目をこらし、思わず息を飲んだ。

「…こちらエヌ班…応答せよ…」

そつと通信を始めたヴァレスを尻目に、ロイルはふらりと生垣から飛び出した。

「…！？ば、ロイル！」

「あの人は…」

入り口から出てきた人物はゆっくりと踵を返して見えなくなった。ほんの一瞬明るい玄関のそばで見えたその人物に、ロイルは愕然として言葉を失った。

「黒髪のポニーテールに高い身長…」

「ロイル、何してんの！見つかったらどうだろっ！」

「間違いない、お姉さんだ…！」

走り出したロイルを止めることが出来ず、ヴァレスは思わず受話器を置いた。

屋敷へ躊躇なく飛び込んだロイルは、薄暗い室内で自分の心臓が高鳴る音だけを頼りに歩き出した。

屋敷は、誰かが住んでいるとは思えないほど荒れ果てていた。

わたあめのように何層にもなった木の巢が天井をはびこり、床は腐って抜けんばかり。照明は無かったが、天井が一部崩壊している

ため、外の月明かりが室内を照らしていた。

ロイルは慎重に辺りを伺い、足を置いただけで崩れそうな階段を音を立てないように歩いた。

話し声もない二階。

明かりだけがこうこうと灯っていて、中の様子はよく見えない。こまでくる中、マリルの姉らしき人物には遭遇しなかった。

ロイルは意を決して室内に侵入する。

その室内の真ん中にはぐったりと椅子に座るマリルの姿があった。

「マリル！」

ロイルは急いで彼女に駆け寄り、だらんと力なく下がった腕をそつと取り安堵の息をつく。

マリルの椅子の側にはランタンが置かれていて、横顔は胸の口ザリオを反射させて輝いていた。

マリルは首を動かさず、目でロイルを追うと、何かを呟いた。

「…ん…た…の？」

「えっ？何、よく聞こえない…」

「…何で付いてきたの？」

ごおつと風が叩きつけるような音がした。ロイルが思わず振り返る前にランタンの火がふつと消え、轟音と共にロイルに大きな斧が振り下ろされた。

突然背後から奇襲にあったロイルは反動で転がり、強く背中を打ちつけた。

「…ったあ…！」

「このこのこんな村に来なければ、死なずに済んだのに…」

床に大きな亀裂と穴を作り、斧が再び上げられた。ばりばりと木製の床は悲鳴と屑を巻き上げる。

椅子から立ち上がったマリルの側で斧を構えたポニーテールの女性、マリエルはキツとロイルを見据えて斧を向けた。

その腕は人形特有にシリアルナンバーが刻まれてあり、質素なエプロンドレスから覗く細い足には刃物が括り付けられていた。

「こうするしか、ないの…許してね」

すっとマリルの小さな手が下ろされた。

それを合図にすばやく飛び掛ったマリエルは、斧を短剣のように振り下ろす。

ロイルは早すぎるその人形の動きに圧倒され、肩に刃がかすって血を流した。

「うそ…だと言って…じゃああの村の人たちもみんな君が…」

「私じゃないよ。マリエルがやったんだよ」

「そん…な…！」

「私は…どうにもできないの…マリエルさえいれば、いいんだから」

冷たい少女の瞳。ロイルは動揺してうまく刀が出せなかった。もたもたとしている間にも、再び床から斧を引っこ抜いたマリエルがロイルに構える。

もう駄目だ、そう目を閉じたとき、部屋に銃声が響いた。

「ロイル！」

一瞬、銃声にひるんだマリエルに、ロイルは渾身の力を込めて蹴りを入れた。

人形であるマリエルは数十センチ吹き飛ぶと、受身も取らずその場に倒れ込んだ。

「大丈夫か、ロイル！」

「ヴァレス、駄目だよ…君は戦ってはいけない、のに…！」

「何言ってるんだ、逃げるんだよ！人形の討伐は俺らの任務じゃない。もし戦ってクビになっても清掃員になっても頑張ってるから！」

「ヴァレス…！」

銃を構えていたヴァレスはロイルを起こして、包帯をすばやく肩に巻きつける。マリエルが再び立ち上がるか否かで、二人は走り出した。

「行かせない！」

しかし、手の空いていたマリルがそれを阻止するように立ちはだかり、ヴァレスは銃を突き付けた。

「ヴァレス！」

「君は立派な犯罪者だ…、そこを退かなければ俺は君を撃つ！」

マリルは頑なに首をふり、ついには涙を流してもそこを退こうとはしなかった。

ヴァレスはマリルを見据えたまま、安全装置を外して指を添えた。

「やめて、ヴァレス！」

「やらなきゃ、二人とも死んじゃうだろ！？！」

パン！と乾いた銃声が響いた。

室内は静寂に包まれて、やがて声をあげたのはロイルだった。

「向ける相手を…間違っている…」

銃口はマリルの斜め上を貫いていた。マリルはその場に座り込んで呆然と二人を見つめる。

ヴァレスははち切れそうに鳴る心臓と荒くなつた息で、襲い掛かる敵に一瞬気づけず、数秒遅れて叫んだ。

「ロイル、後ろっ！」

しかしその時には既に遅く、ロイルの背中には月明かりに鈍く光る斧が振り下ろされていた。

八話

声にならない激痛がロイルを襲った。息が急激に上がり、口は魚のようにはくはくと無意味に開かれる。背中から血しぶきが上がったのと同時に、マリエルは斧を落としてロイルの背中は切りつけられた傷だけで済んだ。

「なん…エラーが発生する…？これはあの方の規制…？」

初めて声を上げたマリエルは、ぶつぶつと何かを呟き始めた。何か合点が行かない様子のマリエルに、ヴァレスは数発小型拳銃の銃弾を叩き付けて馬乗りになった。油断していたマリエルは身動きが取れず、ヴァレスは足に括り付けられていた短剣も奪って遠くに投げた。

「…俺は、人形全てが嫌いなんだ…、よくもロイルを…！」

マリエルの口に銃口が向けられた。人形は人間と違って銃弾ぐらいでは中々壊せないが、脳のデータと心臓部分の機能を破壊すればコアがある人形でない限り機能が停止する。

ヴァレスの腕は反動で痛んでいたが、薄い呼吸を繰り返すロイルを横目で見遣ったヴァレスは引き金に手を掛けた。

「やめてっ…！」

どんっ、とヴァレスの体に体当たりして、マリルは涙ぐんだ。

思わずバランスを崩したヴァレスはマリエルから転げ落ち、銃は斧が穿った穴へ落ちていった。

ヴァレスは唯一の武器を無くし跳ね起きると、ロイルを抱えあげてマリルに返った。

マリルはマリエルをかばうように大きく手を伸ばしてぼろぼろと涙をこぼした。

「マリエルは悪くない、私はマリエルがいない世界で生きていけない！」

「マリル、そいつは殺戮兵器なんだ…、破壊しなければならぬんだ」

ヴァレスはゆっくりと後ずさりながら述べた。

マリエルはマリルの後ろで起き上がり、側に落ちていた短剣を手にとった。ヴァレスはロイルの耳からピアスを剥ぎ取ると手のひらを掲げる。するとピアスはみるみる大きくなり、二刀の日本刀に姿を変えた。ヴァレスはその片方をマリルに向け、息を吐いた。

「お願い、殺さないで！」

ひゅっ、と刀が掲げられ、マリルの鼻先を掠めて刃先は二人同時に貫こうとぎりりと光って突き立てられた。しかしその切っ先は二人に触れることなく、ヴァレスの手から離れて床をスライドしていく。ヴァレスが顔を上げると、そこにはヒューヒューと肺から空気の漏れる呼吸をしたロイルが刀を持って立ちはだかっていた。

「なっ、何してんだロイル！」

「…駄目だ…マリルまで…ころしちゃあ…」

命が助かったマリルは、血がにじんだロイルの背中を見上げて掠れた声で尋ねた。

「…どうして…」

「…僕は…君の大切な人を壊せない…だって僕も…」

そう、あの人が。告げようとした瞬間、振り返ったロイルの頬に数滴の血が跳ねてかかった。

何が起きたのか理解できない頭は、マリルの胸を貫通した短剣を見つめて上ずった声を上げた。

「あああ…ああ、マリル…っ！」

勢いよく引き抜かれた短剣は、マリルの血を噴出させ、胸元に輝いていた金のロザリオはするりと胸から落ちて回転してはすぐに動かなくなった。

ロイルはマリルの血を浴び、スカイブルーの瞳に真っ赤な景色を映した。

マリエルは髪を解いて霧のような息を吐き出した。

「ごめんなさいね、小さいご主人。もう私にも破壊衝動を止めることができないの」

持っていた短剣はついに、ロイルに振り下ろされようとしていた。マリルの屍を呆然として抱くロイルに、ヴァレスは刀を奪ってマリエルに一線を与えた。

それからどれだけの時間が経っただろうか。

ロイルは冷たくなったマリルの体を抱いたまま、月明かりの下に居た。

ヴァレスが破壊したマリエルの部品が足元に散らばり、それらをぼんやり眺めるロイルをヴァレスは強く胸元を掴んで叱責した。

「なあロイル、俺は間違っていたか？」

「……………」

「お前は一体何をしたんだ、言つて、みろっ！」

「…ぼくは…」

力なく視線を合わせないロイルを突き飛ばし、ヴァレスは言いようのない気持ちからうずくまって大声を上げた。軽い気持ちで臨んだ初任務は、最悪の幕引きを迎えた。

九話

それから、ロイルは任務違反と少女の過失致死によって牢獄の中にいた。

自ら軍人を辞めて清掃員になったヴァレスは、数ヶ月ぶりに友人の許を訪れていた。監視役の兵士が見つめる中、ロイルの牢獄まで連れてこられたヴァレスは、なんと声を掛けようか考えながら格子を前に、大きいため息を吐く。

壁にもたれかかって座るロイルを見つめて、ヴァレスは普段通りに声を掛けた。

「や、やあロイル…どう？ここには慣れた？って聞くのも変か…あの時はごめんその、俺…」

ロイルは一言も言葉を発しなかった。ただじつと自分の指先を見つめるロイルに、ヴァレスは困惑して言葉を探し黙ってしまった。両者静まり返った時、言葉を返したのはロイルだった。

「お前は、軍人を辞めたのか？」

「えっ？」

「…お前は軍人を辞めたのかと聞いている」

「あ…えっと、そう、その通り。うん、辞めた…」

ヴァレスはあまりにぶっきらぼうなしゃべり方をするロイルに戸惑い、言葉が途切れ途切れになった。

ロイルは腕を組み、隈の垂れ下がった不健康そうな顔で不敵に笑ってみせた。

「そうか。じゃあ僕は安心して上を目指せる…」

「ロイル？まさか、君…軍人を続けるの？」

「…僕は僕の弱さを恥じている。もつと、もつと強くなる。お前に助けてもらったこの命を使って、僕は軍人を続けると決めただ」

ロイルはふと、立ち上がってポケットから何か光る物を取り出して格子の間からヴァレスに渡した。

「マリルの墓を、アクアドームに作ってくれるように頼んだんだ。これをケイに渡してマリルに渡すよう言ってくれ」

真ん中にロザリオが輝くピンクのリボン。リボンは後から新しいものをつけたようで、血の染みもないきれいな色をしていた。ヴァレスは深くうなずき、リボンを握り締めると、ロイルはその両手を取った。

「それから…マリルに伝言を頼む。僕が強くなった時には、そのリボンを僕に貸して欲しいと」

「ロイル…」

「お願いだ…」

ふつと弱弱しく微笑んだロイルは、その後出所すると間もなくレニに出会い驚くほどの成長を見せる。そして半年も経たずその胸元には、堂々とピンク色のリボンとロザリオが輝いているのだった。

リックは冷めた紅茶に口をつけ、押し黙った。
あれほどロイルが何を考えているのか知りたがっていたリックだったが、その生々しい話を前に生半可な気持ちをしていた自分を恥じていた。

ロイルは最後のマカロンを頬張り、それを紅茶で流し込んで自嘲気味に笑った。

「お前は僕に似ている。まあ、同じ末路を辿らないための忠告だ」

リックはヴァレスが何故清掃員になったのか聞いたとき、話をうまく流されたあのとときの事を思い出した。どこか悲しい顔をしていたあのヴァレスの心境を思い、またそのことを話してくれたロイルを想って言葉がでなかった。

「…もういいだろ、いい加減帰れ。僕は明日の訓練の打ち合わせに行かなければならない」

「あつ、ごめん…そうだね」

立ち上がり、身支度を始めたリックに、ロイルは思い出したように戸棚からいつぞやのボタンを取り出して投げた。

「そういうのは一生ものだ、大事にしておけ」

リックはその陸軍で支給された服の安っぽいボタンをまじまじと眺めた。

それから、ロイルの胸元で輝くロザリオを見つめる。会ったなりの頃は似合わないと思ってしまったそのロザリオも、随分違って見えてリックは薄く微笑んで頷いた。

「俺、ロイルくんに会えて…よかった」

「ふん、明日には忘れてるなよ？いい頭をしてそうだ」

「それ、どーゆー意味っ？」

去り際、見送りもしない上司の背中を見つめる。

相変わらず華奢であったが、以前よりずっと、たくましく思えた。

ロイルにあった苦手意識は、もしかしたら得体の知れないものへの恐怖かもしれない。

すっかりそれが払拭されたリックの顔には、晴れ晴れとした笑顔が飾られていた。

九話（後書き）

九話でロイルの過去編は終了です。眠たいと思いながら一気に書いていたので、多分文章がおかしかったり、誤字があると思うのですが…。ロイルの印象ががらっと変わる話だったのではないかと思えます。でもロイルはやはりこのままで、性格は物語の最後までそのままです。笑

ここから後半は話がどんどん過激になると思いますので、苦手な方はご注意願います。

第五章 特別な訓練

海軍将校アランはアイリーンの部屋に赴くため、エレベーターに部下数人を連れて乗車していた。若くして将校の地位を手に入れたアランは聡明で、正直な人間であった。

どんなに目に掛けた部下でも不正があればすぐに取り除く。自身もまた疑われるような生活をしないよう、兎角潔白であった。

そのため、年配の者には慕われるアランも、同年代の妬みからはどうしても抜け出せず、敵視されることが多々あった。

媚びを好まず、その出世は全て自分の腕でもぎ取ってきたアランも陰湿なそのしがらみには手を焼いていた。

最上階で停止したエレベーターで、アランは小柄な少年が行き違いにアイリーンの部屋からやってくるの目撃して、足を止めた。

「アイリーン総統の私室はこちらか？」

少年はアランを上から下までまじまじ見つめると、言葉を発することなく頷き頭を下げた。

アランはエレベーターへ入って見えなくなった少年に振り返ると、誰に言うでもなく呟いた。

「不思議な雰囲気を持った少年だ…」

ロイルは、アイリーンとの打ち合わせの後、カミュのラボへ足を運んでいた。

基地の奥にあるほりつぱいその室内は、滅多にカミュ以外の者が立ち入ることが無いので、カミュが通れる程の狭さしかない通路が迷路のように伸びていた。ロイルは面倒そうに屈んだり這い蹲ったりしてその難解な小道を進み、ラボの中心でカミュをようやく発見した。

「おい、たまには掃除をしてもらえ。ランガーのゴミ溜めより酷いぞ」

「んあゝロイル、ごくろうさまあ」

カミュはボサボサの金髪に手を突っ込み、中を探るようなしくさで頭を掻くとチューインガムをぶっくり膨らませてロイルに振り返った。

始終動いたままの巨大な機械に、何を混ぜたのか不気味な色をしたフラスコ。

怪しただだよう机の上に嫌そうな視線を遣っていたロイルは、一枚の書類をカミュに寄越した。

「出勤命令だ。明日の朝迎えが来る。訓練場にきてくれ」

「ええっく？！僕があゝ？嫌だよ、僕戦うの苦手だし……」

「命令だ、明日は海軍の新人が視察を兼ねて訓練を行う。」

「うん、聞いてるけど、僕がラボから居なくなったら誰が門を開くのさあ」

「トレストウーヴェに今日中、叩き込むようにアイリーンから言われている。頼んだ、午後にごっちに向かうよう伝えておく」

「うわあ…トツティも大変だね…了解」

カミュは書類にさっと目を通し、再び机に嚙り付くように何か作業を再開した。

ロイルは無言でその様子を見つめていたが、やがて踵を返して元来

た細い通路へ帰っていった。

カミュは噛んでいたガムを今ロイルが持ってきた書類に包み、床に投げ捨てた。

新しいガムの包みを開きながら、カミュは子供らしからぬ真剣な表情でロイルが居た場所を見遣った。

「僕に出動命令なんて…、よっぽど何か嫌な事があったのかなあ〜」

リックは翌日、鐘が鳴るよりも先に目が覚めて時計を見つめた。

起床時間より二時間は早い時刻を指した時計を忌々しそうにながめたりックは、再び硬いベッドに倒れ込んですすけた天井を見上げた。

「今日はロイルくんの合同訓練か…厳しそうだな…」

ふと、リックはポケットに入れっぱなしだった写真の存在を思い出し、もう一度しわがついたその写真を開いてみた。

ロイルが言っていた少女はこの少女なのだろうか。幼い少女ではあったが、胸元にロイルが付けていたロザリオはない。それでは一体誰の写真であるのか益々気がかりであった。

リックはしばらくその動かない少女と睨め合いをしていたが、ふと窓の外が明るるので、リックは体を起こしてカーテンを開いた。

もちろんだが日が差したという訳ではない。

どこからかライトが当てられているのだ。リックは全開だったカーテンを一部だけまで閉めると、光源がどこなのか視線をさ迷わせた。

「あれは…潜水艦？」

ドームに黒い影が差した。

海の中をゆっくりと沈みながら、ライトを我が物顔で照らすその不細工な物体を見つめて、リックは思わず驚きの声を上げた。

潜水艦の管がずるずるとドームにひっかかり僅かな音を立てていたが、そんなことではびくともしないのかドームは無骨なその人工物をうつすら照らして鏡のように映し込んでいた。

潜水艦は何かを捜していたのか、しばらくするとすぐに上がっていき、やがて光と共に見えなくなった。

「海軍の潜水艦か何かかな…」

ドームは再び薄暗い静けさを取り戻していた。

再びまどろみ始めたリックは写真を撮ったまま夢の中へと落ちていった。

二話

アランを招きいれたアイリーンは、普段どおり派手で露出度の高い服を着ていた。アランは真面目な男だったので、その目も当てられないほど露出の高い服に不快感を感じていたが、同行した彼の部下は男として健全な反応を見せ、視線をなるべく逸らすようにしていた。

アイリーンはゲストルームにアランを通すと、お茶を出した給仕の女性と部下を含む複数の人間を払うとアランに向かい腕を組んだ。

「遠路はるばるようこそ、実は今回、訓練の話以外に貴公にお話が あったのだ」

「話？それであの人払いか」

「そうだ、まず…我々の存在意義は分かって頂けているな？」

「勿論だ。殺戮兵器オートマタの破壊と殲滅を特務とした組織なの だろう？」

「ああ、そうだ。しかし、考えたことがあるか？」

アイリーンは少し身を乗り出してひたとアランを見据えた。

アランは口ひげに手をやり、もったいぶったアイリーンの言葉に痺れを切らして尋ねた。

「何のことをだ？」

「あの破壊兵器達は何故突然暴走を始めて、誰が作ったのかを」

アイリーンの言葉に、アランは目を見開いた。

海軍としてその地位を築いてきたアランは、人形の混乱を耳にしてはいたが、実際は海の上。

その下にレイディアン本部があつたとしても、実情はなんら関わりもなく家族が人形によって死んでしまった話などしか耳にしていなかった。

「やはり、製造者が？」

「そうではないだろうか…という、憶測にすぎないが一人の男が関与している可能性があるのだ」

「一人？ たった一人だというのか？」

「そうだ、その男の名前はマリス・ソルワット。」

アイリーンは猫のように目を細め、苦い顔をした。

「私が昔愛していた男だ…」

ロイルは、訓練場のロッカールームの綺麗さに少しばかり驚いていた。

普段は滅多に手をつけない場所ではあつたが、海軍の合同訓練があるともあり、意を決して入つたのだ。ぴかぴかのロッカーはまるで買ったばかりの頃を思わせ、くすんでいた床は足元を鏡のように映していた。

「綺麗だ…」

「…それはウィーゲル新兵とブラックモアが数日前綺麗にしていたのだよ」

「…ルイス…」

「馴れ馴れしくファーストネームで呼ばないでくれ、ハーゲン！」

ロイルは面倒そうに振り返った。
ルイスはロイルを睨むと、背中を預けていた壁から離れてロイルの元へ歩き出した。

「だいたい君は私に仕事を押し付けて何をしていたんだね？」

「寝ていた」

「寝ていた！そんなやつがこの私よりも優れているとは思えん！全く！皆無に等しい！」

「何なんだ、用事がないならさっさと僕の視界から消えてくれ」

心底疲れたようにロイルが言うと言った憤慨していたルイスは自分の感情を抑えるように拳を握ると、その拳を開いてロッカーの側にいたロイルを右側に腕を伸ばして縫い付けた。

「海軍の合同訓練、私に任せたまえ」

「…何故だ」

「君には不可能だと言っている。そう、好きに寝ていたまえ、三日でも四日でも」

「断る。これは僕の仕事だ」

ロイルはルイスの体を押しつけてロッカールームを出ようと歩き出した。

しかしそんなロイルの態度に気に入らなかったのか、ルイスはロイルを引き止める。

「納得いかん！どうして私がお前なんか…！」

ぐいつ、とロイルの腕を引き寄せたルイスは、振り返ったロイルの凍てつく視線にひるみ、思わず後ずさりした。ぞっとするような地の底の冷たい視線のまま、ロイルはルイスに返した。

「お前は自分の力がどの程度のものなのか、知るべきだ」

ルイスはそれ以上ロイルを引き止めることが出来なかった。
圧倒的な力の差に、ルイスは唇をかみ締めてうなだれた。

三話

ロツカールームから出てきた人物に、リックは思わず声を掛けようかと口を開いてまたすぐに閉じた。寝る間も惜しんで打ち合わせをしたのか、ロイルの顔には疲れた表情が貼り付けられていた上に、見るからに不機嫌であることが伺えた。

片手にボードを抱え、訓練場の隅の椅子に足を組んで座ったロイルを見遣り、リックは昨日の夕方ロイルの部屋を訪れた出来事を思い出していた。

「よお、リック。早いじゃねえか流石のハーゲン少佐では気合が違うな」

「そ、そんなこともないよ」

同僚で少し先輩のデンは緊張した様子のリックの肩を組み、豪快に笑った。デンも元陸軍軍人だったがレイディアンにつき最近赴任し、その実力を買われて階級は上等兵。今回の訓練には補佐として参加することとなっていた。

集合時間の二時間ほど早い時間だったが、数人の新人が見て取れた。リックはちらっとロイルに視線をやってデンの腕を解いた。

「ろい…ハーゲン少佐、寝てないのかな…」

「さあな。まあ普段どおりツンツンしたガキの面してらあな」

聞こえるのでは、というデンの大きなぼやきにリックは内心はらはらした。

ロイルは聞こえていたのかいなかったのか、先ほどからなんら変わらない様子でばらばらと資料をめくっては大きなあくびをもらして

いた。

「それよりリック、朝食は済んだのか？」

「いや、早く目が覚めたのでここに来てみただけなんだ」

「おいおい、食いつぱぐれんぞ。あと二時間ほどあんだ、今行ってきたらどうだ？」

「あ、うん。デンはもう済んでる？」

「あーあ、俺は野郎とは食わない主義なんだ、さっさと行ってこい」

どん、とデンの分厚い手のひらで背中を叩かれ、リックは苦笑して出口へ向かった。

何となく誰もいなければロイルに声を掛けようかと思っていたが、早々諦めてリックは食堂へと足を運んだ。

合同訓練集合時間後数十分。

ぴしつと両手両足揃えたレイディアンの軍人が整列する中、ロイルは終始苛立った様子でボードにとんとんとペンを叩きつけながら海軍の新人の到着を待っていた。

本来のロイルならとつくに訓練を始めていておかしくないのだが、よその軍ともあり、大人しくその到着を待っている。

「ねえ、ロイルくすつぽかされてるんじゃない？」

「馬鹿な。これは将校直々に下された命令だぞ？そう易々と違反してもらおう軍人では困る。」

「んあ〜でも来る気配もないよ〜」

ロイルの隣でいつも通りチューインガムを噛んでいたカミュが、退屈そうに足をぱたぱた動かしてロイルを見上げた。数回ペンを回しながらカミュと言葉を交わしていたロイルは、ふと会話をやめて戸

口を見つめた。

「どうやら、お出ましのようだな」

数人の話し声と共に、訓練場の大きな扉が開かれた。

紺色の制服に斜めに被られたベレー帽には海軍のマーク、サメの紋章がぎざまれている。

しかしその美しい制服も台無しに、盛大に着崩した若い数人の新兵は、集まったレイディアン軍人の冷めた視線をもともせず、辺りを見渡す。

「なあんだ、まだ上官来てねえじゃん」

「ホントだ、俺らが遅刻したと思った」

ロイルは特に顔色を変えず、その数人の海軍新兵を見つめていた。レイディアン列からそつとその様子を見つめていたリックは、逆に何の反応もないロイルが怖く感じられて、心配そうに交互に視線を遣る。

ロイルは澄ました顔のまま、告げる。

「何をしている、さつさと整列しろ。もう集合時間を過ぎて訓練の時間をオーバーしている」

海軍の新兵たちは一瞬、何を言われたのか理解できず、きょとんとロイルの顔を見つめていたが、やがて下品な笑い声が響き渡った。

「何、坊や。軍人さんごつこの真つ最中だった？」

「はい済みません、上官殿！直ちにならびます！」

おどけて敬礼してみせる海軍新兵の一人に、皆が笑う。レイディア

ンの軍人だけが、次第に下がっていく室内の温度に身を震わせていた。

ロイルはふむ、と顎に指をあてて考えるしぐさをしていたが、やがて思い立ってすつと身を屈めた。

まだ爆笑の渦にいた海軍の新兵達は勿論知る由もない。

ふっ、と消えるように瞬間見えなくなったロイルは、恐らく姿を捉えられたのはカミュだけであつたらう音速で新兵まで距離を詰める、その鼻先に白銀の刃を向けた。

「二度は言わんぞ。さつさと整理しろ」

どさっ、とその場に尻餅をついた新兵の一人、ダリスはその気配のなさや速さに圧倒されて言葉が出なかつた。馬鹿にしていた他の兵士もただ立ち尽くし、しぶしぶレイディアン側に整理する。

(何なんだあのガキ…全く何も感じなかつた…)

まだ腰を抜かしていたダリスは、よろよろと立ち上がり、改めてロイルを見遣つた。

「それでは海軍との合同訓練を開始する。指揮はこの僕、ロイル・ヴァン・ハーゲンがとる」

「ちょ、ちよつと待てよ？お前みたいな子供が上官だつてののか？」

列もしつかりし、大人しくしているのかと思えば、この言葉に早速抗議を上げたのはダリスだつた。

ロイルは面倒そうに書類に目を通し、ダリスと書類を交互に見遣る。

「…ダリス・ウエンストーン一等兵。僕のやり方がつくづく気に入ら

んようだな。」

「当たり前だろ！子供に訓練を見られるほど俺らは馬鹿にされてんのか？」

「…馬鹿にしているのはどっちの話だ。僕は少佐だぞ」

「嘘をつけ！子供がそんな階級についている訳がない！それとも、ここが正式な軍部隊じゃないからめちゃくちやなのか？」

ふう、と分かりやすいため息を吐いたロイルはダリスの側まで来ると、指先で薄い胸板をつつき

冷たく言い放った。

「そんなに僕が不服なら出て行くか？尤も、お前たちが大遅刻して僕を散々虚仮にしてくれたことはお前たちの上司にたっぷりと聞かせる羽目になるがそれでもいいなら今すぐに僕の視界から消えうせろ」

憤慨して顔を赤らめ、今にもロイルに飛び掛らんばかりのダリスに振り返り、ロイルはもう一言付け加えた。

「…以上だ」

四話

同僚の制止も聞かず、ついにダリスは踵を返したロイルにつきみかかった。

後ろに居た仲間の腕を振りほどいて飛び出したダリスは、訓練用の木剣で殴りかかった。

しかしそれより何秒も早く振り返ったロイルは、その一振りを刀でなぎ払った。

一瞬、振り返ったロイルの鋭い眼光に背中を震わせたダリスの右手から木剣が真つ二つに裂けて宙を舞った。

「…訓練に尚参加するならよし、出来ないなら尚よし。さあ選択しろ」

ダリスは手に握っていた木剣に視線を落として、蚊の鳴くような声で返した。

「続ける…」

「では列に戻れ」

ダリスは密かに、自分の腕には自身があつた。剣技はもちろん、銃の扱いや戦場に慣れていたダリスにとってこの完敗は彼のプライドを大いに傷物とした。

ロイルはもう一度ため息をつき、再び落としてしまったボードを拾い上げて中断されっぱなしの訓練を再開するべく立ち上がった。

「さて、訓練に移る」

「普段、フォスター大尉が訓練する時は素振りや基本的手合わせなどをしてきているので：今回は実戦を試してみようと思う」

リックはその言葉の棘と皮肉に苦笑してロイルを見つめた。

先ほどダリスがつかみかかった時はどうなる事かと思っただが、改めてロイルの実力を知ったリックはただただ口を開いて二人を見つめるだけだった。

ロイルは場の中心にカミュを連れてくると、ボードに目を向けた。

「では早速、この人形と一人ずつ戦ってもらおう。制限時間は三分。その際にカミュに一撃を与えられなければ訓練は終了だ」

訓練場がざわめいた。リックは驚いてカミュを見遣った。あのヴァレスとの清掃以来、カミュの存在を忘れかけていたリックは、初めて間近での人形との対面に息を詰まらせた。

全く人形とは気づかない精巧で人間らしい性格に、リックは少し困惑して支給された木剣を握った。

「うはあゝロイルきつついなゝ僕は非戦闘員なのに……」

「文句ならアイリーン辺りに言え。では始める」

すつと体制を低くしてファイティングポーズで構えたカミュは、パチンとガムを破裂させた。

まず始めに、レイディアンの新兵が剣を構えて走り出した。

カミュは最初の大きく振りかぶった一撃を軽々避け、トン、と指先で男をつつく。

すると凄まじい勢いで飛んでいった男はそのまま壁に衝突し、意識を失った。

「ありや〜」

「馬鹿者、もつと手加減せんか」

「ええつ、指でちょ〜んてしたただけだよお〜」

その後も次々とレイディアン軍人がカミュに破れ、その場にうずくまってはうめき声を上げたり悪いものは気絶して積みあがってゆく。

次、リックの番だという時に、震えたダリスの声がそれを阻止した。

「お、おお、おい…嘘だろ？そんな化け物相手に戦えるかよ…俺らはお前とは違う…人間が相手なんだ」

「違う？散々レイディアンを馬鹿にしていた様だが、人形を前に怖気付いたのか？」

「そうじゃねえよ！戦うならそう、手前と戦ってやるよ、こんなの訓練になるわけないだろ」

「ハン、いいだろう。」

ピアスの刀を具現化させたロイルは、くいつと指引いてダリスを挑発した。

ダリスは支給されていた木剣を投げ捨て、腰のサーベルを抜いた。

「手前が真剣で俺は木じゃあ話になんないだろ？」

つう、とダリスの首筋に汗がしたたる。その汗が落ちるか否かでダリスはロイルに切りかかった。

ロイルは突っ立ったまま、ダリスを見据えサーベルが肩を掠めた瞬間、さつと身を屈めてダリスのみぞおちに蹴りを食らわした。思わずひるんだダリスが体制を変えようと後ずさった瞬間、だつ、と地面を蹴り上げ、ロイルが猛攻に出た。

キンッ、と刃が交わる音が鳴り、ダリスはロイルの強い押しに負けそうになりながら、必死に刃を受け止めていた。一際強く刀がしなった瞬間、ぱつとダリスの背を飛び越したロイルは油断していたダリスの背中に刀のみねで叩きつけた。ダリスは数量の吐血をして、その場に崩れ落ちた。

「もう終わりか。」

ダリスはうつ伏せで倒れたまま、うなり声を上げた。レイディアン
の軍人の一人にダリスを医務室へ連れて行くようにロイルが伝える
と、ダリスはくぐもった声でロイルに一言呟いた。

「…この化け物め…」

ロイルはダリスに一瞥もくれず、再び訓練に戻るべく体の埃を払って青ざめた顔した両軍人に向かい合った。

「どうした、訓練に戻るぞ」

「ロイル、大丈夫う？」

「…何がだ。僕は無傷だ」

カミュは不安げにロイルを見上げてそつとロイルの軍服の裾を掴んだ。

ロイルはカミュの指先を軽く払い、ボードの書類へペンを走らせた。

「次はどいつだ、さっさと始めろ」

五話

デンは剣を構えていたリックを押しつけ、大きく手を挙げた。ロイルはデン見つけるとペン先でデンを指した。

「バークホーク上等兵、前へ」

リックは自分の順番であつたにも関わらず、自らカミュに挑もうとするデンの背中を不安げに見つめた。上着を脱ぐと、盛り上がったデンの立派な筋肉が晒される。気合も十分なデンはカミュに向き合った。

「手加減、頼むぜ」

「うわっ、どっちの台詞？」

バン！と勢いよく両手を鳴らしたデンは、カミュを見据えて木剣を投げ捨てた。

ロイルはそんなデンへ眉を上げて顔をしかめた。

「バークホーク。素手は厳禁だ。木剣を使え」

「なあに少佐殿…こっちは実戦を潜り抜けてきたんだ。どこそのお坊ちゃん兵士とは訳が違うぜ」

納得いかない様子のロイルだったが、今のデンに何を言うまいが聞くことはない判断したのか、数枚書類をめくると右手を挙げて始まりの合図を出した。

デンは、果敢にカミュを攻めた。身軽なカミュに比べて体格が大きいデンは行動が遅い。その為極力動かず、カミュの出方を伺うよう

に、彼は威風堂々と仁王立ちし、構えた。

カミュは今までデンのような人間と手合わせしたことが無かったため、どうしてよいのか分からず、攻撃をしかけてこないデンへ自ら攻撃をしかけた。それこそデンの思惑通りだったのだが、カミュは知らない。

拳を振り上げるカミュはまんまと足払いにあい、体制を立て直して受身を取った。

しかしそのほんの僅かの際にプログラムされたカミュの動きに隙が生じ、

デンは体ごとカミュに掴みかかると、そのまま雪崩れ込むように二人一緒に壁へ衝突する。

ロイルはデンの戦略に目を見張り、様子を見守った。

「っぷあゝ危なっ！」

カミュはすばやくデンから飛びのくと、起き上がったデンを見つめて青ざめた。

デンは顔面に額から流れる血を滴らせ、更に身構えたのだ。

再びカミュが攻める。しかしデンの目には既に動きを読まれてしまい、カミュの両足を掴んだデンは、カミュを振り飛ばし拳の打撃を与えた。

「止め」

ロイルが叫び、デンが攻撃の手を止めた頃には、カミュは再起不能なほど損傷してしまっていた。

あまりの強さに啞然としたロイルは、デンの書類に評価を刻み、デンを褒めた。

「素晴らしい一連の動きだ。もう戦場に出てもいいぐらいだ。アイ

リン總統に話しておこう」

レイディアン軍人から、歓喜の声が上がった。拍手に包まれた訓練場で満足げにはにかむデンは、動かないカミュを見つめた。

「ありやあ、直るんですか」

「無論だ。僕からランガーに報告しておこう。ご苦労だった」

ロイルは目に無数の記号の羅列を浮かべてショートしてしまったカミュを抱えて、まだ興奮した様子のレイディアンの軍人へ咳払いし、再び整列させると、海軍の軍人を見つめて述べた。

「折角の合同訓練だったが、見学になって申し訳ない。人形がショートした以上訓練が難しいのでここで終了したいと思う。何か質問があつたら挙手しろ」

おずおずと海軍の軍人の一人が手を挙げた。

「何だ」

「人形は制御の効かない殺戮兵器なんだろ……？そんな危険なのを基地に住まわせておいて大丈夫なのか……？」

しん、と訓練場が静まり返った。ロイルは肩に担いでいたカミュを少し見遣って

質問をした軍人に向き合った。

「いい質問だ。こいつを含めアクアドームの中の人形はランガーが手を加えて暴走しないようには改造してある。しかし絶対しないとはいいい切れん。もしもの時は自壊するようにプログラミングされて

いる。敵を知るためには我々には仕方のないことだ。では訓練を終了する。」

ロイルの言葉に合わせ、レイディアン軍人は一糸乱れぬ動きで敬礼した。

数秒遅れてその様子を見ていた海軍の軍人もゆるく敬礼して解散していった。

リックは、解散後すぐさまロイルに駆け寄るとカミュの反対の腕を取ってロイルの補助をした。

「何の真似だ」

「俺、今日デンに圧倒されて何も出来なかったから…せめてと思っ
て…」

「…嫌でも明日また通常訓練があるのにか」
「えっ、う、うん。まあね」

少し無言になったリックは、ぼそつと告げた。

「デン、すごかったね」

「…列はお前が前だっただろう？」

「えっ？そう…だけど…知っててデンにさせたの？」

「お前の戦力はいかほどか嫌というほど知っている、それより…」

ロイルは抗議するリックを尻目に、他の兵士と雑談して微笑むデンを見つめて険しい表情をした。

「何故あの男…あれほどの力がありながらレイディアンに飛ばされたんだ…？」

六話

壊れてしまったカミュを連れて、ロイルはランガーの部屋を訪れた。

リックはランガーに苦手意識があったため、緊張して唾を飲み込んで煤けたドアを見つめた。

ロイルがノックすると、数秒間を置いてランガーの声が返った。

「入れ」

ロイルは少し嘲笑するように鼻を鳴らし、ランガーの部屋に入った。相変わらず散らかった部屋の中心にいたランガーは、カミュを見つけるなり血相を変えて急いで二人に駆け寄った。

「な…何があった？新人訓練に出してどうしてここまで破損する！？」

「最近赴任してきたバークホークが一人でこうした。見たところ外部損傷で済んでいる」

「馬鹿な…どんな化け物だそいつは…」

カミュの両頬を優しく包み、損傷した箇所を入念に調べていたランガーは、ロイルがカミュを離してソファーに横たわらせると胸元から小型の照明を取り出して傷の修復にかかった。

ロイルは一人どうしていいか分からないリックをそのままに、ランガーの机の引き出しを漁り始めた。

「幸い、バックアップは最近のものだ。エラーが出ている以上今のデータの復元は不可能だな」

「厄介なことをしてくれる…今回カミュで良かったものを、マリアが出勤していたら私はお前を半殺しにはしていた所だ」

「…マリアにはそんな危険なことはさせるか」

リックはハツとして室内を見渡した。

清掃の時出会った、優しく出迎えてくれた女性　マリアの姿は無かったが、彼女もまた人形だったのかと悟り、リックは複雑な心境になった。

ロイルは引き出しから目当てのものを見つけたのか、再びしっかりと閉まることのない引き出しを戻していた。

「どうだ？酷いか？」

「いや、心配ない。そんなことよりあまり私の私物に触れるな汚らしい」

「…いい加減僕に噛み付くのはやめろ、みつともない」

「何だと？私に逆らってもいいと思っているのか親に向かって口の聞き方の悪い…」

「いつ…?!」

リックはいい加減慣れてきた二人の攻防戦をぼんやり眺めていたが、最後のランガーの言葉に思わず奇声を発してしまった。

ロイルは舌打ちし、忌々しくランガーを見つめた。

「誰が親だ気色が悪い…」

「ロイルくんの…お父さんっ？」

ロイルはその存在を忘れかけていたリックを見遣り、面倒そうに否定をした。

「違う。そんな血のつながりはない。僕はこいつに拾われて無理や

り軍人にさせられたんだ」

「…拾われて…」

「馬鹿を言うな。私が拾ってやらなければカラスの餌になっていた分際で…」

ランガーはカミュの修復の手を止め、バックアップの入ったチップを受け取るとリックを一瞥した。リックはランガーの視線に気がつかなかったが、ランガーとロイルの意外な関係に何やら納得した様子で頷いたり首を傾げたりと一人にぎやかに百面相をしていた。

「カミュを頼んだ。新しい情報として今回の訓練のこともインプットしておいてくれ」

「言われなくとも」

「…あとは…マリアによろしく伝えてくれ」

「……………」

ランガーの返事はなかった。さも作業に没頭しているかのようにはしていたが、聞こえているのは間違いなかった。ロイルは返事を待つことなく、部屋を後にした。

第六章 暁の反逆者・前編（前書き）

ここから少し長い話になります。物語が急変していくと思いますので、どうかお付き合いです。

第六章 暁の反逆者・前編

男はゆっくりとワイングラスを傾けながら、窓に広がる大海原とその海面にゆらりと青白い影を落とした月を見つめた。

「なあ、どう思う？」

男の言葉には訛りがあった。男に語りかけられたゴードンは傳っていた頭を上げ、同じく窓の外に視線を遣った。しかし今のゴードンには月や海をみてもただの絵のようにかすんで見え、眼前の男だけがゴードンの視界を埋め尽くす。ゴードンは男に頭が上がりなかつたからだった。

冷や汗を感じながら、ゴードンは低音で返した。

「いえ、私は特に何も」

「そうか？似てへんかなあ、まあるいお月さんに大海原…まるで、僕の弟みたいやと思わんの？」

「…はい、確かに」

「あかんなあ、僕は察しの悪い子おは嫌いやよ？」

男はくすくすと笑って飲みかけのワインをゴードンの頭へと容赦なくかけた。

「今度…あない目立つ動きしよつたら承知せんよ？」

「…申し訳ありません…」

冷たいワインと優しいげな声音に対して冷酷な男の行動に、ゴードンは思わず肩を震わせて男を見上げた。狐のように細い男の目は鋭利

な視線を送る。ゴードンは再び頭を下げ、震える声で続けた。

「マールリス様……」

医務室のドアは締め切られていた。りんごのかがを片手にその締め切られたドアを開いたロイルは、うんざりとしたため息をついて収容されたレイディアン軍人たちを見遣った。

その大半が先ほどの訓練で負傷して運ばれた者で、医務室担当の二ユーハーフ、ドーナは忙しそうに走り回っていた。

「ドーナ、少し聞きたいんだが……」

「後にして頂戴な！あーだが私の仕事増やしてくれたおかげでこちらは手が足りないの！」

「そうか、なら好きに捜す」

派手なスパンコールの服をぎゅっと握り締めてヒステリックな声をあげたドーナに、ロイルは面倒そうに手を振って医務室内を見渡した。

ベッドが足りないのか、床に横たわった数人の兵士を跨いでカーテンが引かれたベッドへ向かう。シャ、と断りもなくカーテンを開いたロイルは、目的の人物を見つけて眉根を寄せた。

「なんだ、元気そうじゃないか。ウエンストン」

ダリスは突然入ってきたロイルに驚き、しばらくロイルを無言で見つめた。

ロイルはりんごの入ったかごを側に置いて、小さな丸いスに腰掛ける。

かごからりんごを取り出したロイルはダリスに話しかけた。

「訓練は先ほど終わった。海軍とも手合わせするはずだった人形が壊れたからな」

「…何しにきたんだよ」

「見て分らんか？りんごを持って医務室に来るとすれば理由は一つだろう？」

ロイルは胸元から取り出したサバイバルナイフで丁寧りんごを切り始めた。

ダリスはその慣れた手つきに少しばかり感心してその様子を見つめた。

「俺をボコボコにして笑いにでもきたのか」

「…好きに思っている。りんごに毒でもあるのか、ナイフで刺されるのかとかな。」

「じゃあ何だってお子様に見病されなきゃなんねえんだよ。」

「たまたまりんごがあつたんだ…」

少しだけ赤い部分をのこしてうさぎの形になったりんごを皿に移して、ロイルはそのうち一つを食べながら新たにりんごを取り出した。

「…うさぎ」

「さつさと食べ、色が悪くなる」

「うさぎ形なんてやっぱりガキだな、お前」

「…黙れ」

ピツとナイフを突きつけたロイルに両手を挙げて、ダリスは肩をすくめた。ロイルは脅しが効かないと分かると再びりんごに向かった。ダリスはじつとりんごを見つめていたが、手は出さなかった。

「お前、腕に自信があったろう」

「…だからなんだよ、やっぱり嫌味か？」

「…いや、それは僕も同じだ。自分の腕を過信している。」

ロイルはりんごをむいていた手を止めてどこか遠くを見つめた。ナイフを持っていた手でそつと胸元のリボンを手繰り寄せ、再びダリスに向かった。

「お前のような奴が僕は嫌いだ。力がないのは時に罪だ。本当に誰かを守りたいとき、自分を守る方法しか知らないような軍人にはなるな」

「…説教すんなよ」

「忠告だ」

切りそろったうさぎ達はまばらに皿へ集結すると、ロイルはサバイバルナイフを少し布で拭いて胸のポケットへしまった。かごは数個の熟したりんごを残してすかさずかになつていった。

残りをそのまま通りすがった兵士に押し付けたロイルは、ぎしりと軋む椅子から腰を上げた。

「では、な。」

背中を向けたロイルへ、ダリスは思い切ったように声をかけた。

「お前、死ぬなよ。俺がぶっ潰すまで」

「…威勢がいいな、まあそのまま返す。今度は容赦しないからな」

ダリスはだんだん見えなくなるロイルを見遣ってりんごを口に入れた。

甘酸っぱいりんごの味が舌を伝わり、ダリスは無意識に呟いた。

「うめえ…」

二話

医務室から出たロイルは、訓練場から伸びている長い通路を一人歩いていた。

その顔はどこか穏やかで、歩きながらロイルは様々なことを考えていた。まずはバークホークのこと。次にカミュの状態。最後にはランガーの部屋に居なかったマリアのことを想った。

ふと歩いていると、向こう側で立ち止まっている長身の男を見つけて、

ロイルはその男 レ二の前で足を止めた。

「レ二」

「おはようございます、ロイルさん二日ぶりですね。ご機嫌も良さそうですね、何かありましたか？」

「…何がだ。そんなことより用事か？こんな所で僕を待って突っ立つてるなんて」

「はい、仕事の話ですが…」

「それで十分だ」

奪うようにレ二から調査書を受け取ったロイルは、ほぼ白紙のその紙を見つめて顔をしかめた。

紙にはアイリーの直筆で、至急私の部屋に来ること。

と走り書きされていた。ロイルはレ二に紙をつき返すと、ぎろりとレ二の顔を睨みつけた。

「何だこれはこんな事は異例だ…何かあったのか？」

「さあ…それは私には分かりかねます。いつも通り私の部屋のポストに入っていましたので」

「全く面倒な女だ…」

ロイルはニコニコと笑むレニの横をすり抜けて歩き出した。急に不機嫌になったロイルに苦笑しつつ、レニはロイルの後に続いてエレベーターへ向かって歩き出した。日は落ちかけていた。静かに揺らめく海の姿は、どこか不安げにその凸凹な二人を見下ろす。そうして暗雲が立ち込めていくように、この一枚の指令書が、レイディアン丸々全体を巻き込む騒動となるとは、彼らに知る由もなかった。

ロイルはアイリーンの部屋のドアを乱暴に開くと、葉巻を燻らせていたアイリーンを見つけてレニが渡された紙を突きつけた。アイリーンはまだ長い葉巻をジュッとテーブルの角にこすり付けて、不敵な笑みを浮かべた。

「意外に早いじゃないか。感心だな」

「うるさい黙れ、さつさと事情を説明しろ」

「やれやれ、お前といい、ランガーといい、身勝手な奴らだな……」

アイリーンは腰掛けていたテーブルから降りると、ロイルの手から落ちた紙を拾い上げてくずかごに捨てた。やたらと険悪な雰囲気を出すロイルに呆れながら、アイリーンは腕を組んでロイルを見下ろした。

「海軍との訓練もよくなかったらしいな、まあ仕方あるまい。そんなに刺々しくなるんじゃない。実は今回の任務は二組のペアで行ってもらいたいのだ」

「何の任務なんだ」

「まあ、待て。相手のペアが来てから話そう」

アイリーンは閉じていた窓を開いた。風のないレイディアンの街。活気に満ち溢れた人々の声が今にも聞こえてきそうな街の熱気とぼんやりとした家々の明かりが見える。

アイリーンはアクアドームが出来たばかりのことを思い出しながら、ロイルに振り返った。早く帰りたいそうなロイルのあからさまに不機嫌な表情に思わず笑みがこぼれた。

「なあ、ロイル。お前はここに来たばかりの事を覚えているか？」

ロイルはしばらく黙っていたが、やがて重々しく返した。

「…勿論、覚えている。殺風景なドームは真つ暗で、その真ん中にこの建物があった…」

「私は、正直後悔しているのだ…。こんな街にしまって、守るべきものが増えたことを…」

「…じゃあ、あのまま良かったのか？」

「ここは要塞だから…。民衆を巻き込む形になったことを後悔してもおかしくはあるまい。だが、この民達には感謝している。何も無い海で生活する、基盤となったのだから…」

ロイルは以後、言葉を返さなかった。同意するのか否定するのか。その心の全ては分からないが、何か想うところがあるのだろう。黙ってしまったロイルを一瞥して、アイリーンは穏やかに笑った。

「いつか、本当の平和がやってくるのが、私の夢だ」

三話

しばらくして、アイリーンの部屋のドアがノックされた。

レニは何度かロイルに他愛ない話を持ちかけたが、依然三人の間に目立った会話もなく、アイリーンの部屋は嫌に静寂があつた。アイリーンは大きいため息をつき、ドアをノックした人物へ入るように促した。

「し、失礼します。ごめんなさいアイリーン様、到着が遅れて…」

「いや、問題ない。カミュ不在の間門の開閉を頼んだのは私だからな、トレストウーヴェ。」

おずおず室内へ入ってきた人物に、ロイルは目を見開いた。ペアのいないトレストウーヴェも勿論だったが、その後ろに控えた体格のいい男を見つけて眉をしかめた。デンはアイリーンの派手な部屋をぐるりと見つめて、今にも口笛を吹くように少し唇を突き出していた。

ロイルは更に不機嫌そうにアイリーンに向かった。

「これは何の真似だ」

「今回、バークホークの新人訓練の功績をお前から聞いて、トレストウーヴェのペアに推薦したのだ。不服か？」

「チツ、そこじゃない。僕が聞いているのはどうして任務がこいつらと一緒になのか聞いている」

「せつかちな奴だな」

アイリーンは窓を閉め、入ってきた二人を見つめると咳払い一つして、ようやく今回の任務について話始めた。レニは普段通り大人しくアイリーンを見つめて話を聞く体制に入っていたが、ロイルはま

だ文句が言い足りないように始終落ち着き無く足を揺らしていた。トレストウーヴェは一際不機嫌なロイルの横顔を、心配そうに見つめていた。

「実は、この人形騒動を引き起こしたのではと推測される男の工場跡を見つけた。跡とはいえ、中には何かがあるのか知れない。よってその調査を命令する」

「騒動を引き起こしたと推測される人物？そんなやつがあがったのか？」

「無論、我々が何の調査もせず人形の駆除をしていたわけではない。だがまだ憶測なのだが、この調査ではつきりするだろう」

「そいつの名前は？」

「トップシークレット、とでも言っておこう」

アイリーンにうまく流されたロイルは再び舌打ちを打つと、そのまま腕を組んで発言をやめた。

アイリーンはペアに一枚づつその地図を渡して、服に入り込んだ赤毛を右手で払いのけた。

レニはロイルにも地図を軽く見せたが、ロイルは一瞥もせず手を振った。

「現地はひどい砂利道で、レイディアンの馬車が通れない。近くまで乗せるそうだが地図付近からは徒歩だ。ぬかるなよ」

「あの、アイリーン様……」

「何だトレストウーヴェ。」

「ロイルが言うように、どうして私たちが同伴なのでしょう？ペアになってまもないというのに……」

「だからだ。ロイルは口が悪いが腕はいい。今後ペアがどうあるべきかの見本になるう」

アイリーンはちらりとロイルを見遣った。ロイルはアイリーンの視線に気づき、不満げに鼻を鳴らしていたが、特に文句はその口から出ることはなかった。ロイルの不機嫌もおさまったところでパン、と両手を鳴らしたアイリーンは笑顔で場の雰囲気を一転させた。

「任務は明日から。ロイルは再びルイスに新人訓練を頼んだから心配しなくてもよい。さあ、飯でも食べにいくか！」

ロイルの首に腕を巻きつけ、アイリーンはそのままロイルを引っ張っていくように出口へ向かった。レニは笑んでそんな二人の後をつけていったが、トレストウーヴェの表情は浮かぬままだった。デンはそんなパートナーの肩を優しく叩き、尋ねた。

「どうかしたか？」

「い、いえ…別に…」

「敬語なんてよせ、俺たちパートナーだろ？」

「…ええ、そうね。」

「…何か、不安なことでもあんのか？俺じゃあ役不足かな？」

「そ、そんなこと…ないわ！ただ、ロイルの足手まといにはなりたく…ないの」

俯いたトレストウーヴェの顔を覗き込み、デンは少し困ったように笑った。

「好きなんか、あの坊や」

「すすすす、好きじゃないわよ、ばっかみたい！」

ドン、とデンの厚い胸板を突き飛ばし、トレストウーヴェはこれでもか、というほど否定を重ねて紅潮した頬を両手で覆い、足早に去

っていった。デンはすっかり元気になったトレストウーヴェに安心して、自身もマイリーの部屋を後にした。

四話

リックはその日、唯一の休日である日曜をどう過ごしたらいいものかと考えてベッドに横たわっていた。時刻はそろそろ昼を迎え、日曜は早朝訓練があるだけであとはすることもなく退屈であることが多かった。陸軍からの荷物も届き、いよいよレイディアンの暮らしが様になってきたリックは、これまでのことを振り返りながらまどろみ始めていた。

何をしようか、からこのまま睡魔に身を任せようとしていた頃、調度いいタイミングでリックの部屋がノックされた。

リックはハッと目が覚めて起き上がり、少し不機嫌になりながら昼寝の妨害をした客人を迎えた。

「…はい？」

「やぁリック、俺、ヴァレスだよ！」

ドアを開けてすぐ、眩しいほど爽やかな笑顔を携えたヴァレスがにっこりと微笑んで出迎えたリックに片手を挙げた。まだ眠気のあったリックも突然の来訪者に一度に目が冴え、急いでヴァレスを招き入れた。

「わわ、言ってくれば迎えに行きましたよ！」

「うーん、そうすればよかったね…。君の部屋に着くまでにお昼になったよ」

リックは無造作に椅子や机にかけていた洗濯物をごっそりクローゼットにしまい込み、椅子とテーブルを開いた。ヴァレスは持参したお菓子や酒類を広げながらリックの狭い部屋を改めて見渡した。

「なつつかしいなあ…俺、この部屋にいたんだ。隣がロイルでさ、」
「えっ？ここはヴァレスの元部屋だったんですか？」
「そうだよ。夏はアクアドーム涼しくていいけどさ、冬は寒くて暖房もなくて…本当、懐かしいや」
「あ、そういえば」

リックはふと、備えつけられていたクローゼットで見つけた写真を取り出して、ヴァレスに渡した。

「この写真…ヴァレスのでは…」
「ああ、これ！探してたんだ！」

ヴァレスは両手を挙げてそのくしゃくしゃな外装を見ただけで自分のものだど理解したのか喜んだ。
ゆっくりとその写真を開き、ヴァレスは感慨深い様子でそつとため息をついた。

リックはヴァレスが持参したワインのコルクを抜きながら、ヴァレスに尋ねた。

「その子のご家族ですか？」
「そう、妹。人形のテロにあつて死んじゃったんだ…」
「そう…なんですか…俺も家族をだいぶ前に亡くしていて」
「そっか、それでレイディアンに」

リックは開きかけた口を閉じた。本当はロイルに出会わなければ一生を陸軍に捧げていたかもしれないかったリックには、真剣にあだ討ちするべくレイディアンに入隊していたヴァレスに話すことなど無かった。そして同時に、軍人をやめてから清掃員にならなければいけない程の理由が、彼にはあるのだらうと悟った。

リックは静かにワイングラスへ真紅の芳醇なワインを注ぐと、ヴァレスに差し出した。

ワイングラスを傾けながら、ヴァレスは苦笑する。

「じめつとした話になっちゃったね。チーズ食べる？持ってきたんだ」

「あ、はい…頂きます」

ヴァレスはチーズの袋を開いて、その袋を下に細かいチーズたちをそのままざらりと出した。

リックはおずおずとそれを口に運び、何を話そうか考えていた時、ふとヴァレスが立ち上がったので顔をあげた。

「ねえ、街を見学しないかい？君に案内したい場所があるんだ」

リックは少し驚いたが、やがて頷いた。ヴァレスはにっこり笑って写真をポケットに突っ込むと、片付けようとしているリックの手を取り、それをやめさせた。

「そんなのはいいから、ほら急いで！」

「えっ、ああ、えっと…はい」

ヴァレスは強引に作業を中断させると、軽い足取りでリックの部屋を出た。

施錠を済ませたリックへ振り返り、ヴァレスは元気よく右手を挙げた。

「ではレイディアンの街へしゅっぱーっ！」

少し酔っていたヴァレスは千鳥足で歩き出した。

リックは呆れて笑い、その背中を追いかけた。

五話

翌日、アイリーンの命令で製造者と思わしき男の工場跡へ赴く馬車が二台揺れていた。その先頭を走っていた馬車に乗車していたロイルは、大きいため息をついて目を閉じた。レニは広げていた地図を丸めてロイルを見遣った。

「どうかされましたか？この任務が通達されてから機嫌が悪いようですが」

「当たり前だ。ここ連日僕とお前は働きっぱなしだぞ？機嫌が悪くなつて何がおかしい？」

「そうですね…お疲れ様ですロイルさん」

外は霧のような細かい雨が降っていた。馬車の小さな飾り窓から見える景色が流れていく。

ロイルはレニを見上げて思い出したように声を上げた。

「そつえば昨日、アイリーンと食事に行った時、お前がこの任務に反対していたと聞いたが？」

「…はい。」

「どうかしたのか？お前が任務に口出しだなんて珍しいな」

レニは顔を逸らした。少し間があったため、ロイルが怪訝な顔をする。

レニは数回首を振って、何でもないように笑ってみせた。

「いえ、私も連日の疲れが溜まっていたのかもしれない。そんなことよりもつすぐですよ、ロイルさん」

馬車が一際揺れた。馬のいななきと共に停車した馬車は、砂利道のほんの手前で停まっていた。

ロイルは従者が開いたドアから降りると、延々と続くような獣道を見つめてうんざりとうなだれた。

レニはロイルに持参していたコートを手渡すと、その肩を柔らかく叩いた。

「嫌そうですね」

「ここまで雑巾のように酷使してくれるんだ。今月の給料はさぞ弾んでくれるんだろうな」

ロイルは鼻を鳴らし、不機嫌そうに歩き始めた。

後ろから追っていたトレストウエが合流し、上司から手渡されたたたった二枚ぼっちの地図だけをたよりに工場跡を目指す。黒雲は今にも雨をたたきつけようと、ぐるぐると獣のように雷を鳴らしてロイル達を見下ろしていた。ロイルは自分の心境を映したような不機嫌な空を見上げて小さく笑うのだった。

レイディアンの街中へ徐々に降り立ったりリツクはそわそわと落ち着かない心をじつと抑えていた。それは細い路地を行ったりきたりする子ねこのように早速迷子になっていたためだった。

この日のためと折角ロイルから預かっている地図を逆さまに覗いて

いたヴァレスは、困ったように大きくため息をついて顔を上げた。

「この先に俺の行きつけの店があったような…」

「い、行きつけの店の場所を忘れちゃったんですか？」

「うん…そういうことだね、この状況からして」

うすうす感じていたが、リックはヴァレスと二人っきりで行動してはいけないのではないかと思い始めた。ヴァレスは地図を回転させながらうんうんと唸っているままで、何の解決にもならない。

ここは住民に話を聞こうとリックが通りかかった人へ声を掛けた。

「あ、あのっ」

「はい？」

振り返った人物はシスター服を着た若い尼僧だった。振り向きざまに彼女の黒髪がさらりと揺れ、切れ長の目をした美人だった。ヴァレスはその女性を見たなり、嬉しそうな声を上げた。

「ケイ！」

「ヴァレスさん…？」

リックは知り合いだったのかとヴァレスを見遣った。ヴァレスは視線を感じてリックに向かい、ケイのこと紹介するべく嬉々として話しはじめた。

「彼女はアクアドーム唯一ある教会のシスターケイ。ケイ、こちらは俺の友人でリック」

どうも、と軽く頭を下げたリックへ、ケイは穏やかな笑みでその会釈を返した。

ヴァレスはケイと久々に再会したのか、様々な思い出話に花を咲かせる。

道を聞こうとしていただけのリックにとっては少し困ったほどだった。元来ヴァレスには女好きの傾向を感じていたが、彼女は久々をもあつて極め付けに話が長そうだった。

しかしケイはあっさりとその話を中断させ、何故声を掛けたのか根本へと戻ってくれるありがたい女性だった。ヴァレスは思い出したようにケイに尋ねた。

「あ、そうそう。ケイ、俺の行きつけの店フラッグって知ってる？そこに案内したかったのに道に迷って…」

「君は相変わらずですね。フラッグはこの道の最初の十字路を右折した先ですよ」

「そっか！ありがと！キスしていい？」

「駄目です。どういたしまして」

冷静に二度頭を振ったケイへ、ちえつと子供のように拗ねたヴァレスを見遣り、リックは苦笑いする。ケイに別れを告げて二人はヴァレス行きつけの店、フラッグを目指して歩き出した。

リックはケイの背中が見えなくなると、ヴァレスに尋ねた。

「綺麗な人ばかりですね、アクアドームって…」

「安心しな！君と俺は通常だから」

「…どういう意味ですか…あの人…ケイさん？お知り合いだったんですね」

「あー、うん。妹の墓地がここにあるからね…」

「そう、ですか」

リックは足元に視線を落とした。またまずい話を掘り出したのか。そう思っていると、ヴァレスはそんなリックの背中を叩いて笑んだ。

「何気を落としてんの？まあ妹は助からなかったけどさ、今助かる人たちが君がこれから助けてあげてよ…、ね！」

「あ…はい。ありがとうございます…何だかヴァレスの言葉を聞いているとすごく、救われる」

「俺にそんな力はないよ！さあ、見えてきた！」

路地の角から店の看板が見えてきた。ヴァレスは空気を一新させるように走り出してリックを置いて行ってしまった。ぽつぽつと力なく歩いていたリックは、頬を涙が伝っていくのが分かった。

ヴァレスは強く、自分は非力であることが許せず、涙はとめどなく流れた。

中々追つてこないリックを心配し、戻ってきたヴァレスはリックの顔を見て、笑う。

「何で泣いてるの？あはは、面白い顔！」

涙の理由である本人にげらげらと笑われ、リックは次第に笑顔になつていった。泣きたいのか、笑いたいのか定まらないうち、リックは自分にぽっかり空いていたような空洞が埋まっていくのを感じていた。きっとこれが求めていた友情とかで、ここの所の虚しさを埋めてくれる存在が友人なのだ。

リックは涙を拭い、照れ臭くなりながらヴァレスの背中を追いかけた。

六話

店は静かだった。年代を感じさせるバーカウンターとテーブル席がいくつかの喫茶店のようで、真ん中にはジュークボックスが居座っていた。扉を開くと鐘が鳴り、客の存在を店主へと教える。ヴァレスが陽気に店内へ入ると、店主らしき小太りの男が新聞紙から顔を上げた。

「ヴァレス！久しぶりじゃねえか！」

「やあマスター！いつもお願い」

「おや？ロイルと一緒にじゃないのか。」

「俺軍人辞めてっからねー、ロイルも忙しいみたいだよ？」

マスターは新聞紙を折りたたみ、カウンターの上に置いた。ヴァレスはその新聞紙を拾い上げ、近くの椅子へと腰掛けた。目元が腫れ上がったリックもまた、おずおずとカウンター席へ腰をおろす。

「連れは？何か飲むのかい？」

「あ、俺はコーヒーで」

「はいよ」

豆を挽くけたたましい音が店内に響いた。ヴァレスは水の氷をがりがりとかじりながら新聞紙を雑誌のようにぺらぺらめくってゆく。リックはなんとなくその様子を眺めた。

「ほら。ミルクは？砂糖もいるか？」

「ブラックでいいです……」

「何だよリック！俺と同じのにすればよかったのに！折角ここまで

来たんだし」

「同じの？」

「マスター、いつものもうひとつ！」

ヴァレスの注文を受け、マスターは奥へと引つ込んでいった。一体何の準備だろうと覗いたリックは、次にマスターが帰ったとき、大きく口を開いて唾然としてしまった。

「な、何ですか！あの巨大なパフェの器！」

「マスター特製、デラックスパフェだよ！」

マスターの顔ほどもあろう大きな器二つがカウンターに並べられた。そこへ山ほどのシリアルと生クリームが盛大に流し込まれ、それを見ただけでリックの空腹感は満たされるようだった。さらにアイスや果物の層を重ねられてゆくパフェを見つめて、スプーンをくわえていたヴァレスはしみじみして呟いた。

「これ、ロイルが考えたんだよ」

「えっ、ああ、甘いものが好き…ですもんね」

「そう、そこだけは今も変わらない…。昔はよくここにきていたんだけど…今は少し疎遠…かな」

「ロイルくんとはいつ知り合っただんですか？ランガーさんからロイルくんはここに来る前拾われたって…」

「それからすぐだよ。ロイルはね、ランガーに拾われる前の記憶がないんだ」

「えっ？」

パフェは話している内に出来上がり、さっそくスプーンで頂点に堂々と座っていたアイスを割ったヴァレスは少し視線を上げて天井を見上げた。空気を循環させるファンがくるりくるりと緩やかに回っ

ている。リックはパフェには手をつけず、始めに頼んだコーヒーに口をつけた。静寂がややあつて再びヴァレスが話始めた。

「ランガーは用事でアクアドームを出ていただけで、まだ出来てまもない頃のレイディアンの付近には誰もいなくて、ぽつんとロイルが立っていたんだって。少し話しかけてみたら名前もなにもかも忘れていたから、アクアドームに連れ帰ったらしい。」

「名前も…じゃあロイルくんの名前は、誰がつけた名前なんですか？」

「勿論ランガーだよ。その後ロイルはランガーから紹介された家の養子になっただけで、その家少し前に人形に襲われて壊滅。一応は名乗っているけど元々彼が誰なのかなんて誰も知らないんだ。」

リックは驚いた。ロイルの過去が明らかになるにつれてロイルのまとうあの不思議な雰囲気がかかっていくような気すらした。そんなにも波乱万丈な人生を送っていたのかと少し不憫にすら思える。ヴァレスはもう半分に達したパフェをかき混ぜながらため息をついた。

「昔はああじゃなかったけど、今はあんな性格だから益々人が寄り付かない人間になってしまつて…。分かつてあげたいと思う人がいるだけマシだけれど…」

リックはふと、ロイルの部屋で出会った銀髪の少女を思い出した。墓地にいるロイルを気遣つて出て行ったあの少女もまたそうなのかとヴァレスの横顔を見つめながら思う。それにくらべて自分はどうなのか。それもまだすつきりとしなないところだった。

「早く食べないとどろどろになつちゃうよ?」

「あ…はい」

一番上のアイスは、ヴァレスが促す通り、もう溶け切って生クリームと大差ない姿へと変えていた。リックは進まないスプーンを行ったり来たりさせながら、外を見つめた。

レイディアンに住む住人の殆どは死を覚悟した軍人の家族。ここに住むと決めるほどの決意をリックは今求めている。そういつた覚悟が足りないため、自分を諭す人が現れても、こうして疑心したり深く用心してしまう。ロイルへの気持ちも晴れていたような気がしていたのに、リックの中のロイルの像は益々謎が絡んでどうしたらいいのか分からない。

別段上司関係があるわけでもないのにどうしても彼が気になってしまった。そう、そう。

そうした所にどこか傍観者を気取った己をリックは感じていた。

七話

その後、食べ切れなかったパフエをヴァレスに食べてもらい二人は店を出た。それから街をてんでんと歩き回り、時刻は夕方を過ぎて二人の足は基地へと戻っていた。

新しい服や食料を両手に抱えたリックは、今日あった色々なことを思い出していた。特にフラッグを訪れる前の涙は突発的で、今思い出すだけで顔に火が付きそうだった。

ヴァレスは片手に抱えたリックの荷物を見つめ、小さく笑った。

「俺、ロイル以外とは外をうろついたの初めてだな。」

「えっ？意外ですね、なんだか」

「あはは、勿論女の子とはデートするけどね！」

リックは苦笑する。それから話が脱線して、前出会った可愛い女の子の話に逸れていったが、リックは聞いてみたいことがあった。やはり、自分とヴァレスは友人なのだろうか。そうなら敬語をやめてもいいだろうか。きっと彼なら許してくれるだろうし、友人と云ってくれるだろう。いつかタイミングがきたとき尋ねようかと思っていたが、中々切り出せず、いつしかリックはその質問を忘れてしまった。

「あれっ？あんな所に扉が…」

基地の門前まで帰ってきたリックは、基地の正面玄関の斜め向かいの扉に気づいて足を止めた。普段気にしていなければ見つからないような場所にあってもものすごく頑丈そうなオレンジ色の扉だった。その持ち手には何重にもなった鎖が巻きつけられ、鍵がかかっている。

あの付近を中から一度訪れた時、内側からの扉なんてなかったことを思い出したリックはヴァレスの肩を叩いてその扉を指差した。

「あれは、何の部屋なんですか？内側に扉なんてなかったけど…」

「ああ、あれはコアがしまつてある部屋さ」

「コア？」

「そう。特別な人形だけについているらしい宝石みたいな玉で、それをつけた人形は戦闘能力が高くなるんだ。コアはまだ研究されている物で、何なのかまだ分かってないらしいけど…危険だからああして封鎖されてるんだって」

「へえ。詳しいですね」

「まあね、清掃員は年に一度だけあの部屋の掃除をするから入ったことはあるよ」

「そうなんですか」

改めてリックはオレンジの扉を見遣った。入ってはならないと言われれば好奇心が動くもの。どんな風なのかと想像しながら、二人は基地へと入っていった。

獣道は突然途切れた。

雨でぬかるんでいた地面はロイルたちの歩く動きに合わせて茶色い水しぶきをあげる。

また砂利がいい具合に足を引つ掛けて、足場は最悪の状態だった。ロイルは草が伸びきった方向を見つめ嫌そうな顔をし、地図で場所を確認してもう一度顔を上げた。

「この先…なんだが」

「いやあああ、もうどうして突然道がなくなるのよお！」

トレストウーヴェは抗議の声を上げて駄々を踏んだ。ロイルはトレストウーヴェに振り返り、嫌味な笑みを浮かべた。

「なら馬車に戻るか？もうとっくにレイディアンに帰った馬車を追っつてせいぜい走れ」

「馬鹿言わないでよ！弱音ぐらい吐かせてよ！」

「ロイルさん、この藪を歩くのは危険です。迂回しましょう」

「そうだな」

「ええええええっ!?!」

「なら一人でこの藪を歩くか？お前は辛い選択ばかり好むな」

「いい加減にしてよ、ロイル！」

憤慨した様子のトレストウーヴェに薄く笑って、ロイルはなら文句を言うなと一言述べて踵を返した。

一向に止まない雨がロイル達の頭や肩をぬらしていった。深緑の軍服が黒々とする頃、藪を避けて迂回したロイル達の視線の先に、突然のように現れた古い廃屋。

ちよつとした屋敷のようで、錆び切った柵に覆われていた。ロイルは地図と比較しながら納得したように頷いた。

「どうやらここだな…僕たちは少し遠回りさせられていたようだ」

「…あの藪から斜めに渡ってすぐじゃない。なんであこから見えなかったのかしら」

「木が邪魔していたんだ。」

屋敷の周りもやはり草が生い茂っており、ロイルはナイフで背の高い草を切っていくながら屋敷へ進んだ。レニはトレストウーヴェが歩きやすいようにリードして歩き、デンは先ほどからなんの言葉も発しなかった。やがて朽ちたドアの前までたどり着くと、雨でぐしゃぐしゃになった地図をしまつて、ロイルは改めて外装を見上げた。二階建ての大きな屋敷だった。昔は白木を使った美しい様だったのだろうが、今は虫が食い荒らし茶色くなってしまっている。窓はいくつか割れていてボロきれのようなカーテンがひらひらと風に揺れていた。その屋敷の不気味さに眉を寄せるトレストウーヴェは思わずロイルの服の裾を握って押し黙った。

「人が使っている様子は全くないな」

「早めに調査しましょう…、人形よりもっと悪いものが出そう」

「…やはりお前は事務向きだと僕は思うぞ、本当に馬車を呼ばれたくなかったら小鳥のようにうるさいその口を閉じろ、トレストウーヴェ。」

トレストウーヴェはぎろりとロイルを睨みつける。ロイルはトレストウーヴェを一瞥すると、なんの躊躇もなしに今にも取れそうなおブを引いた。

八話

室内は荒れ放題だった。ロイルは昔訪れたマリルの屋敷を彷彿させる風景を眺めて一人眉を寄せた。天井は抜け落ち、少し歩けば大げさなほど軋み音を立てる床。すぐ目の前には踊り場がある長い階段が伸びており、その踊り場にはすっかり何が描かれていたのかわからない絵画が飾られている。

この様子からみて、数十年は軽く経っている。ロイルはそう思った。レニはきよろきよろと辺りを見渡して、ロイルに提案をする。

「ロイルさん、屋敷の崩壊が進んでいます。一度に大人数では歩けません。ここは二手に分かれましょう。」

「だが…、僕とお前、トレストウーヴェとバークホークでは危険だぞ。お前はバークホークと行動を共にしろ。僕はトレストウーヴェと共に行く。」

「はい」

ロイルはデンに振り返った。

「もしも人形が出たならまず人形がレニに向かないよう攻撃しろ。レニが逃げたのを確認したらお前も逃げていい。ただしレニには絶対戦わせるな。もしレニが死んだらお前が生きてレニを回収しろ。分かったな」

デンは少し目を細めて、声を出さずただ頷いた。ロイルはデンが頷いたのを確認すると、踵を返してトレストウーヴェに向かった。

「行くぞ」

「あ、うん！」

嬉しそうにロイルの背中を追いかけたトレストウーヴェにレニは緩く微笑んだ。デンはレニの背中を軽く叩き、にやりと口角を上げた。

「よろしくおねがいますよ、中尉殿」

「ええ、こちらこそ」

そして、レニとデนมまた、ロイル達とは反対の方向へと歩き出した。

トレストウーヴェは、黙って歩くロイルの横顔を見つめながら、なんと話しかけようかと頭をフル回転させた。ロイルがマリルとの事件があつて三年。その三年間という長い月日、トレストウーヴェはロイルに話しかけようと試みたが中々聞きたいことが聞けず、また会話のないまま三年を過ごした。その三年分の想いが、今なら言えると思つた矢先、言いたいことがありすぎて、言葉にできずにいたのだ。もどかしさに奥歯をかみ締めると、ロイルから声があがった。

「…お前、でかくなつたな」

「な、何がよ？下品なことだつたらぶつとばすわよ？」

「何が下品だ馬鹿者、身長のことだ」

「えっ、あ、そうね。だつてもう十八だもの。当然でしょ」

ロイルは靴先に視線を落とし、歩きながら少し考える。ふと割れた鏡に映つた自分を見つめて、ロイルはぼつりともらした。

「それに比べたら僕は…アクアドームに来た頃から何も変わってない…」

「ロイル？」

自然と足が止まる。トレストウーヴェは先を歩いていたことに気がついて彼女もまた足を止めた。ロイルは自分が足を止めていたことによろやく気づくと首を振り、歩き出した。

「なんでもない、独り言だ」

結局、ロイルに考え事を中断されたトレストウーヴェは大きなため息を吐き出して、さっさと歩いて行ってしまったロイルを追いかけ小走りをする。外はいよいよ雷が轟き、激しい雨が降り出そうとしていた。

しばらく歩いたところで、通路は大きな部屋となった。隔てるドアや壁がないためか、通路の延長線のようなその部屋を見渡したロイルは、ふとデジャヴを感じて眉根を寄せた。

しかしその部屋は真っ白な壁が広がる窓もない不思議な空間で、特に何も落ちていないがらんとした部屋だった。トレストウーヴェは退屈そうにあくびをすると、中々動こうとしないロイルの肩をつついた。

「ねえ、何も無いじゃない。もう違う部屋行きましょう。ホントにここ工場だったのかしら？ただのお屋敷みたい」

「待て、トレストウーヴェ、ここに何だか…」

一人歩き出したトレストウエを止めようと大きく右手を伸ばした瞬間。頭に閃光がほとばしるような強い衝撃を受けたロイルは、思わずうずくまって頭を抱えた。激しい激痛がおそろ頭はすっと見えている景色をぼやけさせ、心配して振り返ったトレストウエを最後に、ロイルの視界が暗くなった。

『いいか、ここから出してやるから、俺の言うことを聞くんだ』

格子が見えた。薄ぼんやりとした室内で、顔がうかがえない人物がそう告げている。

だが両手に感覚はない。格子の間から伸ばした両手は自分のものだと分かっていたが、動かすことはできない。まるで、夢をみている最中のようだった。

男は続ける。

『俺はきつとお前を出せばあいつに殺されてしまうだろう。だが、覚えておけ。もしもお前と俺がもう一度であったなら、俺はお前を』

そして、格子が開いた。自由になった両足が、ふわふわと落ち着きなく揺れる。見知らぬ男、ただし顔は分からないが、は両肩を掴み、静かに、それでいて強く告げる。

『必ず殺すと覚悟しておきなさい』

「ロイル、ロイル！」

トレストウーヴェの声に跳ね起きたロイルは、まるで呼吸を止めていたかのように荒く呼吸を繰り返した。ようやく起き上がったロイルに安堵したトレストウーヴェはロイルの背中をさすりながら優しく尋ねた。

「一体何があつたの？いきなりうずくまったりして…」

「…記憶だ」

「えっ？」

「さっきのは…僕の記憶だ…」

トレストウーヴェは思わず両手で口を覆った。以前、ロイルは記憶がないことをマリアから聞いていたトレストウーヴェは、突然記憶を探り当てたロイルにかける言葉がなく、黙ってしまった。

ロイルはよろよると立ち上がってもう一度部屋を見つめた。

あの激しい頭痛は襲ってこなかったが、急に記憶の一部を垣間見たロイルは気分が悪く、片手で口を押さえて険しい表情となった。この屋敷の風景そのものが記憶の底辺から蘇る。その意味がどんなものなのか理解できなかったが、ロイルの胸には様々なことが浮かんで消えていった。そしてこの任務がいかに重要なのかを改めて知るのだった。

九話

ロイルはその後、何かを思案するように黙っていた。トレストウーヴェはどんな記憶だったのか、触れてみたい気持ちがあったが、ロイルの様子を伺う限り、尋ねられる様子は無かった。部屋を出たロイルは次に、二階へと足を運んでいた、軋む階段をとんとんとゆっくり歩きながら、ロイルはトレストウーヴェに振り返った。

「そんなに心配げな顔をするな…別に機嫌が悪いわけじゃない」

「えっ？…そんな、心配げだなんて」

「…別に、そうでないならそれでいい。だが僕は別にさっきのことを気にしてるわけじゃないと言ってるんだ。頭がまだ痛むが、平気だ。まるで他人事だったからな…」

そう言い、ロイルは再び顔を上げて階段を上り始めた。

トレストウーヴェは微笑し、ほんの少しロイルの優しさをかみ締め、その背中を見つめる。先ほどまで気になっていたロイルの過去も、それほど気にならなくなった。

ふとロイルが足を止める。

再び頭痛でもしたのかと驚き、トレストウーヴェもまた足を止めれば、ロイルはトレストウーヴェをかばうように両手を開き、低く身構えた。その手にはいつの間にか刀が握られている。

「ロイル？」

「お前は、こここの屋敷に住み着いているのか？」

トレストウーヴェに投げかけた言葉ではなかった。恐る恐るトレストウーヴェがロイルの視線の先を追うと、そこには清楚なエプロンドレスに身を包んだ少女が立っていた。歳はトレストウーヴェと変わらないほどか。ロイルの反応からして人形なのだろうが、顔はよく見えなかった。

「ソチラこそ、勝手に我が主のお屋敷二進入しておいてナンですか？あなた方はドチラ様でしょう？」

ロイルは眉根を寄せた。音声機能がおかしい。ところどころ音が飛んだその発声は、ロイルには聞き覚えがあった。

「お前は…初期号だな…体のつなぎ目も露出してある古い型だ…」

「はい、わたくし八第一号機初期タイプ…今から一億八千九百二十一万六千秒前に一度整備を受けた以来ずっとこのままです」

「…記念すべき、第一号機がいるということはやはりここは、工場間違いなさそうだな…」

「工場？」

ひととロイルを見据えて、一号機は不思議そうな表情をした。しかしながら彼女には表情を作る機能も備わってないのか、依然として無表情には変わりなかったが、ニュアンスとしてそんな風だった。

「ナニカ…勘違いをなされてイマス様です。ここは主のお屋敷。随分前に主はお引越しナサれましたが、ここで人形を製作なされていた時はお一人でしたカラ、工場とは呼べません。あえていうなればそう、アトリエですネ」

「アトリエ、じゃあ作っていた数はなんと説明する…ここは相当野ざらしたが、お前は六年ほど前には一度整備されていると言った。どういうことだ…？」

「わたくしの口カヲはなんとも言えません。しかし、どうぞ、ご自由に見学なサツテ下さい。別に阻止など致しません。」

一号機はくるりとリボンを揺らして背を向いた。

ロイルは肩透かしを食らったようにしばらく啞然としていたが、トレストウーヴェに振り返ってもう一度刀を握る。

「おい、待て！そこまで言うのなら、お前がこの屋敷を案内しろ。

だがいいか、僕たちはお前たちの敵…少しでも怪しい真似をすれば僕はお前を容赦しない」

「…案内はして差し上げマス。しかしながら、理不尽ですネ。その物騒な考えはおヨシになって下さい。」

一号機は振り返ってロイルを一瞥する。ロイルは一号機を睨みつけ、大きく深呼吸をした。

「僕は人形を信用しない、それだけだ」

一号機は薄暗い廊下にマツチを擦って明かりを灯した。

片手の小さくなったろうそくへ火を灯し、一号機は再び歩き出した。

「この奥八主の私室が続いております。どうぞ足元に気をつけて下さい」

ぽつぽつと火が燃える小さな音を聞きながら、ロイルは廊下の奥を見遣った。

明かりを灯したことで更に影を増した廊下の闇がほの暗く、進入した二人を招くようにぽっかりと口を開いていた。

十話

デンとレニの間に、会話はほとんどなかった。

各々が参考になりそうにない崩れた屋敷をぼんやり見つめながら何を思うでもなく歩いてきた。ロイル達と反対方向へ歩いてきたレニ達は、奥で大きな広間を見つけて立ち止まった。

その広間の中心にはあまりにもその場にそぐわないような巨大な浴槽がどんと構えてあり、部屋はタイル張りで恐らく風呂場なのだろうと推測できた。

正面には今は伸び放題の草が生い茂った庭が一望できる大きなガラス張りの扉が並んでいる。すでにそれらは割れて地面に散らばっていたが、デンはこの部屋に入った瞬間口笛を鳴らして驚いた様子を見せた。

「金持ちつてのはよく分からんな…なんだこの箱は…」

「浴槽：でしょうね。それも東洋の…模様が鮮やかですね」

「風呂?!これが?東のやつらはこんなでけえ風呂を使うのか…」

「こちらでもわりと貴族には流行っているそうですよ、大きな浴槽が。」

「…やっぱり金持ちは分からねえな…」

しばらく浴槽を眺めていたデンは、ふと思い出したように顔を上げてレニを見つめる。

レニもまた視線があったデンを見つめ返すと、デンは急に顔をしかめた。

「俺あ、この前、東洋の服を着たなんとかって奴に会ったんだが…」

「…ランガーさんですか?」

「そうそう、そいつ。あいつぁアンタン所の坊ちゃんに似ていていけ好かねえ」

「よく言われていますね…ロイルさんが苦手なんですか？」

「苦手も何も…」

デンは視線を逸らして天井を見上げるそぶりを見せた。頭をぼりぼりと面倒そうにかきむしり、デンはもう一度視線をレニへ戻した。

「アンタは、あんなガキが上司で気に食わなくないのかい」

「いいえ」

即答だった。

デンはあまりに早いその返事に眉を上げて続ける。

「だがよお、本当は我慢してんじゃないのか？子供なんか指図されて偉ぶられて…」

「お言葉ですが…バークホークさん。」

レニはいささか冷めた視線でデンを見つめていた。

デンはそんな視線に気づいていたが、虚勢だろうとそしらぬ顔をしていた。だがレニはデンの澄ました様子までしっかりと見通していた。た。

「私は以前、ロイルさんに忠誠を誓った日から一度たりとも彼を疎んだことはありません。私は彼の命令ならば忠実に従う、あなた方からすれば犬。主君が幼かろうが地位があろうが私には関係ないこと。あなた方の低俗な意見と同調させないだけですか」

デンは鼻で笑った。

「そうだな、アンタも所詮犬…だったんだな」

と嘲笑し、レニの脇をすり抜けて一人、歩き出した。レニはそんなデンをしばらく見つめていたが、大きく距離が開く前に、レニもまた歩き出した。

やがて二人はロイル達の部屋からは反対方向の階段にたどり着き、足を止めた。

長い、それでいて緩やかな階段を見上げて、先ほどの会話から静寂が続いていた二人の間に、ようやく声上がる。

「さつき遠目から見たときに階段は両サイドあったよなあ？」

「…はい。ロイルさんが歩いていった方向にも階段があるのを見ました。」

「今頃上か…そろそろ落ち合えるんじゃないか」

「そうですね」

階段はやはり老朽化が進んでいて、軋んだ。

慎重に足を運んでいくデンに続き、レニも階段を上がり始めた頃、

レニはハツとして突然足を止めた。

デンが聞こえなくなったレニの足音に反応して振り返ると、レニはロイルが歩いていった方向を見つめて険しい表情をしていた。

「あれは…」

「おい、中尉殿、何してんだ」

「…！す、すみません…」

どこか上の空だったレニはデンに声を掛けられてようやく片方の足を階段へとかけた。しかし視線は廊下に釘付けになったまま、デンより二足ほど遅く階段をのぼるのだった。

階段が終わると、薄暗い廊下続いていた。

レニは持っていたマッチでろうそくに火を灯し、ランプを掲げた。外の激しい雷雨が今にも破裂しそうな薄い窓ガラスを叩いていた。肖像らしき大きな額縁が揺らめいた炎に照らされてオレンジ色に染まってる。デンは寒気に身震いして、その薄暗い廊下を先陣切って歩き出した。

第六章 暁の反逆者・後編（前書き）

やっと後編です！

第六章 暁の反逆者・後編

数日前

アイリーンはランガールの部屋を訪れていた。ランガーはカミュの修復に追われ、カミュの体にもたれかかるようにして寝ていたが、アイリーンの訪問で目が覚め、不機嫌そうにアイリーンと向かい合っていた。

「何だ、私は忙しいのだが」

「ふふ、激昂すれば一人称が戻るお前が私だと？…滑稽だなあ」

「…マリア、追い出せ、今すぐ」

「まあ、待て。今日はカミュの具合だけでない、話があつたのだ」

アイリーンは相変わらず派手な服から艶やかな腿を惜しげもなく晒して足を組んだ。マリアはアイリーの側にお茶を置き、カミュを抱え、ソファを広くした。アイリーンはマリアに礼をし、身を乗り出して話を再開した。

「…空軍の上層部によからぬ奴がいるらしい。アランから聞いたのだが…」

「よからぬ奴？だが私に空軍の豚連中の話をして何になる？」

「聞け。その空軍でよからぬ動きを見せている男の名前はゴードン・ディネガー。少将で戦闘機管理統括している男なのだが、ある男と癒着している可能性がある」

「…マリス、か」

マリアは身を硬くした。アイリーンはマリアを一瞥し、茶に口をつけて俯いた。

「アランはマーリスのことを知らなかったのだが、この所、空軍の予算外に兵器や戦闘機の性能が飛びぬけて上がっていて、紋章が入れられていない不審なものがごろごろ出てきたらしい。」

「その男の癒着目的はそれか…やはり、マーリスが製造者であるのは間違いなさそうだな…大方戦闘機や兵器の設計図をマーリスに依頼して外装は内密に作らせたものだろうな…」

「ゴードンが癒着している証拠はあるものの、マーリス本人が消息不明なため、明確な処罰など下せないのが現状だ。」

「マーリスの屋敷には潜入してみたのか？」

「屋敷だと？」

ランガーは顔を上げて面倒そうにため息をついた。

「マーリスの昔住んでいた屋敷だ。お前は恋人だったにも関わらず訪れたことがないのか」

「い…いや、失念していた。そうか、マーリスの尻尾を掴む手がかりになるやもしれんな…」

ランガーは自身のカップに黒々と注がれたコーヒーをすすり、目を細めた。

少し落ち込んだ様子のアイリーンに尋ねる。

「まだ、あの男を愛しているのかお前は…」

「な、何を…」

「私は遠い昔にそんなことは忘れてしまったというのに、お前は進歩のない下等生物だな」

「…ジュリアのことか…」

カタン、と大きさにカップを置いたランガーは、片方だけの漆黒の瞳でアイリーンを見つめた。マリアははらとその様子を見守っ

ていたが、アイリーンはそんな空気などお構いなしに穏やかな声
で続けた。

「あれから何年経っているんだ…私はともかく、縛られているのは
お前のほうだ。」

「アイリーン…!」

「じゃあな、マリアの茶は相変わらずうまい…この調査はロイルに
でも任せよう」

ついにカップのコーヒーはこぼれてしまった。自分の感情を何とか
抑えようとしているのか、フーフーと荒く獣のような息を繰り返す
ランガーは途切れ途切れに呟いた。

「俺の前で…二度と、その名を口に…するんじゃない…!」

アイリーンはランガーを一瞥し、背を向けた。

「俺…、ね」

薄く笑みを湛えたアイリーンはそのままランガーの部屋を後にした。

基地玄関付近で、リックはヴァレスと別れて手を振った。

ヴァレスは買ったばかりの荷物があるからと部屋までついてこよう
としたが、ヴァレスが帰りに迷子になる心配をしたリックは大荷物

でエレベーターに乗車した。いつもは二つしかないので混んでいるエレベーターも幸い誰も乗ってなかったためガラガラだった。足元にいくつか荷物を置いて、リックは大きく息をついた。体に疲れを感じる。

楽しかった休日はあつという間で、時間が分からないアクアドーム内では尚更そう思えた。

ふと、降りる手前でエレベーターが止まった。

誰かが入ってくると慌てて荷物を抱えると、大量に買い込んだりんごがごろごろと転がり出た。思わずそのりんごを追って身を屈めると、皮の美しいブーツの先が視界に飛び込み、リックは顔を上げた。

「おい、乗るのか降りるのかはつきりしろ」

声と高そうなブーツの主が不機嫌そうに言った。声を聞いた途端、降りたくなったリックだったが、おずおず顔を上げて男　ランガーを見上げた。

「…乗ります…その、りんごを拾ったら…」

気まずい雰囲気か漂っていた。

声を掛けられないリックは話しかけられないように、一心不乱に落としたりんごを磨いた。

次第に光沢が現れてきたりんごをみつめていると、努力むなしくランガーはリックへ声を掛けた。

「お前、私が嫌いだろう」

「ええっ？い、いやそんなことは…!!」

「いい、嫌いなのは分かっている。お前の行動全てが語っている」

「は…はあ…。」

「私のことは存分に嫌ってもいい。そして信用もしなくていい、だが、お前の上司は信用してやれ」

「えっ…。」

ランガーはリックを一瞥する。ふん、と高慢そうに鼻を鳴らしたランガーは続ける。

「…ロイルをそんなに嫌ってやるな」

チン、と軽快な音と共にドアが開いた。

着物の端を揺らして見えなくなったランガーの姿を最後まで捉えていたリックの目は、動揺して揺らぐ。見透かされた自分の全てに動揺していたわけではなかった。

今までどんなに冷酷な人間なのだろうと思っていた人物から漏れた優しい一言に胸が痛んだのだ。

あの一言はどんな言葉より重い。リックはそう感じた。

何故ならば一生ロイルが知るところのない、ランガーの想いを、ロイルの端くれである自分が受け取ってしまったのだから。屈んでうなだれたリックは、自分の部屋の階をしばらくすぎても、エレベーターから降りれなくなって小さくため息をつくのだった。

二話

一号機の歩く速度は遅かった。ゆったりとしたその速度に合わせて歩くロイルの手には刀があった。廊下は永遠に続くことさえ思われる長さで続き、いくつかのぞいた部屋はロイルの記憶を喚起させるものや、手がかりなど一切感じられず、調査は振出しから前進を見せぬままであった。

廊下はまだ続くのかといい加減うんざりし始めた頃、一号機が何かに気づいて、声を上げた。

「あら…?」

ロイルは突然声を上げた一号機を不審がり、足を止める。

一号機はロイルへ振り返ると、奥を指差す。

「あちら側から光が…お連れ様でしょうか？」

「何？」

ロイルが廊下を見遣る。だが光などない。何か騙そうとしているのではと一号機を見上げると、向こうから声がしてロイルはハッと再び暗闇へ視線を遣った。

「ロイル…さん？」

デンを先頭に、身構えた風の二人組みは間違いなく先ほど別れたデーンとレニだった。

ロイルは安堵の息をつき、むき出していた刀を鞘へ戻した。

「レニ、バークホーク…」

身構えていた二人は、一号機とロイル、トレストウーヴェを交互に見つめて怪訝な表情を見せた。

ロイルは首を振り、一号機を見遣る。

「わたくし、ココで生涯を終えるのでしょうか…？不穏な空気ですらっしやいマスね」

「いや、お前にはまだ案内してもわわなくてはならん。おいレニ、向こうで何か収穫はあったのか？」

「いえ、浴室しか…ロイルさん、その人形は？」

「案内をさせている。気にするな」

ロイルはレニの側を通り抜け、一号機の後を追った。レニは何か言いたげに振り向いたが、数ミリ開かれた口から何の言葉もでなかった。デンはそんなレニの様子を何か思案するようにつめた。

トレストウーヴェはちらりとレニへ振り返り、そっとロイルに耳打ちする。

「ロイル？さっきのこと、レニに言わなくていいの？」

「何故？」

「な、何故って…あなたのパートナーじゃない…」

「必要ない。あれは僕に忠実に従う腕だ。大体さっきのことは言うただろう、夢のようにまるで他人事だ。言う必要など、ない」

トレストウーヴェは足を止めて複雑そうな表情になる。自分はロイルを分かってあげたいし、きっと同じ想いがレニにもあると信じていた。他人事なのはロイルの方ではないか、そう思うと胸の奥がちくりと痛んだ。一号機は振り返り、一つの大きな部屋で足を止めた。

「ここが最後の部屋で主の書斎です」

この部屋だけつい最近まで使われていたかのように、扉は頑丈、そして綺麗だった。

さらに嚴重に鍵で守られていたドアノブを開き、一号機は腰を屈めてお辞儀をした。

「どうぞ」

この先は畏ではないか、そう思われるような丁寧な手つきで招かれたロイルは、一号機を一瞥し、部屋へと入った。トレストウーヴェはなるべく一号機との距離を取り入室し、レニとデンは部屋の外から様子を伺った。

書斎内部はやはり傷んでいた。家具は皆役目を終え、床につつぶし、窓ガラスは割れてこれもまた床に散らばっていた。昔は鮮やかな赤色をしていただろう絨毯も黒くくすんでいる。ロイルは棚と棚の間から覗く文献などを引っ張りながら、書斎の調査を始めた。

レニはお辞儀をしたまま動かない一号機をしばらく見つめていたが、やがてふと、自分たちが上がってきた階段から、足音が聞こえて、一号機の背後へ目を凝らした。

次第に近づく足音にデンも感づいたのか、すっとレニの前に出る。

やがて、ぼんやりとした廊下の明かりが向こうから歩いてくる人物の影を映し出した。

レニはその人物の顔を見て、絶句する。

「やあ、初期。何だか賑やかだね！」

快活な声を上げた少年は、こつこつと靴音をならし、一号機の背中を軽く叩いた。

ようやく頭を上げた一号機は少年の顔を見つめて、滑らかな音声で

返した。

「はい、レイン様……」

「君たち……どこから来たの……？」

レニは答えに困っていると、

突然、声に反応したロイルが廊下に飛び出した。

レインと一号機に呼ばれた少年はロイルの一撃を軽々避けると、ロイルに向き合った。

「やあ、ロイル。元気だね」

ロイルは思わず自分の腕から刀を落として少年の顔を見つめた。ロイルの背後にいたトレストウーヴェは震える声でその心境を代弁する。

「ロイルが……ふたり……？」

長く垂れ下がったアシンメトリーの髪をかき上げて少年は不敵に微笑んだ。

「僕はレイン、レイン・ソルワット……さあて君たちの用事は何かな？」

三話

ロイルは落とした刀を慎重に拾うと、その切っ先をレインに向けてへらへら笑うレインを睨みつけた。一号機は恭しくレインにこれまでの事を報告して、レインは愉快そうに何度か頷いてロイルに向き合った。

「そう、お仕事ね。」

「お前は…一体？」

「困るなあロイル。いくらもう随分前から使っていないとはいえ僕の家をつろつろしてもらっちゃあ…」

レインは手招きをするように二三度手を振った。すると、今までなんの反応も無かったデンは、そのレインの動きに合わせて歩き出す。レニが驚いてひき止めようと手を伸ばすと、デンはレニへ拳を振り上げた。

「れ、レニっ！」

トレストウーヴェの悲鳴が上がったと同時にレニは廊下の壁に強く叩きつけられ、頭を下げた動かなくなった。ロイルはそんなレニを静かに一瞥して、デンを見据えた。

「バークホーク…貴様…」

「ああつと、デンを裏切ったなんて思わないでね？彼は元々、僕がお手伝いに出していた人と人形の融合体…言わば改造人間なんだから」

「スパイだったんだな…僕が馬鹿だった…お前が訓練に出ていた時

に気づいていれば」

ロイルは体制を低くし、トレストウーヴェを部屋へと押し込んだ。今にもレニに駆け寄りそうだったトレストウーヴェはロイルとレニ、交互に見つめて不安げに大きな瞳を揺らした。レニは口の端から血を流し、ぼんやりする視界で緊迫した様子を見守る。

レインは側で立っていた一号機にそつと腕を回すと、愛おしげにその頬を撫でる。そして恍惚として告げた。

「デンには海軍将校のアランに近づいてもらおうと動いてもらっていたけど…堅い男でさあ、飛ばされちゃったんだよねえ…まあ、好都合にも君たちの組織に…ね」

「お前が人形の製造者なのか…何が一体目的で…」

レインはその言葉に大げさなほど高笑いすると、一号機を押しつけ、ロイルへと近づいた。

ロイルはレインに切っ先が触れるか否かで後ずさり、レインは冷酷な視線をロイルへと投げつけた。

「忘れちゃったの…何もかも…」

「な…にを」

「だったら全てその感情を僕に頂戴…そうすれば、僕がお前の代わりになつてやるのに」

レインはロイルを突き飛ばすと踵を返した。トレストウーヴェはそんなロイルを支えて、声を掛けたが、そんな言葉など耳には届かず、すぐに起き上がったロイルはレインに飛び掛った。

しかしその攻撃はデンによって阻まれ、ロイルは大きく体制を崩して受身を取った。

「僕は製造者じゃないよ、ロイル。僕の兄様がこの美しい彼女を作り出したそう、神だよ…そして僕たちの悲願が叶う時また会おうね、ロイル」

「待て、どうして僕の名前を、僕の、僕の過去をお前は…！」
「行くよ、初期」

ロイルは足を蹴り上げてレインにもう一度飛び掛った。トレストウーヴェはロイルの名を呼んで手を伸ばしたが、ロイルはそれを跳ね除けて走り出した。通常の間では追いつきもしないような速さで間を詰めたロイルだったが、デンはロイルへ先回りしてロイルのど元を掴んだ。ロイルは宙を浮いてうめき声を上げる。

「あ、そうだロイル、いいこと教えてあげる」

レインは少し足を止めてロイルを見つめた。

酸素が足りない頭は必死に口を開いて尚も何かを尋ねさせようと動いたが、僅かな空気だけが絞まったのどの隙間から流れてゆく。レインは相変わらずの笑顔で告げた。

「あまりお前の周りの人間を、信用しない方がいいよ。」

デンは気絶してしまったロイルを離して、レインの後を追った。トレストウーヴェは口を押さえて震え、レニ、ロイルと動かなくなつた二人を見つめて涙を流した。

トレストウーヴェはか細く、震える声で呟いた。

「もう、見つかったいたなんて…」

外の雨は嵐のように吹きすさんでいた。

屋敷は倒れ込んだ二人のかすかな息遣いと、トレストウーヴェの鳴咽だけが響いていた。

四話

意識を取り戻したロイルは、鈍く痛む頭を押さえて起き上がった。膝を抱えて泣いていたトレストウーヴェはハツとしてロイルの側に駆け寄った。

「ロイル！」

ロイルはレニを一瞥する。レニは肋骨が損傷しているのか、うまく立ち上がることが出来ない様子で、ロイルはのろろ立ち上がってレニを抱え上げた。トレストウーヴェはレニの反対側を支え、ようやく立ち上がった三人の間には、気まぜい雰囲気か漂っていた。トレストウーヴェはレニの右側を支えるロイルを見つめて、またすぐに視線を落とした。

「…すみません、ロイルさん、トレストウーヴェ…」

「馬車を呼ぶ間また降ろす。僕は残党がないか見て回るから、馬車が到着したらすぐに乗り込め」

「…はい」

ゆっくりと階段を降りながら、ロイルは胸に渦巻く感情の整理が出来ないでいた。

自分と全く同じ顔をした少年と、海軍からやってきたデンのスパイだった真実。

そして、何故か蘇った記憶の一部分。全てのパーツが当てはまらない。頭は益々混乱するばかりだった。カミュが破壊されたのにも理由があるのかと、巡らせた考えの謎は何倍にもなって深まる。

するとレニはそんなロイルの心境を読み取り、声を掛けた。

「バークホークに関してなんらかの不正があつて飛ばされたことは、将校からお伺いしてない事実でした。ロイルさんが訓練場で気づかなかつたのも無理ありません」

「慰めか？ だったらトレストウーヴェにしてやれ。あいつのパートナーだつたはずだ」

「いいえ、あくまで意見です。お忘れ下さい」

レニはそれ以上何も言わなかつた。

やがて扉が外れてしまった玄関のロビーへ戻つてきたロイルは、そつとレニを降ろして刀を構えた。

「ここにいろ。危なくなつたらすぐに僕を呼べ」

「うん、ロイルも気をつけて……」

激しい雨の中、いざ飛び出そうとした瞬間、大きな馬のいななきが響き、ロイルはとつさに玄関から離れた。すると暴れるように乱暴に屋敷へとつつこんだ馬車が一台、ロイル達の目の前で停まつた。

「ロイルさん……！」

「キール……？ どうした、僕はまだ呼んでないが……？」

「大変です、アクアドームが空軍に占拠されました！」

「な……何だと……！？」

レニとトレストウーヴェは焦つた表情で顔を見合わせた。

顔色を変えたロイルは、急いでレニを担ぐと、馬車の扉を開いた。

「何故空軍が……アクアドームを……！」

「お急ぎ下さい！ このままでは民が危険に晒されます！」

「分かった、すぐ出してくれ！」

一難さつてまた、一難。不安で揺れるロイルの心は焦燥した。

胸に描いていた何よりも大切な存在がかすむように感じる。鞭を打たれて再び走り出した馬車は悪路をひたすら走りぬける。雨が叩きつける空は不機嫌そうなトラのように、大きく唸り声をあげ始めていた…。

「我々、空軍^{さんなな}三七隊はこれより、人形殲滅など国家反逆にも等しきゲリラ組織である、レイディアンに制裁を加える」

空色の軍服に身を包んだ若い軍人たちが、一糸乱れぬ動作で敬礼し、その指揮を執っていた男を皆一斉に見つめていた。男、ゴードンは胸に巻いたスカーフの奥から金色に輝く勲章を取り出し、目立つ位置につけ、しばらく戦場の幸運を祈って目を閉じた。紋章にはサメが悠々とした姿で彫られてあり、光を受けて何度がきらりと光ってみせた。

ゴードンはサーベルを腰からすらりと抜くと、澀んだ空をぼんやり映し出したアクアドームの天井へ掲げる。

それが合図のように一斉に軍人たちが剣を抜き、戦場と化したアクアドームを走り出した。

「この要塞は海に作られているため、守りが浅い。まさか、人間が攻めてこようと思っておらんからな…」

アクアドームの街は戦火に包まれた。しかし、逃げ惑う人は少なく、皆が家の中でじっと空軍の動向を追っているものが大半を占めていた。彼らはこうなることを想定して、この場で住むと決めた民。刃を向けられようが、火を放たれようが、その崇高な精神が誇りある死に様を選ばせていた。

ロイルが到着した頃には、空軍の戦闘機がぐるりと空を覆っていた。風は強かったが雨が止んで、空はすっかり兵器の色に染まっていた。ロイルは舌打ちをすると、キールへ二人を任せて馬車を飛び出した。切りかかってくる兵士を打ち飛ばし、アクアドームを駆け抜ける。幸い、住民は手出しをされず事が済んだ様で、ひどく荒れていることはなかった。

基地へ向かって走っていたロイルは一刻も早く基地にいるマリアが無事であるか確かめたく、兵士が固まった正面を避けて回り道をした。

レイディアン軍人たちが、空軍の兵士と刃を交える音が飛び交う中、基地の側面の防護壁から軽々降り立ったロイルは、ふとあの巨大なコアの倉庫が開いているのに気がついた。

「まさか、空軍の狙いは…コア…！」

ロイルは逸る気持ちを抑えて、倉庫へ向かって走り出した。

すると、倉庫に人影を発見して、ロイルは思わず、身を潜めた。

へたり、と床に座り込んだ人物に目を凝らし、ロイルは眉を寄せた。

「…ヴァレス…？」

その声に反応して、ヴァレスが顔を上げた。目は腫れぼったく、泣いたことは明確だった。

ヴァレスは誰？と身をこわばらせていたが、ロイルの顔を見つめて一転、安堵のため息をついた。

「ろ、ろいる〜！」

「おい、一体何があった、中はどうなっている?!」

「う、うん。俺：逃げる途中、迷子になっちゃって：それでここに
来たらコアの倉庫が荒らされていて：中は多分、ルイスたちが応戦
してる。アイリーン様に近づけさせないために：」

「それで、人形たちは：？」

「：マリアはどうだか知らないけど数人、応戦してたと思う：俺、
逃げちゃったからよく分からないんだけど：空軍の軍人が沢山入っ
てきて：」

「セキュリティはカミュがいないため自動にしたらしいな：それが
バークホークの狙いか：？」

ロイルは荒らされた倉庫を眺めて、しがみついていたヴァレスを引
き剥がした。

棚に嚴重に保管されていたコアは箱だけを残しほとんど全てが回収
されていて、ロイルは親指の爪を噛みながらその棚一つ一つに目を
遣った。

ヴァレスはしばらく震えていたが、ロイルの背中を見つめて、立ち
上がった。

「ロイル…」

「おい、ここはお前が来た時にはもう荒らされていたのか？」

背をむけたまま尋ねるロイルに、ヴァレスはゆっくりと頭を振った。

「ううん、俺が来たときに開いたんだよ」

「何？じゃあ、お前、隠れていたのか？」

ヴァレスは俯いて更に首を振った。

「ううん、ロイル、俺が開いたんだよ」

「えっ…？」

腰の辺りが嫌に熱かった。ロイルは振り返ろうとした瞬間、その腰への衝撃でバランスを崩し、大きく傾いで倒れ込んだ。ヴァレスは手に持っていたナイフの血を払うと、悲しげな表情でロイルを見下ろした。

「ごめんね、セイラ…兄ちゃんやっぱり、お前を思い出になんて、出来ないよ…」

五話

ロイルは貫通した腹の傷を押さえて痛みから大きな悲鳴を上げた。傷からはとめどなく鮮血が溢れ出し、ロイルは口からも多量の吐血をして、定まらない視点でヴァレスを見上げた。

ヴァレスはロイルを見下ろして、ナイフを落とした。

「な……ぜ……お前が……！」

「……ロイルに会ったときから、殺そうと思っていた。けど、だんだんお前と仲良くなって、だんだんセイラを忘れそうになってゆく、それが怖かった。」

ヴァレスはぼろぼろと涙をこぼして鼻声で続けた。

「セイラはあんな酷い殺され方をしたのに、覚えていないお前に殺意と憎しみが蘇るたび、葛藤した」

「……けど、とヴァレスは後ずさりをした。

既に沢山の血液を失っていたロイルは意識が飛びそうな頭でヴァレスの話在必死に繋ぎ止める。ヴァレスは首を振ってロイルから視線を逸らした。

「……だけど俺は、こうすることを選んだ、選んでしまった。だから、」

ロイルは泣いているヴァレスの表情を見つめて、ふと笑った。

「さようならだ、ロイル」

重たい音が響く。ロイルを残して巨大な扉は少しずつ閉まっていった。だんだん見えなくなつてゆく光を追っていたロイルの目も、静かに閉じられていった。

空軍は、ヴァレスの合流と共に、一部の兵を置いて撤退していった。

基地の中樞、アイリーンの私室で両手を組んで堂々とその様子を見つめたゴードンは、部屋の隅で拘束されて尚、キセルをくわえるアイリーンを一瞥した。

「完全なる我らが勝利だ、ベイツ」

アイリーンは手錠がかかった両手でキセルを持ち替え、煙をゴードンの顔へと吹きつけた。

「何が勝利だ、そもそも奇襲をしかけてきた頭のおかしいのはアンタ達の方だろう？」

ゴードンは鋭くアイリーンを睨み、胸倉を掴んで容赦なくその美しい顔に拳をたたきつけた。バランスを崩したアイリーンはそのまま倒れ込み、組み敷くゴードンへぷつと唾を吐きつけて笑った。

「私をそこらへんの女だと思うなよ、下郎」

「…気に食わん女だ…思わず、殴ってしまうほどに、な」

やがて、静かさを取り戻したアクアドームには、傷ついた多くの兵士、そして民。沢山の損害と損傷だけがまざまざと刻まれ、この一方的な戦争は終結をみせた。ルイスは怪我をした兵士と、まだ戦える兵士を振り分けて点呼を取り、怪我をした兵士達は廊下で寝そべり、救護に回されていた。

トレストウーヴェはドーナを手伝い、負傷者の救護にあたる傍らで見かけないロイルの姿を捜していた。皆が慌しく走り回り、兵士達は悔しそうな声をあげた。

「くそ、空軍の奴ら、頭がどうかしちゃったのか？分隊とはいえ、仲間である俺たちに手をかけるなんて…！」

「一体何が目的で… たった半日で撤収したんだ、おかしいだろ、どう考えても…」

「こんなあっさりと空軍に陥落される組織で、いいのか？」

レイディアンに渦巻く混乱。レイディアンの士気は下がりに下がり、兵士たちには深い不安が残った。ランガーはマリアを救護に向かわせると、大きく息を吐いて椅子にもたれかかった。ここ最近はカミユの修繕でろくな睡眠もせず、ランガーの体力は底をついていた。両手で頭を覆い、ランガーは苦々しく呟いた。

「どうして俺にこうも立ちはだから…？マールス…」

ランガーは頭を振り、蘇りそうな過去の全てを払いの退けるように

立ち上がって両手を回した。カミュを修復しなければ、またいつ何に襲われるか分からないそう思ったランガーが作業を再開しようとしてソファーに向かった途端、ノックのないドアが突如開き、狼狽しきったレニが飛び込んで来た。

「ロイル…さんが…！」

べつとりと上質なスーツにこびりついた大量の血液、ぐったりとそれこそ人形のように動かないロイルが一度に視線に入ったランガーは呼吸を止めて、目を見開いた。そして、ハッと我に返って吠えるように叫んだ。

「何をしている！止血だ！ドーナを呼んでこい！」

番外編 出会いの物語（前書き）

この話は本編からずれてレニとロイルが出会った時の話を描いたものです。全く本編に関係ない、という訳でもありませんが特別物語に食い込むような話ではないので、気楽に読んでいただければ幸いです。

番外編 出会いの物語

飛行船、マグダリアは漆黒の空を流れるように飛び、薄い雲を突き破って隣国を目指していた。貴族が華やかにその飛行船での空の旅を楽しむ中、一人、身なりのよくしゃんとした美しさを兼ね備えた一人の少年が人の波を見つめてふてくされた様な表情をとっていた。

いつものほこりっぽい深緑の軍服を脱ぎ、少年もまた、貴族の一人のような豪華な服に全身を包まれてダンスホールの飲み物に手を付けていた。

（出所して最初の任務がこれとは…僕はこのまま干されるのだろうか…）

今回の任務は、同乗しているレイディアン軍人と落ち合うことだった。同じように軍服を着ていないのか、特徴もなら教えられない少年は、ぐるぐるとそれらしそうな人影を捜したが、勿論わかるわけもなく。手当たり次第にレイディアンについて尋ねても不審がられてしまうだろう。

少年　ロイル・ヴァン・ハーゲンは大きいため息をついた。

そもそもこんな飛行船で落ち合う約束をさせるなど、どういった金持ち感覚の人間なのかと、ロイルはつくづく思った。そんな人間がレイディアン志望でまともに勤まるのか、そんな事ばかり考えた。

やがて、日が落ちきり、シャンデリアが目眩しいほどぎらつき始めて、ロイルはぼつんと一人で座っていると、様々な貴族に声をかけられ、鬱陶しげに二言三言交わした。

中にはロイルを一晩相手にさせようと詰め寄った貴族もいたが、ロイルのすさまじい眼光に圧倒され、去ってゆく。この繰り返しだった。

収穫がなさそうだと、ロイルは一度部屋に戻るべく、立ち上がった。

(なんだって金持ちの馬鹿共は僕に話しかけてくるんだ…鬱陶しい…一度部屋に戻ってそれからさきほど話しかけてきたやつらの整理をしよう。あいつらは除外できるからな…。)

そうして出口へ向かった途端、突然凄まじい音が鳴り響き、辺りは静寂に包まれた。ロイルは音がした方向へ素早く視線を遣るすると今度は怒鳴り声が響き渡った。

「貴様、私を馬鹿にしておるのか、オズボーン！」

どうやらその怒った男が椅子を倒してテーブルを盛大にひっくり返したようで、反対側に座っていた男の連れは、背中を向けていて表情などは読み取れなかった。

しばらく物珍しげに貴族達がその様子を見つめていたが、ボーイ達が後片付けを始めると興味を無くして再びダンスに耽った。

「落ち着いてくださいませ、ポーマン子爵。私はあくまで示唆しただけでございます」

ロイルはそつと二人に詰め寄り、観葉植物の間から二人のやりとりを見つめた。

角度が悪いのか、やはり連れの男は見えないが、甘い声が耳につく、

どうやら色男のようだった。

ボーマンと呼ばれた男はようやく冷静になったか、ボーイが整えたテーブルに座りなおして咳払いをした。ロイルは指にびっしりと下品なまでにつけられた指輪が光るのを、嫌そうに眺める。

「私は何も関与していない。むしろお前が怪しいではないか、一体お前は何者なんだ？」

「いえ、そんな事はございませんよ。私はしがない教師風情ですか
ら…」

ロイルはそれ以上の情報の入手は無意味だと判断して、その場を後にした。

ふと、ボーマンの連れがこちらを見ていた気がしたが、思いなおしてロイルは部屋へと戻っていった。

二話

自室に戻ったロイルは、高級なサテンのシーツが張られたベッドに横たわった。体がどつと疲れから開放されて緩み、ロイルの口からは大きなため息が吐き出された。ごろりと仰向けになったままマグダリアに乗船している人物リストをロイルはなんとなく眺めた。ぱらぱらとめくるうち、瞼が重くなり、まどろむ。そのまま寝てしまおうかと寝返りを打った途端、部屋のチャイムがポーンと軽快に鳴った。

ロイルは飛び跳ねるように起き上がり、ドアを睨みつけて立ち上がった。

上着を豪快に投げ捨ててベッドから降りたロイルは、ドア越しに相手を見遣る。するとそこにいたのは背の高い紳士だった。頭には上質な山高帽をかぶり、胸に絞めたタイにはカフスが輝いている。顔は帽子のため見えなかったが、もしかしたら今日落ち合う予定だった男かと、ロイルはドアを開いた。

「夜分に失礼します、実は先ほど、ホールで落とし物をされていて、お部屋に伺った次第です」

声は聞き覚えがあった。先ほどのホールで怒鳴りつけられていた男と調度似た、甘い声の持ち主だった。ロイルは不審がってじろじろと男を見つめていたが、やがて男が帽子を脱ぎ、軽い会釈をした。

「こちらに見覚えは？」

男が胸から取り出したのは、女性物のハンカチだった。ロイルは胡

散臭げにそれを眺めて首を振り、少し開いていたドアを狭めた。男はそうですか、と一言ハンカチをしまい、ロイルを見つめた。

「私が座っていた座席のすぐ側にありましたので、てっきりあなたのものかと」

「…僕は貴殿の側など寄っていない、用はそれだけだろうか」

「…失敬、ええ、それだけでございます。それでは」

背を向けた男を、じっと見つめていたロイルはやがて、男が歩き出したのを期にドアを閉めた。しかしその行動はドア越しに見えなくなるまで追い、見えなくなつてからは声をひそめて足音を聞いた。難しい表情を取ったロイルは、少し逡巡し、ベッドに投げた上着をひたたくつて用心深く外に出た。

そして、その紳士の背中を見つけて、壁に隠れた。

（あの男…怪しいな…なぜ僕の気配に気づいた…？もしやあいつがレイディアン…）

そして何の躊躇もしぐさも見せず、船員用の個室に入つていった男の姿を捉えて、ロイルは目を細めた。

（そのへらへらとした化けの皮、剥いでやる…）

男が個室に入つてしばらく間を置き、ロイルもまた、その個室へと足を踏み入れた。

部屋の入り口には、リネン室と書かれていた。狭いその室内にぎっしりと積み上げられたシーツの山を見上げて、ロイルは慎重に男

の姿を探した。奥には部屋が続いており、向こうからモーター音が聞こえた。恐らく、洗浄機がある。ロイルは山々の間に体を詰め込み、そのドアに耳を澄ました。会話や人の気配がなく、ただ激しい機械の音だけが響いている。ドアを開こうか、鉢合わせたら？等、様々なことを考えていたロイルの背後から、ひたひたと足音が近づく。しかし向こうの部屋の音に意識を集中させていたロイルは、背後の人物に気がつかなかった。すり、と布擦れの音が耳に届いたときにはもう遅く、ロイルがすばやく振り返った瞬間、何者かによってロイルは頭を強打されて、そのまま意識を失った。

レニは、リネン室から続く業務用通路を伝い、作業員の服を拝借して船内を歩いていた。

容姿端麗で、一度見ればすぐ気づかれてしまうレニは、深く作業用帽子を被り、髪は一つに束ねてわざと傷んでいるように見せて歩き出した。一見すれば表情も見えず、猫背を意識していたので、陰気な青年である印象を受けた。

そして、船内の見取り図を広げて、ポーマンが宿泊している一等の部屋を探していた。

途中、すれ違った船員に、新人でよく分からないなど嘘をつき、清掃道具を手に入れたレニは、清掃員よろしく他の部屋を掃除してまわり、他の人間へ不信感など抱かせぬような完璧な変装を見せていた。そして、ポーマンの部屋に立ち止まったレニは、咳払い一つ、しゃがれた声で告げた。

「清掃員の者です、失礼してもよろしいでしょうか」

ポーマンの返答は無かった。部屋に居るのは明確だったが、清掃員

が疎ましいのか、返事をしようとしな。レニは少し待ってから、続ける。

「備え付けの浴室のお掃除だけですの、お手間は取らせません…」

レニの折れない態度に参ったのか、従者にドアを開かせたボーマンは、面倒そうにレニを見遣った。

「そんなに金に困っているのか知らんが、私はお前のような者にやる金を持っておらんてな、チップをねだるならもつといい身なりでやってこい」

レニは深々と頭を下げ、低い腰でいそいそと浴室へ引つ込んだ。ボーマンは鼻でその姿を笑うと、向かい合った客人に謝罪を述べた。

「話の腰を折ってすまない。それで、アレはどう扱ったらいいかね？」

レニはじつと壁にもとれかかり、音声を録音する装置を起動させた。ボーマンの客人はいやに耳障りな甲高い声で返した。

「どうぞ、お好きに。アレは兵器としての扱いばかりか、生活にも役立ちますゆえ…ただし、それが人間ではないと周りに公言してはなりません。いらぬ…混乱を招きますゆえ…」

「おお、承知している。精巧で、とても人形だとはだれも気づかないのであるう？ならば問題ない」

「オホホ、使い方を間違いませぬよう、ご注意めされませ」

レニはうつすらと口元に笑みを浮かべて機械を止めた。そして、清掃用具を片手に、不審がられる事がないように清掃を始めた。もと

もと清掃が行き届いた一等の豪華な浴室はそんなに手を加えなくとも、綺麗になった。レニは清掃用のカートを押し、浴室を出ようと再び帽子を目深く被る。すると、退室しようとしたレニを、ボーマンが止めた。

「お前、その帽子、取ってみろ」

レニは足を止めた。嫌な汗が伝う。ボーマンは中々従わないレニを不審がってますます帽子を取るようにレニへと要求をした。

「どうした、お前の従い方しだいによっては、チップをくれてやらんでもない、さあ取れ」

「…先を急ぎますゆえ…」

「何？いいから取れ、無礼な男め、ますますその憎らしい顔が気になるわ」

ボーマンが椅子から立ち上がり、こちらへと向かった。レニは緊張から、ぐっと拳を握り締め、護身用に携えた銃の場所をゆるく触った。するとそんなレニを救うように、一人の若い従者が、ボーマンの部屋に飛び込んできた。

「ボーマン様、怪しげな少年を捕獲しました。」

「…何？フン、お前はもう出てよい、おい、その小僧を連れてこい」

レニは鋭くその少年という言葉に反応して振り向いたが、そのまま頭を下げ、ボーマンの部屋を後にした。清掃カートから隠していた機械を取り出し、清掃員の服を脱ぎ捨てたレニは、カートを隅の方に隠して、ボーマンの部屋の方角へと振り返った。

「嫌な予感がする…急いで合流しなければ…」

レニは髪を解いて、緩んだタイを結びなおした。美しい貴族の出で立ちに戻ったレニが向かった先はポーマンの部屋とは反対方向の、食材庫。急ぐようにその足はすばやく赤い絨毯が敷かれた廊下を駆けていった。

三話

ロイルは全身に冷水を叩きつけられて目を覚ました。大理石の床の隙間に水が伝ってゆくのを嫌そうに見下ろしたボーマンは、その視線を上げ、蒼穹の瞳を見据えた。

「貴様、あんな乗客が立ち入り禁止の場所で何をしていた？」

ロイルは少し考えるように俯いた。ボーマンは突き出た己の腹を撫で、空いた手で口ひげを落ち着きなく触る。以後もロイルは答えず、従者はもう一度ロイルに水をかけた。

ロイルはやがて俯いていた顔を上げてボーマンを怯えた表情で見上げた。

「や、止めてください…！何をするんです？ただ僕は道に迷ってあの部屋に…」

「部屋にはリネン室と書かれていたそうだが…お前は道に迷ったのか？」

「だ、だってそこなら船員さんがいると思って部屋を聞こうと…本当です、信じてください！」

かたかたと寒さか恐れか分からない震えをあげるロイルを見つめて、ボーマンは舌打ちをした。まだ幼さが残るその恐れた表情は全く何も知らないのは明確だった。しかしながらこんな粗い手を使っておいておめおめロイルを返してやるわけにもいかず、ボーマンはソファーに体を預けて大きくため息をついた。

「もういい、おい、こいつをどこかに閉じ込めて置け」

「な、何故！僕は何も知りません！お願いだから部屋に返して下さい！」

「うるさい、私がお前を脅したと知れては困る。殺さずにせよ、口止めはせねばなるまい」

「助けてください、ほ、ぼくは、ぼくはどうしたら」

ぐずぐずとしまいは泣き出してしまったロイルを二人の従者が無理やり立ち上がらせてポーマンの部屋から連れ出していった。ポーマンは嘲笑してずぶぬれで泣き叫ぶロイルを見つめた。

まだ乾かない大理石の床にベッドのシーツを叩き付けたポーマンは、愉快そうにそのシーツを踏みにじった。

「私にもそういう趣味があったなら、まあもう少しで帰れたものだな。仕方あるまい、痛い目をみて泣きながら帰るんだな」

ロイルは去り際、わんわんと泣き叫ぶのをほんの一瞬やめて、氷のような鋭い眼差しでポーマンを睨んだ。しかし、ポーマンが気づくはずもなく、ずりずりと引きずられるように、ロイルはポーマンの部屋を後にした。

ロイルは自分を引きずってきた従者二人を叩きのめし、濡れた服を脱ぎ捨て、従者の燕尾服を拝借した。それは部屋を出てまもなくのことであったが、ポーマンに気づかれては少し面倒そうだと悟ったロイルは、気絶した従者を先ほどのリネン室に押し込み反対側から物で出口を塞いで閉じ込めておくことにした。濡れた髪をかきあげてポーマンの部屋を睨んだロイルは、ポーマンが何故神経質に自分を拷問したのか考え、腕を組んだ。

（何か悟られては困るものがあるのか…あのリネン室の奥にもたいしたものはない…とするとこの船に薬でも乗せている…？となれば荷物を載せた所が怪しいが…）

ぎり、と歯を噛み、ロイルは表情を堅くする。

（しかしこの僕にこんな仕打ちをしてくれたんだ…お礼をしなければ気が済むものか…）

ロイルは腕をたくしあげ、大いに燕尾服を着崩してボーマンを泳がせるべく、周辺の調査に回った。

時刻は深夜。ダンスパーティーも終局を見せ、いよいよマグダリアの夜が、終わろうとしていた。

「ボーマン子爵について？」

ロイルは薄く笑みを浮かべ、ダンスから帰った若い婦人の細い指先を取って頷いた。

すっかり夜の雰囲気を楽しんできたのか、ロイルに魅せられているのか。婦人の頬は紅潮し、話を聞くのは容易いことだった。婦人は赤ら顔を隠すためか扇を口元に持っていくと、しずしず答えた。

「あのお方、なんでも軍からお依頼を受けて裏では色々、危ないことをしていらつしやるのか」

「軍からの…依頼？」

「ええ、そう。あの方のお兄様が軍師でいらして…なんでもわが国

の兵器とかを無断で…: ですか? ご拝借なさる取引をされているとか
…: まあお噂でしてよ?」

ロイルは眉根を寄せた。それが本当なら、隣国に向かうこのマグダ
リアを兵器の密輸入に使用しているのがボーマンの目的であるのは
明確。恐らくボーマンは抜けた男のようで、子供一人がうるうるし
ていても気が立つのかこうしてロイルが捕らわれてしまったのだろ
う。

ロイルは、ボーマンと話していた男が兵器の輸入に関してなんらか
の関与をしていると見て、確信をつけた。これ以上はこの婦人から
なんの情報も得られないと思ったロイルは、婦人のなめらかな手を
撫でるのをやめ、そっと耳に囁く。

「…: 後で…: あなたさまのお部屋にお伺いしても…: ?」

「…: ま、まあ…: よろしくつてよ…: 部屋は202…: いつでもいらして
頂戴」

そう喜ぶ婦人が踵を返すのを、ロイルは面倒そうに見つめた。何度
も振り返ってアピールを繰り返す婦人に手を振り、見えなくなつて
からロイルは再びボーマンの部屋を目指した。

「事情が分かってしまえばこちらのもの…: 覚悟しておけ、ボーマン
…:」

三話（後書き）

ロイルの処世術がすごくなってきました…。演技しすぎですね…。

四話

レニは、食材が積まれた倉庫で木箱の蓋を延々と開き続ける作業に追われていた。ポーマンそして人形を売りつけたあの甲高い声をした男、ジェインの目論見に当初から気がついていたレニは、食事の際、孤児院に貢献しているというポーマンを褒めながら、貴族の家庭教師をしているのだと言って近づいた。しかし、いざ鎌をかけてみればすぐさま激昂し、それが何よりレニの確信を深いものとした。どこかに人形を隠した場所があると思い、様々な場所をこっそりと覗いてみていたもののマグダリアは広く、その見取り図を見てもなかなか人形が見つからなかった。

まさに密輸入にはもってこいの船といえよう。あらかた野菜やチーズが詰まった木箱を除いてみたが、見つからない。いい加減少年を助けるべきかと立ち上がった瞬間、出口から話し声がしてレニはすばやく身を潜めた。

「しかし、なんだってアレの確認をさせるんだ？何かあったのか？」
「なんでも、少年がうろろうろしていて捕まったらしい。ねずみ一匹にぎゃあぎゃああと……」

「用心深いというか、小心者というか……だな」

どうやらやってきたのはポーマンの手先らしく、愚痴をこぼしながら食材庫の出口の階段を降りている。レニは見つからないようにそっと背後にまわり、二人の様子を伺った。

二人のスーツ姿の男は、隅に寄せられた木箱をずらし、その下の小さな扉を開いた。レニはそこへ入っていきこうとする二人を気絶させ、薄暗く広がる地下通路を眺めた。

「きつと小心者なんですよ、間抜けでね」

そう、もう答えない男に告げて、レニは通路へと降りていった。

ボーマンは命乞いをして、先ほど己が踏みつけたシートに顔を沈めて何度も頭を下げていた。

ロイルは片方の刀をしまい、その日本刀の切っ先を向けたまま、ボーマンを見下し、鼻を鳴らした。

「まあよくもこんなに弱いボディーガードで密輸入なんてしてこれたな。」

傍らでうめき声をあげるボディーガードをちらりと一瞥して、ロイルはボーマンの醜い巨体を蹴り上げてほくそ笑んだ。ボーマンは大げさに悲鳴をあげて転がると、再びかたかたと震えて命乞いを始めた。

「たたた、頼む、助けてくれ！そ、そうだ、ボディーガードにしてやる！いくらだ、いくら出せば……」

ロイルは汚いものを見る目つきでボーマンを睨むと、再びブーツの先で軽くボーマンをどついた。それだけでもう死にそうな声を上げたボーマンは謝罪し、ロイルのブーツにしがみついた。

「すまない、し、死にたくない！乗せている兵器ならいくらでもやるから、た、たすけてくれえ！」

「ええい、寄るな気色悪い！」

ロイルはすがりついてきたボーマンを払い、しゃがみこむとその胸倉をつかんでイライラとした口調で尋ねた。

「おい、この船に乗せた兵器は何だ？銃か？刀か？」

「お、オートマタだ……」

「……な、何だと!？」

ロイルは思わずボーマンを突き放して血相を変えた。レイディアンが自分に乗せていた理由を改めて知り、ロイルは焦ってボーマンを再び掴んで揺さ振った。

「おい！それはどこにある!？言え！」

「しょ、食材庫の……りんご箱の下……階段がある。その先だ……」

「チツ！」

ロイルはボーマンを離して、部屋を出るべく、走り出した。しかしそれはボーマンの両手によってさえぎられ、ロイルは大きくバランスを崩して倒れ込んだ。

「なっ！」

「……行かせるか……アレさえあれば私は……忌まわしい兄に馬鹿にされることは……ない！」

両足に絡みつくボーマンの太い両手を払おうともがいたロイルだったが虚しく、ボーマンの力に勝てないロイルはそのまま両足を椅子

の足に括り付けられ、身動きが取れなくなった。
ロイルは出口へ走っていくボーマンへ叫ぶ。

「くそ、おい、まで…！ボーマン！」

「見ている…私を虚仮にしたこと…後悔させてやるわ…」

そう言っ出て行ってしまったボーマンを追うべく、うつ伏せだった体制を整えて刀でロープを切る。手形がまざまざとあざになった両足を撫で、ロイルは焦燥した。

「あいつまさか…人形を起動させようと…！」

そして自身もまた立ち上がって、ボーマンを追い、走り出した。

五話

レニは驚いて薄暗い地下を見つめた。

配管がのびた船内最下層のこの場所に積まれた人形の数は一度の戦争で軍隊を築けそうなほどであった。数体ならば回収しようと思っていたレニも、あまりの多さに驚き、ただ見つめていることしか出来なかった。両サイドの壁に飾りつけたかのような裸体の人形たちがぶらりとぶらさがっており、目は伏せられていたがその顔は皆違うもので、製造者の技術力が伺えた。

レニが唾然としてそれを見つめていると、背後から男が近づき、レニはすぐさまその気配に気がついて振り返った。

「この人形は、ソルワット様からじきじきに頂いた精鋭達だ…型は古いがいい働きをしてくれた」

男、ジェインはくつくつと不気味な笑みを浮かべ、ランタンを掲げた。その淡い炎に照らされたレニは、無表情でさして驚いた様子もなく返した。

「お前がジェイン・ダボット…。ソルワットは製造者だな？」

「ホホホ、まさかお前、レイディアンの…下らぬ組織だ。こんなに素晴らしい兵器を壊してしまおうとは」

ジェインはランタンを持った手とは反対の手でそつと人形に触れた。するとその人形の目に光が宿り、体を伸び縮みさせると地面に降り立った。

「さあ行け、あの若者の目を覚まさせてやるのだ…」

レニは眉を寄せて、足に隠していた銃を取り出して構えた。骨ばったジェインの頬が緩み、ジェインはいやらしい笑みを浮かべてレニを指差した。

「そして殺せ。お前の価値の分からぬものを、生かしてはおけぬ」

そうして人形が飛び掛り、レニは銃の引き金を引いた。痛みを知らない人形は基本攻撃を避けたりしないが、高い戦闘プログラムをされた兵器用の人形はすばやくレニが撃った三発の弾丸を避けてレニを殴りつけた。レニは体制を崩して受身を取り、さらにもう二発弾丸を撃つ。一発は人形の頭部を損傷させ、残り一発は避けられてしまった。

人形がもう一度レニを殴りつけようと拳を挙げた瞬間、野太く大きな悲鳴が地下を駆け巡った。

「ジェイン！ジェイン！」

ジェインは人形を止め、側へと引き戻した。すばやく後退してレニから離れた人形は、ジェインの背中にぴったりとつき、命令を聞いた。

「今やってくる男を…」

「ジェイン！助けてくれ！感ずかれた！変な少年に…どうしたら…」
「殺せ」

人形は狼狽したポーマンに駆け出した。

何も知らないポーマンはジェインにすがろうと両手を広げ、刹那、ポーマンの視界に人形が写った瞬間、激しい金属音が交わり、ポーマンはすっかり腰を抜かして倒れ込んだ。

「くそつ、貴様が人形を仲介していた男か！」

ロイルは刀で人形の一撃を止め、反対の刀で反撃して人形は大きくのけぞった。その短い時間を突き、人形を大破させたロイルは、奥で銃を構えたままのレニを見つけて、目を見開いた。

「お前は夜に部屋であった…！」

「ひいい、死にたくない！助けてくれ！」

「…！」

混乱したボーマンが足にすがりつく。新しい人形を数体起動させたジエインは、不気味に微笑んでまるで劇でもみているように手を叩いた。ロイルは襲い来る人形たちを捉えてボーマンを後ろ足で蹴り上げ、刀を振り下ろした。すると銃の援護で倒れた数体がロイルの足元を転がり、ロイルは不審がって顔を上げた。レニはすばやくロイルの側により、弾を充填するとロイルを見つめて笑顔を浮かべた。

「私はレニ・オズボーン。レイディアンでは少尉を務めています」

「なっ、じゃあお前が落ち合う予定だった？！」

「はい、詳しいことは後で！」

掴みかかる人形を取っては捨て、取っては捨て。

それを繰り返して、ジエインは愉快そうに笑う。

「そうだ！そうだもつと殺しあえ…！あは、あっはははは！」

「チツ、気色が悪い！オズボーン、僕が合図したら銃を撃て」

「えっ？」

「いいから、！」

ロイルは急にしゃがみこみ、人形の下をくぐるように大破させると、すばやくジェインの間を詰めた。新たに人形を起動させようと手を伸ばしたジェインを守る人形に蹴りを食らわして、ロイルは声を上げた。

「今だ！手を撃ちぬけ」

バツン、と鋭い音が鳴り響き、人形の頭上ぎりぎりを掠めた弾丸は、ジェインの手のひらを貫通して血しぶきをあげた。甲高く悲鳴を上げたジェインは手からランタンを落として背中から倒れた。

「ぎゃあああああ！」

蹴りを入れた人形を殲滅したロイルは人形ごとジェインを蹴り、ランタンの炎を消した。ジェインは痛みにした打ち回り、悲鳴はやがて、恍惚とした笑いに変わっていった。

「あはははははははははは、アハ、アハツはハハハ！」

ロイルが不気味さにやや驚いて後ずさりをした。地を虫のように這い、何がそんなに可笑しいのか尚も笑い続けたジェインはやがて、口からあわを吹いて、そのまま声が聞こえなくなるまで笑い、事切れた。

ごとりと、と動かなくなったジェインを見下ろして、不気味さから身震いしたロイルはレニを見遣り、眉を寄せた。

「銃で手のひらを撃ち抜かれて死んだ奴は初めて見たぞ……」

「……ええ、私もですよ」

「……さて、ポーマン。お前、こんなものをみてまだ人形で僕たちに

歯向かうか？さあ、今考えろ」

ポーマンは即座に青ざめた顔で首を振り、死んでしまったジェインを一瞥して許しを請うた。

「捕まったっていい、死にたくない…どうか助けてくれ」

ロイルは満足そうに鼻を鳴らして返した。

「どれ、許してやるっ」

と。

やがて、船内に戻ったロイルはポーマンを拘束して改めて自分のサイズに合った服に着替えてポーマンの部屋を搜索した。中には隣国に持ち込む予定だった自国の兵器のリストや、銃などの他の兵器なども見つかり、ロイルは呆れてため息をついた。

レニは拘束したポーマンから丁寧に情報を引き出し、時たま脅したりして楽しそうに会話をしていた。ロイルはそんなレニに振り返り、側に寄った。

「今日は助かった。アイリーンからお前のことを聞いていなくて…お前が仲介者だと疑った、すまない」

「いえ、それよりお名前を伺ってませんでした。お名前は？」

「ロイル…ヴァン・ハーゲンだ。」

「そうですか。私のことはレニとお呼びください、ロイルさん」

ロイルは薄く笑って、レニと握手をした。
そしてその細くて白い指先を眺めて、ロイルはふと、嫌なことを思い出して顔をしかめた。

「…どうかしましたか？」

「…あ、いや…情報を引き出した婦人をだましたまま…来てしまったなあ…」

「それはそれは…ロイルさんもお若いながら…ですね…」

「…うるさい！面倒なことになる前にさっさと降りるぞオズ…いや、レニ」

レニはふつと目をほころばせて微笑んだ。

「ええ、ロイルさん」

そしてこの任務の後、彼らはパートナーとして歩き出した。
大きな運命と、必然の元に…。

第七章 殺人鬼X

ロイルの状態は悪かった。傷は浅かったが、出血量が多かったため輸血を必要とする重傷だった。ドーナは人払いをしてロイルの手術を行い、輸血は血のつながりはなかったがランガーの血液で行うこととなった。ランガーの部屋から追い出されたレニは、血だらけの服で彼自身も患者だったため運ばれていかれ、部屋前には不安そうに祈るマリアとトレストウエの姿があった。

「どうということなの？一体誰がロイルを…」

「空軍のやつよきつと…許さない…無事でいて…ロイル…！」

ランガーは少なからず動揺していた。深緑の制服はすっかり酸化した黒に変わった血液で染まり、呼吸は浅く今にも途切れてしまいそうだった。ドーナはロイルの腹部の傷を縫い、輸血最中のランガーに振り返った。

「ちょっと…アンタこの胸の傷…」

「……………」

「アンタ知らないわけないわよね？これってもしかして…」

「…いいから今は腹部に集中してくれ…」

「この子…こんなに辛い人生を歩んできていたなんて…不憫ね…」

上着を取ったロイルの胸には、血管が浮き出たような無数の管が伸びた傷があった。その中心は盛り上がり、まるで心臓が浮き出ているかのように脈打っていた。その傷を発見したドーナは思わず目を逸らして、ロイルが着ていた上着を被せて作業を再開させた。

ランガーはロイルを一瞥して、深くソファアへ体を沈める。

ロイルの手術が終わったのはそれから二時間後のことだった。

「ロイル！」

二十階のロイルの私室には、トレストウーヴェ、マリア、それと無理をして医務室から出てきたレニの姿があった。数日全く目を覚まさなかったロイルはようやくその両目をしっかりと開いて、鈍く痛む体で起き上がった。意識を取り戻したことを聞いて駆けつけていた三人には安堵の表情が浮かび、トレストウーヴェはロイルに抱きついてむせび泣いた。

「よかった…もう目を覚まさなかったらって…！」

「トレストウーヴェ…」

ロイルは辺りを見渡して自分がどこにいるのか確かめると、自嘲して薄く笑った。

「生きていたか…」

「よかったロイル…心配したのよ」

「ええ、無事でよかったです…ロイルさん」

ロイルはふとレニの顔を見つめて怪訝そうな顔をした。そしてフン、と不機嫌そうに鼻をならしてトレストウーヴェを押しつけたロイルは、寝返りをうってレニ達に背中を向いて黙ってしまった。

トレストウーヴェはまだ傷が癒えないのかとロイルの側から離れて、その細い背中を寂しげに眺めた。

「何か食べ物でも…数日点滴だけでしたし…」

「構わん…一人にしてくれ…」

「ですがロイルさん…」

レニはそつとその背中に触れようと、手を伸ばした。その指先が触れるか否かの瞬間、電撃が走ったように大きく震えたロイルは飛び上がり、レニを睨みつけて荒い息で返した。

「ぼ…僕に触れるな…ダリウス…！」

レニは驚いて手を引いた。

マリアやトレストウーヴェは突然錯乱したロイルに驚き、ロイル自身驚いたように口を押さえてベッドの隅からレニを見つめた。

「…ぼくは…今なんて…？」

レニは数秒間険しい顔をしていたが、やがて落ち着いたロイルを横たわらせて毛布を掛けた。

トレストウーヴェはおろおろとその様子を見つめていたが、レニはいつも通り微笑み、ロイルに向かった。

「…少しお疲れのようです。誰かと間違えたんでしょう。私達ももう出て行くとします。何か欲しい物は？」

「…ない」

「そうですか。ではお大事に」

レニはそう言って踵を返してロイルの部屋を後にした。戸惑ったトレストウーヴェとマリアもロイルに別れを告げ、部屋を出る。一人

きりになった室内で、ロイルは胸に渦巻く奇妙な感覚に、苦しげに呻いた。

「ダリウス…ダリウス…誰だ思い出せない…だけど僕は…そいつを知っている…」

交差する記憶を懸命に思い出そうとするロイルは去り行くレニの表情を思い出して、また苦い顔をした。そして何より、自分の腹に大きな穴をあけて、コアそして空軍と共に去ったかつての親友を思い出して、唇を強くかみ締めた。

「ヴァレス…何故…」

リックは、敵に刺されたというロイルの話聞き、ルイスに断りを入れてロイルの私室へと赴いていた。もちろんルイスはいい顔をしなかったが、ほんの少し時間をもらって

リックは前に訪れた菓子店で菓子を購入して二十階を目指した。

街はどこも慌しく壊されてしまった家屋の修理や復興に忙しそうに動き回っていた。リックはそんな現状を見て改めて空軍の突然の奇襲がなんだったのかを考えた。

もともと、陸軍だったランガーとアイリーンが創立したという分隊でここまで大きくなったのも一連の人形騒動があったからだという。やがてエレベーターは二十階にたどり着き、リックは深く深呼吸した。

「あの、少佐のご容態はどうですか？」

「ああ、この前の二等兵か。それが今誰とも会おうとなさらないんだ、悪いが面会はできない」

「そう…ですか」

リックは驚いて目を見開いた。

あのロイルが面会すら出来ないほど何かあったのかと心配すらなかった。

リックは菓子を門番に渡して二十階を後にした。

あれから、ヴァレスの姿も見当たらないし、訓練にはデンがいなくなった。

こここの所、落ち着きなくばたばたとしていた為、気にはしていたものの誰に聞くわけでもなかったリックは、ロイルのことといい腑に

落ちないことばかりだった。

訓練まで時間があつたため、ふらりと再び町に降りたリックは、もしかしたらフラッグにヴァレスが顔を出しているかもしれないと勘を頼りにフラッグを訪れた。

しかしそこにいたのはヴァレスではなく、意外な人物だった。

「ろ、ロイルくん！」

先ほど部屋を訪れた時、面会謝絶と言い切られたロイルの姿がそこにあつた。

顔より大きくて長細いパフェをぼんやり食べていたロイルは名を呼ばれてこれもまたぼんやりと振り返った。リックはロイルに急いで駆けていくと間髪入れずに質問を次々浴びせた。

「どうしてここに？さっき君の部屋に行ったら会えなくて…それよりどうしたの？怪我したって聞いたけど…あとヴァレスとデンがいなくなつて…何か知らないかい？」

ロイルはややうつろな目でリックを見ていたが、何を言うでもなくまたパフェに没頭し始めた。

リックは見事に全ての質問をスルーされてしまい、肩透かしを食らつてしばらくその様を眺めていたが、やがて落ち着いた声で尋ねる。

「…何があつたの？」

ロイルはそつとパフェ用の長細いスプーンを脇に置いて、か細い声で話し出した。

それは頼りない声で、とても以前のロイルが出すような声とは思えないほどだった。

「ヴァレスがレイディアンを裏切って…空軍と共にコアを奪って去っていった」

「えっ？」

リックはまるでロイルが何を言っているのかさっぱり理解できず、頭が真っ白になるのを感じた。再びロイルが言ったことを何度も反芻しながら、恐る恐る復唱した。

「…ヴァレスが…裏切った…？あのヴァレスが？」

「そうだ、あのヴァレス・ブラックモアが僕の腹に風穴を作って逃げていったんだ」

「嘘だ！」

カン、と高い音が鳴り響いてスプーンは床をバウンドした。

思わず叩き落してしまったリックは、今にも泣き出しそうな顔でロイルの肩を掴んで

もう一度尋ねる。

「嘘だろ？ロイル…くん…あのヴァレスが…どうして裏切る必要が…」

「嘘なものかじゃあこの腹の穴は誰が空けたんだ？僕が？ひとりだけで腹に穴が空くのかお前は！」

リックは思わず手を離した。

それはロイルが何倍も自分より悲惨な声で、酷く悲しげな顔で、リックを見上げたからであった。

リックはようやくそれが真実だと分かり、力なく椅子に座ると頂垂れたロイルを見遣った。

傷が痛んだのか横腹を押さえるロイルに申し訳なさがこみ上げる。

ロイルは続けた。

「バークホークは最初から人形組織のスパイだったらしい…僕と任務を共にした時製造者の弟と姿を消した…」

「なん…で…デンまで…」

「…僕はもう…何を信じたらいいのか…分からない…」

リックはロイルが食べていたパフェを見つめた。つい先日、自身も口にしたロイル発案の大きなパフェ。

ここはロイルとヴァレスの行きつけの店だったとヴェレスから聞いたのは本当だったらしい。

きつとヴァレスのことを想いながらこの店に足を運んだのだろうと思うと、リックは胸が痛んだ。

そしてこれ以上なんと声をかけていいか分からず、リックは椅子から立ち上がってロイルに背を向けた。

「その…ロイルくんの部屋にお見舞いに行ったんだ…会えなかったからお菓子を門番の兵に渡してあるから…」

ロイルは答えない。リックは戸口まで歩いていき、振り返る。

「…じゃあ…ね…」

「…待て…ウイーゲル…」

「えっ？」

「…見せたいものがある…」

ロイルは重々しく口を開くと、パフェの代金をカウンターに置いて彼もまた立ち上がった。

そしてゆっくりと戸口へと向かうと、リックの側で足を止めた。

「そして…僕は聞きたいことがある奴がいる。…一緒についてこい。」

「このアクアドームの教会へ」

三話

教会はミサを終えて人々の姿はまばらだった。入ってすぐ目に付く大きなパイプオルガンがステンドグラスの様々な色を受けて輝いている。信者がゆっくりと目を閉じて祈る様子を横目に、つかつかとヒールを鳴らして教会の中央にやってきたロイルは、神へ祈りを捧げる一人のシスターの前で立ち止まった。

シスター・ケイはそんなロイル達に気づいてそっと立ち上がって複雑さそうな表情で振り返った。

「ロイルさん……」

「ケイ、聞きたいことがある。僕をセイラの場所まで案内してくれないか」

「……はい」

リックはケイと面識あったため、驚いて彼女を見つめていた。

シスター服の下の憂いた表情はかつてヴァレスと冗談を言い合っていたような面影はない。ケイはリックに軽い会釈だけ済ますと、案内するべく歩き出した。

一体どうして教会へ連れて来ようと思ったのか尋ねようとも、先を歩く二人の奇妙な雰囲気それを拒んでいるかのように思えて聞けなかった。

そしてケイとあった時のことをぼんやりかみ締めてリックは苦い顔をして俯くのだった。

連れてこられたのは不思議な空間だった。

ガラスケースが一つの個室のように連なった廊下が延々と続いてい

る。

そしてそのガラスケース全てにはぎっしりと詰められた花などと共に、目を閉じて全く動かない人形が立つたまま飾られているように収まっている。

リックはその下に刻まれた黄金のプレートをたどたくどしく読み上げた。

「…マイク・スピネルここに眠る…？」

「これは故人の墓だ、ウィーゲル」

「ええっ?!」

リックは思わずロイルの顔を見遣った。

ロイルはそんなリックを鼻で笑って、歩き出す。

「生前の美しさを永遠に残した棺が何千、何万と並んでいる。それはすべて人形と関わって死んだ者達だ。皮肉にも、その遺体を包んでいるのは葬儀屋が作った人形だがな」

「こんなに…沢山」

少し歩いた所で、ロイルは突然足を止めた。

リックもつられてロイルが見上げるガラスケースの棺に納められた少女を見上げて、ハッと息を飲んだ。その下のプレートにはマリル・アトキンズここに眠ると刻まれていた。

「僕はここで何度あのをときを思ったのか知れない。それはきつと、ヴァレスも同じだっただろうよ…彼女を包む花の数が物語っている

…」

「…ロイルくん」

マリルの遺体は、人形に包まれた顔だけを残して全て真新しい花で

埋め尽くされていた。まるで花卉の布団で眠っているだけのように見える、少女の穏やかな表情。

リックはロイルが任務後は墓参りに訪れると聞いていたが、ロイルが言うようにたった一人のものではないだろう花の数だった。

「セイラさんのお墓はこちらです」

それから少し歩いて、見上げたセイラという少女の姿を見て、リックは再び驚いた。

それは軍服のポケットの中に入っていた、何度も見てくしゃくしゃだったヴァレスの写真の少女。写真はモノクロで分からなかったが、その少女は鮮やかな真紅の髪を編み込んで、幼さの残る表情で笑っていた。墓場の他の人形は全て目を閉じたものだったのにも関わらず、この少女だけ、写真と違わぬ眩しい笑顔を見せていた。

ロイルはケイへ尋ねる。

「この子がここに運ばれてきたのはいつだ…」

「それは…」

「言え。大事なことなんだ」

「ロイルさんがやってくる、ほんの一週間前です…」

ロイルは、それを聞き、大きく頂垂れそつとセイラの微笑むガラスケースに額を寄せ、呟く。

「だとしたら…僕は…本当に君を殺したのか…セイラ…」

「えっ…?」

静寂が周りの人の声を掻き消すように広がった。その静寂はもしかしたらこの三人にのみ訪れた幻想だったのかもしれない。それでも一瞬、凍りつくような空気が流れて、ロイルは両手を組んで悲痛な

声で告げた。

「だけど…僕は何一つ…覚えていないんだ…」

それはまるで誰かに宛てたような言葉だった。セイラに宛てられたのか、はたまたヴァレスだったのか、それはロイルにしか分からないこと。

リックは小さな疑問を抱えつつ、それをそつと頭の隅へと追いやるのだった。

四話

墓地は悲しむ人で溢れていた。セイラへ手向ける花を買いに言ったロイルを待つ為、墓地のベンチで座っていたリックは居心地の悪さを感じていた。

運ばれてきたばかりの棺にもたれかかってむせび泣く家族を見てみると、心が動揺して目を逸らさせた。かつて自分の両親が亡くなったときも、リックはああして泣いた記憶があったからだ。

ケイはそんな墓地の片隅で俯いたリックの背中を撫で、柔らかな笑顔を見せた。

「お辛いでしょうね…」

「えっ？」

「君も、ご家族を人形の暴走で亡くされていると伺いました…」

「そう…ですか…はい…両親は人形の手にかかれて死にました…でも今はあんなに憎かったし悔しかったのに…なんだかぼんやりしているんです…今墓地をみてハツとしたぐらいで…」

「そういうものなんでしょうね…墓地を頻繁に訪れる方はそうそういませんから…ただ…皆さんがそうだとは限らないだけで…きっとまだ憎しみが忘れられない方だっています…」

リックはヴァレスを咄嗟に思い浮かべた。空軍と何故か去ったというヴァレスは一体何故ロイルに深手を負わせていなくなったのだろうと考えた。

ロイルはヴァレスの妹の墓で、死なせてしまったと聞いていたが二人の間に何があったのかさっぱり掴めない。そしてロイル自身もそ

うであるのだろうと先ほどの墓地でリックは思った。
レイディアンに来る前の彼が何者で、誰と関わりがあったのだろうか。

ケイはふと誰かを見つけて立ち上がった。

リックはケイの視線を追うようにさっと視線をさ迷わせると、ベンチに向かってくる一人の女性を見つけてもう一度ケイを見つめた。
ケイは女性に近づくと、驚いたように述べた。

「シャルロット！あなたどうして…」

シャルロットと呼ばれた女性はケイとリック交互に見つめて、銀の縁がついた眼鏡を押し上げた。

「…デート中だったかしら？そうであったならごめんなさいね」

「馬鹿なことを言わないで！シスターは恋愛なんてしません！」

「あ、そう。つまらない女ね、相変わらず」

リックは一人ついてゆけず、おろおろとケイを見上げた。

「あ、リックさん…この子は私の妹でシャルロット。墓地の管轄をさせているんです」

「墓守っていうのよ姉さん」

「いもうと…さん？」

シャルロットはケイとは似つかず、どちらかといえばアイリーンと姉妹だと言われれば納得するようなグラマスな体系をしていて、ウエーブされた金髪がとても魅力的な知的美人といったところだろう。黒髪で清楚なイメージを持つケイとは身長差もあって益々姉には見えな

ケイはキツとシャルロットを睨む。

「それはそうと、どうしたのですか？用事なら聞きますよ」

「それがね姉さん…少し込み入った話になるのだけど…」

そういつてシャルロットはちらりとリックを見遣った。リックは気まずい気持ちになったが、ケイは首を振って続けるように促した。

「彼はレイディアンの軍人です、言いなさい」

「実は…死体がね、一体無くなったのよ」

「何ですって?!一体誰の…!」

「セイラ・ブラックモアの死体が…ね」

ケイとリックは思わず顔を見合わせた。

このことに何の意味があるのかは知れなかったが、二人は今さっきまで見つめていた人形の中身が空っぽだったことを知り、そして更にリックはヴァレスの失踪した件も合わせて考えた。

ケイはリックの肩を叩いて焦ったように頼んだ。

「ロイルさんを連れてきてくれませんか…!」

ロイルはいつもの花屋でマリルの分も合わせて大量の花束を買い込んで路地を歩いていった。

頭の中は常に様々なことが思い浮かんで落ち着かずそれを振り払うのが精一杯だった。

両手に抱えた花が匂いたち、幾分かそのぐらつく心を癒していたが、ロイルはもう既に心身ともに疲弊しきっていた。

ロイルは教会へと帰る間、なるべくレイディアンの軍人に見つから

ないように狭い路地をすり抜けて歩いた。大怪我がまだ癒えていないというのにこのこと買物にでかけていると思われれば益々信用を失うばかりだ。孤高の道とはいえ、部下に慕われない生き様というのも中々ロイルには応えた。

花束で遮られた視界で道を歩いていたらロイルは、ふと足元になにかぶつかる衝撃を感じて下を見下ろした。

よく何かあるか見えなかったため、花束を一度下ろして確認するとそれは人だった。

驚いてロイルは屈み込んでその倒れた人物へ声を掛けた。

「お、おい、大丈夫か？」

しかし倒れていた男は絶命していた。

ロイルは何故こんな所に死体が転がっているのかと不審がつて辺りを見渡す。すると気づけばその路地の周りには数人も人間が倒れている。

ロイルは改めて最初に見つけた男を眺めた。頸動脈を叩き切られての即死であるのが伺えた。

となれば当然他殺で、ロイルは冷静に刀を取り、気配に身を研ぎ澄ます。

ゆっくりと倒れた人をよけながら歩いていくと、路地は突然途切れ行き止まりになった。そしてその下で俯いて座る小さな人物に、ロイルはそっと近づいて切っ先を向けた。

「立て、ここで何をしている」

その背中はどうやら子供だった。だがロイルは空軍の奇襲からどさくさで人形が進入した可能性も考えて刀は向けたまま、子供に尋ねる。子供はすすり泣いているのか小さなうめき声をあげたまま何も

言わない。

痺れを切らしたロイルがその肩を掴んで無理やり正面を向かせた。

「聞け、ここで一体何を…」

ロイルは振り返った子供の姿に驚き、子供から手を離した。

その両手は真っ赤に染まり、返り血で酷く臭った。

服まで血に漬かったように赤く、その片手には死人の内臓と思わしき肉塊が握られていた。

ロイルは思わず眉根を寄せてその子供を見遣った。

「貴様…！」

「ふふ…ふふふふ…。」

ロイルは刀を構えた。しかしそんなロイルには一遍の興味もないのか肉塊をついばんで子供は不気味に笑い声をあげるだけだった。ロイルはその不気味さから戦意喪失さえ感じたが、同時に身の危険も感じて強く刀を握り締めた。

「ふふ…同じ臭いがするね…僕と同じ臭いだ…」

「何を…」

「死人の…臭いが君からするよ…」

ロイルは子供が何か言い切る前に刀を振り下ろした。少年と思わしきその子供はさっとその一撃を避けて身軽にロイルを飛び越えると、ぺっと口から血と肉を吐いて体を屈めてロイルに突進した。

それはロイルの速さを超えたとしてつもない速さ。ロイルは腹に頭突きを食らって吐血を吐いた。

「うぐっ…！」

「お腹痛いんだ…？怪我してるんだね」

「貴様、人形か…？」

「違つよ、人間さ」

そして少年は容赦なくロイルに打撃を与える。ロイルは身を守りついに壁に追いやられて少年を睨んだ。ごとりと重い音がしてロイルの手から刀が落ちる。

少年は血がついた拳を払ってロイルを見据えた。

「少しはやれるかと思えばこれが…つまんないの」

「何が…目的でこんなことを…」

「ふふ…快樂だよ」

そして最後の拳がロイルへと向けられた。

五話

リックはロイルが寄った花屋で、店主からロイルがさきほど出たこと聞きロイルの姿を捜していた。教会にも一度帰ったみたがその姿は見つけられず、リックは何度も花屋から教会までの道のりを往復してロイルを捜した。

「ロイルくん？ロイルくん？」

呼んでも返事がない。あまり大きな声で呼ぶのも人の目があったて恥ずかしかった為、少し小声だったが。

そんなリックは細い路地から女性の悲鳴が聞こえて、足を止めた。なにかあったのかと駆け寄れば大勢の野次馬とむせび泣く女性の鳴き声、そして悲惨な現場が広がっていた。

「なっ！」

一面血の海が広がっている。レイディアンの軍人数名が遺体に布をかぶせて路地の清掃をしようと野次馬を払っていたが、その遺族らしき女性は布に包まれた遺体を抱いてわんわんと泣き叫んでいた。ふとリックはその側に落ちている花束を見つめて悪寒がするのを感じた。

視線を奥にやる。壁に広がった血の跡の下に、見慣れたロザリオを見つけた。

リックは思わず駆け出し、野次馬を押しつけて現場に入る。

「ウィーゲル！お前、何して…！」

「少佐の…少佐のロザリオが…！」

「えっ？」

レイディアンの軍人が困惑したように顔を見合わせて、その一人が落ちていたロザリオを拾い上げてリックに尋ねた。

「もしかしてこれか？」

リックは息が止まりそうになった。

そのロザリオは血に濡れて赤く染まり、ロザリオの装飾には血が溜まってしまっている。

リックはそれを握り締めて恐る恐る尋ねた。

「少佐：ハーゲン少佐の遺体は？」

「おいおい、そんなもんあるわけないだろ？あの鬼少佐の遺体があったら真っ先に気づいているぜ？」

何かあったのは間違いない。リックはドキドキと強く鳴り響く心臓の音に耳を塞いだ。

ロイルの姿はそれから、ぱったりと見えなくなってしまったのだ。

レニは報告を受けて、レイディアンの軍人を街の巡回に当たらせていた。

数日経った今でも、ロイルの姿はなく、ロイルの捜索はついに打ち切られた。あの事件から度々人が殺されることが相次いで、人々は見えぬ敵に怯えて以前の活気を無くした。

そして見えざる敵には未知なるXの名を与えられて殺人鬼Xと呼ばれた。

「レニ、どうしよう…ロイルが死んでいたら…」

「トレストウーヴェ…」

「だって、だってあんなに大怪我していたのよ？一体どこに行ったのよ…」

トレストウーヴェは不安から大きな瞳を揺らしてその両端には涙を浮かべていた。

巡回をしても殺人鬼の噂と被害は後を絶たず、ロイルの姿も無い。レイディアンではいなくなったロイルが犯人ではないかという声まであがり、彼女の不安を煽るばかりだった。

レニはそんなトレストウーヴェの背中を優しく撫で、柔らかく笑む。

「大丈夫。あの人はこんなことで死んだりしませんよ」

「ロイル…！うつつ…うつつ」

「取りあえず落ち着きましょう？お茶をお出ししますよ」

レニは窓の外を見遣った。

混乱が広がるアクアドーム内部は、今までの明るさを無くして澱んで見えるようだった。

空軍の突然の反乱やロイルの失踪。そして殺人鬼に消えたヴァレスとその妹の遺体。

全てが繋がらないまま、混乱はますます糸を絡ませるように広がっていくのだった。

第八章 美しき記憶

カミュは、以前の機能を取り戻して完全に修復された。

数日ろくに睡眠を取れなかったランガーはすっかり疲れ果てて眠り、カミュはそんなランガーの部屋の掃除などを行い、修復を感謝していた。マリアはロイルが失踪した連絡を受けて以来、落ち着きなくランガーの部屋を往復するばかりだった。

「腕の機能もばっちり〜ああ、やっぱり僕は訓練向きじゃないなあ〜」

「良かった…貴方がいないと出来ないこともあるのだもの…もうランガー様のことは気にしなくていいからお仕事に戻ってね」

「勿論だよマリア〜、マリアもそんなに気を落とさないで〜」

マリアは弱弱しくカミュに笑みを返した。

「おかしいわね…。私は人形…ロイルを心配するなんて故障かしら…」

「君は特殊型だからねえ…故障ではないと思うよ…?」

「そう…かしらね」

カミュはポケットからチューインガムを取り出し、噛み始めた。

勿論だがカミュには味覚などない。しかしガムは食べる、ということのいわば疑似体験が楽しめるお菓子であり、人形のカミュにとつてそれは娯楽のようなものだった。

ぷくっ、と広がったイチゴ味のガムはパチンと破裂してカミュの鼻元をべったりと汚した。

「まあロイルなら大丈夫。簡単に死なないよ〜」

「そうね、私も仕事に取り掛かるわ、ありがとう、カミュ」
「どういたしまして〜」

マリアは寝込んだランガーに薄い毛布を掛けた。

少し身じろぎしたランガーを見つめて、マリアは柔らかく微笑むのだった。

「話がある」

十数年前

研究室でまどろんでいたジュリアは、嫌に真面目な顔をした男を見上げて、ふっと微笑んだ。

その頬は真っ赤に紅潮し、いつもはポケットに突っ込んだままの両手を今日ばかりは片手を出して握るよう促していた。

ジュリアはその冷たい手のひらを両手で包み、男を見上げた。

「何かしら？ランガー？」

「そのっ、中庭に出て話さないか」

「ええ、いいわよ」

中庭は落ち葉で溢れていた。ブーツのヒールでその落ち葉を噛むように踏みつけながら

二人は中庭の中央、テラスにやってきた。

日差しは弱く、少し曇った秋の空。ランガーは落ち着きなく足を動

かしていた。

「寒くなってきたわね…」

「ああ」

「あなた、軍に入るまではとても幼くて女の子みtainな顔をしていたのにすっかり大人の顔ね」

「な、何がいいたい」

「別に？」

ジュリアはくすくすと笑んで白衣から両手を出して、赤くなった両手に息を吐いた。

ランガーはそんな両手を包み込み、唇を噛んでようやくこの一言をつむぎ出した。

「結婚…しないか？」

ジュリアは目を丸くして、やがて大げさなほど笑い始めた。

まさか笑われるとも思っていなかったランガーは慌ててジュリアに反論した。

「な、何故笑う！」

「だ、だって何の話しかと思えば…プロポーズだなんて…！普通こんな寒い枯れたテラスですることなの、あは、あはは！しかもしなにかけて！」

「ジュリア！」

「ふふ、ごめんなさいふふ、」

やがて少し拗ねたランガーを見つめて、ジュリアは笑うのをやめ、その額に自分の額を寄せた。

そして温かい声で返す。

「…嬉しいわ…ランガー」

「じゃ、じゃあ…」

「これから、よろしくね。旦那様」

ランガーは思わず強く、ジュリアを抱きしめた。ジュリアは少しおどけて笑っていたが、その両腕でランガーを包み返した。

「愛しているわ、ランガー」

一話

「聞いたでえ、ランガー。ジュリアと婚約を交わしたって」

いつものように、けだるげに白衣のポケットに両手を突っ込んでいたランガーは、呼び止められて振り返った。目じりに爽やかな笑顔を浮かべたその青年を見た途端、ランガーは眉根を寄せた。

「マーリス、帰っていたのかお前、アトリエに戻っていただろう」

「さつき馬車で。帰ってくるように頼まれたんや。ほんまに人遣いの荒い人やで、セイランさん。」

マーリスは大げさにため息をついてみせると、ランガーの背中を叩いて笑顔になった。

そして、ランガーの白衣から煙草を頂戴すると、近くのランプから火を貰って煙を燻らせた。

ランガーは突っ込まれた方のポケットに入った手を嫌そうに動かして、

マーリスを見上げた。

「セイラン…というのは、あの空軍の軍師か。確かお前の人形を兵器活用に目論んでいるだとか」

「その通り。あん人はそれだけに飽き足らず、あの研究を試用してみないかと持ちかけてきてな」

「なんだと？」

ランガーはマーリスを睨んだ。マーリスはただ肩をすくめて返す。

「勿論断ったけどな。あの研究はなんせ、人が一人死んでしもたん

「やからなあ」

マールリスは壁に煙草を押し付けて、吸殻を投げた。

ランガーは吸殻を黙って拾いあげると、背中を向けて何一つそれから発言しないマールリスを、
気まずい思いで見つめた。

「悪かった…」

「…なんの事？」

「お前の母親のこと、まだ気にしていたのだろう。俺も、あれから全く覚めない悪夢のようだった」

「ふふ、別に気にもせんよ。昔のことやろ？」

マールリスは普段通りの明るい声で返すと、そろそろと思い出したようにランガーに振り返る。

「メルデイスと一緒にまた暮らせるようになったんやで。ランガーにも会いたい言うとなわ」

「本当か…良かったじゃないか」

「あはは、ほんまにな」

愛想よく手のひらを振ったマールリスの背中を見つめて、ふとランガーは自分の眼帯に触れていることに気がついて手を離れた。遠い昔、彼との間にあつた脳裏から一ミリも離れない記憶がそうさせていた。ランガーは大きいため息をついて、彼が吸っていた煙草をぎゅっと握り締めるのだった。

ジュリアとランガーは、医薬品の研究をしていた。

中でもランガーは幼い頃からこの軍内の研究施設で様々な研究に携わっていた為天才と呼ばれ

その名は今も健在だった。ジュリアは二十歳の頃からこの研究室で働くようになり、三ほど離れたランガーの補佐をする毎日。自身の研究が実を結ばなかったのは残念に思っていたが、彼女はそれなりにこの生活に充実感を覚えていた。そして今日は、それをかみ締めるように、研究作業に没頭するランガーの横顔を眺めるジュリアの姿があった。

「ねえ、ランガー」

「…なんだ？トイレなら今のうちに行ってこい。俺はこの後会合があっ」

「子供が、できたのだけれど」

ランガーは素早くジュリアに振り返った。

とてつもない剣幕のランガーに圧倒されそうになりながら、ジュリアはもう一度言った。

「子供が、できたの」

ランガーは手に持っていたピンセットをこぼれ落として、人目をはばからずジュリアを抱きしめた。他の研究員からひやかしの口笛が巻き起こったが、お構い無しにランガーは小さな声で言った。

「ああ、愛している、ジュリア…！」

元々感情の起伏が薄いランガーがこんなに感激しているのはジュリアも初めて見る光景だった。そして嬉しさからその頬に温かい涙が伝う。

「私もよ、今とても幸せなの、ランガー」

ランガーは仕事が終わるとすぐさまジュリアを置いて買い物に出かけた。

その間二人に目立った会話はなかったが、ランガーがとても上機嫌であることは一目瞭然だった。

軽い足取りで出かけていったランガーを嬉しそうに見つめて、ジュリアはその背中に手を振った。

街は、冬の気配が漂っていた。

肌寒い中、コートの襟を立てて歩き出したランガーはシヨウウインドウに並べられて商品にぼんやりと視線を遣って、浮かれた自身の姿を確認した。

昔、とても償いきれない罪を作ってしまった自分が、こうして子供を授かったのはありがたいことだとランガーは思った。最初は浮かれて写っていた顔も

次第に沈んでゆく。

もしあの事がなければジュリアと出会った自分がいなかった。そう考えると複雑だった。

こんな罪人が一端の幸せを享受しているなど、果たして本当によかったのかと。

「ランガー？」

不意に、声を掛けられて振り返った。

視線を少し下げると、自分を呼んだ人物を見つけ出して、ランガーは視線を合わせてしゃがみ込んだ。

前髪ときつちり揃えられたおかつぱ頭の金髪。その前髪に少し隠されていた大きな青色が姿を見せた。

「久しぶり！ランガー！」

「メルデイス…久しぶりだな、変わりないか？」

旧友、マーリスの弟であるメルデイス・ソルワットは大きく頷いて満面の笑みを見せた。

「お母さんが死んで、お兄ちゃんと離れ離れだったけど今度から暮らせるようになったんだ」

「ああ、マーリスに聞いたぞ。良かったな、また暮らせて」

「うん、今学校の帰りなんだけど、ピアノサボって来たからお兄ちゃんには内緒ね！」

「分かった」

ランガーはいつもは鬱陶しくも感じる子供の存在を少し違って感じられて、メルデイスの頭を撫でた。艶のある金糸がさらりと揺れて、メルデイスはくすぐったそうに笑った。

もし子供が男子であったなら、こんな利発な子が欲しいとランガーは思った。

そして試しに、こんな事を尋ねた。

「なあ、メルデイス。もしもお前に弟がいたなら、どんな名前にし

ていた？」

「えっ？」

「考えてみる、どんな名前だ？」

メルデイスは少し考えて俯いた。ランガーは答えが出るのをもどかしく思いながら待ち、やがてメルデイスは笑顔で答えた。

「ロイル、ロイルなんてどう？」

「ロイル？」

「そう、短くて呼びやすいでしょ？」

「そうか…いい名前だ。」

ランガーはそれを聞いて立ち上がった。そうだ、ジュリアを一人で待たせすぎるのも良くない。

メルデイスはそんなランガーを見上げた。

「兄貴によろしく言ってくれ」

「うん」

「じゃあな、メルデイス」

「また遊んでね、ランガー！」

ランガーはゆるく微笑んでもう一度頭を撫で、

買い物をする為、街へと消えた。

そんなランガーの姿をいつまでも寂しげに見つめて、メルデイスは小さなため息を漏らした。

「また、ね」

そして誰に言うでもなく呟くと、帰路を歩き出すのだった。

三話

ランガーは日常品と、妊婦となったジュリアによい食べ物を買って、両手いっぱい紙袋を手にして帰宅した。しかしドアにはかけたはずのない鍵がかかっており、ランガーは荷物を一度置いて、鍵を回した。

ドアを開けて、ランガーはジュリアに声を掛けた。

「ジュリア…？いないのか…？」

ふとダイニングテーブルに視線を落とした。

そこには可愛らしい絵が入ったメモが一枚。簡潔に忘れ物をしたから研究室に戻ると書いてあった。

買ってきたものを置いてそのメモを読んだランガーはどうせ出かけたついでだからと、

迎えに行く為に自身も研究室へ向かって、自宅にまた鍵をかけた。

そして澱んだ空を見上げて歩き出すのだった。

研究室は閑散としていた。年末の忙しい時期なので、研究員のほとんが休みを取っていた。

今日は会合があったが、ランガーはそれを休んでジュリアと帰宅した。

やや罪悪感やら気まずさがあったが、上着を脱いで靴を履き替え、

ランガーは白衣を身にまとった。
ジュリアを迎えに来ただけだったが、研究員の務めを果たして消毒も行った。

いつも自分が使っている研究室は三階で、その行き来はもっぱら階段を使っていたランガーだが、

今日は事情が異なる為、エレベーターを使った。

暖房設備がない研究室内は寒い。ジュリアが長居していないか不安だったが、

やがてエレベーターは目的の三階にたどり着いた。

「…うつ…?!」

扉が開いてすぐ、ランガーは思わず袖口で鼻を覆った。

何やら嫌な臭いがした。鼻をつくその臭いに驚いてランガーは恐る恐るエレベーターから降車した。

そして、足元に広がる赤い海を見つめて絶句する。

「何が…」

側には数人の研究員と思われる人が倒れていたが、顔は残虐的につぶされていて識別できない。

真っ白になりそうな頭でランガーは走り出した。

「ジュリア…ジュリア…！返事をしろ、ジュリア！」

倒れた人を抱き起こしてそれが妻でないことを確認する。

心臓は早く打ちつけていて、今にも意識を手放しそうだった。

一体誰が？何があった？そんなこともぐるぐる巡る。

人が点々と倒れている場所が赤い道筋となり、その終着点はランガーの研究室が繋がっていた。

ドアがほんの少し開いている。

ランガーは急いで研究室に入ると、もう一度ジュリアの名を呼ぶ。

「ジュリア！ジュリア！」

ぱたん、と何かが倒れる音がした。

机と机の間から、その様子が鮮明にランガーの目に留まる。

ウェーブがかかった茶色がかかった長い金髪が揺れている。そして多量の血液が喉元から溢れ出し、その美しい髪を染めていった。

完全にそれが倒れた瞬間、ランガーは獣のように叫んだ。

「あああああ！ジュリアっ！」

這い蹲るように体を引きずって既に事切れたジュリアまで歩き出した。

そのお腹にはできたばかりの子供がいた。男子であれば名前すら決まっていた。

ランガーは慟哭した。

やはり神はあの日のことをお許しでなかったのだと神をも恨んだ。

そしてそんなランガーの目の前に、ふらりと一人の少年が躍り出た。ランガーはその少年を呆然として眺めて、溢れる涙とジュリアの血液で汚れた顔を上げた。

少年は荒い息を繰り返して、体中返り血で染まり、その胸から無数の管がのびていた。

ランガーは少年を見つめて目を見開いた。

「…くる…しい…、胸が…やけつく…っ」

「お前…ラグナロク試験体の…！」

「…たす…け…」

次の瞬間、凄まじい轟音が鳴り響いて研究室が大きく傾いだ。

そして少年は自分の拳で空けた大きな穴へ深く落ちて行き、ランガーは慌ててその姿を追った。

既に姿は見えなかったが、今の所作からしてこの高さから落ちたとしても平気だろうと強く唇をかみ締めた。行き場のない怒りと憎悪がランガーの背中を駆け巡り、ランガーは再び強く叫び声をあげた。

四話

ランガーは夢見の悪さに飛び起きた。いつのまにか肩に掛けられていた毛布を床に落とす、

落ちた毛布を見つめて、ランガーは大きいため息をついた。

度々、ジュリアを亡くしたことを夢見ていたが、こんなに鮮明だったのはランガーにとっても初めてだった。何か飲み物を取ってこようと立ち上がった瞬間、ランガーの脳裏に、ある一点が浮かび上がった。

居なくなってしまったロイルと、最近アクアドームで噂される殺人鬼の話。

まさか、とランガーは青ざめて額に片手をやった。

あの日、結局研究室から逃げ出してしまった試験体。その姿をここ数年間探し続けていたが、

まさかこんな形で会う日が来るとは思わなかった。

ランガーは急いで上着を羽織り、エレベーターへ向かった。

ロイルがいない事態を楽観視していたが、とうとう重要となった。

焦る気持ちでエレベーターのボタンを押したランガーの胸には、あの日のことが思い出されていた。

薄暗い室内。

ぼつぼつと何も無い空間を歩いていたロイルは、怪我と疲労からついに膝をついた。

つい最近、ここにいつの間にかいて、その前は確か死体を見つけたところまでは覚えていた。

だがその犯人らしき少年に接触してからの記憶がない。ただ処置された怪我だけが痛む。

部屋には窓もなく、おおよそ三日は監禁されているとロイルは考えた。

体がだるく、何もなくてただただ広い室内に、ロイルは絶望感を抱いていた。

もしかしたらこのまま死んでしまうのでは？そう考えるがとにかくだるい。

ついに横になったロイルはぼんやりと教会で別れてしまったリックを思い出していた。

あの情けない青年は墓地で何を思ったのか気になった。

あの反応からして、リックとヴァレスが友好関係だったのは明らかだが、

墓場では別に複雑そうな表情を見せていた。ロイルは目を閉じた。今死ねたなら、ヴァレスは許してくれるんだろうかと、少しだけ考えた。

ふと、目が痛いほどの光が差し込んで、ロイルは閉じたばかりの目を開いた。

逆光で全然誰が立っているのか見えないが、一人、男が立っていた。目を凝らすと、男は聞き慣れた声でこう言った。

「さて、お帰りロイル」

「貴様……！」

次第に慣れた目が男を捕らえる。

男はロイルに歩み寄って、ロイルと全く同じ顔でにっこりと微笑ん

だ。

「お腹空いてないか？ご飯にしよう」

そう言った男 レインは冷酷な眼差しでロイルを見下ろした。

第九章 おかしなお茶会

ロイルは無理やり肩を持って自分を立たせた少年、レインの手を振り払って、

よたよたとふらついた足でしっかりレインを睨んだ。

レインは愉快げにふらふらなロイルを見つめていたが、やがて再びロイルの肩を持った。

「そんなに警戒しないでいいよ、ほら、肩貸すからさ」

「そんなことはどうでもいい…僕はお前に聞きたいことが…」

「しかし僕には答える義務がない、行くよ。君、結構重いな」

「チツ…！」

また振り払おうと、ロイルは手をかざした。だが一撃目でもう疲れていたロイルの二発目はまるで紙で叩かれたように弱弱しく、レインはそんなロイルを鼻で笑って歩き出した。

もう振り払う腕を上げる元気もないロイルは諦め、レインが抱えている反対の方角へ顔を逸らした。

レインはくつくつと嘲笑する。

「意地っ張りなんだ？」

「うるさい、黙れ」

「ふふ、はいはい、僕も君が昔からだあいっ嫌いだからそっぽでも向こうかな」

「……………」

昔から。ロイルはその言葉を頭の中で反芻させた。

やはりこの男は何か知っている。ヴァレスのことがあった今、ロイ

ルはどうしてもそのことが気がかりだったが、先ほどあっさり断られたところを見て、すぐ流されてしまっただろうと察した。

お互いが反対の方向を見つめる奇妙な二人は、やがて大きな扉の前で立ち止まった。

ロイルが眉を上げてその扉を見上げる。

「おい、僕をどうするつもりなんだ」

「そうだね、僕は焼いて煮て原型もとどめないほどにして鶏の餌にでもしてやりたいけど、したらいけないって兄さんが言うからしないよ、ご飯を食べるだけ」

「…いちいち癪な奴だな…」

「ふふ、褒めてくれてるの？どうもありがとう」

自分と同じ顔、そして同じ声の人間がニコニコと微笑んで甘い声で皮肉を垂れ流す様子を

気分悪くロイルは眺めた。できれば二度と喋ってくれなければ幾分か笑顔ぐらいは許せたものの、

この気持ち悪い話し方や笑い方も、ロイルは気に入らない。いつそ言ってやるうかと口を開くより先に、レインがその大きなドアを開いた。

「さあ、どうぞ」

そしてとん、とふらついたロイルの背中を押した。

勿論ロイルはつんのめって倒れて、顔からぶつけて悪態をついた。自力でなんとか立ち上がると、豪華な長いテーブルが目の前にあった。

思わず頭をぶつけそうになって少し後ろに後退し、その華やかなダイニングを見つめて顔をしかめる。

ここは一体何処なんだ？そう考えていると、椅子に落ち着きなく座

つっていた少年と目が合った。

「お前…！」

その少年は紛れもなくあの日、アクアドームで殺人を犯して自分を連れ去っていった血まみれの少年。

思わず掴みかかりたくなつたが、怪我が急激に痛んでロイルはキツと少年を睨んだ。

少年はロイルから視線を逸らして無邪気そうに歌を歌っている。

「座って」

レインに強く肩を掴まれ、ロイルは渋々近くの椅子に腰掛けた。

フォークをべたべたと触つて尚歌う少年を睨みながら、ロイルはさつと少年の隣に腰掛けている人物に目を遣つた。

まだ誰かいたのかと驚いてその人物を見つめる。それは少女のようであつたが、垂れ下がった銀髪の前髪でほとんど顔が隠れていてよく分からない。時々隣の少年に足を蹴られるらしく、嫌そうに何か訴えていた。

「あと一人…もうすぐ来るだろうけど…」

レインは嫌がるロイルの隣に腰掛けてにつこり微笑んだ。

やはりこの笑顔は慣れない。そう思つて顔を逸らすと調度入つてきたドアが見えた。

そしてタイミングよく開いたドアから、最後の一人が姿を現した。

「あ、来た来た」

ロイルは思わず立ち上がった。

ドアから入ってきた人物はスツと顔を上げ、真っ直ぐとした眼差しでロイルを見つめ返した。

「遅かったね、ヴァレス」

二話

ロイルはしばらくヴァレスと見つめ合って立ち尽くしていたが、やがてヴァレスが視線をはずしてロイルの斜め向かいの席に着席した。ロイルはただ何も言えずヴァレスの顔を見つめていたが、ついに堰を切ったようにヴァレスの目の前へ行き、その胸倉を掴んでまくしたてた。

「貴様：！どうしてこいつらと一緒にいるんだ！空軍の奴らと一緒にじゃなかったのか、おい、答えるヴァレス！」

「…お腹の傷は平気そうだね…ロイル」

「何を…！」

ロイルは思わず激昂して手を振り上げた。先ほどまでの弱弱しさが全く嘘であったかのように力強く振り上げられたその手は、レインによって阻まれた。

「修羅場中悪いけどさ、もうご飯にしない？ね？お腹空いているでしょ？」

ギリツと腕が悲鳴を上げそうなほど強く掴まれ、ロイルはその手を振り払った。

離された腕にはレインのつけた痣が残り、ロイルはレインを睨んだ。レインはへらへらと笑ってロイルの背中を押して、無理やり着席させる、二度手を叩く。

するとドアが開いて次々と給仕が現れて食事の準備を始めた。

「さて、僕は君に話があつてね、ロイル」

レインは隣に座ったロイルを見つめて、笑顔を作った。前菜が配られていくのを眉を寄せて見ていたロイルは、視線を自分に向けるレインを見つめ返す。

「エックス、ほら君の向かいに座ってる少年だけど…が、君を見つけてね、偶然」

その偶然という言葉を強調したレインはわざと偶然ではないことを示唆して皮肉げに言った。

ロイルは特に何を言うでもなくじっと座って、エックスと呼ばれた少年を見つめた。

あの日出会った時怪我をしていたとはいえ、人形を専門とした特殊な軍人であるロイルを負かしたエックス。自分の腕を疑わないロイルは、彼の異常な強さ、そしてあの時見た残忍さは一体何だったか思い返す。今日の前で食事を楽しそうに待つ少年と、明らかに雰囲気が違う。

まるで人を殺すときは別な人物が乗り移っていたような。そんな気がロイルはしていた。

「それで君を殺さないでって頼んだんだけど…どうかなロイル。僕達と一緒に暮らさないか？」

「な…何を馬鹿なことを…！」

「勿論僕だつて嫌だよ？だけでも少し君に用事があつてね…一緒に暮らせたなら楽なんだよ、こっちはね」

「ふざけるな！」

ロイルは皿を置こうとした給仕の手を叩き払い、室内は割れた皿と高く床を打ちつける食器の音で満たされ静かになった。

レインは顔の前で手を組んで蒼穹の瞳を細めると、小さく笑った。

「ロイル、君は一つ誤解している」

かちり、と特殊な人工物の音と共に、ロイルのこめかみに冷たいものがあてられた。

ヴァレスが手に持った小型拳銃。ロイルはぐつと歯を食いしばってレインを睨んだ。

「これはお願いじゃないんだよ…ふふ、まあいいよ。ロイルの前菜、新しいの持ってきて」

ヴァレスはロイルに目でもう一度座るように訴えて、ロイルは大きくため息をついて

椅子に腰掛けた。ロイルが大人しく座るのを見てから銃を下ろしたヴァレスも、また自分の席に座った。

「大丈夫。ほんの少しだけだから」

「何が目的だ…？」

「…その質問こそが…罪深いね、ロイル」

ろうそくの火が、貼り付けただけのレインの笑顔をぼんやりオレンジに染めていた。

その場に会話は無い。ただ沈黙と食器が鳴るだけの奇妙な空間に、数日何も食べていないロイルの胃袋は吐き気を訴えていた。

「アイリーン、いるか」

アクアドーム最上階、アイリーンの私室にやってきたランガーは、その部屋の前でノックと声まで掛けた丁寧さで相手を伺った。アイリーンは束ねた長い髪を鬱陶しげに払って、返事を返した。

「ランガーか、入れ」

促されたランガーは、室内に入った。

アイリーンは普段とは違い、地味な服でやたらと露出していた服は何処へやら。

胸元はきつちりリボンとボタンで留められ、ガーターベルトが巻きついていた魅惑的な足は黒いストッキングで隠されていた。

「どうかしたのか？数日カミュの修復作業で疲れていたお前がわざわざ私の部屋に訪れるとは…」

「…？お前こそ何かあったのか？疲れきった顔をしているぞ」

「私のは仕事の疲れではない、気にするな」

「まあいい。お前に調べて欲しいことがある」

「何だ？」

ランガーは着物の裾から一枚の写真を取り出した。

アイリーンが受け取り、その写真を確認する。写真には初老の東洋人が写っていた。

「こいつは…見覚えがあるな…たしか空軍で軍師をしていたか…？マリスのアトリエで一度会ったことがある」

「その通りだ。名前はセイラン・リー。こいつが今どうしているか調べてくれ」

「構わんが…何の用事だ？」

「そいつに尋ねたいことがあってな…。生死だけでも構わんから分かったら私の家に送ってくれ」

アイリーンは写真から顔を上げて、険しい表情となった。

ランガーは次、何を言われるか何となく検討がついたが、黙って彼女の顔を見つめる。

「ロイルは…まだ見つからないのか…」

「みただな」

「最近頻発する噂と殺人事件も心配だ…カミュにセキュリティ改善を頼んでくれないか」

「分かっている、今日にでも伝えておこう」

「しかし…」

アイリーンは苦い顔をして俯いた。

立ち上がって静かな町並みを見下ろす。すっかり家から出なくなつた住民たちの灯す明かりが

点々と広がっている。アイリーンは窓に手をついて反射する自分の顔とランガーの姿を見つめた。

「私たちは、ロイルに出会ってはいけなかったのかもしれない…それがあの子の為だっただろうに」

ランガーは眉を寄せた。

ふと今日見た昔の夢を思い出した。

そしてつい、左目の眼帯をそっと触ってしまうのだった。

三話

食事が終えて、皆がデザートを運ばれて来る頃、頑なに料理を口にしないロイルの前にはまだ前菜がぼつんと置かれていた。

レインは給仕が淹れる紅茶のカップを揺らしながら、困ったように笑ってため息をついた。

「ロイル、ほんとに意地っ張りだなあ、食べなよ。待っててあげるからさあ」

「……………」

「それとも無理やり突っ込んでおうか？はい、口あけてー」

「僕は…甘い物以外…食べられないんだ」

「…は？」

レインは持っていたウニの乗ったカナツペを皿に戻すと、呆れたようにロイルを見つめた。

ロイルは俯き、指先に力を入れて手持ち無沙汰に指を絡めたり離したりを繰り返した。

レインはロイルのカナツペを口に放り込んでにやにやと俯いたままのロイルを見つめた。

「なるほど…アレの効果で食べられないんだね…」

「アレ？」

「ここの胸が、痛んで受け付けられないんでしょ？」

つつん、とレインが胸を触った。そこには血管のような管が張り巡らされた大きな傷跡があった。

ロイルは思わずレインを凝視し、レインは嬉しそうに笑ってみせた。

「な……」

「知ってるよお…僕は忌々しくもロイルのことは何だって知ってるんだから……」

レインはそつと皿からもう一枚残っていたカナツペを手のひらに乗せて、片方の手でロイルの顎をしっかりと掴んだ。

ロイルは勿論抵抗して、何か言おうとしたが、ヴァレスが席を立つて、そんなレインの手助けをして無理やり口を開かせた。向かいの少女は心配げに立ち上がって制止しようとしていたが、

ロイルの口にはもうカナツペが押し込まれて無理やり口が閉じられた。

「う、おえっ…！」

物凄い嘔吐感がロイルを襲い、今食べたばかりのカナツペが口からあふれ出した。

レインは大きくのけぞってその様子を笑い、ヴァレスはただ冷酷に離れたロイルを見つめた。

少女は急いでロイルに駆け寄ると、嘔吐を繰り返すロイルの背中を撫でた。

「あはは、ごめんごめん、でも今なら食べれるかなって思ってたさ、ヴァレスとお手伝いしてあげたんだよ。イナーシャ、庇わなくていいんだよ？」

食べたものを吐き出しても嘔吐は止まらず、胃に僅かに残っていた胃液すら吐き出してしまい、ロイルの顔色は急変した。イナーシャと呼ばれた少女は心配そうにロイルの顔を覗き込み、前髪で隠れた瞳でレインを睨んだ。

「レイン、これはやりすぎだろう？こんなことしてどうなるんだ」
「ふふ、いい子だね、イナーシャは。じゃあ、もういいよ、新しい部屋を用意したから、そこで休みなよ、ロイル」

エックスはその様子をどう思うでもなくただ傍観していた。

皿に乗っていたエックスのケーキはぐちゃぐちゃにかき回されてそのままフォークは投げ出される。

イナーシャはゆっくりとロイルを抱えて、口元をハンカチで拭くとダイニングの出口へ向かった。

急に興がさめたのか、レインはつまらなさそうにその様子を眺めていた。

「どうせあいつ××なのに、変なの、ね、ヴァレス」

ヴァレスは答えず、ただデザートを食べきろうと一口分にフォークの切れ目を立てるだけだった。

そしてその目には、深い悲しみが広がっていた。

小さな一部屋に連れて来られたロイルは、部屋を占領する一台のベッドに横たわらせられ

天井を見上げた。吐き気は治まったものの、何の気力も湧かなかった。

イナーシャはロイルに水を飲ませて、一度部屋を出た。

もう一度戻って来た時には、デザートで出されていたケーキがその

手にあった。

「何か食べたほうが…いいよ。君はビスケットを主食にしてるんだっただね…失念していたよ」

ロイルはけだるい体でイナーシャを見つめた。長い白衣に身長より長い髪が垂れ下がっていて、顔と体を包んでいるようだった。それにしても輝くような銀の髪を持つ少女に、

ロイルはつい、緩んだ頭で首を傾げて

「トツテイ…」

と呼んだ。

途端イナーシャは肩を振るわせて大げさなほど驚いていたが、やがて側の机にケーキを置いて、そっとロイルの側に腰掛けた。

「あの子のこと、そんな風に呼んでいるだね…ロイル」

「…お前は…誰なんだ？」

「…君は知らなくてもいいんだよ、さあ寝なよ、起きたらケーキを食べればいい」

瞼が重くなつて、言われた通り、ロイルは目を閉じた。

イナーシャは規則正しく寝息を立て始めたロイルに安堵して、そつとその髪を撫でた。

「君にはもう少し記憶を思い出すために外にいてもらわなくちゃいけない、明日僕が出てあげるからね、ロイル」

四話

「…る…さん」

誰かが呼んでる声が、ロイルの耳に届いた。体は痛み、とてつもない倦怠感が襲い掛かり、まぶたを開くことさえ億劫だったが、やがてロイルはほんの少しまばたきをして目を開いた。その姿を見ていたレニは、ロイルの意識がはっきりしたのを確認して声を上げた。

「よかった、ロイルさん、目が覚めましたか…！」

「ここは…？」

見慣れた一室。そこはアクアドームの自室に違いはなかった。つい先ほどまで、何処とも分からない場所で監禁されていたロイルは、どうして部屋に戻ってきたのか理解できずに少し反応が遅れて返事をした。

レニは安堵し、そっと毛布を掛けなおすと、管が繋がれたロイルの腕を見てため息をついた。

「先日、ロイルさんがアクアドームの前で倒れているのをキールさんが発見して…とても衰弱なさっていたので心配しました」

「アクアドームの…前？」

「はい、海の側で倒れていたそうです。ご無事でなによりです」

トレストウーヴェは暫くロイルの手を握って付き添っていたのか、うつぶせて眠ってしまっていた。

ふとトレストウーヴェを見つめっていると、よく似た背格好の少女が確か自分を助けてくれた事を、ロイルは次第に思い出していた。そして点滴が落ちてゆく様を見つめ、ゆっくりと体を起こした。

「あの…屋敷で見かけた僕と似た顔をした男に会った。」
「えっ…？」

「そして、一緒に暮らすように僕に強制してきたんだ。幸い、その仲間と思われる女に助けられたみたいだが…それと、」

ロイルはさつと寝息を立てるトレストウーヴェを見つめた。
ちゃんと眠っていることを確かめると、ロイルは小さな声で付け加えた。

「ヴァレスとも…」

「…ヴァレスさんが…？でもどうして彼が製造者の仲間と一緒にだったんでしょうか…彼は空軍についたのでは…？」

「もしかしたら、空軍は製造者となんらかの関わりがあるんだろう。武器の不正な取引とかな」

ロイルは包帯で包まれた体に視線を落として、険しい顔つきとなった。

そして、レニが思い出したように、言葉を発する。

「そういえば、ヴァレスさんの妹の遺体が消えていたそうです。墓守のシャルロットさんから連絡があって、アイリーン様が見に行かれたとか」

「…セイラの死体が？」

「まだ何の目的で、誰が持ち去ったかは分かりませんが、墓は元通りの綺麗なままだったそうです」

「…ヴァレス…」

ロイルの足元で寝ていたトレストウーヴェが身じろぎした。
ロイルはハッと喋るのをやめ、起き上がると、そっとその肩に自分が羽織っていたカーディガンを掛けた。

「僕はランガーに話がある、取りあえず次の任務に出れそうか怪我の具合をドーナに診てもらって…」

パジャマ姿のロイルは、さっとその上に深緑の軍服を羽織ってリボンを胸元のポケットにねじこんだ。
安っぽい革靴を踏みつけて部屋を出ようとしたとき、そんなロイルの袖をぴん、とレニが引っ張った。

「レニ？どうした、まだ何か用か？」

「…もっと、ご自分を大切にしてください、ロイルさん。こうしてまたただ見送って、私はあなたが居なくなってしまわないか、不安です」

ロイルは顔をしかめた。そして暫く俯いたままのレニを見つめていたが、やがて指でさっと指示を出した。

「屈め」

「えっ」

「早くしろ、屈め」

レニが言われた通り屈むと、ロイルはレニに近寄った。そして何をするかと思えば、まるで子供をあやす様に優しく頭を撫でた。レニは呆然としてその様子を見上げる。

「だったら、お前が捜しにこればいい話だ、違うか？」

レニは酷く真面目な顔をしたロイルをぼかん、と見上げて、やがて滅多に大笑いしないのだが腹を抱えるようにしてレニは笑った。

ロイルはだんだんと恥ずかしくなってきたのか、屈んだままのレニの頭を今度は小突いた。

「きさ、貴様、僕が慰めてやっているというのに、この、」

「あはは、だつ、だつてロイルさんが、あんまりにも真剣だったんでつい…！」

「チツ、とにかく僕は出かけてくるから！トレストウーヴェに居てくれてもいいと伝えておけ、いいな！」

「…はは、分かりましたよ、ロイルさん」

フン、と急に不機嫌になったロイルを見つめて、レニは笑いきったあと小さなため息をついた。

「本当に、居なくなってもらっては困ります…からね」

「イナーシャ！」

旧ソルワット邸。その姿はすっかり長い年月で荒れ果て、見る影もなかった。

だがそんな枯れ果てた屋敷の最奥には、長年マーリスがアトリエとして使っていた

秘密の部屋が存在した。レインはどすどすとわざとらしく足音を鳴らし、昔はアトリエだったその一室で機械をいじるイナーシャに詰め寄って、プツン、と機械の電源を落とした。

「…何だい、レイン」

「君、勝手にロイルを逃がしたろ？初期が出て行くお前と抱えられたロイル見たって教えてくれたんだ」

「全く、これだからジャンクは口が軽くて頭が悪い…」

イナーシャは椅子を回転させ、不機嫌そうなレインの顔を見つめた。レインはイナーシャの胸元をぐつと掴みあげて片方の手で延び放題の前髪を掴んだ。

「僕に、喧嘩売ってるの？」

「どうしてそうなるんだ、レイン。僕は初期のことを言っていただけだろう？離して」

レインは前髪を掴んだ手を上に上げて、痛がるイナーシャの顔を覗き込んだ。

イナーシャはレインを睨んで、手で何とかレインを振り払おうとやっきになった。

しかし体力差が男女である以上離れていて、レインは更に髪を掴んだ手に力を込めた。

「僕が兄さんに怒られてしまったら、お前、殺してやるからな」

「…レイン、どうしてロイルをそんなに憎むんだい…ロイルは君の…」

「あいつは僕から何もかも奪ったんだ、元は、全ては僕であるは

ずだったんだ！」

「い、痛いっ、やめてっ！」

がたん、と椅子が大きくしなつて、そのまま二人は床に倒れこんだ。やっと開放されたイナーシャは、頭を抱え込んでうずくまるレインを見下ろした。

「これが憎まずに…いられるものか…」

「レイン…」

イナーシャは声を掛けることが出来ず、ただ立ち尽くした。悔しそうに唸って、一向に起き上がらないレインの声を聞きながら、イナーシャは苦々しい顔をするのだった。

第十章 追憶（前書き）

誰かのの正体が明らかに…なったりならなかったりの記念すべき十章目。もう七十話にもなりましたが、まだもう少し続くようです。

第十章 追憶

遠い昔、ある一つの約束をした。約束を持ちかけた当の本人はすっかり忘れてしまっているかもしれないが、俺は一目見た時からお前だと知っていて、それから別れた時、俺が言った言葉と、お前が言った約束を思い出していた。それは矛盾しあった約束で、俺は今もどちらも守れないでいる。ただ、これだけが全てと、お前に尽くすのみだ。

ある男の日記から

ロイルは、エレベーターでランガールの部屋を目指していた。ドーナは活動的なロイルにいい顔をしてくれなかったが、ランガーに会ったら必ず休息するという約束をして、ロイルはランガールの部屋をノックしていた。暫くしても返事がない為、ロイルは勝手に室内に入った。

「ランガー？マリア？」

しかしどちらの返事もない。出かけているのか。そう思って出て行くとした時、

ただ肩に引っ掛けていたロイルの軍服の袖が積み上がった本に触れた。それだけの衝撃であっという間に倒れてしまった本の山をロイルはうんざりで見つめ、嫌々とそれらを拾い始めた。

埃が蓄積して触るのも嫌だったが、このことで小言をランガーから

食らうほうがよっぽど最悪だと、黙々作業を続ける。最後の一冊。本当ならば一番下においてあったろう本を重ねた時、中から一枚の写真がはらりと宙を舞った。

(これは…マリアの写真か…?)

セピア色の随分古しい写真を手に取り、写った人物を見つめる。明るいウエーブがかかった髪に優しい笑顔。何やら指には指輪をはめているらしく、それを見せるように左手を掲げていた。

(…違うな。マリアは黒髪だから…。だが、顔がそっくりだ…誰だ、こいつは)

じっと食い入るように写真を見てみると、背後からぴっ、と素早く写真を取られて

ロイルは振り返った。ロイルの背後に居たのは言うまでもなくランガーで、不機嫌であるのは一目瞭然だった。

「私の部屋で何をしている、ゴミ粒」

「…お前に話があったんだ、ランガー」

「…だが、私にはない。さっさと出て行け」

写真を元入っていた本の中に滑り込ませると、そのままランガーは机へと向かった。

ムツとしてお望み通り出て行くのかとも思ったロイルだったが、大事な用だった為、

机へ向かってツカツカと歩いて行き、両手をついてランガーを睨んだ。

「は、な、し、が、あ、る」

「…何だ鬱陶しい、居なくなつて清々していた所をのこのこ帰つてきやがつて」

しっしつと犬を追い払うような手つきで手のひらを振つたランガーを睨みつけたまま、ロイルはランガーの机に足を組んで座り、ランガーに背を向けた。

「僕の過去を、お前、知っているだろう？」

「何のことだ？ゴミ粒と記憶を共有して何になる？馬鹿も休み休み言え、脳細胞が全て死んでるんじゃないか、お前は」

「チツ、いちいち苛立たせる奴だな、お前…」

ロイルは振り返つてシラツとした顔をしたランガーを殴りたい衝動に駆られたが、ぐつと拳を握つて再び腕と足を組む。

「じゃあ、僕と同じ顔をした奴、知ってるか？」

ランガーの指先がほんのわずかにぴくりと動いた。背中を向けていたロイルが知るはずもないが、たとえ正面を向いていてもそれほど気づかないような変化だった。

「知らんな。お前と同じ顔なんて嫌ほど覚えているだろうにな」

「…お前、何を隠しているんだ…？」

ロイルはランガーを見下ろした。眉一つ動かさず、いつも通りの無表情を決め込んだランガーはだらしなく机に腰掛けるロイルの背中をたしなめる様に叩いた。

「降りろ、机が汚れる」

「…じゃあ話を変える。あの写真の女…、誰だ？」

ガタン、と椅子を倒して、ランガーが立ち上がった。突然態度が変わったランガーに些か驚いたロイルは、そのランガーの顔を覗き込んだ。

先ほどまでのポーカーフェイスは何処に落としたのか、焦ったような顔して声を荒げた。

「出て行け、俺はお前に話すことなんてない」

「フン、おかしな奴」

ロイルは机から降りて、出口へ向かった。

話していても一向に進まないのは明白であったし、ランガーを怒らせてしまった以上、それなりに居づらかった。部屋を出るとき、ふと振り返ったランガーが、眼帯をしきりに触っているのを視界の端で捉えて、ロイルは小さな声で呟いた。

「何か地雷を踏むと、お前すぐそこ触るよな…」

そしてドアを閉めて今度こそ出て行くのだった。

部屋からロイルが出て行った後、眼帯から血が滲んできたのを感じて、ランガーは触るのを止めた。

いつも無意識で手を持っていくそこは、罪悪感と、後悔が詰まっていた。

ランガーは大きくため息をついて、出会わないほうがよかったと言うアイリーンの言葉を思い出していた。

二話

ロイルはそのまま大人しく部屋に戻ることにした。ランガーからは何一つ情報を聞きだせず、ロイルの胸にはもやもやと固まり切らないものがこもっていた。

ヴァレスの妹を殺してしまったという過去、そして何者か知れない顔の同じ少年。そして突然頭に浮かんだダリウスという人物。全てが繋がらず、それが一層もどかしい。

誰かに自分はこういう人間だったという話を聞いてもピンとは来ないだろうが、ロイルには一刻も早く安心感が欲しかった。失った過去という空白を埋める、絶対的な安心感が。

二十階に止まったエレベーターで、ロイルは俯いて向かってくるトレストウーヴェを見かけて、思わず声を掛けた。

足をエレベーターから降ろし、何故だか沈んだ様子のトレストウーヴェは、ロイルの顔を見てもさほど反応を示さないほどだった。

「遅かったわね…どこに行ってたの？」

「あ…ああ、ランガーと話に…。どうかしたのか、トレストウーヴェ」

「…べ、別にどうともしてないわよ…、とにかく無事でよかったわ…じゃあ」

「待て、茶でも飲んで…」

「…ごめんなさい、仕事があるの」

すっ、とロイルの側を過ぎたトレストウーヴェに、ロイルは妙な違和感を感じた。

だが、引きとめようと思ったときにはもう遅く、トレストウーヴェはエレベーターと共にいなくなった。普段なら大げさなほど抱きついて帰還を喜んでくれるトレストウーヴェが、監禁されて海に投げ出されていた想い人をそっちのけで仕事など、考えられない程だった。

だが、それほど心配もしていなかったのだと、ロイルは首を振った。

「僕も少し自惚れすぎたな…」

そう自嘲気味に笑んで、ロイルは自室のドアを閉めた。

リックは、午後からの訓練を終え、街の復旧作業のボランティアに参加していた。

ボランティアは強制ではなかったが、初めてアクアドームを訪れたあの日の活気がとても心地よかったリックは、早く復興できるようにと尽力していた。

作業は家の修繕や、殺人鬼によって殺されてしまった人たちの葬儀の手伝いなど様々で、

あまり人と関わるのが得意なほうでなかったリックも次第に街の住人に溶け込んでいった。

「リックさん、ご苦労様です」

ケイはそんなリックに尊敬の意を示し始めていた。紙コップに注がれたコーヒーを受け取り、リックははにかむ。

「この前、演習に来ていた海軍の新人が手伝いや支援をしてくれて

…俺こそ、こんなことしか出来ないのが申し訳ないよ」

「そんなことありません、とても助かります」

「ケイさんも大変ですね…」

「はい、葬儀に追われて通常運営がままならなくて、神父様も嘆いておられました。」

リックは湯気が立ったコーヒーに息を吹きかけて、暗く日が差さない海を眺めた。時々大きな魚がドームを覗き込むように過ぎ去ってゆく。

「でも、空軍は孤立してまで軍事力が必要だったのでしょうか…」

「孤立、そうですね、言ってみれば孤立したのかもしれないですね。海軍が手伝ってくれているのを見ると」

「…一体、誰と戦う気で、そんなに軍事力を高めるのでしょうか、わたくしは切なく思います」

「ケイさん…貴女みたいな方が沢山いたら、この国は平和だったでしょうね…」

ケイは俯いていた顔を上げて、リックをひたと見つめた。

「ロイルさんは…どうでしょうか？浜辺で倒れていたとお伺いしましたが」

「俺もよくは知らないんだけど、無事であることは確かみたいですよ…リボンをレニさんに渡さなきゃ会いに行くチャンスがあったのになあ…」

「…リックさんは、ロイルさんと仲がいいんですね」

「えっ？」

リックは思わず聞き返してケイの顔を見つめた。ケイは逆に何故聞き返すのかと、ケイもまたえっ？と返す。

「いや、その。正直最初からロイルくんは苦手だなんて思うことが度々あって…仲がいいなんて思っていなかった…んです。俺を採用したのがロイルくんだったから、上司ではあります」

「そうですか、わたくしは聞いているかぎり、仲がよろしいのかと」

どちらかといえば、仲が良かったといえればヴァレスが思い当たる。

だが彼はレイディアンを捨て、

海軍と共に消えてしまったとロイルは言った。そして実際もういないのだ。

色々とかみ上げるものはあるが、それ以上に付き合いが長かったロイルはどんな気持ちでいたかなんて、今の今まで考えたこともなかった。更にあんな不器用なロイルも、ふがない自分を度々気にかけてくれていたこと、思い返せば多々あった。

リックはそうやって巡らせた考えを一つにまとめて、ケイに返す。

「今…考えていたんですが…ロイルくんは仲良し、とか友達じゃなくて、俺の中では憧れや、畏怖に似ているんです。人形に立ち向かえないのに無謀に挑む俺を何度も助けてくれて…俺もあなれたらなって…最近では思うようになった気がします…」

「上司関係として、素晴らしいものですね、リックさんあなたはいい軍人さんになれるかもしれませぬ」

リックは少し照れて薄く笑って俯いた。

そして空になったカップをポケットに押し込んで、再び作業へ戻る為立ち上がった。

「またお話聞かせて下さい、リックさん」

「はい、あの、ごちそうさまでした、コーヒー」

そして、清清しい笑顔でケイと別れたのだった。

三話

部屋に戻ったロイルは、リックが門番に沢山預けていた菓子の袋を覗き込み、ため息をついていた。こつも安月給のリックに見舞い品を貰っているのは、上官としてしめしがつかない気持ちがあった。つき返すのもなんなので、その菓子たちを棚にしまったロイルは、ふらりと部屋を出て、

兵士宿舎がある十階へと降りていった。

もしかしたらリックがいるかもしれないと、付近の兵士に番号を尋ねて、ロイルはその部屋番号に目を見開いた。何の縁か、昔ヴァレスが使っていた部屋。彼が軍人だった頃によく訪れて騒いだことをぼんやりと思い出していた。

ロイルは部屋をノックした。だが、当然ながらボランティア最中のリックは不在だった。

流石に基地から出てまたドーナにうるさく言われるのも嫌なので、あっさりとその日は諦めることにした。

エレベーターが混んでいたのも、階段を歩いていたロイルは、リックには何を返してやればいいのかを考えていた。物であれば何が好きであるとかという情報を集めなくてはいけなくて面倒だと感じたならば得意の料理は？だが男の料理姿を延々と見つめてそれを食べたところで美味しくもないかもしれない。だったら実戦訓練は？まるで仕事と同じだった。

ロイルは部屋に戻ると盛大にベッドへダイブして絡まった脳を休ませる為に目を閉じた。

こんな送り物なんてレニにだってしたことがなかったロイルは心底考え疲れて、

そばかすだらけのリツクの顔を思い浮かべた。
いつそランガーに頼んでそばかす除去の薬を作ってもらったら喜ぶ
んじゃないかとまで考えた。

「ん？ランガー？」

ロイルはがばりと起き上がった。
傷口が痛んで少しそれを後悔したが、そのままポン、と手をついて
ロイルはニタリと微笑んだ。

「よし、善は急げだな」

そしてあっさりとドーナの約束を破って再びランガーの私室へと向
かうのだった。

「いきなり戻ってきて何だお前は？無理に決まっているだろう」

ロイルはつつけんどんに否定されて、眉を上げた。いつの間にか帰
っていたマリアがロイルに茶を出しに奥へ引つ込み、ロイルは書き
物に没頭するランガーに近寄り、ふてぶてしい声で返した。

「じゃあ、いくら出せばいいんだ？言い値で買ってやる」

ランガーはロイルを見上げて、呆れた顔をした。元々ロイルがこん
なに自室を訪れることや、こんなわがままじみたことを要求してく
ることはなかったなので、ランガーも少しばかり驚いていた。

「馬鹿か貴様は…本人がいなければ、どんなものを作ってやればいいのか分からん。本当に作って欲しけりやそいつを連れてくるんだな」
「それでは駄目だ」

「じゃあ諦めろ、鬱陶しいゴミめ」
「…おい」

ロイルはランガーから羽ペンを取り上げると、ポケットから取り出した四つ折りの紙面を取り出して机に広げた。書いたばかりの文字がじんわりと滲んで黒ずみを作っていたが、ロイルはお構いなしに紙面を指差した。

「随分前、ウィーゲルの戦闘能力を測ったデータだ。これさえあれば作れるだろう？こいつの武器が」

「ふざけた真似は止める、ロイル。クソ、資料が台無しだ」
「頼む」

ロイルの両耳にぶら下がった翡翠色のピアスが揺れた。ここに来たばかりの頃、何も持たないロイルにわざわざオーダーメイドしてやった世界に一つしかない特殊な武器。

昔は武器や兵器の研究をしていた為、人形を直すのにも長けていたランガーが作る武器は一級品だった。

頭まで深く下げたロイルを見つめて、ランガーは折れてため息をついた。

「製作費用はお前に送りつけるからな、あと維持費」

「構わん」

「ハッ、お優しい上官だな」

ロイルはマリアが帰ってくると、ソファアに腰掛けて不敵な笑みを浮かべた。

「お前も随分優しいじゃないか」

「地面に頭こすり付けるまで見ててもよかったがな、床が汚れる」

「…ゴミ溜めのような部屋でよく言うな」

マリアが出した茶を飲みながら、ロイルは微笑んだ。

先ほどまでの刺々しさはなくなっていたものの、ロイルは少しランガーと会うのが躊躇われていた。

そっと自分の武器であるピアスに触れたロイルは不機嫌そうにランガーの横顔を眺めて

茶を飲み干した。

四話

「そういえば…お前は巷で噂の殺人鬼の顔を見ているんだろう？」

茶菓子を遠慮なく次々と頬張っていたロイルは、今まで帰れだのもう来てくれるなだのと言っていたランガーの口から違う言葉が出て振り返った。ランガーはロイルに邪魔されて書き直しとなった資料を忌々しく眺めたまま、続ける。

「どんな容姿をしていた？」

「…そんな事を聞いてどうなる？お前が捕まえるとしても言うのか」「いいから話せ」

菓子をお茶で流し込んで軽く笑ったロイルは、事細かに容姿の説明を始めた。

「まず、子供だった。髪の毛は茶色がかつた金…目が猫のように釣りあがっていて…口調は飄々としていて落ち着きがない。僕と同じ顔した奴がXと呼んでいたな」
「…そうか」

ロイルはカップに口をつけたまま、ランガーを見遣った。何やら険しい顔つきで考えるランガーが、何を思ってこんな事を尋ねたのか知りたい気持ちがあったが、聞いたところで答える様子は微塵もなかった。

マリアはロイルに新しいお茶を淹れようとポットの蓋を取って中身を伺っていた。

ロイルはそつと空になったカップを渡してマリアが注ぐのを待った。

「…僕が監禁されていた部屋には四人の男女が居た。まずはその少年と、僕に似た男、そして銀髪の少女に…ヴァレス」

「お前はブラックモアに刺されたらしいな。理由を知っているのか」

ロイルは首を振った。ランガーは腕を組んで眉根を寄せる。

「ヴァレス、きつと何かあったんじゃないかしら…あんなに仲が良かったロイルにそんな事するなんて…よっぽどの事情があったんだわ」

マリアはロイルがおかわりしたお茶を置いて、不安げな表情をみせた。

ロイルは少し困ったようにマリアの手を取り、優しく諭す。

「…マリア、ヴァレスは僕が、妹を殺したと言って僕を刺したんだ。身内だったから疑いたくない気持ちは分かるが、事情があって仕方なくってという優しさじゃない。殺したくて刺したんだ」

「でも、ロイル…」

「こちらから、偵察を空軍に向かわせた。そいつらの素性も明らかでない今、うかつな行動は危険だな」

ロイルは温かい二杯目のお茶をすすった。ランガーは静かに目を閉じ、大きなため息を吐く。

「お前は次から次と厄介事しか持って来ないな、さっさと帰れヨミ」
「ああ、言われなくともこれを飲んだら帰るよ屑」

いつも通りのやりとりに戻った二人に、マリアは困ったように微笑んだ。

トレストウーヴェは、荒く浅い息を繰り返しながら、壁伝いに歩いていった。

酷く体が重たく感じられて、苦しい。そしてその元凶は、ついロイルが帰ってくるまでと、彼の部屋で読んだ自分宛の郵便だった。鈍い頭痛に悩まされながら歩いてゆくと、手紙で指定された場所で猫と戯れる人影を見つけて、トレストウーヴェは足を止めた。

「アンタ…猫きらいじゃないの」

「いや、この前から慣れたんだ」

声を掛けられた少女が立ち上がる。トレストウーヴェは向かい合ったその少女を見つめて、やや視線を落とした。

「アタシ…もう…嫌なのアンタ達と関わる事が…」

「分かっているよ」

「お願い…もう、放っておいてよ…幸せなの今、アンタだって私と一緒に…」

「でも、僕はそうはいかない。まだ復讐していない、君だってそうだろ、トレストウーヴェ！」

少女がトレストウーヴェの肩を掴んだ。トレストウーヴェは咄嗟に手で振り払って、

怯えた表情で少女から離れた。

「アタシは…アンタとは…違う…イナーシャ姉さん」

少女 イナーシャは残念そうに微笑むと、白衣のポケットに手を突っ込んで、すつと細長い注射器を取り出した。

「僕達、たった二人の姉妹だろうか？残念だ」

そして逃げ出したトレストウーヴェの手首を強く掴んで引き寄せ、強引に注射を腕に刺した。

「嫌っ…助けて！助けて…っ！」

「ごめんね…トレストウーヴェ…これも全て、あの男のせいなんだ」

がくん、と力なく倒れこんだトレストウーヴェを抱えて、イナーシヤはその頭を撫でた。

そして高くそびえるアクアドームの基地を見上げた。

五話

ずっと昔、今はもうおぼろげで完全には覚えていないけれど、お姉ちゃんが働くまで、私たちはとても貧しい生活をしていました。両親が妙な宗教にはまりだしてから、家は一層悪くなって、両親は共に自殺をして私たちを置いて行った。私は両親を憎んだ。こんなことなら殴ってだつて目を覚まさせたのに、置いていくならあんな宗教に全てつぎ込むくらいなら遺産でも残してくれたらよかつたのに。そうして私たちは、住むところを無くして、食べるものがなくて、もう死ぬのかもしれないところまで追いやられて、あの男と出会った。

「…お前達のような人間の端くれにいい道を教えてやる」

「あなたは、誰？」

救われた、そう思ったのはその瞬間だけだつた。

「お姉ちゃんが軍の研究員に？」

その男の名前を、セイラン・リーと言つた。

東洋人にしては流暢な言葉を使う男で、禿げ上がった頭が印象的の初老の男。

私はあの男が生理的に嫌いだったが、私の妹は随分と懐いていた。ただ冷酷で、私たちに物を与えてくれるだけの存在を、私は信じない。

だけれども運命は順調に、私たちを狂わせていた。

「うん、セイランがお姉ちゃんの腕を買って医療品研究の研究員に抜擢してくれたんだって」

「…でも、お姉ちゃんまだ若いし、それに独学だったお姉ちゃんがそんなすごい所で大丈夫かな」

「大丈夫だよ、私たちのお姉ちゃんだもの！」

妹は楽観的だった。セイランにも懐いていたから疑うことを知らなかった。

ある日、とても疲れた様子で帰宅した姉。私が、どうしたのか尋ねても頑なにその理由を答えなかった。しかし、その日の夜、セイランが私たちの家にやってきた時、私は耳を疑う事実を知った。

妹はまだ幼い。私と五歳離れた妹はまだ文字を覚えたばかりの子供で、そういう私も勿論子供だった。

夜は日が落ちて間もなく就寝して、セイランがお金の工面をした学校に通う。

学校なんて随分前に行かなくなっていて、そのときだけは私も喜んだ。

夜中、トイレに目が覚めて行った私は、リビングの明かりに近づいてそっと近づいた。

隙間をそっと覗き込むと、苛立った様子のセイランが室内を歩き回っていた。

「一体、誰がここまでしてやったと思っている、貴様の愚妹達が学校に通えるのは誰の金でだ？」

私は息を飲んだ。姉は静かに答えた。

「ですが、私たちにはその莫大な資金を返すアテがありません…私たちにどうしろというのですか」

「数日後、ある重要な実験がある」

「重要な…実験？」

「生と死、人間という定義を超えた崇高なる実験だ…」

セイランは姉の前で足を止めて、冷ややかな声で告げた。

「その実験に、協力して欲しい、お前ら全員が」

「それは…被験体になれと…ということですか?!」

「いい方法だ、死にはしない」

セイランはソファアームに座っていた姉を無理やり立たせて、胸元を引っ張った。

「ただ、人間でいられるか、定かではなくなるだけだ」

ぷつん、とボタンがはじけ飛んで、私は思わず悲鳴みたいな声を上げた。

しまった。そう思う頃にはもう遅く、しっかり私を見据えたセイランが駆け足で私に近寄ってきた。

姉がなんとか制止しようと手をの伸ばしていたけれど、結局セイランは私を見下ろして、

唾を吐くような汚らしい声で私を罵った。

「覗き見とはいいご身分だな、卑しいガキが…」

そして、私の意識は途切れた。

姉が悲痛に、助けを求める声をあげていたけれど、私はその後何があったか知らない。

でも、二階で眠る妹だけが、気がかりだった。

「君、具合どう？」

目が覚めたとき、私は知らない天井を見上げて、知らない若い男の人を見つめた。

男は私が無事そうなのを確認して安堵の息をついている。一体誰なのか

「良かったわあ、もう死んでるかと思ったで」

妙な訛りの言葉で話し、顔は照らされた照明でよく見えなかったけれども、細くすらっとした体つきをしている。私は暫く左右を見渡して、声を発した。

「ここは…？」

「ここは僕のアトリエ。君、セイランの研究室で倒れていたんで、連れてきたんや」

「アトリエ…？」

見ればぐったりとした裸の人形がぎっしりと作りかけの状態でも並んでいて、一瞬ギョっとするほど不気味な光景が広がっていた。私は起き上がって姉と、妹のことを思い出して尋ねた。

「あいつ、私の他に二人女性と少女を見かけませんでしたか？」

「女の子なら、隣に」

私は驚いて振り返った。机に寝かされていたのは紛れもなく妹で、すうすうと息遣いが聞こえた。

「君たち、セイランと何かあったんかー？怪我もしてへんようやし、研究室で一体何が…？」

「わ、私たちあの男に実験台にされそうになったんです！連れ去られて記憶がないけど、お姉ちゃんが危なくて、知りませんか?!名前はジュリア・レイシェン」

「ジュリアの…妹さん…」

男は私の肩をそつと撫でて掴み、優しい声音と悲しそうな顔で告げました。

「いいか、落ち着いて聞いてや。彼女、働いていた研究施設で、遺体で見つかったんや」

「…えっ?…」

「どうやら、暴走した実験体にやられてしもて…もう、亡くなって…」

「うそ、そんなの…信じないわ…だって、だって…!」

私は男にすがりつくように彼の白衣を握り締めて、涙が溢れ出した顔を俯かせた。

「あの…男が…あの男が殺したんだ…うわ、あああっ」

「お、落ち着いて、!」

「殺してやる、殺してやる!」

どンドンと見知らぬその男の胸板を叩いて、私は泣き叫んだ。

胸の奥が焼け付くように熱く、憎悪が体中から噴き出そうだった。

悲しさと怒りで前が見えず、男は私をなだめるように背中を撫でな

がら、言った。

「泣いたって仕方ない、泣いては駄目や、男の子やるう？」

私は咄嗟にその言葉が頭に反響して手を止めた。どうやら私を男だとこの人は勘違いしていたらしい。

突然泣き止んだ私に安心したのか、男は今度頭を撫でて優しく笑んだ。

「きつと報われる時が来る。僕が今している研究が君みたいな子達の為に役立つかもしれないへん」

「どんな研究をしているの…？」

その質問をした時、急激に男は冷めた声になって、

「死者を…蘇らせる研究…や」

と言った。私は背筋が冷たく凍りつくのを感じて男から離れる。

そして頭に浮かんだのは、セイランが言っていた生死、人間を超えた実験という言葉だった。

六話

すごい雨だった。素肌に当たれば痛いほどの強い雨が降りしきる中、アタシは姉さんの言いつけを無視してマールリス様の研究室から抜け出した。一番上の姉が死んだと聞かされて、融通の利かない子供だったアタシは、自分の目で確かめるために走った。信じたくなかった。どんなに辛い環境でも笑顔を絶やさなかったあの姉が、ジュリア姉さんが死んだなんて信じたくなかった。何故だか体が物凄く重くて、走る速度を上げるたびに足が鉛のように重い。もう走れない、体がぐらついて倒れかけた時、私の視界に真っ白な傘が差し出されて細い腕が、私を抱きとめた。

意識が朦朧とする中、私を呼びかける声が耳に届いた。

「大丈夫ですか?! しっかりして下さい!」

高いテノール。ふんわりとアタシの頬を金色の髪が垂れかかって撫でてゆく。

とても綺麗なその顔を見て、アタシは思わず呟いた。

「きれい…天使みたい」

そしてアタシはすっかり意識をなくしてしまった。

しっかりと意識が戻ったのは次の日だった。

いつの間にかソルワット邸で横たわっていたアタシは、心配そうにアタシの顔を見つめる姉さんをぼんやりと見つめ返した。今にも泣き出しそうな顔でくしゃりと顔をゆがめてアタシを抱きしめる。

「無事でよかった…」

「姉さん…ごめんなさい…」

「トレストウーヴェまでいなくなったら…僕は…」

姉さんは、マールス様と暮らすようになってから何故か男の子らしく振舞うようになった。

上品だった喋り方はすっかり少年のそれとなり、一人称も僕だというようになった。

アタシは別に気にも留めなかったし、そのほうが妙にしっくりきた。

「そついえばアタシ、男の子に助けられたの…お礼が言いたい」

「男の子？」

「金髪で…、きれいな子…アタシと同じぐらいの年で…」

「ああ、その子は僕の弟だよ」

少し驚いたけれど、先ほどから室内に居たらしく、マールス様はにっこり微笑んでベッドの側までやってきた。

「彼はメルデイスっちゆうてな、父親が違う僕の大事な弟なんやで」「お父さんが…」

「そ。メルデイスの父ちゃんは格式の高いいい身分でな、僕とは一緒に住めへんのや」

マールス様は肩をすくめた。母親は同じだというのにそんなしげらみで弟と暮らせないのは不憫に思われた。アタシは掛ける言葉が見

つからなくて、しばらく黙っていたけれど、どうしてもお礼が言いたくて話を切り出した。

「アタシ、お礼が言いたくて…会えませんか、マールス様」

「ええけど…僕嫌われてるみたいやし…母さんはもうおらへんし…困ったなあ」

「トレストウーヴェ、あまり我が儘を言っつて先生を困らせてはいけないよ」

「せやけど、頼んではみる…暫く待っててや。君を運んだつてことはメルデイス、母家におけるかもしれんし」

マールス様は持っていた自分のコート羽織つて背中を向けた。なんだか申し訳なくなつて断ろうかとも思つたけれど、中々逢えない弟に逢いたがつているのはマールス様の方かもしれない。そう思つて伸ばした手を引っ込めた。

マールス様は笑顔で振り返り、手を振つた。

「外は悪天候です、僕もついて行きます」

「いや、イナーシャはトレストウーヴェについてあげてえな。すぐ戻るわ」

姉さんは心配そうに玄関先までついて行って、室内はまた静寂が訪れた。

窓をこつこつと叩くように雨が伝つてゆく。激しい雷鳴と共に、室内のランプの炎がゆらりと不安定に揺れていた。

七話

「ランガーはいるか？」

部屋のドアがノックされ、返事を待たずにドアが開いた。中で邪険にされながらもくつろいでいたロイルは、突然の来訪者を見上げて驚く。また、来訪者も伸び伸びと居座ったロイルを見つめて驚いた表情を見せていた。

「ロイル？何故ここにいる？」

「アイリーン、お前こそ何しに来たんだ？珍しいな、お前が人の部屋を訪れるなんて」

「私はこの男に用があったのだ」

アイリーンは部屋を見渡し、自分を見つめるランガーの姿を発見し、その机に膨大な資料の山を置いた。

「ロイル、出る」

「な、ん」

「いいから出る。大事な話がこの女とある」

ロイルはアイリーンとランガー二人を交互に見つめて、立ち上がった。

まだ納得がいかないのか表情は険しく、堅かったがやがてランガーの部屋を出た。

マリアはロイルを見送りに出て行き、静かになった部屋でランガーは小さく息をついた。

「セイラン・リーは死亡が確認された」

「やはり…か」

「死んだのは今から調度八年前…そうだな…」

アイリーンはロイルが出て行ったドアの方向へ一度視線を遣って、ランガーに向き合った。

「ロイルがお前に拾われた頃の一年ほど前か」

「死因は？」

「心臓麻痺だ。持病かといわれているが」

ランガーはアイリーンを見上げた。この前見たような露出度の少ない服に身を包み、表情は暗い。

空軍が撤退した今も占拠されたことを悔やんでいるのは一目瞭然だった。

しかしながら、そんな時に優しく声を掛けてやる術を知らないランガーはそのまま黙ってしまった。

「…ロイルは何の用だ？絶対安静だと聞いていたが」

「部下に世話になったそうだ。その礼に武器を作ることを頼まれてな」

「相変わらず甘い男だな、あいつは…」

アイリーンは暗かった表情をほんの少し明るくさせて笑んだ。ランガーはアイリーンが持ってきた資料を流し読みながら、やや低い声で呟いた。

「数年前…ジュリアを殺した実験体が、今騒がれている連続殺人犯と同一だと判明した」

「…そうか…一刻も早く駆除しなければいけない…」

「…この任務、ロイルに任せろ」

「ランガー、ロイルは数日の任務が重なった上…ヴァレスに刺されたあけく傷をもう一度抉られて監禁されていたのだぞ？流石に休ませてやらなければ…」

「それでもいいが、あいつはロイルにしか倒せない」

アイリーンは驚いたように顔を上げてランガーを見つめた。

そして、少し考えるように俯くと、誰宛てでもなく呟くように一言、

「…ラグナロクの研究か…」

と苦い顔をするのだった。

ロイルは部屋に戻ると、肩にぶら下げていた軍服を脱ぎ、ベッドに倒れこんで大きく深呼吸を繰り返した。体は重く、思考は曖昧な情報しか捉えない。急激な眠気が襲い掛かり、ロイルは天井を見上げて片手を挙げた。

「アイリーンが直々にランガーに用…一体なんだ？」

広げた手のひらを開いたり閉じたりを繰り返して、眠気に身を任せると、ロイルは目を閉じた。

夢を見ているような感覚に落ちて行き、そつと息を吐いて体が機能を止める。

本格的な眠りに落ちそうになった時、ロイルの脳裏に一人の人物が浮かんだ。

『俺は、お前が生まれる前からお前のことを知っているよ』
それは穏やかな声。子供に向けられた優しい声音が耳に心地よい。
顔を覗き込むようにする男の顔には見覚えがあった。そして男は自
分の頭を撫でている。視界は自分目線だがやけに低く感じられた。

『そして俺はお前が死ぬまで、お前に忠誠を誓おう。』

『ちゅうせい？』

『そうだ。俺はお前を裏切らないし、何があっても守ってやる。
それが、俺の罪滅ぼしだ』

『罪？罪なんてダリウスにはないよ』

男は少し困ったように微笑んで、抱きしめた。

『俺は、お前に許されようなんて思っていないよ。済まないな

×××××

ロイルは汗が滲んだ体を起こして辺りを見渡した。

記憶の断片が蘇り、そしてはつきりとしたダリウスと呼ばれた男の
顔。

ロイルはアシンメトリーに垂れ下がった前髪をくしゃりと掴んで汗
が伝う首筋を袖で拭った。

「……………レニ…？」

第十一章 パートナー、決別

レニは、まだ癒えぬ傷を体と心に負ったロイルの部屋の前で立ち尽くしていた。

なんと声を掛けるべきか。自分の不注意で拉致監禁されたロイルを助け出そうともしなかった自身をレニは責めていた。現状が現状で、言ってしまうえばロイルに構っている暇などなかった。しかしそれでもリックは復興を助ける傍ら、住民にロイルの目撃情報を求めるなどそれなりのことはしていた。

トレストウーヴェも部下を派遣し、ロイルを搜索していたという。思い返せば合わせる顔など無い。立ち去ろうとしたレニは、踵を返す。

しかしそんなレニを引き止めるかのようにドアが突如開かれた。

「ロイル……」

「……………」

ひどく焦った様子でロイルはレニを見上げた。寝巻き姿のまま、裸足で飛び出してきたロイルは、レニをじっと見つめて服の袖を引き、中に招き入れた。

レニは突然のことに戸惑い、何も訳を話さずドアを閉めるロイルを怪訝そうに見つめた。

「どうかされましたか？お体の具合が悪いんですか？」

「…レニ、正直に答えろ」

ロイルの額には汗が浮かんでいた。

寝苦しさか、はたまた別の作用か。顔色も悪く、今にも倒れてしまいそうだった。

「お前、ダリウス・ターナーだな？」

レニは呼吸を止めた。

すっと吸い込んだ冷たい空気が、一気に内臓を冷やすような勢いすら感じる。レニは真剣な眼差しで見つめるロイルから視線を外して言葉を慎重に探す。

「私は……」

「お前は、ダリウスという本名で、僕の過去と関わりがあるだろう！ 言え、言ってくれ、レニ！」

レニは胸元のタイを掴まれて、ようやく視線をロイルに戻した。ロイルはレニが答えないのをもどかしげに待ち、唇を強く噛んでいた。レニは静かに答えた。

「……記憶が……戻ったんですね」

「じゃ……じゃあ……お前は……やっぱり……」

「昔はそんな名前を使っていました。それは事実です。ですが今はレニ・オズボーンとして生きています、それが私です」

「馬鹿なことを言うなっ！」

ロイルは側にあつた花瓶を手でなぎ倒した。静かな部屋に盛大な花瓶の割れる音が響き、水が床に散乱した。ロイルは花瓶を倒した手をぎゅっと握り締め、俯いてよろめく。

レニがそれを支えようと手を伸ばすと、花瓶と同じようにそれは振り払われた。

「……僕は……もう誰を信じていいのか……分からない……僕自身ですら……」

信じていいのか」

ロイルは床に尻餅をつくように倒れこんだ。

レニがロイルを見下ろして、やや、視線をずらす。

「私は最低な男です…どうぞ、軽蔑して下さい…。あなたのパートナーを名乗る資格だって…持ってないのですから…」

レニはロイルの側を過ぎ去っていった。呆然とそれを見つめたロイルは、

部屋を出ようとするレニに声を掛けた。

「…いかないでくれ…レニ」

レニは少しだけ足を止め、振り返ることなく部屋を出て行った。

尋ねたのは自分だ。そう頭の中で言い聞かせるも、ロイルは涙を止められなかった。声にならない悲しみの塊が喉につつかえ、もどかしい痛みを生む。そして完全にレニがロイルがいる空間から気配をなくした途端、ロイルは慟哭して地面に突っ伏した。そして、激しく胸が痛むのを感じながら…。

「どづいづいことですか？」

街は明るさを取り戻すまではいかずとも、以前の町並みを取り戻しつつあった。その作業に毎度のごとく参加していたリックは、ケイが尋ね返したのを見つめて、少し顔を逸らして空を見上げた。深海の揺らめきをその両目で見つめて、リックは遅れて答える。

「だから、ロイルさんとレニさんが、パートナーを辞めちゃったんです」

「あの二人が…一体どうしたというんです…？何かあったとしたか思えません」

「それが、俺らも良く知らなくて…、喧嘩したとか、任務での金銭問題とかいろいろ言われているけど」

「それは…心配ですね、ロイルさん、お仕事していませんか」

「怪我で療養していたけど、命令状が今日貼り出されていて、明日から任務があるらしいです」

リックは見上げていた視線をケイに戻し、心配そうな表情のケイに軽く笑顔を向けた。

「でもあの二人だから、またすぐ仲直りするって…思っんですけどね」

「そうだといいいのですが…」

リックがへらへらと笑っていると、その後頭部めがけて丸められた雑誌がヒットした。

痛さから俯いたリックに、ケイが驚いていると、雑誌でリックを叩いた青年は、満足げに鼻を鳴らし、仲むつまじげにベンチに座った二人を交互に見つめて目を細めた。

「いって、何すんだよダリス！」

「さつさと作業に戻れ、色ボケ」

ぱしばしと雑誌を手のひらで行き来させながら、切れ長の目の青年、ダリスはリックを睨んだ。

リックは涙目でダリスを見上げて、ベンチから立ち上がった。

「最近レイディアンに配属されてきた部下のくせして、どうしてこんなに馬鹿にされなきゃならない訳?!」

「俺の用事はハゲへのリベンジ、上下関係なんて俺には関係ないんだよ、ばーか」

「ハゲとは何事だ、ロイルくんは少佐だぞ?!」

過去に合同訓練でロイルにボロ負けした海軍の兵士、ダリス。ウエINSTONは、ロイルへのリベンジを誓って、レイディアンを志願し、今は深緑の軍服に身を包んでいる。だがその胸元には海軍の誇りを忘れないようにと、サメのエンブレムが輝いていた。リックは大きいため息をつき、ケイに向き直った。

「ごめん、ケイさん。俺、任務に戻ります」

「ええ、こちらこそお引止めして申し訳ありませんでした、また」「はい、ありがとうございました!」

リックはダリスに突かれながら、任務に戻っていった。

ケイはそんな二人の背中を見つめて、昔、ロイルとヴァレスがあんな風になっていたのを思い出し、目元をこする。

「ロイルさん…君のこれからの道にもう波乱が訪れませんかよう、わたくしは祈るばかりです」

二話

任務が張り出された板をぼんやりと見上げて、ロイルは小さく嘆息する。

あれから、全くの連絡が途絶え、姿を見せないレニが気がかりで、任務に支障があるのではないかと、ロイル自身危惧していた。

側を兵士が少しの視線をくれながら通って行く。パートナーでなくなったことはあつという間に基地内を駆け巡り、陰では非難の声を囁く者もあからさまだった。こういう時、側に居てくれていたトレストウーヴェは一体何処に行ったのか。最近行方が知れず、捜索部隊を組んだとも話を聞いた。

ロイルは任務状を掲示板から剥ぎ取り、その場を後にした。勿論、任務を受ける為に歩き出したのだ。その足は何があるかと、マリルを死なせてしまったあの日から止まらずにいる。パートナーが変わったぐらいで立ち止まるような決意ではない。ロイルは気合を入れるかのように頬を叩いてしゃんと歩いていった。

任務の話をしに、アイリーンの部屋に訪れる予定だったロイルは、ふと空腹感を覚えて食堂に吸い寄せられた。この時間は任務や訓練に向かう兵士でがらに空いていたため、ロイルはただっぴろい食堂を見渡して端に腰掛けて荷物を置いた。上着も脱ぎ、食堂のカウンターへ向かう。手早く調理をする女性に声を掛けた。

「サラ、いつもの頼む」

「あら、ロイル！食堂を利用してくれるの久々じゃない？私あな

たの為にいつもビスケット注文しているんだから、たまには顔出してよね」

「すまん、早くしてくれ」

「はいはい」

サラは不機嫌そうなロイルの顔を見つめて軽く笑顔を見せた。彼女はこの食堂内で最も人気があるシェフで、その笑顔は釣られてしまいたいようなほど明るい。

ロイルには通用しないものの、ロイルはこの食堂ではサラにしか話掛けなかった。

サラは調理中の鍋の火を止め、さっと近くの棚からビスケットの業務用袋を取り出し、これでもか！というぐらい皿に盛り付けて空いた片手で牛乳を取り出す。

そして先端がフォークになったスプーンを脇に置き、そのままロイルに手渡した。

「はいどーぞ」

「すまん。釣りはいらさない」

「まいど」

今にも2、3枚こぼれそうなビスケットをお盆に乗せ、ロイルは荷物を置いた端の席を目指した。

だが、その向かいの席に、見覚えある派手な軍服を着た男の姿を捉えて眉を上げた。

「おい」

声を掛けるとキリッとした表情で振り返った青年。ルイスは、ロイルを見上げてこちらは眉根をぐっと寄せた。

「他に座るところはいくらでもあるだろう、僕が先に取って置いたんだ、移れ」

「何を言っているんだね。もう食事を始めてしまったのに席を立てるわけがないだろう！」

ロイルはルイスが食べていた食堂の定食に視線を遣る。きつちりと細かく切られたハンバーグが湯気を立てていて、匂いを嗅いだ瞬間吐き気を感じた。

「僕が退けというのか…ふん、意地でも退くものか」

ロイルは荷物を置いた席から少し離れて腰を下ろした。

ルイスはじつとロイルを見つめて、眼鏡の縁を持ち上げた。

「君、パートナーを解消したんだって？」

ロイルは答えない。

山盛りになったビスケット数枚を口に放り込んで少しへこんだ所に牛乳を流し込んだ。

ルイスは嫌そうにそれを眺めて尚続けた。

「ついにオズボーンも理解したのだろう、君と居るといいことがないだろうということに」

「黙れ、さっさと食事を再開しろ」

更に牛乳でべちゃべちゃにしたビスケットを砕いてロイルはうんざりとして返した。

ルイスは薄く笑い、ようやくフォークとナイフに手をつけた。

「私は今のパートナーとは別に個別に部隊を作るようにアイリーン

様に命じられてね。まあ、これも実力の賜物かな」

「テイナとパートナーを解消するのか？」

「まさか！彼女は私の優秀なパートナー、言ったらどう？別に部隊を作ると。今日そのパートナーをお伺いしに行くんだ」

「それは良かったな」

皮肉として返したロイルは、もうビスケットの原型を留めないそれを口へ流し込んでため息をつく。

ルイスと会つと長々しい自慢話を阿呆のように延々と続けることがロイルにとって苦痛だった。

今日も気分がいいのかまたつらつらと長話を始めたが、ロイルが聞き流してぼんやりとさっきルイスが言ったことを反芻していた。

（別部隊…そんなこと聞いたことがないが…訓練場はどうするんだ…全く）

三話

食堂から出てすぐにアイリーンの部屋に赴いたロイルは、鉢合わせたルイスに再び怪訝な表情を見せた。別部隊のことで話があるからと訪れるとは聞いていたが、同じタイミングで鉢合わせたことがロイルは不服でならなかった。ルイスはロイルをちらりと一瞥すると、何事もないようにドアをノックする。ロイルは少しルイスの肩を押して彼の頭付近を見上げた。

「退け。僕の用事は数秒で済む、そこで待っている」

「何だねハーゲン。大人げの無いことをするな、君こそその寒い廊下で落第生のように立っていたまえ」

ルイスはロイルの胸板をドンと突き飛ばしてドアノブに手をかけた。しかしそれはロイルの両手で阻まれ、ルイスは面倒そうに顔を上げた。

「退け」

「聞き分けのない子供だ」

すらりとルイスがホルスターから拳銃を取り出した。ロイルもそれと同じタイミングで刀を出す。

互いが一触即発の状態で固まっていると、ドアが突然開いて呆れ顔のアイリーンが姿を見せる。

向き合った二人を交互に見つめて、アイリーンは疲れたような声で二人入室を促した。

「何を子供みたいなおことをしているんだ。さっさと入れ馬鹿者が」

ルイスとロイルは互いに暫くにらみ合っていたが、先にルイスが拳銃を収め、ややあつてロイルも刀を引っ込めた。

「実は、お前達にこなして欲しい仕事がある」

アイリーンは普段の姿に戻って、前よりは快活さを取り戻していた。長い髪を色気のある手つきで撫でつけ、ぴしっと立ったルイスと視線を逸らして不遜な態度のロイルを見遣る。

「つまり、ハーゲンとペアを…」

「…レニが…、ロイルとのパートナーの打ち切りを申し立てた。ロイルは腕がいいから前線にはどうしても置いておきたいんだ」

「アイリーン、訓練場はどうなっている？」

「代わりに別な兵を監督としてつけておく。心配はしなくていい」
「それで、任務とは？」

ルイスは気に入らない様子だったが、アイリーンには忠実だったため、ロイルの横顔を一瞬嫌そうに見つめていたが、あまり顔色は変えた様子も無い。一方のロイルは病み上がりで信頼していたパートナーが一方的にいなくなってしまうって意気消沈しているのはあからさまであった。

アイリーンは一枚の写真を机の引き出しから取り出して、ロイルに向かつて投げた。

「そいつの顔、見覚えがあるだろう」

「…こいつは…エックス…？」

ロイルは手に取った写真を見つめて、写っていた少年の顔に驚いた。アイリーンは引き出しを開けたついでに葉巻を取り出し、側にあったランプから火を借りて煙を燻らせた。

「そいつはとある実験の被験体だった。数十年前に失踪していたが、非常に危険な為、我々で駆除をすることが決定した」

「…駆除って…こいつは人間…だろ？」

ロイルの問いかけにアイリーンは答えなかった。暫く写真に視線を落としていたが、ルイスがその写真を覗き込んだのでロイルは写真をルイスに押し付けた。

「任務は明日。仮とはいえ、互いにパートナーの掟は必ず守ること。いいな」

ロイルは煮え切らないものを抱えたまま、顔かずに一人ただアイリーンの顔を見つめた。

ルイスは早々に写真をアイリーンに返却すると部屋を出ようと踵を返した。

考え顔のロイルに、ルイスは去り際一言吐いて部屋を出た。

「せいぜい、足手まといになるなよ」

ロイルは言い返すことも忘れて、ルイスの顔を見遣った。何の反応が無いのも面白くないのか、ルイスは肩をすくめて出て行った。

ロイルはまだ何か用かと尋ねるアイリーンの顔を見つめ、ようやく一言搾り出した。

「…いや、なんでもない。すぐに出て行く」

レニは何か言っていたか？レニが何者か知っているのか？はたまた、自分が誰なのかを知っているのか？そういったわだかまりを全て飲み込んで、ロイルはアイリーンの部屋を後にした。

アイリーンは机に残されたエックスの写真を見下ろして、苦しげな表情をするばかりだった。

四話

翌日。深くフードを被ったロイルに、住民に成り済ましたルイスはただぶらぶらと街中を歩いていた。時間は正午。人で賑わった市場から少し離れて、今まではスラムと化していた路地を歩く。エックスは警備が厳重なアクアドームに幾度と無く侵入しては細い路地で人を何人も殺していく。

今までが平和だったため、家に鍵すらついていなかった住民達は今ではすっかり引きこもりがちとなってしまうた。

ルイスは写真を何度も見比べ、側を通る住民を凝視こつもしていたが、手がかりは全く無い。

現れる場所も毎回変わり、殺害方法も異なる。計画性がなく、目星のつけようがなかった。

ロイルはくちやくちやくとチューインガムを噛みながら気だるげに辺りを見渡した。

やけに真剣な表情のルイスが疎ましくすら感じる。

「君ももう少しやる気を出したらどうなんだね？」

「…僕は叩く側、お前は調査する側。」

「全く…アイリーン様のご命令でなければ誰がお前なんかと…」

ルイスはそれから延々と悪態をつき続けたが、ロイルの耳からは貫通するばかりだった。

ロイルは猫でも探すように細い土管などの穴をぼんやりと眺めたり、たまにゴミ箱の蓋でさえとってみせた。勿論エックスを真剣に捜してやっている行為ではない。

神経は研ぎ澄ましていたが、どうもやる気が持てないのが本音だった。

それはルイスがパートナーだったから。というわけでもなく、胸にぽっかりと空いた隙間がロイルの脳を鈍らせていた。

「…何があつたのかね」

「…何のことだ」

「オズボーンのことだ。君がへまでもしたのか？」

「関係ないだろう、余計な無駄口を叩くな阿呆」

「…気の毒だな、君はつくづく」

ルイスの最後の言葉は本当に憐れみを含んだ言い方だった。

ロイルは奥歯をかみ締め、ついっつかかってしまいそうなのをなんとか自分自身で押さえ込んで

平静を装う。そういえばここ最近、倒れるようにそのまま眠ってしまふような強烈な眠気がどうした訳か襲ってこない。いつもなら任務後は三日必ず眠りにつくのだが、どうも体の調子が悪かった。そのせいで何もかもうまくいかないのだとロイルは決め込んだ。

「ティナは…いい子だよ。私の言うことには忠実で。私なら、ティナからパートナー解消などされたら堪らんな…」

「何が言いたい、僕を馬鹿にしているのか貴様」

ロイルは振り返らずに声を荒げてそう返した。ルイスは少し押し黙って、小さく返した。

「君は今、とても辛いのだろう」

ロイルは答えず、ガムを膨らませた。パチン、と軽快な音と共に、自分の中の何かが崩れるような音が聞こえた気がしたのだ。

「お前に何が分かるっていうんだ…」

ロイルは素早くルイスに詰め寄り、近くの壁に背中を押し付ける。ルイスは体制を崩して眼鏡を落とした。ロイルは怒りで震える手でルイスの高級そうな私服を握り締めて続ける。

「親友に裏切られて腹を刺されたあげく…この前は銃だつて突きつけられた…そうかと思えば僕の記憶がごちゃごちゃと横から割り込んでレニがいなくなつた！そしてトレストウーヴェは行方知れず…」

ドン、とルイスを突き飛ばして、ロイルはよろよろと後退した。

「何の不自由もないパートナーがいて幸せなお前に何が分かるっていうんだ…教えて…ルイス…！」

顔を両手で覆つて膝をついたロイルに、嫌いな相手でも申し訳なさがこみ上げたルイスはなんと言葉を掛けようかと考えていた所、ぼんやりとした視界でロイルの背後に人影を感じた。

すっかり滅入つてその気配に気づかないロイルに、ルイスは眼鏡を探しながら声を上げた。

「ハーゲン、君の…」

そう言った瞬間、凄まじい轟音と共に激しい砂埃が舞い上がった。

一瞬、何が起きたか理解できず、急いで眼鏡を探し当てたルイスは、間の前に広がった光景に息を飲み込んだ。

「ばけ…もの…」

巨大な獅子の体。四本の足で立ち、調度建物と建物の間にすっぽり挟まる程度の姿で遠くの人目には触れない。そして大きく開かれた口からはだらしなく涎が流れ出ている。

ロイルはなんとかその獅子の一撃を交わして刀を構えると、その体に刃を突き立てた。

「援護射撃をしよう！」

ルイスは戦ってはいけないという掟をやや破って銃を構える。ロイルに突き立てられた傷が痛むのか、獅子は唸り声を上げて大きく腕を振りかざした。

その腕が調度ルイスの肩を掠めて大きくしなり、ルイスは数メートル先へ飛ばされて倒れこんだ。

「チツ、何だこいつは…！」

ロイルはルイスが無事であることを一瞥を送って確認し、ルイスの銃で目元を狙って射撃した。

だが弾丸は硬い皮膚で跳ね返ったようで、獅子はワニのような尾を振り上げた。

ロイルはなおルイスが装填した弾全弾撃ちこんで切りかかる。

しかしロイルは最初の一撃から、どうもこの獅子の様子がおかしいことに気がついていた。

まるで今まで戦ってきたかのように衰弱していたのだ。

それでも凄まじい勢いを見せる獅子に、ロイルは胸元へと転がり込んだ。

心臓を一突きしてやろうと刀を構えた瞬間、その動きが止まる。遠くで、ルイスが叫ぶのが耳に届いた。

「ハーゲン！」

そして躊躇つてはいけないと分かっているながら動けなくなってしまったロイルに、獅子は大きく爪を振る下ろすのだった。

五話

ロイルは鮮血が噴出し、その多量の血を浴びて呆然とその場に座り込んだ。

ルイスは突然のことに一体何が起こったのかついてゆけず、真っ赤に染まったロイルの横顔を見つめて、更にロイルの足元に視線を遣った。

先ほどまで巨体を存分に振るっていた獅子はさつと姿を消し、代わりに胸から血を流した少年が横たわっていた。

ロイルの右手に握られていた刀の持ち手を両手で掴んで離さない少年は、柔らかく笑んで口から血を吐き出した。

そして定まらない視線でロイルを見上げて目を細める。

「やっと…楽に…」

そう一言呟くと体が色を無くして行き、少年は石像のように灰色になる。ルイスがもう一度瞬きした瞬間に少年の体はまるで泥人形のようにパツと碎けて砂となった。ロイルは馬乗りになっていた少年エックスの中から真っ赤な球体が転がり出すのを見つけて目を見開く。

ルイスは一人状況が把握できずにロイルを見つめた。

「な…何があつたんだ、ハーゲン？」

ロイルは手のひらでキラキラと輝く一つの球体に視線を奪われていて答えない。

ルイスが球体に視線を遣る。そしてその存在が何であるのかに気づいて驚くと、ロイルを押しつけるように近づいていった。

「これは…っコア…！？何故、人間の体にこんなものが…」

「…じ…だ」

「ん？何だ、ハーゲン、どこか怪我したのか？」

「僕と…同じだ…」

ロイルは胸の辺りをぎゅっと握りしめて叫んだ。

あの時、獅子の胸に飛び込んだロイルは、心臓を突き刺すべく、刀を構えた。

その瞬間、目に飛び込んできたのは、無数の血管のような管が盛り上がった傷。それが心臓の辺りに広がってドクドクと脈打っていた。それはよく見下ろす自分の胸の傷と酷似していて、

それに気を取られていた隙に、獅子は腕を振り上げてロイルの刀を自らの胸に差し込んだのだ。

事故だったのか、本意か。

見事に獅子の胸を貫くと、獅子は少年に姿を変えてことりと倒れこんだ。

そして砂になった少年から転がり出たのは、人形の力を増幅させるコアだったのだ。

これが意味しているのは一つだけ、ロイルが押さえた胸には、全く

同じコアが埋め込まれているという事実だった。

レニは、ランガーの目の前に立ち尽くし、これで十分程度が過ぎたことを知った。

ランガーは相変わらず無表情でロイルに頼まれた武器の製造を行っていて、マリアは険悪な雰囲気の二人を不安げに見つめているのだった。

「それで、貴様の用事はそれだけか」

「…私が尋ねている方です。答えて下さい」

「…思うに、この事はあいつ次第だろ。知るも知らないもあいつが求める次第」

レニはランガーの背中を睨むつけて肩を掴んだ。ランガーはやや抵抗したが無理やり正面を向かされ、着物の襟元を強く引っ張り上げられて忌々しくレニを見上げる。

レニは真剣な表情で返す。

「ロイルさんの過去を思い出させるのは危険です。これ以上彼に刺激がないように、またあの部屋に…」

「閉じ込めてどうなるんだ？」

ランガーはレニの手を振りほどいた。マリアは悪い雰囲気にごうごうもできないのがもどかしいのか、エプロンの端を握っていた。

「また記憶を消して、あいつはまた同じ事を繰り返すのか永遠に」

レニは少したじろいで視線を逸らした。

「確かに危険だろうが、何度やったって記憶はいつか蘇る。あの部屋から出したのはお前だ。そして、研究に関わってしまった我々と同じ罪を、自分だけがどうにか逃れようと結局はロイルに接触する」
「私はそんなつもりは…！」
「じゃあ、お前が何にも知らないガキを会おう前からパートナーとして指名したのは？あのわがままに忠実なのは？」

レニは少しよろめいて、唇をかみ締めた。返す言葉が見つからない。ランガーは鼻で笑ってレニに向き合った。

「全てお前が許されたいからするエゴだろ？善意を押し付けて少しでもロイルに許されたいと思うからだろう？所詮お前がやっていることは、自己防衛なんだよ」

レニは思わず、固く握った拳をランガーに振り上げていた。だが、そんなランガーの前に、かつて彼女の妻だったジュリアの面影のあるマリアがさつとそれを庇うように両手を広げて立ちはだかった。勿論勢いがついた拳はそのままマリアに直撃して、マリアは本棚に体を打ち付けてよろめいた。

「わ、わたしは…そんなつもりは…」

「だったら、どうしてロイルがとパートナー解消したんだ？怖かったんだろ、お前の全てを思い出されることが…」

「…ランガーこそ…どうかしています…死んだ子供の名前を…つけるなんて」

レニは部屋を逃げ出すように出て行った。

大きくため息をついたランガーは、マリアに手を差し伸べて抱え起こした。

マリアは悲しげな表情で俯く。海の外には冷たい雨が降り出していた。

冷え切った室内。俯くマリアを抱き寄せ、ランガーは静かに目を閉じた

第十二章 ラグナロクの研究（前書き）

また長い過去編です。今回は物語の核ですので、丁寧に書きたいです。

第十二章 ラグナロクの研究

私は、母の死体を見下ろしていました。ただ冷静に、それが赤の他人であるがごとく見つめていました。心の中は薄暗く、汚い憎悪が凝り固まって、私の中で渦巻いていました。これは、私が望んだことではない、悪いのは私ではないとどこかで考え、澱んだ目で私を見つめる母から目を逸らしました。

数十年前

ランガー・エイボリーンの才能は逸脱していた。彼はわずか十歳という若さでその才能を買われて軍直属の兵器開発に関わる研究のチームの一員として迎えられた。

彼の才能を妬み、若いのにも関わらず莫大な研究資産を与えられて開発に口を出すランガーは、周りの大人からは倦厭されていたのは言わずもがな。

彼は入ったばかりのチームを抜けて独自に開発を進めた。

彼の友人であったマーリスは、ごく普通の少年としてすこし、仕事で引きこもったランガーをひっぱり出しては遊びに出かける仲であった。

「なあランガー、あない所で息がつまって死なない？俺、ちよつと寄るだけでもう駄目やわあ」

「死なないよ、むしろ楽しさ。僕は僕だけの研究が許されるんだから」

「何の研究？」

「…人を…殺す研究、だよ」

マーリスは眉根を寄せる。理解しがたいと顔で返したマーリスに、ランガーは肩をすくめた。

「大人は人を殺すのが仕事の人だっているんだ。その人たちが効率的に別な人間を殺す為の兵器を作っているんだ」

「…楽しい？」

「えっ？」

「そんな研究して…、楽しいんか…？」

ランガーは少し目を見開き、やがてまっすぐとした眼差しで返した。

「楽しい…よ。僕の研究が認められて。」

「そう」

マーリスもまた、素っ気無く返した。

「マーリス」

マーリスの母は体が弱かった。持病で長生きはできないだろうということを、幼いながらもマーリスは悟っていた。今日は珍しく外出していたのか、羽織を片手で持ったまま、少し火照った顔で、そつとマーリスを抱き寄せた。

「いい話よ。お母さん、新しいお父さんを連れてきたの」

「あたらしい…おとうさん？」

「ええ、そうよ。あなた、寂しいと思って」

マーリスの母は扉を開いた。

目を開けていられないほど眩しい逆光で、目が眩んだが、

二人の人影が伺えた。マーリスが絶句し、何もいえないでいると、母は笑顔で続けた。

「ヴィル・ターナーさん。それと、息子さんのダリウス・ターナーくん。あなたのお兄さんよ」

背の高い髭を生やした男の側で、身なりのいい姿をした少年が立ち尽くしていた。その表情は冷淡で、なにか物を見ているような感情のない二つの瞳が、絶望に浸って惨めな姿のマーリスを映し出していた。

それからマーリスは母の腕を振りほどいて、挨拶の一言も無しに家を飛び出した。慎ましやかな生活と、優しい母。趣味で粘土を固めて作っていた人形が褒められることが嬉しい幸せな毎日を、

生活支援という鎖で繋ぎそうな男が介入し、マーリスは我慢ならなかった。

しかも男には子供がいる。あんな冷酷そうな子供と仲良くしろというのが間違いだ！

そう考え出しては止まらなかった。思わず飛び出したマーリスは、一生懸命自分を呼ぶ母が気がかりだったが、そのままランガーの研究室まで走っていった。それからは、一度たりとも振り向くものと胸に誓って…。

一話

「それは君の母親がもうすぐ死んでしまっからさ」

ランガーの研究室に、逃亡者よろしく逃げ込んだマーリスは、事情を話した先突き付けられた言葉に些か戸惑った。素直、それでいて鋭利なその言葉は真っ直ぐマーリスの胸をえぐり、しばらくは反論ができないほどだった。マーリスは少し視線を落とし、ランガーの靴先を見つめた。

「どういうことや？」

「つまり、君が一人にならないよう、わざと息子がいる男を選んだんだろう。多分死んだ後君の生活援助をお願いしての婚約さ」

「俺は…こんなこと望んでへんよ…」

「それは母親に言うべきだろうね」

ランガーは再び作業に戻ってマーリスに背を向けた。ドライな彼の反応には慣れていたが、今日という日には若干堪えるものがあり、マーリスはランガーの白衣を掴んでなんとか彼の気を引こうとした。

「ランガー、お前、お前の研究で…母さんは助けられへんのか？」

ランガーは少し手を止めて、大きな瞳でしっかりマーリスを見つめ返した。

どんな罵倒や冷やかな言葉が返ってくるかと思えば、ランガーが返したのは意外な一言だった。

「実は僕もそれを考えていた。そのために、君の力を貸してくれ」

マーリスは少し驚いてランガーを見上げる。ランガーは普段どおり無表情だったが、薫にもすぎる気持ちであったマーリスには神にも等しく思えた。そんな友人を強く抱きしめて、マーリスは何度も礼を繰り返す。

「ホンマに、ありがとう…、俺、出来る限りのこと手伝うから言うてや…！」

「…じゃあ、マーリスに早速お願いがあるんだ」

マーリスが喜ぶ傍ら、ランガーは冷やかな目をそっとマーリスに向けて、ほんの僅かに口角を上げるのだった。

それから、マーリスは帰宅し、進まない足取りで母屋に着いた。母は嘆いて、顔を合わせてくれないかもしれない。まだ、あの二人はいるだろうか。様々なことを考えて、正面玄関で足踏みをしていたマーリスは、不意に声を掛けられて顔をすばやく上げた。

「そんな所で立ってないで、入ったら？君の家…だろう？」

家のテラスの入り口に背中を預けて立っていたのは、義兄となるターナー家長男、ダリウスだった。

ダリウスはテラスからマーリスの姿を見つけて声を掛けたのか、そっとテラスの階段から降りると、マーリスの正面まで歩き出した。マーリスは思わず体を硬直させてその様子を見つめた。

「それとも入りにくい？心配しないで、父さんはもう仕事に出かけ

「だから」

澄ました顔でそうマールリスに語りかけるダリウスを、マールリスは忌々しく思った。

土足でソルワット家に介入してきたこの親子を、マールリスはなんとかしても追い出してやろうと力んでいた。ややダリウスを睨みつけながら、マールリスは静かに返した。

「…別に。今入ろうと思ってたんや。」

マールリスはわざと肩をぶつけると、その側を過ぎ去る。ドアを開いて閉じようとした瞬間、ダリウスが思い出したように声を掛けた。

「あ、ねえ」

「…なんや」

「君のお母さん、お腹に僕のお父さんの子供がいるんだ」

マールリスは足を止めてダリウスに振り返った。ダリウスは少し微笑んで、ゆっくりと繰り返す。

「僕達に、弟ができるんだって」

「嘘…やる?」

マールリスは突然告げられた更なる真実、絶望的な母親とあの男の關係に口を開けたまま立ち尽くす。

それでは、母親がたとえ元気になってくれようとも、決して親子になるという事実は変わらず、新しい兄弟が増えるなど、受け入れがたいことであった。

マールリスは思わずダリウスの側まで走っていくと、彼の肩を揺さ振

って確かめる。

「嘘…や…母さんは体が弱い、もし弟なんかできたら…」

ダリウスは静かにマーリスの手を振りほどいて、淡々とした口調で言いよんだマーリスの言葉を続けた。

「出産したら、死んでしまいかもしれないね」

そうしれつとした顔で言いかけた。本日二回目の、躊躇い無い鋭い言葉だった。

三話

マールリスはまだ胸の中に渦巻く感情から逃れられずにいた。突然母に恋人がいたことを知らされて、しかも男に年上の息子がいる。それだけではなく、母には男との間に新しい命を授かっているとも聞かされた。

あまりに沢山の事が知らされ、マールリスは頭の整理がつかない。落ち着こうと水を取りにキッチンへ向かうと、マールリスの母は少しまどろみながら編み物をしていた。マールリスに気づいたのか、手を止めて笑顔を向けた。

「あつ、おかえりなさい。ごめんなさいね…急に話したものだから、きつと不安になったのね。でも今度は挨拶しなきゃだめよ」

マールリスはその母の姿が酷く、消えてしまいそうに儚く思った。そして、ランガーが協力してくれると言った事を思い出して、自分が母を守ろうと強く誓った。

マールリスはコップを置いて、母を後ろから抱きしめた。

「安心してな…もう、大丈夫やから」

「そう、それなら良かったわ」

マールリスはこの時、この全ての事が後に自身の、そして世界までも巻き込むような運命を持っているとは到底思ってもみなかった。ただ病気の母を救って幸せに過ごしたいという、ごく普通の望みが、歯車を狂わせているとも知らずに…。

翌日、マーリスは学校を休んでランガーの研究所を訪ねた。学費を母に出してもらっているのです、なんだか申し訳なさがあったが、ランガーが昨日の別れ際、どうしても見せたいものがあると言ってきたので、大人しく従った。自転車を研究室の脇に置き、窓からランガーの部屋を覗いた。

しかしランガーの姿がない。マーリスは暫く窓から様子を伺ったが、帰って来る様子も無いので室内に入ることにした。廊下を少し歩いた所で、マーリスはランガーの姿を見かけて声を掛けた。

「ランガー！」

ランガーは両手を突っ込んだままの白衣から片手を出してそれに答えた。マーリスが近くまで寄っていくと、ランガーはそれに合わせて無言で歩き出した。

「実は、君にして欲しいことがある」

「して欲しいこと？ なんか、大げさやなあ……」

「ああ、大げさだ。」

ランガーはポケットから束になった鍵を取り出してその中の一つを鍵穴に差し込んでドアを開いた。黴の臭いと、湿気を纏った生ぬるい風が鼻を刺激した。

「まず、これを見て欲しい」

ランガーは側にあつた幕のかかつたケースを見せた。中には普通のモルモットが二匹鼻をひくひくと動かしてこちらを愛らしい瞳で見つめていた。マーリスは眉根を寄せてそれを見つめ、もう一度ランガーの顔を見遣つた。

「これがなんやつていうの？」

「実はこの二匹は、ある実験に使われて二日前に死んでしまつたんだ」

「な、何を阿呆な……」

「これが二日前撮られた写真だ」

マーリスはモルモットの写真を食い入るように見つめた。特徴やまだらな模様が良く似ているが、確かに死んでいる。口から泡を吐いて、片方のモルモットはひっくり返つていた。

ランガーは驚くマーリスの顔を見て薄く笑い、胸元から一つの球体を取り出して見せた。

「これは、僕が研究し、発明した哺乳類の生命能力を飛躍的に向上させる物。このモルモットが装着している。名前はコアだ」

「せいめい……のうりよく？なんやそれ」

「例えば、君の学校に君より足の速い子供と、そうでない子供がいて、このコアを鈍足の子供に装着させるとする。そうすると身体能力が跳ね上がり、その足の速い子供に追いつくどころかプロの選手だつてなれる速さになる。そういう物だ」

「ほ、ホンマにそんなモンが……？じゃ、じゃあもしかして母さんも？！」

ランガーは薄く笑つて、頷いた。そしてその真紅の球体をマーリスに渡した。

「君、前に機械人形を作ったろう？言葉が下手くそな」

「初期号のことか？ああ、まだ改良中やけど」

「これは哺乳類でしか試したことがないんだ、もしかしたら役に立つかもしれない。今度新しい人形を作ってくれないか？」

「構わんけど…役に立つんか、それ…」

「君の機械人形同様、試験中だ。まだ人間には使えない」

「そう、か」

ランガーは力強くマーリスの肩を叩く。マーリスが浮かかない顔でランガーを見上げると、ランガーはニツと珍しく笑顔でマーリスを励ます。

「大丈夫、きつとこの研究で君の母さんは助かるよ。安心するんだ」

「ランガー…」

マーリスは手のひらで鈍い光を放ったコアを転がした。この小さな球体が、自分の母の新しい命となってくれるはず。そう願ってマーリスはランガーに頷いてみせるのだった。

四話

マールリスはランガーに別れを告げ、研究室から出て扉を開いた。ふと、扉の前に遮るように誰かが佇んでいるのに気がついたマールリスは、少し顔を上げて見上げた人物に目を丸くした。そんなマールリスにお構いなしに研究室へと側をすり抜けて通っていた人物。ダリウスは声を掛けられて足を止めた。

「ぬ、盗み聞きしとつたな？」

「…何のことだい？」

ダリウスは振り返らない。マールリスは一気に頭に血がのぼっていくのを感じた。そして歯止めが効かない怒りの感情は力任せにダリウスの右手を握り、無理やりにもこちらを振り向かせようと自分側に引き寄せた。ダリウスは大人しく彼の表情を眺めるように振り返る。

「お前、俺を尾行しとつたな？そんなに俺が目障りなんか？」

ダリウスは言葉を選んでいった。どの道なんと言おうが目障りだと思っっているのはマールリスで、怒りの先に傷ついて悲しむのもマールリスだった。ダリウスはなるべくいい兄弟として過ごしたかった想いがあったため、中々言い出せずにいたが、それを仲介するように研究室で傍観していたランガーが声を上げた。

「ダリウスは僕が呼んだのさ」

「ランガー！？なんでや…」

「彼はこの研究に加担してくれている、唯一の協力者なんだ。」

「なっ…」

マーリスは言葉を失った。母を健康にして、彼女に元気を出してもらいたい。そしてこの結婚が間違이었다と気づいて欲しいと思っ
てランガーの提案に乗っている。それなのにも関わらず、この研究
をダリウスが手伝っていたなんておかしな話で、鋭く勘付いたマー
リスはぱくぱくと口を動かしてようやくランガーの顔を見つめて問
うた。

「…母さんは…お前の実験台にされようとしとんのか…？」

ランガーは答えない。

マーリスはシヨックのあまり言葉が出なかった。ではこれまで励ま
しだと思っていたものは全て自分を円滑に操る為の言葉だったのか。
そう理解すると、マーリスはふらりと後退して弱弱しく呟いた。

「お前は…最低だ…」

「マーリス！」

マーリスは研究室を飛び出して帰路を走った。涙が出てくるのを必
死に服で拭いながら、走り続けて、マーリスは小石につまづいて転
んでしまう。手のひらに大きな擦り傷を作ったマーリスは倒れたま
ま動けなくなつた。友人はこの自分を利用しようとした。そしてま
んまと騙されていた自分が激しく許せず、マーリスは地面を叩きつ
けて大きく叫んだ。悲しいのか、悔しいのか、それすらよく分から
ずに。

マールリスは帰宅して、母がいないことに気がついた。部屋には母の手紙があり、病院に行つてくるといふ簡潔な内容だった。マールリスはベッドに倒れこんで、泥だらけの靴と靴下を投げてそのまま目を閉じた。なんだか疲れて動けない。このまま眠ろうかと思つていと、部屋がノックされてマールリスは目を開けた。

「マールリスさま、オキヤクサマデス」

マールリスは体を起こした。客？一体誰が？そう思つてしているとドア越しに聞き慣れた声がして、マールリスは体を強張らせた。

「先ほどは…すまなかつた」

「……………」

「弁解するつもりもない。僕は君の母さんを実験台にしようとしていた。君の良心を利用してね」

マールリスは暫く黙つていたことにした。それは声を掛けているランガーも分かつているのか、返事を待たずに言葉は続いた。

「でも、君の母さんを助けられるかもしれないのは僕だけだということも頭の隅に置いておいてくれないか。それだけだ」

「…一つ、聞きたい」

「…なんだ？」

「なんでダリウスが実験に参加したのか、聞きたい」

「…彼は君と六つ離れているが、優秀な研修医なんだ。この実験で不備があつた場合対処してもらえるように頼んだ。そして、彼のお母さんにもなるからね」

「…ランガーは、俺のこと分かつと思うてた…違つんか？」

ランガーは少し間を置いて、静かに答えた。コトリ、と小さな音がしたので

額をドアにつけたのだと何となく推測できた。

「じゃあ、マーリスは僕のこと分かるかい？」

「……………」

「分かり合うことが全てじゃないだろう。言葉を持って生まれたのだから、鈍い僕には言葉で教えてくれないか、マーリス」

マーリスは幼かった自分の行動と言動に、突然恥ずかしくなって枕に突っ伏した。そしてとても小さな声で、

「…入れよ…まだ話したいことがあるんだ…」

とランガーに宛てた。

五話

ランガーはおずおずとマーリスの部屋に入った。友人だった為、入ること自体初めてではなかったが、マーリスはまだ怒っているのではと思うと気が気ではなかった。マーリスはランガーを側の椅子に座らせ、自分はベッドに腰掛けたまま、言葉を探していた。いざ入ってきてもらうと、何を言えばいいのか分からなくなった。

「…実験のことだけど…やるやらないにしろ、口外法度でお願いしたい。他の研究員に知られたくないんだ」
「…それは構わんけど」

マーリスはランガーを見遣った。中性的で整ったランガーの横顔には憂いがあった。

こここの所研究に力を入れてろくな睡眠もとってないことを聞いていたし、マーリスは次第に不安になった。母の体より、細くて弱そうなのこの体はいつまでも元気にこうしていられるのか心配になる。視線に気づいたのかランガーがくすぐったそうに笑った。

「何だい？」

「あ、いや…。顔色悪いで…ちゃんと休息もせな…」

「ああ、有難う」

マーリスは覚悟を決めて、尋ねた。

「なあ、どうしてあいつがこの研究に加担してんねや」

「彼は確か君とは六つ離れていたね…彼はあれでいて優秀な研修医で…この研究には君のお母さんに手伝ってもらおうと思っていたか

ら、不備がないように頼んだんだ」

「研修医…、医者のお卵なんかで大丈夫なんか？」

「恐らく。彼の腕は確かだね、研修期間が終える頃に誘われている病院があるらしい」

「ふーん…」

マールスは冷たいダリウスの表情を思い浮かべた。確かに彼が医者だというのならイメージぴったりの仕事に違いない。腕がいいとは信じがたいが、頭が堅そうなのは見ただけで分かるほどだとマールスは思った。

「しかしこのコアを使った研究、実はダリウスが反対しててね」

「反対？」

「リスクがあるんじゃないかって言うんだけど…今のところ死んだモルモットの健康状態に異常はない。彼は新しいお母さんを心配しているのかもしれないね」

「…その言い方はやめろ。あいつの母親なんかやらへん」

「…すまない」

マールスはため息をついてそれ以後は口を出さなかった。重苦しい空気を変えようと、ランガーは話題を切り替えた。

「そういえば、この人形新しいものだね。僕との約束覚えていてくれていたのか」

作業机に無造作に置かれた人形のパーツに、ランガーは感心したように声を上げた。

マールスはやや机に視線を遣って、照れくさそうに返した。

「あ、ああ。まだそれは試作品やけどな」

「でもすごいと思うよ。この滑らかな皮膚は一体なんだ？」
「家畜、特に猫のものを使っとる。死んだ野良猫や、飼い猫の皮を
たまに頂いてるんや」

ランガーはパーツにそつと手のひらを寄せて猫の皮が張られた人形
を撫でた。確かに今まで陶器で造られていたものよりはずっと人間
らしく、丈夫であった。ランガーはしばらくその感触を楽しみ、マ
ーリスに返る。

「素晴らしい出来だ。完成を楽しみにしているよ」

「ああ、出来たら一番にもっていくで」

ランガーは満足げに頷いて、床に置いていたコートを手に取った。

「じゃあ、また連絡する。君の母さんの容態が悪くなったら言っ
てくれ。」

「分かった」

「それから、どうするか考えておいてくれないか。確かに僕は君の
母さんを実験台にしようとしていた。それが許せて僕を信用すると
いうのなら、僕を頼ってくれて構わない」

「……………」

「…それじゃあ」

ランガーはドアノブを引き、部屋を出た。マーリスは何か言わなけ
ればと思ったが、既に遅く。
見えなくなったランガーへ、

「俺こそすまんかった」

と密やかに呟いた。

それから数カ月後、学校から帰宅したマールリスは、家の前に山ほど詰まれた荷物を見上げて、嫌な予感を感じていた。業者らしい男達が荷物を次々とマールリスの自宅に運び入れている。マールリスはその内の通り過ぎた一人の業者に声を掛けた。

「あの、今ソルワット邸に入っていったには誰の荷物ですか？この家の者なんですが…」

「あ、えつとー…ターナーさんのお宅から届いた荷物ですね。」

「…そう、ですか。ありがとうございます」

「いえ！どうも！」

爽やかに去っていった男の背中を見つめて、マールリスは大きく頷垂れる。ついにターナー家とソルワット家は同居という形をとつたらしく、またしても何も聞かされていなかったマールリスは言い知れぬ怒りがこみ上げてくるのを抑えられずにいた。

「母さん！」

マールリスの母は、その引越しの手伝いをしていたのか、大きなお腹で素早く歩いてくると、マールリスの姿を見つけて笑顔になった。一方のマールリスは苛立ったように鞆をリビングに投げつけて、階段から自分を見下ろす母親を睨んだ。

「何やのこれ！聞いてへんよー！」

「ふふ、ごめんなさい、びっくりさせたくて」

「確かにびつくりはさせられたけど、こんな大事なことは言わんとあかなくて言ったやる！」

「そうね、でもこれからは家族が増えるわ、きつと楽しいわよ？」

何食わぬ顔で微笑む母をうんざりと見上げて、マールリスはつい、激昂して側にあつたターナー家の荷物を振り払った。業者が高く積んでいったその荷物たちは呆気なく重力に従って落ちていった。

「…いい加減にしてや…いつも嫌な思いするんは俺だけや…」

「ま、マールリス、どうし…」

マールリスが本気で怒っていることによつやく気づいた母は、驚いて階段に足をかけて降りようと身を乗り出した。マールリスは背を向け、自室に戻るうとした瞬間、予期せぬ物音に素早く振り返った。

「母さん…！」

階段下、ピクリともしない母親に青ざめたマールリスはすぐさま駆けつけ顔面蒼白となつて母を呼んだ。

しかし返事はなく、苦しげに歪められた母の表情を見つめ、マールリスは頭が白くなっていき、思わず流れ出た涙をそのままに母親を揺さ振った。

「母さん！しつかりしてくれ！母さん！」

その手はまだ顔も見ぬわが子を守るように腹へと添えられていた。

六話

マーリスは子供分も併せて自分の体重よりはるかに重い母親を抱きかかえてランガーの研究室を訪れた。たまたまダリウスと一緒にだったランガーはすぐさま研究室と隣接した病院にマーリスの母を担ぎ込み、取り残されたマーリスは呆然と研究室の前で立ち尽くした程なくして、ランガーが帰ってくると、複雑そうな顔でマーリスを見つめた。

「母親は無事かもしれないが…子供は流れているかもれない。」

「…そんな…俺のせいや…」

「何があつたんだ…?」

「ターナーの家がうちと同居することになって…それでカツとなって…」

「ともかく、君も落ち着くんだ、今研究室の鍵を開けるからそこで休んで…」

ランガーがそつとマーリスをいたわり、その背中を叩いた。

そしてそのまま研究室で落ち着かせようと歩みを進めると、マーリスに容赦ない言葉が浴びせられた。

「卑怯者！」

マーリスが驚いて振り返れば、そこには付き添って病院に赴いたダリウスの姿があつた。勇ましく吊り上げられた眉と目は、威圧感さえ感じられた。マーリスがたじろいでいると、ダリウスはマーリスに近づいてその頬を平手打ちした。

「君は僕達から逃げてばかりで、拳銃の果てにこんな結果になってしまつて、どう責任を取るんだ！」

「な、俺は…」

「彼女の實の息子だからつて、僕の父さんの子供を殺してもいいつていつのか！」

「そんなこと…！」

「やめろ、ダリウス、マーリスだつて反省して…」

「うるさい、ランガーお前は黙つていろ！」

ダリウスはランガーの腕を振り払い、二度目の打撃をマーリスに与えた。

マーリスは衝撃でバランスを崩して膝をつき、殴られた箇所を手を添えて何も言えずにただダリウスを見上げた。

「君の母さんは本当の母親のように僕に優しくしてくれる素晴らしい女性だつた…そんな女性の子供である君がどんなに僕らターナー家を恨もうが許せた…でも、こんなことなるなら…！」

ダリウスは強く唇を噛んで悔しげな表情をしていた。そこでようやく、マーリスと同じように、目の前の少年は母を愛していたことに気がついた。それからは声さえ出すことが出来ず、マーリスは涙を流した。自分だつて、したくてこうなつたんじゃない。でももしダリウスと真剣に向き合つていたならば、こんな事態にはならなかつただろう。マーリスはそう自分を責めた。

「もう、顔も見たくない…僕の前から消えてくれ…！」

あの時、母が妊娠していると告げられたとき、マーリスは母親と、自分に対する皮肉を言われていたと感じていたマーリスは、初めて見たダリウスの本音を前にして、あれは喜びを伝えようとしてた意

思があつたのだとかみ締めた。冷徹そうな印象に振り回されて彼の
本質を見抜けなかった自分の愚かしさに、マールリスはただただ絶望
感を覚えてうずくまる。

病院に戻っていったダリウスと、うずくまって動かないマールリスを
見つめて、ランガーもまた苦しげな顔をするのだった。

それから、マールリスの母親とお腹の子供は奇跡的に助かり、入院
することとなった病室で、ダリウスは浮かない顔をしていた。

「ふふ、驚かせちゃってごめんなさいね。この子が無事でよかつた
わ」

「…はい。本当に心臓が止まってしまうかと思いましたが…」

「…、マールリス。どうしているかしら？」

「…すみませんが分かりません…、喧嘩をしてみましたので」

「あら」

マールリスの母は穏やかに笑みを浮かべた。ダリウスは申し訳なさそ
うに口をつぐんでしまい、そんなダリウスを励ますかのように彼女は
ダリウスの頭を撫でた。

「元気を出して。あの子はいいい子だから、きっと許してくれると思
うわ」

「…はい」

「私がいなくなっても…兄弟三人で…仲良くしてね」

ダリウスはバツと勢いよく頭を上げて、今にも泣き出しそうな声と

顔で強く訴えた。

「軽々しく、そんなこと言わないで下さい…僕はあなたに救われたんです…母さんのぬくもりも皆あなたから教わりました…僕はまだ、あなたと親子でありたい…」

最後は消え入りそうなほど弱弱しく呟いたダリウスに、母はそっと腕をまわして温かい抱擁を与えた。ダリウスはぼろぼろと涙をこぼしてそれに答える。

「血が繋がっているマールリスももちろん大事な息子だけれど、あなただってとても大事な息子よ…弟をよろしくね」

「…はい…母さん…」

そしてダリウスはある決意を固めていた。ぎゅっと握った拳はその決意の現れだといえた。

決意から三日後の夜、その母の死を見つめるまでは、彼の意志は運命に忠実に歩き出していた。

七話

病院から帰宅したダリウスは、新しく自分の部屋となる一室のドアの前で座り込んだ少年に顔をしかめた。マールスは随分前からダリウスを待っていたようで、ダリウスにようやく気がつくといいで体を起こした。

「…一体何の用だ」

「…おこがましい…真似やとは思っ…けど」

マールスは俯いて、ポケットから一枚の紙を取り出して、すつとダリウスの目の前に差し出した。

顔も見たくもないと言った手前、無視してしまおうかとも思ったが、その紙を受け取ったダリウスは、たった一言、人物の名前が書かれた紙を見下ろし、眉根を寄せた。

「何だこれは…？」

「…あんたから、子供ができたと聞いたとき、実は考えていたんだ」

紙には綺麗な字でメルデイス、と刻まれていた。

ダリウスはそれがマールスが予め考えていた弟の名前だと理解し、その紙を突き返す。

「だったらなんだっていうんだ。もういいだろう、早く自分の部屋にかえって…」

「…こんな俺でも、必死になって考えたんや！お前と、お前の父さんは気に食わなかったが、それでも母さんと弟は血が繋がってるんや…」

マールリスは目をぎゅっと閉じて大きな声を出した。些か驚いたダリウスは、真剣なマールリスの言葉をようやく受け止める。

「母さんに、伝えたらいいのか？」

「頼む…俺は合わせたらいい顔がないんや…」

ダリウスはもう一度差し出された紙をそっと受け取って、マールリスの横を過ぎ去った。

その瞬間、ふと思い出したように最後、声を掛ける。

「…あの実験、お願いしようと思う」

「えっ？」

「これで母さんが助かるなら…合わせる顔も、その間に作ればいいだろう」

そう言っただリウスは自分の部屋に入ってしまった。

覚悟は決めた。自分が彼女を救ってみせる。そう誓うダリウスのドアを挟んだ向こう側では、複雑そうな顔をしたマールリスが一人、考え込んでいたのだ。

それから、無事に彼女とダリウスの父の間にできた子供は生まれた。ダリウスは部屋にこもってしまったマールリスに何度か声を掛けたが、彼は返事すら返さず、中から響く作業の音だけが、彼が生きていることを伝えていた。

真っ白な病室は、清潔感を感じさせた。
病室のドアが開く。大きな花束を抱えたダリウスは、女のすぐ側に腰掛けて花束を渡した。

「おめでとугоざいます、あいつも喜んでました」

「そうなの？ふふ、まああの年で初めての弟ですものね」

「名前を考えたそうですよ」

「あら、どんな？」

「この子の名前はメルデイス。メルデイス・ターナー」

強い風が流れ込む。新しい命に命名された瞬間、母親はふっと目を細めて微笑む。

「いい名前……」

ダリウスは微笑んで、彼女が抱いていた子供をそっと抱き上げる。

「心配しなくていい。お前の母さんは、僕が……いや俺が守ってあげるから」

無邪気に笑つ子供を、そっとベッドに戻して、ダリウスは母親に向き合った。

「母さん、来て欲しいところがあるんだ」

「えっ？でも私は入院中だし……」

「大丈夫、すぐ側だから」

ダリウスは母の手を引いたもう迷いはなかった。目指すのはランガ
ーの研究室。わが子が心配で振り返る母を無理やり病院から出して、
ダリウスはぎゅっとその手を握った。

八話（前書き）

若干グロテスク注意です

八話

彼女の容態に変化ないよう、そっと優しく連れ出したダリウスは、研究室のドアを閉めた。

母は不安げに怪しげな実験器具を見つめて、どうしてここに連れてこられたのかを尋ねた。ダリウスはそんな母親に大丈夫だからと声を掛けて、手術服に着替えたランガーを見遣った。

「母さんの体はこれから生まれ変わるんだ」

「どういうこと？」

「今まで侵されていた病から開放されて健康になれる。弟とハイキングにだっていけるようになる、出産したら是非ここに来て欲しいと思っていた」

「なんなの？一体何が始まるの？」

ダリウスは混乱気味の母親の背中を撫でて、優しく抱きしめる。

「大丈夫、母さん大丈夫だから」

そして、ランガーは彼女の腕に麻酔薬を打ち込んで、彼女を横たわらせた。不健康な体は出産後だというのに痩せ細っていて、見るだけでも不憫に思えた。ダリウスはそっとランガーに任せて研究室の隅に座り込んだ。

「…マールリスは？」

「呼んだけど返事が無い…」

「そうか、もう一度呼ばなくていいのか？」

「いい、特に反対もしていなかった」

静かに目を閉じた。その脳裏には優しい彼女の面影と、生まれたばかりの愛らしい弟がよぎった。

「始めてくれ」

数十分後、病室を訪れたマーリスは泣きじゃくる弟と、空のベッドを見つめて焦燥していた。

今日はダリウスに話しかけられて、弟の顔を見えてくると言っていたのを思い出し、そして重なる実験を頼んだという言葉。それに当てはまる現状に、マーリスはどうするべきなのかを考えていた。

わんわんと泣き叫ぶ弟　メルデイスをあやし、マーリスは近くの看護婦に母がいないことを告げ、メルデイスを預けた。

「きつと散歩だと思います、俺捜してきますんで」

そう言つて走り出した足は、少しもつれていた。心配だった。

やはりやめておこうと言えなかつた自分に焦りを感じ、渡り廊下から研究室へと走つていったマーリスは、異様な空気を感じていた。

なにか張り詰めた空気に、人だかりができた研究室。

一抹の不安を感じて人ごみを掻き分けると、その現場に我が目を疑つた。

一面部屋は血の海だった。

壁や天井は元の色を忘れてしまいそうなほど赤く染まり、様々な肉片が飛び散っていた。

そしてその中心でうずくまった一人の少年と、一人の少年。

片方は小さくうめき声をあげながら顔をおさえ、もう一人は完全に動かない。

更に二人の側には、お腹が大きく開いた一人の女性が横たわっていた。

マールリスは人ごみを押しのけて、その女性まで駆けつけると、顔を確かめて飛びついた。

「母さん！母さん！」

もちろん既に息絶えているとは分かっていたが、体全体が悲しみと憎悪に支配されてその場から動けない。もう笑ったり泣いたりしない母の姿そしてこうなった原因もすべて含めて憎しみがこみ上げ、マールリスは吠えた。

二人はそれに答えない。ただ、三人の間には凄まじい記憶がインプットされて悲しみだけが転がっていた。

九話

それから、ランガー、ダリウス、マーリスの道は違った。

ランガーは研究内容をがらりと変えて、コアの製造と研究を永久に放棄し、ダリウスは医者を目指すのをやめてしまった。そしてマーリスは軍人となり、人形と兵器製造に携わる仕事を選んだ。そして何より衝撃的に、コアを推薦して兵器を作るようになった。誰よりもこの存在を疎むだらうマーリスが、何故だかコアを秘密裏に製造を継いで人形を兵器活用する道を進む。

そして何も知らない少年、メルデイスの運命も、この時既に間違った方向へと、着実に進んでゆくのだった…。

ランガーはレニが去った部屋で、一人思索しているように見えた。眉を寄せ、机に頬杖をついてマーリスは昔のことを振り返っていた。それはひと時も色褪せることなく胸に焼きついたあの日の記憶。友人である、マーリスの母親を実験台とし、生命能力を高めて救おうとした欺瞞がああ惨劇を生んだ。

マーリスの母はコアの強大な力に体が耐え切れず、腹を破裂させて死んでしまった。

もがき苦しみながら死の間際、胸を掻き穿ったマーリスの母の鋭い爪が己にも飛び火し、そのときから左目は光を失った。

しかしその代償は左目だけではなく、今では多くの人が悲しみ、苦しむ結果をも巻き込んで、

ランガーは自分の罪の重さに、耐えられない時があった。レニの苦しい去り際を見つめて、その思いは再び明るみにさらけ出された。

「ランガー様、お顔色がすぐれませんか…少しお休みになられては」
マリアは心配そうにランガーの顔を覗き込み、彼が気に入っているカップに紅茶を注ぎ込んで差し出す。ランガーは浮かない顔でマリアを見上げて、薄く笑んだ。

「…大事ない…。だが少し家に戻って進めたい仕事を片付けてくる。留守番を頼むぞマリア」
「畏まりました」

ランガーは椅子からゆっくりと立ち上がって、部屋を出た。部屋をでる間際、少し自室を振り返った。昔は散々潔癖だと言われていた自室だとは思えないほど荒れている。ランガーは胸の内で自嘲して、ドアを閉めた。

ロイルはエックスの死体を抱えて、基地へと歩き出した。自立つてはいけないからと、教会の裏を回ってこそそと歩く二人に会話はない。

突然襲い掛かってきた野獣はエックスと呼ばれていたこの少年だった。そして彼は死ぬ間際、ロイルの刀を自分から胸へと突き立てて自殺してしまった。ルイスはロイルの言葉を信じたが、あの現場は誰が見てもロイルが無抵抗の少年を殺したとしか見えなかった。ルイスはやや視線を落としたまま、言葉を探す。

「あれは一体…何だったのだろう…」

「…さあな」

「ハーゲン、君はこの少年と面識があったのだろう？君が見た時も獣のような姿だったのかね？」

「いや、人間だった。この通りの姿で細い路地に返り血だらけで座っていた。」

「…そうか…」

ルイスはエックスに視線をやった。自害したとは思えないほど安らかな表情をした少年は、まるで眠っているかのように静かに抱えられている。人形だと言われれば、信じられるかもしれない、そう思った。ロイルは手のひらに握った血まみれのコアの存在が頭から離れず、今度こそこれに関してはレニヤランガーを問い詰めようと覚悟した。自分の過去がもしかしたら特殊なのかもしれないことは薄々気づいていて、それを知りたい気持ちが今はとても強かった。

それも、ヴァレスが妹を残酷的に殺したと告白してから、胸の内がつつかえて何をしていても自分の真実だけが知りたかった。そうすれば何か変わるわけでもないのだが。

「…ハーゲン。僕はお前が嫌いだ、そしてこの先もずっと馴れ合おうなんてことは微塵も思わない」

「…お互い様だな」

「だが、…少しだけお前の気持ちを今なら、分かってやりたいと思う。」

「…憐れんでくれんでもいいと何度言ったら分かる。この気持ちがお前に易々分かっただら、僕はこんな胸が焼け付くような感覚を覚えたりしなかつただろうよ」

「辛いならそれこそお互い様だな、ハーゲン。そんな弱気な君を見ているのが僕は一番不愉快なのだよ」

ルイスは無理やりロイルからエックスの死体を奪って、体に返り血をこすりつけた。ロイルが制止しようと思えば、それを遮ってルイスが大げさに笑った。

「これで、フェアじゃないか」

ロイルは何か言おうと口を一度開いたが、すぐにそれはため息に変わった。

そして弱弱しく、ロイルはルイスから視線を外して返した。

「アンフェアだ…お前がそんなに格好つけると」

二人はそうこうしている内、基地の裏側までぐるりと戻ってきたことに気がついて足を止めた。

裏口から入って棺おけを作り、すぐさま教会の葬儀を頼もうと思っていたが、裏口に入った途端、出くわした男に、ロイルとルイスは目を見開いて驚いた。

髪は跳ね放題、目は細く色白の男が突っ立っている。基地の軍人ではなく、ラフな姿でたまたま出くわした男は、血まみれの二人を見つめて特に驚いた様子もなく、ただ黙っている。

秘密裏に事を運ばせたかった二人は、裏口に立っていた一般人の男を見上げて言葉を失った。

すると男から不意に声がかかる。

「お宅ら、仕事帰り？」

言葉がいやに訛っている。聞きなれない訛りに少し困惑したが、やがてルイスがロイルの目の前に割り込んで代わりに話した。

「見ての通り。我々は秘密裏に調査していた為、ここで見たことは他言無用でお願いしたい」

「構わんよ、僕もちよ〜っと用事があつてね。その、何、タゴン・ミヨ　でいいわ。いや、お邪魔しました」

軽く笑って受け流した男に、ルイスは妙な違和感すら感じた。一人死体をぶら下げた血まみれの人間を見つめてあんな風にいられるなんて普通の人間ではないのは明らかだった。

彼が何者なのかと怪訝そうに見つめていると、通り過ぎようとしていたその男はロイルの前で立ち止まった。

「…あれ？君、どうしてここにいるんや？」

「は？え、ちよ、何を…」

男はロイルの腕をにこにこ笑みを浮かべたまま強く捻り、持ち上げた。ロイルは痛みに顔を歪めると、中からごろりと重い音を鳴らしてコアが転がり出た。ロイルがしまったと素早く手を振り払ったが遅く、男はコアは拾い上げて、ロイルを見つめた。

「こない危ないおもちゃ持ち歩いて、いけない子やね」

「ハーゲン！」

困惑して、油断しきっていたロイルはみぞおちを強く殴られて膝を折った。ルイスは急いで銃を構えて、男へと銃口を向けた。男は静かに笑みをたたえたまま、動きが鈍くなったロイルを抱えた。そうして、震える手で銃を構えるルイスに向き合う。

「撃つてみ。その弾、僕には当たらないで」

ルイスは頬を冷たい汗が伝うのを感じて、安全装置を外し、ぎゅっ

と力を込めて引き金を引いた。ダン！と鋭い銃声が響いて、硝煙がたちこめた。弾丸は、男の耳を掠めて飛んで行き、反対側の壁に身を預けて動かなくなった。ルイスは言い知れぬ恐怖を感じて、銃を落とした。

「な？言つた通りやる？」

そして男は銃を拾い上げて、躊躇なく銃口をルイスへと向け、引き金を引いた。

第十三章 邂逅（前書き）

次の次の章で完結です！

第十三章 邂逅

ルイスは撃たれた肩を庇いながら、這うように地面を進んで基地の軍人を捜した。幸い、すぐにルイスは発見され、ドーナによる処置を受けた。死体一体と血まみれのルイスを発見した兵士は、リックだった。リックは狼狽しきってしきりに手術を行っている部屋の前を行き来し、落ち着きなくルイスの回復を待っていた。

死体はアイリーンの指示で処理され、今は教会に運ばれていた。リックの側にいたダリスは、唇を噛んで大きく頂垂れていた。

「一体…何があつたつていうんだよ…？」

「フォスター大尉…、確かロイルくんと任務に出たはずなんだけど…レイシェン曹長と同じでまた行方不明に…」

「…ロイルが、撃つたのか？」

リックは素早く振り返って、ダリスを睨んだ。ひどく落ち込んだ様子のダリスは、リックを一瞥し、面倒そうにため息を吐いた。

「だったら、誰が撃つたんだよ…あとのガキの死体は何だつていうんだよ…」

「ロイルくんは無闇に人を殺したりなんかしない、彼は命の重さを知っている…、ロイルくんが、フォスター大尉を撃つ理由だつてない！」

「…俺は…フォスター大尉を尊敬していたんだ…！お前こそあいつを買い被り過ぎじゃないか？！」

ガタン、とやけに大きく椅子が倒れる音が響き渡った。ダリスとリックはようやく落ち着きを取り戻したのか、押し黙って、リックは

ダリスの隣に腰をおろした。

「…思えば…ロイルくんが苦手だって思っていたのは、俺にどこか似ているからなんだと思う」

「…お前と、あいつがか？」

「うん、ヴァレスのこととか、誰より辛かったのはロイルくんなのに、俺はヴァレスの一番になれたと思っていた。だからヴァレスがいなくなったとき、辛く当たってしまったって、彼、年相応の顔で僕を見上げていて、思った」

リックは壁に背を預けて、手術中と手書きされた文字を見上げて続けた。

「俺の中の強がっている部分は、彼そのものなんだって」

ダリスは考え込むようにリックの言葉に何か返すことは無かった。リックはダリスを見遣って、深く頭を下げて目を閉じた。

「それからずっと思い返すんだ。彼が僕をあの村でみつけたあの日のことを…」

トレストウーヴェは質素なドレスに身を包み、まだ誰も来ないダイニングで一人静かに泣いていた。突っ伏した机はすっかり彼女の涙で濡れてしまい、小さな嗚咽がダイニングに響いていた。

イナーシャは妹がダイニングに入ってからずっと泣いているのを知

っていたが、入っていつて慰める言葉も持ち合わせておらず、ただ、そのドアの前で彼女の悲しみの声を聞いているしかなかった。

「姉さんは卑怯よ…どうして私も巻き込むの？私がいなかったら…ロイルだって、ロイルだって」

トレストウーヴェはイナーシャが既に外にいることを知っていたのか、そう叫んだ。

返事をしようか迷ったが、イナーシャは落ち着きを持って答えた。

「君を巻き込んだのは、それが正しいと僕が思ったからだ。確かに、悪かった」

「もうお仕舞いだわ…私が愛した彼は記憶を取り戻したらいなくなってしまう…！ああ、姉さん、私はアンタを恨むわ！」

だんだん、とテーブルを叩く激しい音と共に、トレストウーヴェは繰り返す。

「彼が死んだら私も死んでやる！それがアンタへの罰なのよ！」

イナーシャは強く拳を握って涙を耐えた。自分の復讐の為、復讐を望んでいなかった妹を踏み台としている自分が許せずにいた。こうして改めて口で言われると尚更胸に突き刺さり、イナーシャはその場に崩れて顔を覆い隠した。

「許して…ジュリア姉さん…！」

イナーシャに細長い影が落ちた。顔を覆い隠してたイナーシャは目の前に佇む男に気づかなかった。

男 レインは貼り付けられただけの笑顔でイナーシャに声をかけた。

「とうとう、悲願の日がやってくるわけだね、イナーシャ」

「…！レイン！」

「お前にいい事を教えてあげよう」

レインはそつて体を曲げて、イナーシャの耳元へ吐息を吹きかけるように優しく告げた。

「兄さんが帰ってきたよ。さあ、人柱の妹を連れて兄さんの部屋に来るんだ」

イナーシャは目を見開いた。そんなまさか、いやらしく微笑んだレインはさぞ愉快そうにイナーシャの驚いた表情を見つめた。

「メルデイスの、お帰りだ」

二話

ロイルが連れ去られる数時間前、レニはなんとなく訪れたロイルの部屋で、数十年ぶりに義弟と再会することとなった。自分の誤った判断で行った実験によって母を亡くして以降、どこかおかしくなった弟、マーリスの動向を危惧していた。血が繋がった弟、メルデイスが生まれてから、不安定だった彼の心も幾分か和らぎ、暫くは父のヴィル、マーリス、メルデイスの三人で暮らしていたが、その父がまた新たな女と結婚してからというもの、マーリスとは少し疎遠になり始めていた。

それでも彼は母と唯一自分との血のつながりがあるメルデイスを溺愛し、出来る限りは会いに来て挨拶も交わしていた。

過去のことを腫れ物のように扱わず、マーリスは吹っ切れたとも言っていた。

それが本当のことであるかのように、軍での兵器開発を一任されていたマーリスは、軍費用、家庭用の機械人形で世界を発展へと導いたのも事実。

そして、ランガーは知らされていなかったが、コアを使った研究も引き継いでいた。

「久しぶりやなあ、兄さん」

十少しの子供だった頃、生真面目で母親思いの堅い顔をしていたマーリスの面影はどこにもなかった。レニはロイルの部屋でまるで来ることが分かっていたかのように待ち構えていたマーリスに驚いて声も出なかった。

つい先ほど、ランガーにロイルの話をしていたことを、急に後ろめたく感じた。

「…マリス！どうやってこの警備の中…」
「ま、それはこの子のお陰かな？」

マリスの背後に隠れるようにしてたのは、マリアだった。
レニは一瞬息を止めてマリアを見つめ、また再びマリスに視線を戻した。

「やはり製造者には逆らえないか…」

「何やら、ランガーが好きに弄ってくれたみたいやけどなー、僕が折角オーダーメイドで作った彼女に無粋な細工しよって」

マリスはマリアに備え付けられていた暴走を止める装置を放り投げて笑顔を向けた。

レニは苦い顔をしてマリスを睨んだ。

「一体、何の用だ…？」

「別に。最後や、見ておこうと思てな、この小ざかしい組織を」

「さい…」

「まあ、兄弟のよしみで教えたるけど、僕は明日この組織を本格的につぶす為に手を下す」

マリスはつぶす、という言葉を強調して、先ほど投げた装置を足で踏み潰して薄く笑む。

「見たやろ？僕が作って海軍のあほ共にやった戦闘機！すごいやろっ？」

レニはマリスに近づいて胸元を掴んだ。咄嗟にマリアがそれを防ごうと前に躍り出たが、レニはあっさり彼女を再び払い除けてマ-

リスの頬を殴った。

「貴様、人の命を何だと思っているんだ！」

「もう命なんてなんの価値もない…僕には不死の術がある」

マリスはレニの手をぐつと掴んで顔を近づけた。

「世界は僕に逆らえない。それを明日、証明してやる」

マリスはレニを突き飛ばすと、右手を上げた。その瞬間、二十階もあるロイルの部屋の窓を突き破って、デンが姿を現した。

「ほなさいなら。また来世で、あは、あはははは！」

マリスはそのままデンに抱えられて窓から飛び降りた。マリアはマリスに加担してしまったことを後悔してか、その場にうずくまってしまう、取り残されたレニは、もつれる足で立ち上がると、一階を目指して走り出した。

（あいつはまだあの屋敷に住んでいる！母さんと住んでいたあの屋敷に！）

三話

ロイルはぼんやりした頭で見慣れない部屋の天井を見上げた。起き上がると硬く、もうボロボロになったベッドに寝かされていたことに気がついて痛む腰を撫でた。

部屋は荒れていた。物が散乱して、すぐ近くの窓は割れて落ち葉が舞い込んでいた。昔は綺麗な色をしていたであろうカーテンももはや見る影も無く、縦に裂けてレールにぶら下がっていた。

「目、覚めた？」

ロイルはようやく自分が連れ去られたのを思い出して身構えた。ベッドの向かい側の綿が飛び出た椅子に腰掛けていた男。マールリスはロイルに穏やかな笑顔を見せた。そして手のひらでエックスから出てきたコアを転がして、それをそっと側に置いた。

「久しぶり…いつても、覚えてへんのか」

「お前は…誰だ…もしかして、僕の過去を知っているのか？」

「…君から記憶を奪ったのは、なんせ僕やからね」

ロイルは耳を疑った。記憶を奪う？突然現れて何を言い出すのかとロイルは警戒しながらマールリスの言動の意味を探った。マールリスは足を組みなおし、体を少しだけ乗り出してロイルに尋ねる。

「ここ、覚えてへん？前に君は調査に来てたってレインが言うてたんやけど」

「調査…」

ロイルは部屋を改めて見渡す。左右に倒れた本棚は確かに見覚えがあった。前に、人形の製造者と思わしき男の屋敷を調査したとき、似た部屋にトレストウーヴェと入った記憶を思い出す。

そしてレインという男とも、ここで出会ったのだ。忘れるはずがない。

「じゃ…じゃあ、お前が人形の製造を…」

「…八年ほど前の話：僕はいつも通りこの屋敷の地下にあるアトリエで、人形の製作をしとった。需要があつてからは僕一人で作つていたわけでもないんやけどな。」

マールリスは椅子から立ち上がって、両手を組んで後ろに回した。

「そして、納品日で僕は人形を納品する為に外に出た、数週間ぶりに。」

マールリスは思い返すように目を閉じて深く嘆息した。ロイルは尋ねた事とマールリスが話す内容が違う為、問い詰めた気持ちに駆られたが、どうしてだかこの話が耳についてとても流せる気がしなかった。とても重要で、自分に関わる話であると、何故だか直感したのだ。

「この屋敷の隣の村は知つとる？タクスという名前の村で、もう人は住んでへんけど」

「…少し前に調査で赴いたことがある。」

タクス村は忘れもしないあの日、熊の調査に訪れていた陸軍兵士をたまたま発見してアクアドームまで連れ帰った村。そしてあの村は最初に人形の暴走で朽ちた村だった。

マールリスは頷いて、続けた。

「なら、あこが最初に人形が暴走した村やいうことも知つとんのやな。その通りであの日は僕は屋敷のすぐ側まで襲い掛かるような巨大な火柱を見た。」

「ちよ、ちよつと待て、お前が襲わせたんだらう？」

「もしも君なら、一番最初に襲う村をわざわざ近隣で自分の家が危険に晒されるような場所を選ぶんか？」

「……………！」

「あれは…半分は、事故やった。僕が駆けつけた時、村は様々な赤で染まっていた。そして、僕は村の中央で見つけたんや」

マールリスは顔を上げて、真剣な眼差しをロイルに向けた。真剣、それでいて、どこか悲しげな表情。ロイルが息を飲んで言葉を待っていると、マールリスは信じられない一言を最後に呟いた。

「君の死体を」

レニはロビーを走り抜けてアクアドームの町をひたすら駆けた。

疲れは感じない。ただ胸の内の不安感だけは拭い去らなかつた。走っている間は、マールリスが捨て吐いた言葉が何度も頭を駆け巡って落ち着かない。門を開いて海底通路を走り出した瞬間、レニは足に不調を感じて立ち止まった。

スジが切れていたのだ。普通なら到底もう一度走り出すことは出来なかつたが、それでもレニは走った。立ち止まっている時間さえ惜しく感じた。

海底通路を進んでいると、一人の青年がレニに気がついて声を掛けた。

「オズボーン様？どうかなされたんですか？そんなに走って…」

「すみませんが時間がありません、またあとで」

「あ、オズボーン様！」

青年、キールはもう一度レニを呼び止め、真っ白な歯を出して微笑んだ。

「お急ぎなら俺を使ってください！俺、外なら馬車出しますよ」

四話

「どういうことだ、それは…?」

ロイルはマールリスが一体何を言っているのか理解できなかった。しかし表情には真実であることを物語っているかのように、演じられた風はない。ロイルは胸に手をあてて、隣に座っているマールリスの肩をつかんで揺さ振った。

「何を言っているんだ貴様！お前は僕の一体何なんだ！」

マールリス答えず、手も振り払わずただ首を振った。ロイルは胸がざわつくのを感じて、マールリスを言及することを止めることが出来なかった。頭は痛んできて彼が突きつけてきた過去の話が、まるで他人事のようだった。ロイルはマールリスを揺さ振るのを止めて、肩を落として床を見つめた。

「僕は…何者なんだ…」

マールリスはロイルと座っていたベッドから立ち上がって、数歩歩き出した。ロイルはそれを見遣る気力すら失せて、ただ朽ちた屋敷の床をぼんやりと眺めていた。マールリスは自分の背丈ほどある本棚を軽くずらして、大量に散らばった本を足先で蹴り上げて、地下へと続く階段の扉を開いた。

「心配せんでええ。君は今日から、生まれ変わる、いや、生まれ戻るんや」

マールリスは右手を差し出した。

「それで、辛い過去から永遠におさらばや。」

冷たい風が吹き込んでいた。微かにマールリスの前髪を浮かせるその冷たい風を頬に受けて、ロイルもまた、立ち上がる。

「僕はお前の思い通りになんかならない。絶対に」

そして、マールリスが何か言う前に一人、階段がある穴へと走り出したのだった。

レインは、マールリスが到着する数分前に彼のアトリエで一人、考え込むように俯いていた。

まだめそめそと泣き続けるトレストウエを慰めるイナーシャは、レインがやけに静かなことを不審に思っていた。

「ねえ、レイン。一つ聞いていいかな」

「どうぞ」

「君…、どうしてそんなに落ち着いているんだい？」

「ふふ、」

レインは笑いを堪え切れなかった、というように笑ってみせると、椅子から立ち上がって無数に部屋に飾られた中身の無い人形達を見つめた。そしてイナーシャに振り返って、尋ねた。

「どうしてそんなことを聞くんだい？もしかして僕が死んでしまうからかい？」

イナーシャは答えない。レインは薄く笑って、壁の人形を蹴り上げた。

「僕はそうだとは思わない。むしろこの時をあいっに出会ってからずっと望んでいたんだ」

「レイン？」

レインは空を仰ぎ見るように両手を広げて、天井を見上げた。そしてひとしきり笑って、くるりと一回転する。やけにご機嫌な様子のレインに、イナーシャは不気味だとすら感じた。

「さあ、ロイル。早く僕のところに来て。そして僕を人間にしてくれ！」

部屋は、異様な空間となった。レインの狂ったような高笑いとは相反してすすり泣くトレストウーヴェエの声。そして、一人じつと時を待つイナーシャ。役者が揃いつつあるこの空間は、これから始まる儀式の前菜であるかのように、静かに事が運んでいった。

五話

ロイルは飛び込んだ部屋の人数の多さにまず驚き、やがてそこにいる面々を凝視してまた驚いた。階段からは一本線ですぐにドアが一枚伸びていて、そのままそのドアを勢いよく開いたロイルは、自分の存在の場違いさに冷や汗を感じた。レインはロイルの到着をすぐさま気がついて飛び跳ねるように喜んで、人の良さそうな笑顔を浮かべていた。

「ロイル！ やつと来たね！」

「貴様…！」

「ロイル！」

ロイルは高い少女の声にハツとして振り返った。数日前から行方が分からず、ロイルも心配していたトレストウヴェの姿に、ロイルは戸惑いを見せた。

「とれす…トウヴェ…どうしてこんな所に？」

「なんや、賑やかやね」

先ほどまで感じなかった気配に、ロイルは身を硬くした。その声に反応したのか、レイン、トレストウヴェ、イナーシャの三人も深く頭を下げる。ぼん、と軽く両肩に乗せられたマーリスの両手は、いやに重く感じた。

「ここは…一体？」

「僕のアトリエ。どや？ 綺麗な子ばかりやろ？」

無理やり肩をつかまれたまま、ぐるりと室内を見渡させられたロイルはうつとうしげにその手を払ってピアスに触れた。マールリスは猫のようなロイルの態度に、わずかながら笑んで部屋の真ん中の一段高くなつた場所に立った。

「僕は復讐ん為に、一人の男と、一人の少年、一人の老人を招待した。」

マールリスは手を高く挙げ、よく響くように二度手を叩いた。少しの静寂があつて、ロイルの背後の扉が開いた。

「さあ、これで役者はあと一人つちゆうことや」

車椅子が鈍い音を立てながら室内に入ってきた。扉の先は階段だったため、階段は杖を使わされたのか、車椅子に座った老人の息は浅く荒い。そしてその車椅子を引いていた少年は、澱んだ目でロイルを見つめて、静かに涙を流した。

「ヴァレス…」

その隣には、なんの表情も無い、彼の死んだはずの妹を連れて…。

レニは馬車で屋敷に無理やり乗り上げ、馬はいななきと共に少し暴れて止まった。キールは壁と衝突しそうになった馬を宥め、素早く降りると馬車の扉を開け放った。

レニはキールに感謝して、胸元のタイを投げ捨てた。

「キールさん、至急戻ってアイリーンさんに伝えて欲しいことがあ

ります。」

「で、ですが、オズボーン様はどうやってお帰りに？見たところ通信機も持っていない様ですし…」

「私のことは構いません。明日、空軍が再びアクアドームを襲撃します。それに備えて住民を避難させ、警備をすることをお伝え下さい」

「な、りよ、了解致しました」

キールは再び御者席に戻り、心配そうな表情でレニを見下ろし、敬礼する。

「レニ武運を」

レニは笑顔でその敬礼に答え、走り出した。

昔、マーリスが母と二人で暮らしていた懐かしいあの日の屋敷の中を。

レニはすぐに二階へと駆け上がり、マーリスの書斎を目指した。例えば、レニはこの時と同じように階段を駆け上がっていたのを思い出す。タスク村が炎上して、その村の中心で横たわっていた弟の死を知ったあの日。動揺した自分の心をそのまま思い出していた…。

六話

ロイルはこの状況が一人理解できずにいた。裏切ったはずの友人、ヴァレスが死んだはずの妹とともに姿を現し、一人の老人を連れてきた。そして自分の顔そっくりな少年レインはやけに嬉々としていて、トレストウーヴェは目を腫らし、その側に少女が立っていた。なんの役者で、お互いがお互いに何の関係性も感じられない。戸惑うロイルに、ヴァレスが声を掛けた。

「ごめん、ロイル」

「ヴァレス…お前は一体こいつらと何をしていたんだ？…それにセイラは…」

「…八年前、セイラは死んだんだ。大きな事故だった…」

ヴァレスはゆっくりとロイルに歩み寄って、その目の前で立ち止まった。頬には依然として涙が流れ、何故そんなに悲しげであるのか、謝罪の意味もロイルは全く理解できない。

ヴァレスは鼻声になりながら、その話を続ける。

「彼が製造していた人形の突然の暴走に、巻き込まれたんだ。」

八年前：

ヴァレスがまだ幼かった頃、彼の遊び相手はもっぱら妹のセイラだった。良家の跡取り息子だったヴァレスに将来の不安はなく、両親も仲むつまじくヴァレス自身、幸せを感じるが多々あった。

彼は時々、家の垣根からしばらく行つたところに、ポツンと離れて佇む一軒の屋敷にお邪魔していた。母屋であるその屋敷は、自分の家と引けを取らない豪華な佇まいで、少し傲慢だったヴァレスはこれぐらいの屋敷の子供が自分にふさわしいと常々思っていた。

ある時、妹が無くしたボールを探しにあの垣根に頭を突っ込んだとき、彼と出会った。

「君のボール…？」

細い両手でしっかりと抱えられたボールを見上げ、ヴァレスは更に視線を上げた。身なりのいい少年の服を身にまとった少女が一人、生垣から顔を出していたヴァレスを見下ろしていた。ヴァレスはすぐさま立ち上がって、少女を見つめた。

「お前、…女のくせして男の格好なんかして変な奴。ボール返せよ」
「ぼ、僕は男だよ」

肩ほどまで伸ばされた艶のある金髪に中性的な顔が性別の判断を鈍くさせていたが、確かに言われてみれば少女らしき体全体の丸みはない。ヴァレスはふてくされて少年を見遣った。

「お前、名前は？」
「えっ？」
「なまえ！名前ぐらいあんだろ！」
「メルデイス…ターナー」

ヴァレスは満足そうに鼻を鳴らして頷いた。

「俺はヴァレス。よしっ、じゃあお前、俺の子分にしてやる！いい

か、俺のことは兄貴って呼ぶんだ」

メルデイスは少し戸惑ったが、やがて恥ずかしそうに頬を染め、静かに返した。

「はい、兄貴」

それから、ターナー家の息子ともあって、両親も素直に喜んでくれる友人ができ、ヴァレスはメルデイスとよく遊ぶようになった。学校や教養の時間がある時以外はずっと彼と過ごし、今まで寂しい思いをしてきたメルデイスにとっても有意義なことだった。

「なあ、メルデイス。お前の二番目の兄ちゃん変わってんな」

「えっ、そうかな？優しいよ？」

「優しいとか関係ねえよ。ただ、ああいうのってほら、変人っていうんだろ」

「そ、そんなことないよ……」

「ただな、俺、お前の兄ちゃんに憧れてんだ」

「どうして？」

ヴァレスは広い空を見上げて、呟いた。

「ああいう人ってさ、自由だろ」

七話

そしてそれから間もなくして、運命の日はやってきた。

その日は、朝から天気が優れず、家事を任せていた人形が洗濯物を取り込んでいる様子をヴァレスは部屋からぼんやり眺めていた。同じ部屋で過ごす妹のセイラは風邪で寝込んでしまい、ヴァレスはその看病を率先して行っていた。

「お兄ちゃん、今日はメルデイス、来ない？」

「ばか、メルデイスにお前の風邪がうつるだろ。明日良くなったら会えるさ」

自分と年が三離れた妹を守らなければという強い意志が、いつからか芽生えていた。彼女は体が弱かった為、お嬢様だといじめられた時はボロボロになってもそれに立ち向かってきた。

真つ赤な顔で辛そうな表情を見せるセイラを見つめて、ヴァレスは頭をそつと撫でてやる。セイラはくすぐったいのか微笑んで毛布に隠れた。

「ねえ、お兄ちゃん。私、大きくなったらね、お兄ちゃんと結婚したい」

「ばかだな、俺とお前は結婚なんか出来ないんだぞ」

「ふふ、そうだね、じゃあ私、メルデイスのお嫁さんになる」

ヴァレスは目を丸くして尋ね返す。

「な、なんでメルデイスなんだよ?!」

「お兄ちゃんとできないなら、同じくらい大好きなメルデイスと結

婚するの」

「だ、駄目だ！兄ちゃんそれは許さんからな！」

ヴァレスの必死な様子に笑んで、セイラは目を閉じた。

「でも、現実になればいいのに…きつと楽しい…」

ヴァレスは咄嗟に笑顔が自分の顔から消えていたことに気がついた。そして、セイラの手を握ってそつと返す。

「そうだな、そうなるよう、俺も頑張るよ」

外の雨は一層強くなり始めていた。嵐の前兆である強い風の音を聞きながら、ヴァレスはろうそくに息を吹きかけるのだった。

夕方過ぎ、雨足がひどく、部屋が冷えてきたのでブランケットを取りに一階に降りたヴァレスは何となく外の様子が気になってカーテンを引いた。すぐに雨が激しいことが分かり、閉じようとしたとき、視界に信じられないものが映って、ヴァレスは手を止めた。

「あれは洗濯物!？」

風で大半が飛んでいってしまったが、物干しには確かにシーツがはためいていた。ヴァレスは驚いてキッチンへと駆けてゆき、夕食の支度を始めていた人形に声を掛けた。

「おい、洗濯物取り込み損ねているぞ、このジャンク！」

人形が振り返った瞬間、ヴァレスは一瞬、背筋が凍りつくのを感じて息を止めた。キッチンには小麦粉で荒れ果て、真っ白だった。食材は四方に投げつけられた跡があり、人形はボールにあけた卵が既に無くなっているにも関わらず、かき混ぜ続けていた。

「母様に報告しないと…！」

ヴァレスは後ずさりして走り出した。今なら寝室かもしれない。そう思って勢いよく、ノックせずに寝室のドアを開け放った。

「母様！」

途端、顔に生暖かい何かの飛まつがかかり、ヴァレスは足を止めた。ベッドに横たわる母と、斧を振り下ろした人形が視界いっぱい広がって、ヴァレスは言葉を無くした。一体この悪夢は何なのか。縫い付けられたようにその場から動けず、立ち尽くしたヴァレスは、セイラのことを思い出して走り出した。

背後は振り向かず、一気に階段を飛ばし、子供部屋へ飛び込む。鍵をかけ、ヴァレスは荒い息をなんとか押し殺してセイラの無事を確認した。

「セイラ！」

「ど、どうしたのお兄ちゃん?! 怪我、してるの?」

「話はいいい、人形がおかしいんだ! 逃げよう、セイラ！」

ヴァレスはセイラの手をとって、彼女を背負って窓を開け放った。強い暴風雨が吹き付けて、ヴァレスは目を細めた。

「しっかりとまってるよ!」

そして勇気を出して、窓から飛び降りた。

幸い、窓からはよく落ちて逃げ道に使っていたため、怪我はしなかったが、人形が追ってくる恐怖を感じてすぐさまヴァレスは走り出した。どこかに匿ってもらおう。そう路地まで出て村を見渡した瞬間、絶望的な現状に気がついて立ち止まった。

村は炎で覆われていた。雨が振りしきっているのを忘れるように激しい炎を吹き上げる民家の数々に、馬なりになって人に襲い掛かる人形たち。ヴァレスはどこにも居場所がないことをようやく知り、村から出て、すぐそばの森へと駆けた。そこまでは人形も手が届かないのか、人や生き物の気配を感じないその森の一角で、ヴァレスはセイラを降ろした。

「待ってる！すぐ兄ちゃん帰ってくるから！」

「怖いよお、助けて、兄ちゃん！」

「メルデイスが心配なんだ！隠れている、セイラ！」

そして、風邪をひいた妹の為、片手に持っていたブランケットを頭からかけてヴァレスは再び走り出した。メルデイスが心配だった。人形の巣窟のような場所でいて、生きているのか不安だった。

（メルデイス…！）

しかしそれと同じ時刻。メルデイスはふらりふらりと件の森をさまざまに歩いていた。やたらと体を引きずるように歩いてきたメルデイスは、片隅で泣いているセイラを見つけ、側に寄った。

「メルデイス！聞いて、お兄ちゃんが…！」

「…げる、」

「えっ？」

「僕から逃げる！セイラ！」

八話

それから森から戻ったヴァレスが見たのは、ひどい有様だった。うずくまったメルデイスの側に、自分の妹らしき少女の遺体が転がっている。だが顔を潰されていたため、彼女かどうかはつきりしない。ただ、肩から下に、血まみれのブランケットがかかっていた。ヴァレスは膝をついて、その遺体にすりより、慟哭して側のメルデイスに掴みかかった。

「いったい…何があつたつていうんだ…おい、メルデイス！」

「くが…ぼくが…殺した…」

「なん…」

メルデイスはヴァレスを突き飛ばして走り出した。その足はおぼつかないものだったが、負傷してしまったヴァレスは追いかけることが出来なかった。

「嘘だろ…メルデイス…、くそつ、呪つてやる！殺してやるっ！うああああっ！」

そして彼の遺体が、村の中央で発見され、今に至った。

静かにこのことを聴いていたロイルは二、三度首を振って後ずさった。

「おい…今の話は何だ…？そいつは死んだんだろう…？どうして僕

が殺したっていうんだ…ヴァレス」

「まだ気がつかない？」

イナーシャは立ち上がって、垂れていた前髪をかきあげて真っ直ぐロイルを見据えた。うるたえるロイルへと近づいたイナーシャは、トン、と胸を押す。

「無くした記憶の君の姿が、メルデイス・ターナーその人だ」

「う、うそだろう？確かに僕はダリウスという男を思い出して…それがレニだということも知って…」

「嘘じゃない。だったら君は何故、自分は老いないのか考えたこと、なかったかい？」

ロイルはこの場にいる全員の顔をぐるりと見渡して、唾を飲み込んだ。

イナーシャは静かにロイルの隣に並ぶと、背伸びをして耳元で囁いた。

「それは君がもう死んでいる死人だからさ」

「嘘ばかりを言うな！」

ロイルは刀の鞘でイナーシャの脇腹を殴りつけて刀を抜いた。興奮した脳は制御不能となり、目の前がかすんで見えた。

「死人は…こうして立って話したりしない…そのセイラだって人形なんだ…そうに決まっている…」

レインは薄く笑って、吹き飛んだイナーシャを見下したように一瞥し、刀を突きつけるロイルの眼前に立った。

「じゃ、思い返してみる？」

すっ、と細長い腕が目一杯伸ばされて、軽く指先がかすめるような速度でレインの人差し指がロイルの額に触れた。

「うわあああああああああ！」

その途端頭を鋭い痛みが抉り、ロイルは悲鳴を上げて目を見開いた。走馬灯のように膨大な過去の記憶たちが頭の中へと積み重なり、ロイルはそのまま倒れてしまいそんな衝動を感じて目を閉じた。

意識が手放される一瞬、視界に見慣れたハニーブラウンの長い髪が揺れて、ロイルはほんの少し微笑んだ。

「…ロイルさんっ！」

そして彼は記憶の奥底へと沈んでいくのだった。

「これは…一体何の真似だ、マーリス！」

倒れたロイルを抱きかかえて、レニは吠えた。マーリスは今までの事を傍観していて、今度は自分に話しかけられたのだと理解できず、曖昧な笑顔でレニを見つめた。

そして座っていた粗末な椅子から立ち上がって、ロイル、レニの二人を交互に見つめた。

「僕はメルデイスが死んだあの日。その子にコアを埋め込む手術を

施した。元々、医学的知識が乏しかった僕を助けてくれたんは、兼ねてからこの研究に目をつけとったセイランだった」

マールリスはレニへ顎で車椅子に腰掛ける老人を指し、笑んだ。

「そこにおる老いばれがそうやね。」

「馬鹿な…セイランは持病で死んでいたはず…！」

「言ったやろ、こいつはコアの実験、ラグナロクを招くこの実験に着目してたんや。ヴァレス」

ヴァレスは声を掛けられ、肩を震わせると、セイランの上着を脱がせて胸元を晒せた。皺がよってだぼついた胸のまわりにはコアの傷が脈打っていた。

「母さんが死んでから、僕は学んだ。死んでからじゃないと、コアは人間に負荷が罹り過ぎる。でもあの男は違った。今は死んだように動かんけど、彼はコアによって若さを取り戻して不死となった」

「若さ…年相応に見えるが…？」

「盲点やったんは、あいつは生きていながらコアの手術を受けたことやった」

マールリスは部屋の人形を一体取り出して、それを意味もなく手で動かした。レニはマールリスを睨んだまま、視線を外さない。ロイルはその間にも記憶の中をさ迷っていた。

「そこであいつは考えて、拾った三人の孤児をこの研究の人柱にしようと考えた。つまり、コアの負担を四分割にしたんや…一人は失敗やったけど」

「まさか…メルデイスの手術にも…？」

「そう、その二人はそう長く生きられん。コアの半分ほどの負荷

がかかつとる。でも、最初のメルデイスの実験は失敗した。そこでセイランは、わが子であるエックス…本当の名前をシーラというんやけど。その子で実験したんや」

「自分の、子供を…？」

レニは車椅子で俯いたままのセイランを一瞥し、苦い顔をした。

「それも結局は失敗やった。エックスはコアの圧力に耐えかねて研究室から逃げ出して止めようとした最初のサンプルであるランガーのお嫁さんを殺してしもうた。」

その一言に、イナーシャは唇を噛んだ。

「なんとか連れ戻された彼は研究サンプルとして哀れな一途を辿つてこの前める…ロイルが始末した。自害やったけどな」

マーリスは飽きたように人形の手を離して、にっこりと微笑んだ。

「せやけど僕は見出した。メルデイスが助かるコアの有効方法を…！」

マーリスは側で立っていたレインを突き飛ばして、その体を踏みつけた。突然のことに恐れをなしたレインはただ抵抗もできず、怯えた眼差しでマーリスを見上げ、レニは思わず立ち上がった。

「魂が同調できる新たな器を作つて、それに不要なエネルギーである記憶を取り除けば、コアの負荷を軽減できると。」

「やめろ！蹴るな！」

「ふふ、こいつは僕が作ったメルデイスの器。分かるやろ？人形、やで？」

執拗にレインを粗末に扱うマーリスを制止したレニは、驚いて振り返った。レインはすっかり怯え切って何も話そうとはしない。

「こいつは僕に目にかけて欲しくて本来の器であるロイルに取って代わろうなんか思ってたから、お仕置きしてただけやないか、まあ、そういきり立たんと」

マーリスは少し腰を折って、優しくレインの頭を撫でた。ようやく許してもらえたのか。そう安堵して目をとじたレインは、その後、目を開くことはなかった。マーリスは彼の心臓部に眠るコアを引っ張り出してほくそ笑んだ。

「ご苦労さん。もうお前の役目は終わったわけや」

ごとり、と鈍い音がして、レインは機能を停止した。イナーシャは思わず悲鳴を上げて、レインに駆け寄った。

「…兄さん。たしか僕、アンタを刺した記憶があんねんけど…どうしてアンタ、生きてっしやるんや」

「…あの日、俺は死んで構わないと思っていた。メルデイスの記憶を消していたあの白い部屋からメルデイスを逃がし、彼が再び凶行しないよう、見張り、すれば殺す気でした」

レニは静かに立ち上がって、二丁の拳銃を構えた。マーリスは愉快地にそれを眺めた。

「あの時お前をおかしくさせてしまったのは俺の責任だ、マーリス。だからこのこと全てに決着をつけよう。メルデイスが目覚めてしまっ、その前に…」

「無謀やね。孤軍奮闘は…」

そして高らかに銃声が響いた。

最終章 本当の優しさ(前書き)

最終章！なんだか感無量ですね！

最終章 本当の優しさ

ロイルは、温かな思い出に浸っていた。生まれてまもなく母を亡くしたが、二人の兄は優しく、父が構ってくれなくとも、父の代わりによくしてくれた。ヴァレスと共に過ごした日々も楽しく、充実した世界が、ロイルの視界をよぎっていく。だか時々欠落したように記憶が抜けていて、それが悲しかったことや、つらったことであるのを理解した。

それはどんどん増えていって、温かい記憶は薄れていく。これが過去の自分、メルデイスが感じていたことだったのかと、ロイルは思った。

ふと、欠落していた部分に一度だけスポットライトが当てられる。それは、一人の東洋人とのやりとりであった。

「お前の母さんは偉大なる実験に貢献して死んだのだ。お前は、この実験に貢献する義務がある」

頭が禿げ上がって、目つきが鋭い男は、怯えるメルデイスに強い口調で言い放った。

白衣から丸い球体を取り出した男　セイランは、それを見えるように掲げてメルデイスに返った。

「これはコア。これが何でできているか、分かるか？」

メルデイスはすぐさま首を振った。セイランは嘲笑して、再びコア

を白衣に戻した。

「これは死んだ人間の意思が詰まっている。無念や悲しみ。そういった負に膨大なエネルギーがあったと、とある学者が見つけた。成分は死体から抽出した血液。どうだ、すごい話だろう？」

「よく…分かりません…」

「…サルにも劣る知能だな」

セイランは焦点が定まらない目でメルデイスを見つめて、胸元を引き寄せてにたりと笑った。

「しかしいいだろう、これからお前を生まれ変わらせてやるさあ、来るんだ」

そして記憶は途切れた。凄まじい感情が頭をよぎり、この後何があったかいやでも知らされた。

ロイルは胸にてをやって、そつと呟いた。

「僕は…やはりコアを埋め込んで…」

セイランが最初にメルデイスに行った手術がこの出来事だった。生きたまま強いエネルギー源であるコアを埋め込まれたメルデイスは重みに耐えかねて死んでしまったが、ロイルとして生きているこの今は、三個目のコアにして実現した命だった。

ロイルは記憶をたどりながら、記憶が流れていく様がばらばらの時を刻んでいるのに気がついた。

「あれは…」

異国の着物。失った片目に黒髪。見慣れた男が憤っているのを見下ろして、ロイルはその記憶に触れた。

二話

「どうしてだ…マールリス！」

男 ランガーはマールリスの肩を揺さ振り、視線を合わせない彼の姿に悲しみを覚えていた。マールリスは手でランガーを突き飛ばし、椅子を回転させて作業を再開させるべく机へと向かった。ランガーはそれ以上マールリスをしつこく言及しなかつたが、悔しげな表情を浮かべて、ただ彼の背後で立ち尽くしていた。

「俺はお前の母親を殺してしまったあの実験を、自分自身許せないでいるというのに、お前は…」

「…そういえば、ランガーが昔僕に頼んだ人形、この前完成したんやけど」

マールリスはランガーに何食わぬ顔で振り返り、椅子から立ち上がる。マールリスはその様子を視界の端で追い、クローゼットから取り出された人形を見て絶句する。

「顔はつい最近作ったから、旧式のボディとはおうてへんけど、まあ使えるやろ」

数週間前、セイランがコアの実験に使っていたサンプルの少年、シーラに殺害されたかつての妻がそこにはあった。完璧にその姿を写した彼女は静かに光のない両目でランガーを見つめている。

ランガーは思わず怒りがこみ上げてくるのを抑えきれず、自分がただ痛いただけだと分かっているながら壁を渾身の力で叩きつけてその場に座り込んだ。

「…何なんだお前は…俺を馬鹿にしているにもほどがある…！」
動かなくなったランガーを見下ろし、彼女をそつと立てかけると、
マールリスは彼のすぐ側まで歩いて行き、しゃがみ込んだ。

「なあ、ランガー。僕はあん時一度死んだんや。そして新しい僕は僕として、この研究が自分に有益であると判断したから続行した。今の僕は、お前の知っているマールリス・ソルワットやない」

「目を覚ませ…マールリス。メルデイスもこの惨劇に巻き込むといのか…」

「もう遅い、時は過ぎた」

マールリスは立ち上がってドアを開く。湿っぽい地下の一室に新鮮な空気が舞い込み、マールリスはランガーの肩を持ち上げた。

「マリア、付いて行きなさい」

今までぴくりともしなかった人形は、その一言で動き出し、ぎこちない足取りでランガーの側までやってくると、彼を部屋から押し出して、深くマールリスに頭を下げた。放り出されたランガーは、咄嗟に我に返って立ち上がると、制止する彼女を押しつけて、閉まっっていくドアの隙間からマールリスへと呼びかける。

「マールリス！聞け！俺はお前の行く先々の野望を打ち砕いてやる！それはアイリーンも望んでいたことだ、目を覚ませ、実験を止めるまで俺は、お前を…！」

「ほんなら僕は、それを先回りして生きてみせたる。お前と会えてよかったよ、ランガー」

「きつとこの実験はお前を不幸にする！マールリス、馬鹿な真似は止

める！マーリス！」

そしてドアが完全に閉じ、声は聞こえなくなった。マーリスはランガーの声が完全に聞こえなくなってから、頭をもたげて机に突っ伏し、苦しい声で呟いた。

「もう…僕はコアの研究をするしか…メルデイスを助けられへん…分かってくれ、ランガー」

この翌日、タスク村は炎上した。

その火の粉をみて、マーリスは再び激しい絶望感に叩き落されることになるのだ。

ロイルはこの記憶に触れて、ある不審な点に気がついて少し首を傾げた。

この記憶は、かつて自分の中であって、分割されてレインが所有してた一人の人物の記憶。

メルデイスが見たり、体験した記憶を元に行っているはずだった。だが、この記憶は明らかにマーリスのものであり、メルデイスが出てくることは一度もなかった。ロイルはこの不可思議な記憶にはある一点の可能性があるとみて、確信した。

「メルデイスはこの実験で命を落とす可能性を知っていたのか…？もしかしてこれは、あの男とランガーのことを隠れて見ていたのか…」

ロイルはこの記憶たちの中でも、一際知りたい記憶があった。それはタクス村が炎上した日の真実。ヴァレスは森で匿ったセイラを殺

したのは自分で、それを目撃したのだと言っていた。

ヴァレスが言っていたことが事実だったとしても、その真相をどうしても確かめたい気持ちがあった。

コアの実験は死者である人間をもう一度蘇生できるという能力がある。人形という無機物に感情を与えられる品物なのだから、不思議ではないかもしれない。

ヴァレスは恐らく、アクアドームの墓地からセイラの死体を盗んで来れば妹を蘇生してやるなどと言われた上で結束していたのだろうとロイルは読んだ。

そして、ようやくあの日と思わしき記憶を見つけて、ロイルは一步踏み出してその記憶に触れるのだった。

三話

空軍司令官とのぼりつめたゴードンは、今夜アクアドーム最後の夜襲にむけてアクアドーム側の山林に駐屯地を構えていた。数人見張りを遣れば既に就寝して暗いアクアドームは静かに次の朝を待っていた。マリスからこの作戦に成功し、再びアクアドームを制圧すればそれに見合った報酬と、アクアドームを好きにしてもいいと言われ、前回の侵略時に手に入れた大量のコアを埋め込んだ兵士、人形と共にアクアドームを攻め落とすつもりだった。外はいよいよ明るくなる頃、ゴードンは兵を集めて決行に移った。

「相手は前回攻略した弱兵、気を楽にそして確実に攻め落とせ、いいいな？」

兵が乱れなくそれに答えて敬礼し、ゴードンは口角を上げて、地面に突き刺した剣を抜き取り、空に掲げた。

三百の兵が、戦闘機三台と共に夜襲決行を始めた。各三方向から兵を分割し退路を断ち、遊撃する。正面突破する前線兵は易々とアクアドームに侵入し、基地を攻め落とす為にたいまつを掲げた。

「甘いな、前回制圧されたのにもかかわらずこの警備の緩さ……」

兵士の一人がそう呟いて、町の民家に押し入った途端、突然まばゆい光がアクアドームを満たし、一瞬目が眩んだ兵士達は思わず目を閉じた。

「悪いね。わざわざ奇襲してもらったのに」

高いヒールの音がなり響き、振り返った兵士達が見た先にあつたのは、自分達を包囲する、レイディアンレディアンの兵士だった。その中心でほくそ笑んだ女、アイリーンは情けない顔をぶら下げた空軍兵士を嘲笑する。

「タレコミがあつてな。悪いが綿密な作戦と増兵させてもらった。お前らはたしか…」

「三百の兵、三台の戦闘機の模様です」

アイリーンが満足げに頷いて、腰を抜かす一人の兵士の顎をピンヒールの先で蹴り上げる。

「我が軍は三千の海軍の助力が三千、計六千の兵がお前達を包囲し、海には戦艦が五隻。この前のお礼といこうか？」

派手な音と共に、アクアドームが大きく揺れた。あまりの衝撃に驚いて天井を見上げれば、空で飛んでいた最新型の戦闘機が潜水艦のように静かに泡を吐きながら沈んでゆく様子が伺えた。

「狙うは総司令官のゴードン・ディネガー！拘束し、制圧せよ！」

アイリーンの一言によって、レイディアンレディアンの士気が大きく高まり、兵は取り囲んだ空軍の兵士達を次々捕らえてゆく。アイリーンは愉快げにそれを眺め大きく笑い声をあげると、手に持っていた鞭を地面へと叩き付けた。

「辱めを受けたのだ、男として生きられないように仕返ししてやらねばな」

そして空軍はほぼ全ての兵を拘束、捕まった司令官は泣きながら命乞いをしたが、アイリーンに引きずられて消えて行き、彼がその後どうなったかは聞かされていないとか…。

リックは感激した様子でこの事を喜んだ。キールは胸上げまでされ、アクアドームには平和が戻っていた。

「ロイルくん、俺達頑張ったよ、君が帰ったとき堂々と顔向けが出来るように…！」

ルイスの回復により、ロイルの誤解は解けた。いなくなってしまうたレニとロイルを思っ、リックは誰にでもなくアクアドームの空へ向かって敬礼するのだった。

四話

メルデイスは、床で死を待っていた。一番上の兄のダリウスは、病気になったと言って彼を隔離しているセイランを不審に思っていた。マーリスが軍の兵器製作に関わる事業を始めてからというもの、セイラン・リーという初老の東洋人はターナー家、ソルワット家に当然のように大きな顔をして介入し、マーリスが助けた少女二人を養子に持つ、謎の多い人物だった。

ダリウスは彼が居ない隙に、メルデイスの部屋を訪れると、ドアを優しくノックして潜めた声でメルデイスを呼んだ。

「メルデイス？聞こえるか？」

「…ダリウス…」

か細い声にダリウスは驚き、ドアへと近づいてドアノブを何度かまわしてみる。が、中から鍵がかけられているのか、ドアノブはうるさく音を立てるだけだった。

「閉じ込められているのか？待て、今ドアを…」

「聞いて、ダリウス」

ドアの隙間から一枚の紙がすっとダリウスの前に差し出されて、それを受け取る。

中身は一言、

セイランが人形を使ってコアの材料を集めようとしている

と書かれていた。ダリウスはその一文を通して読み、もう一度見直

す。手が震え、声はうまく紡げなかった。

「何故コアのことを知っている?!」

「今は駄目…教えられない」

「メルデイス!メルデイス!」

「行つて。このことをマールリス兄さんに伝えて」

強い口調で言い放たれた言葉に、ダリウスはたじろいだ。悪夢が再度蘇る。コアは再び間違つた道を歩もうとしている。それを止めなければ、自分は必ずまた後悔する。ダリウスは一瞬、メルデイスとコアによつて失われる誰かの命を天秤にかけて目を閉じた。

「すまない…メルデイス…俺は…お前を守ると約束したのに…」

「僕なら大丈夫、急いで」

ダリウスは苦しげな顔をしながらメルデイスの部屋から離れて走り出した。足音が弱まっていくのを聞きながら、メルデイスは再び這うようにベッドまで戻ると、大きく息をついて薄く笑つた。それまで自分が生きていられるのか考えると、もう、笑いしかこみ上げなかった。

その晩、メルデイスは妙な胸騒ぎを感じて目を覚ました。まだ薄暗い中、窓の外に明かりを感じて、メルデイスはカーテンを引いた。

「あれは…?!」

巨大な炎が、柱となって空を目指していた。竜の首のように頭をもたげながら襲い掛かる様を見つめて、メルデイスは息を飲んだ。咄

嗟に、ヴァレスとセイラの姿が脳裏に浮かんで、メルデイスは覚悟を決めた。もうほとんど動かない体を懸命に動かしてカーテンを引きちぎり、それをそっと窓から垂らしてレールにくくる。もう戻って来られないだろう部屋を名残惜しむように一瞥し、メルデイスは窓から降りた。

すぐさま着地すると、ふらふらとした足でタクス村を目指した。どうか無事でいて欲しい。そう願いながらメルデイスは裸足で走り出した。

胸は焼け付くように痛む。体中が一步進む毎に悲鳴を上げた。だが不思議と足だけは止まらずに歩き続け、メルデイスはようやくたどり着いた村の全貌を目の当たりにして絶句した。

逃げ惑う人々を、背後から襲いかかり切りつける人形。そして母の死体に泣きつく子供や、震えて隠れようとする親子。果敢に人形に立ち向かって返り討ちにあう男性。

数日前までのどかな村だったこの場所はもう地獄と化していた。冷酷に火を放つ人形を見つめて、メルデイスは渾身の力で叫んだ。

「やめろおおおおおっ！」

そして、無謀だと分かっているながら、人形に立ち向かう。

たいまつを持ってこちらをしつかりと見つめた人形は、小さなメルデイスの姿を捉えて剣を構えた。

五話

人形はメルデイスの一撃を避け、腕で彼をなぎ払った。それだけで軽がる飛んで行ってしまったメルデイスは、壁に叩きつけられて座り込んだ。口からは微量の血液が流れ、人形はすぐ目の前までやってきた。視界はだんだんとぼやけてゆき、メルデイスは明確な死を感じた。そして、人形は大きく剣を振りかぶり、最後のとどめを刺されるといふ一瞬。目を閉じたメルデイスは、自分に変化が訪れない事を不審に思っただけで恐る恐る目を開く。すると、目の前にはショートして完全に機能が停止した人形と、突き出した自分の右手が、そのボディを損傷させていることに気がついてメルデイスは口を覆った。

メルデイスは自分に宿ったコアの強大な力をそのとき初めて知り、言葉を失う。同時に、自分はもう人間ではなくなったのだと理解した。

「ぼくは…、ぼくは…もう…うつつ、兄さん…！」

涙が口元の血を攫って流れてゆく。

すぐ側で燃え盛る火の粉の赤に包まれた村からそつと出たメルデイスは、ふらりふらりとさ迷うように森へと消えてゆくのだった。

森の中は先ほどの惨劇がまるで嘘のように静寂があった。虚ろな目で森へと迷い込んだメルデイスは、森の奥からすすり泣く声が聞こえてくるのに釣られて歩き出した。

泣き声は次第に大きくなり、木の側でぐずぐずと泣いているセイラ

を見つけたメルデイスは、ハッと我に返った。

「お兄ちゃん、お兄ちゃんどこ？」

わんわんと泣き続けるセイラを慰めようと手を伸ばした瞬間、背後に冷たいものを押し当てられてメルデイスは身を硬くさせた。だが振り向こうとしたときには遅く、メルデイスは至近距離で銃弾を打ち込まれて倒れこんだ。

「…！誰！？お兄ちゃん！？」

ふらりとメルデイスはセイラ向かって歩き出した。せめて伝えなければ、セイラに逃げろと。

使命感を感じていたメルデイスは背中を撃たれた体でセイラの前へふらりとやってくる、安堵する彼女の肩を掴んで言った。

「僕から逃げろ！」

そう叫んだ瞬間、草むらから潜んでいた人形が数体飛び出してきた。メルデイスはセイラを背中へと隠して人形を見据え、自分を撃つた人物を見つめた。

「駄目だな、メルデイス。もう少し賢く生きろと教えたはずだ」

「セイラン…：あなたのやるうとしていることは間違っている…」

「ダリウスにいい報告をしてくれたようだな…：おかげで計画が早まったわい」

杖を片手に、濁った目でメルデイスを見つめたセイランは銃を投げ捨てた。

「お前の体は母親の実験によってコアに耐性があった。もし死んだとしても、まだ使い道はあるということだ……くく、くくくつ」

セイランは額に手をやり、数秒笑っていたが急に顔を変えて告げた。

「あの子供を殺せ」

セイラを指差し、人形達はそれに答えて身構え襲い掛かる。小さな悲鳴をあげたセイラに、メルデイスは両手を伸ばして精一杯彼女を庇った。

そして、巨大な槍のような腕が、メルデイスを貫通し、メルデイスは両手で人形を束ねてその動きを封じた。口から内臓から溢れる血液が逆流し溢れ、地面に吐血したメルデイスは、動かなくなつた人形と、宙ぶらりんになつた自分の体を見下ろしてそつと背後を見遣つた。

「まも…れなかつた…」

背中にぴつたりとくつついたセイラの死体は、頭が人形の腕とメルデイスの腹を通して繋がつて貫通し、彼女は即死だつた。メルデイスは大粒の涙をその瞳から流して彼女の死を悼んだ。

セイランは喜々としてメルデイスの力の大きさを喜んで人形の腕を彼の体から引っこ抜いた。

強烈な痛みに叫んだメルデイスは、セイラの遺体とともに地面に崩れた。

「いいサンプルだお前は…！早速この実績を記録しなければ…」

「さて…、せい…ら…ん…」

セイランは踵を返して森を出て行った。メルデイスは傷がみるみる回復していくのを感じて、慟哭する。守れなかった命を前にして、もう長くない自分が生きていることが許せなかった。

せめてヴァレスに知られないうちに埋葬しようとするよると立ち上がった瞬間、タイミングと運に見放されたメルデイスは、ヴァレスがやってきたことに気がつかず、彼女の遺体を見下ろした。

「…何だよ、これ…」

ヴァレスの声に振り返ったメルデイスは、顔色を変えた。

こんな妹の姿に、正気でいられる兄弟などいない。顔が半壊した妹に擦り寄ったヴァレスは、メルデイスを突き飛ばして彼女の亡骸を抱きしめた。

「どうして…セイラ…！うわああああああっ」

「ヴァレ…」

声を掛けたかった。無事でいてくれたことと、セイラのことを伝えようとメルデイスが口を開いた瞬間、胸が温かくなるのを感じて、胸に手を遣る。コアのすぐ下を貫通した木の枝が刺さっていることに気がついて、メルデイスはよろけて倒れこんだ。

「よくも…セイラを…！」

メルデイスはようやく、自分に死が訪れたことを感じていた。既に半分以上の血を失っていたメルデイスは意識が遠のき、仇だと思っているはずなのに悲しげな顔をしたヴァレスを見つめて、ふっと微笑んだ。

「これで…よかった…んだ」

そして眠気のような抗えない力に身を任せてメルデイスは目を閉じた。

ヴァレスはその後、メルデイスの死体を人形の混乱に乗じて死んだと見せかけて村の中心へと投げ捨てたのだ。

ロイルは記憶からの旅を抜けて、一人考え込んでいた。

じわじわとこれが確かに自分の記憶であるように、埋まらなかった空白はぴたりぴたりと埋まってゆき、最後のこの記憶に触れた途端、ロイルは自分が涙を流していることに気がついて頬に触れた。

安心とともに、やり場のない悲しみを感じた。これをヴァレスと一緒に見てくれていたら、信じてくれていただろうに、もう過ぎってしまった全てにロイルは悔やんだ。

ふと、見てきた記憶がなくなった心理の中の世界で、片隅に座り込んだ自分の姿を見つけ、ロイルは半信半疑で尋ねた。

「レイン？」

自分と同じ姿をした少年は振り返った。

「記憶が…戻ったかい？」

「お前…どうして？」

「僕は元々、君と融合して完全な記憶を取り戻したメルデイスになるため、作られた記憶を保管する為の器…もう役目を終えたんだ」

レインは立ち上がって力なく答えた。ロイルは少しレインが不憫に感じたが、今までのことを思うと、自業自得とも思えて次の言葉が

出なかった。

「でも僕は君がいつでも羨ましかった…生まれてからずっと…覚えてないかもしれないが、君はあの後、兄さんに連れて行かれて再びコアを埋め込まれて蘇生したんだ」

「…嘘みたいな話だな…」

「本当さ。そして、あの事件は君のコアによる暴走だとでっちあげられ、君の記憶は二分されたあげく、記憶のゴミ箱と呼ばれる真っ白な部屋で記憶を消された。」

「それは…なんとなく思い出した…あの部屋に入ったときにレニ…ダリウスが僕を出したんだな？」

「その通り。そして彼は兄さんに手討ちにあって死んだ」

「何だと?!」

ロイルはレインを見つめた。レインはつまらなさそうに唇を少し突き出して答える。

「それも本当。なんなら僕の記憶、見てみる？」

レインはぼんやりと光る白い球体を作り出して、ロイルに手渡した。ロイルは見たくない気持ちと、見たい気持ちに押されながらその球体を受け取る。

受け取った瞬間、まばゆい光があ辺りを包んでロイルは目を細めた。

六話

「ああ、ダリウス、嘘でしょう?!」

男の死体に泣きつく一人の少女がいた。その二人を見つめるマールリスの手には小型拳銃が握られ、銃口から硝煙が立ち上っていた。誰が見てもこの様子では、マールリスが男を撃つたのだと一目瞭然だった。少女は泣き腫らした目でマールリスを睨みあげて、彼を糾弾した。

「殺す必要は無かっただろう?マールリスさま!兄をどうして…!」
「…僕は、その男に忠告した。メルデイスに近づいたら殺してやる
て」

「本当に実行するなんてどうかしている!」

少女、イナーシャは首を振ってダリウスの死体に顔を埋めた。もう話すこともない彼の手にはメルデイスが監禁されてた格子の鍵が握られている。マールリスは俯いて唇を噛んだ。

「僕ら分かり合うには、環境が悪過ぎたんや…」

イナーシャは泣いていた目を強くこすり、マールリスをキツと見上げて告げた。

「僕の体には、メルデイスのコアと、セイランのコアが分割されて埋め込まれている!それを彼に移植して」

「い、イナーシャ!」

「でない僕がメルデイスを探し出してコアを抜き取って彼を殺す」
「…正気か」

「お互い様：助けてもらっておいでこんなこと言いたくないでも、彼を死なせられない」

マールリスは嘆息し、銃を捨てた。

「好きにせえ。」

そこで記憶は途切れた。ロイルは頭の整理が追いつかず、レインを見つめた。

「メルデイスが死んだことを、兄さんはダリウスに押し付けて責めていた。自分が作った人形が悪用されてしまって、最愛の弟が死に、恋人と友人と決別した兄さんはもう普通でいられなかった。」

レインは戻ってきた淡い色の球体を手のひらで握って消し、先ほど座っていたように縮こまって座り込んだ。

「兄さんはその死の原因を作った男だと分かっていたながら、いつか復讐してやるためにセイランと手を組んでロイルの搜索をして、やがて見つけた。それから記憶が落ち着くように君を自由にさせながら、いつもいつも見張りをイナーシャと僕はさせられていた…」

レインは突然感情の起伏が激しくなり、急激に立ち上がるとロイルの服を掴んで彼に大声で叫んだ。

「そう、いつもいつも！気がおかしくなってしまうような程僕はお前を見てきた！憎かった！全く同じ顔に声、姿をしていて記憶すら共有しているのに僕は兄さんに愛されない、愛してもらえない…」

そして手をすぐ解いたレインはふらふらと倒れこんで頭を抱えた。

「そして最後は使い捨てられて僕の生涯は終わってしまった…。いつそただの器だったなら…どんなに苦しまなかったか…」

「…レイン」

「…さあもう行きなよ…見てみな、今の姿を、すっかり君はもう、メルデイスだ」

すつと突然どこからともなく鏡が現れ、ロイルは今の自分の姿に驚いた。アシンメトリーだった髪はすっかりそろったおかつぱ頭になり、色は茶色から金になった。目は少し大人しくなり、その姿は成長したメルデイスそのものだった。

「レイン、お前はこれからどうなるんだ？」

「さあ、器の中で、永遠という長いときに閉じ込められるんじゃないかな…尤も、兄さんが僕を処分しなければね」

意識が遠のいていった。レインは不機嫌そうな顔で手を振っていた。ロイルは何か言わなければ、と咄嗟に思い、レインに声を掛けた。

「今度会ったとき辛気臭い顔してるんじゃない、いいな、絶対だ！」

その言葉に、レインは答ええない。だが、今まで見た中で一番いい穏やかな笑みを湛えていた。

七話

ロイルはハツと目を覚ましたように現実に戻つてくると、気絶する前の現状とかなり異なつたアトリエの姿に驚き、一人取り残されていた。マールリスがロイルが起きたことに気がついたのか、やや焦つた表情で彼を見上げた。

「メルデイス…！」

ロイルはマールリスの下へと視線を遣つた。肩を押さえたレニと、その前で大きく手を伸ばした銀髪の少女。そしてマールリスの手にはレニの拳銃が一丁握られていた。

ロイルが視線を遣つてまもなく少女は倒れこんで、レニはその少女を抱きとめた。

「一体何があつたんだ…？」

マールリスは拳銃を落として、ロイルへと近づいた。レニは腹部から出血する少女を抱えたまま振り返り、普段からは考えられないほど強く、激しい声音でマールリスを呼んだ。

「マールリス！」

「お帰り…メルデイス…僕は待つとつたんや…君が帰ってくるのを八年間も」

トレストウーヴェは少女、イナーシャに駆け寄ると、出血した箇所を止血しようと髪留めを解いていた。ロイルはマールリスの背後に視線を遣つた後、更にドアの側にいたヴァレスを見つめた。ヴァレス

は車椅子を握ったまま、ただ呆然と立ち尽くしていた。

「僕に触るな、下郎！」

マーリスの手を振り払ったロイルは、急いでレニへと駆けつけた。マーリスはまさか手を振り払われるなんて思ってもみなかったのか、驚いてその場に固まった。

ロイルはイナーシャの側でしゃがみ込むと、つたない手作業で止血しようとするトレストウーヴェを制止した。

「もういい、もうお前は頑張らなくていい、トッティ」

「ろ、ロイル…、ご、ごめんなさい、私…」

「いい、今はお前の家族を優先しろ」

イナーシャは浅い息を繰り返しながらロイルを見つめて、レニへと視線を移した。

「おい、貴様、死ぬなよ。僕はお前に借りを作ってたままだ」

「ロイル…あり…がとう…」

マーリスは歯をかみ締めてその様子を見ていたが、やがてレニを突き飛ばしてロイルへと近づいた。ロイルはイナーシャの前へと進み、憤ったマーリスを睨んだ。

「何故や！どうしてロイルの意思が消えてへんのや！格好はもうメルデイスやのに…お前は誰や、誰なんや！」

「やめる、マーリス！メルデイスは記憶とともにあの日死んだんだ！」

「嘘を言うな！マーリスは殺されたんや、あのジジイのせいでもここに、ここにメルデイスはおる！」

「…セイランのせいで…死んだ？」

ヴァレスは啞然として先ほどまでの様子を傍観していたが、マールリスの一言が引っかけり、今まさに見下ろしている老人を凝視した。マールリスは興奮した様子でレニの手を振り払うと、狂気を含んだ笑みを浮かべてヴァレスを見つめた。

「せや…！メルデイスも、ジュリアも…その男がみんな殺した…あの八年前、僕の人形をけしかけてお前の妹を殺したのはそこに座っている死にぞこないや、ヴァレス！」

「そ…そんな？セイラは、セイラはメルデイスが殺したんだ…だって、そうじゃなかったら、何故今まで嘘を…！？」

「それはお前の妹を生き返らせる条件つけたら、お前が使えると思たからに…決まってるんやろ？」

ヴァレスは思わず後ずさって車椅子から手を離れた。その反動で車椅子は横転し、倒れたセイランはうめき声を上げて床に這いつくばった。

「うそ…うそだ…だったら俺はなんてことを…メルデイスの話も聞かないで…俺は…！」

ヴァレスは先ほどマールリスが投げた銃を拾い上げて自分のこめかみに押し当てた。ロイルは目を見開いてその様子を捉えて手を伸ばした。

「やめろ！ヴァレス！」

ダン、と短い銃声の後、今まで何の感情もなく動きもしなかったセイラが、彼の銃を自分の胸に押し当てていた。ヴァレスはへたりと

その場に座り込んで、倒れたセイラの遺体を抱え上げた。

「せ…セイラ…どうして…！」

マールリスは自殺するはずだったヴァレスを見遣り、舌打ちをした。そしてセイラが持っていた拳銃を奪うと、床に倒れこんでいたセイランの額に銃口を向けた。

「なんや…イナーシャだつて、こいつに復讐したがってたから連れてきてやったんに…」

「ひ、ひいつ…！」

「止めて、マールリスさま！」

イナーシャは悲痛な声を上げた。マールリスはイナーシャを一瞥して、銃の持ち手を彼女に向けた。ロイルは血が滲み出したトレストウーヴェの髪留めをギュッと握り締めて、手を振り払おうとするイナーシャを引き止めた。

「待て、何をやる気だ!？」

「僕は僕の役目を果たしてからじゃないと死ねない!今まで、この日の為に耐えてきていたんだ!」

ロイルを突き飛ばしてイナーシャはふらついた足でマールリスから拳銃を奪う。トレストウーヴェは立ち上がってイナーシャを呼んだ。

「姉さん!姉さん…！」

イナーシャは震える手で銃口をセイランに突きつけた。ヴァレスは絶望のあまりうずくまり手を貸さず、マールリスは満足げにその様子を見つめた。トレストウーヴェがいくら叫んでも伝わらず、彼女の

細い指先は引き金をゆっくりと引いた。

八話

銃弾はセイランの斜め下を貫いて止まった。震えていた腕は正確な位置を定められず、セイランは命からがらドアの付近に這ってゆき、かたかたと震えた。そこでイナーシャはようやく数年ぶりにセイランの姿をしっかりと見つめて絶望した。

かつて、何人もの命を実験動物のように扱い、冷酷な事を繰り返してきた男の姿はどこにもなかった。ただやせ細り、髭も伸び放題で粗末な服を身にまとった目の前の男は、ただの弱い老人に過ぎなかった。コアは永遠に老いない特徴を持っていたが、生きたままコアを埋め込むリスクを減らす為、コアを四分にも割っていた男の体はいつまでも老いないイナーシャを尻目に老いていった。

イナーシャは既に憎しみもどこかにやってしまうほど絶望して、銃をおろしてその場に座り込んで泣いた。あれほど憎かった男は今も手を下さなくてもいずれ死んでしまいうなほど老いてしまった。すっかり殺意が消えうせたイナーシャに、マーリスはうるたえた。

「どうしたんや…イナーシャ？アイツはお前を養子にするふりをしてコアの人柱にして、姉を殺した犯人やで？殺せ、殺せ！」

「もういいだろう、マーリス。」

レニは、マーリスの肩を叩いて静かに狼狽する彼を見つめた。マーリスはこれまで一番憎んできた男を誰一人として殺そうとしない雰囲気戸惑い、声を荒げた。

「だ、だってコイツは…メルデイスを殺して…ジュリアを陥れて…、ヴァレスの妹かて…」

ロイルは腕を掴んでいたトレストウエの手をそつと離し、マールリスに近づいた。マールリスはやや肩を跳ね、ロイルを怯えたように見つめた。

「…全て、知ったよ兄さん…。アンタが僕の為に、していたことを…」

「だったら…！」

「でも、それで誰かの手を汚すことは間違っている。こいつは殺す価値もない男だ。…エックスが言っていた、やつと楽になれると。」

ロイルは出口まで歩いて行くと、そつと震えるセイランへとしゃがみ込んでその顔を見つめた。

「アンタも、息子と同じだ」

そしてぐつと指先を胸の球体が盛り上がった部分に突き刺し、そのままロイルはセイランのコアを抜き取った。

「楽になれ、そして地獄で罪を償うんだ」

「メルデイス！」

マールリスは思わずロイルを押しつけてセイランを見つめた。だんだん灰色になってゆく体は指先から砂のようにさらさらと溶け出し、やがて表情は和らいでいった。

マールリスは砂になった体を掴みながらうなだれ、叫んだ。

「あああああつ！くそつ、セイラン・リー…！」

ロイルは立ち上がると、レニに向き合い、数日ぶりの再会に目を細

めた。

「…私は、ロイルさん…いえ、メルデイスがあの事件を起こしたと信じて、あなたを記憶のゴミ箱という部屋につれてゆき、記憶を消しました。そして、マーリスが一生あなたを閉じ込めておくと言ったのであなたを逃がし、ずっと、監視していました。怒って…いますか？」

「フン、今更謝ったところで許せる話か」

「そう…ですよね」

ロイルはマーリスを見下ろす。いつも自分を思ってくれていたが、その思いが歪んでしまった二人のうち一人のかけがえない兄。ロイルは静かに目を閉じて、微笑んだ。

「だが、お前とパートナーだった日々、悪くなかったよ」

「メルデイス…」

「ヴァレス」

ヴァレスは声を掛けられて、肩を震わせた。

ロイルはヴァレスに胸元のリボンを解いて差し出した。

「大事にしてくれ。マリルとの、約束だ」

「ろい…る？」

そして、ロイルはすこし突き出た台にのぼり、軍服を脱いで、胸元に手をやった。

「セイラと、僕に分まで」

「ロイル、ロイル！」

「生きるよ」

そして、コアを自分の手で、引き抜いた。

「いやああああっ、ロイルっっ！」

トレストウーヴェの悲鳴に反応して、マーリスは振り返った。優しい微笑みを浮かべたロイルは灰色になってゆき、マーリスは手を伸ばした。目がかすんで、うまく手が伸ばせない。届かない。触れられない。そう思った瞬間、ロイルは最後の力で手を伸ばし、その手を取った。

「ありがとう、兄さん」

ぱん、とはじけるように彼は砂となって、宙を漂った。

先ほどまで握っていた手を力なく握り締めたマーリスは台に山盛りになった彼の遺灰を抱きしめて、唸った。

そしてその中心にごろりと転がったコアがヴァレスの足元にこつんと触れた。

ヴァレスはそのコアを拾い上げて胸に抱きしめた。

「ロイル……」

こうして、彼の物語は終焉を迎えたのだった。

エピソード（前書き）

とうとう完結致しました。こんなに長い作品をずっと応援してくださった方々に感謝をして、ひとまずロイルの冒険は終わりです。またどこかでロイルと出会えたらいいですね！それでは、ありがとうございました！…の前にエピソードをどうぞ

エピソード

数年後

風が吹いていた。レニはすっかりと晴れ渡った大海原を見渡して大きく息を吸い込んだ。

アクアドームはあれから、人形の混乱がなくなり、その姿を海軍の特殊部隊に変えて、相変わらずアイリーンの指揮下の元運営している。少佐補となったレニは、久々の休日を外で過ごし、帰る前に色々なことがあつた海を眺めた。

「感慨も一入かね、オズボーン」

「いやね、昔のことを思い出しちゃって」

「そうか。色々あつたからな」

大佐という地位に上り詰めたルイスは、外での任務をやめて、アクアドームの運営の貢献をしていた。パートナーの少女はすっかり大人となつて軍を辞め、今は一人の子をもつ母になつたのだという。レニは変わらず派手な彼の軍服を見つめて、微笑んだ。

「その派手さ、アイリーン様に引けを取りませんね」

「どういう意味だオズボーン……」

「はは、そのままです」

ルイスは悪態をつき、レニを見上げた。

「君は少し変わったな」

「そうですか？」

「ああ、潔くなったな。昔は表裏あつてとっつきにくい感じだった」

「そう、ですね。もう隠すことも、失くすものも、ありませんしね」
ルイスは空を自由に飛びまわるかもめの群れを見上げて、そういえばと思い出したように話題を変えた。

「あの男が君に会いたがっていたぞ」

「また、ですか。そんなに人肌恋しいのですかね、独房とういのは」

「会ってやれ、うるさくて敵わなわん」

「はいはい」

湿っぽい地下の独房は、一人の囚人の明るさによって妙な空間となっていた。その男はお構い無しに隣の囚人に他愛も無い話をしては看守に窘められていたが、全く懲りていなかった。

独房を訪れていた女性、トレストウーヴェは呆れたように彼を見つめていた。

「マーリス様、少しは落ち着いて下さい」

「いやあ、これがね、暇な独房やとインスピレーションが湧くやろ？でも人形を作ったらあかん言われてるさかい、ギャグに磨きがかかってな、あは、あはあはは！」

「全く面白くありませんから。はいこれ差し入れ。また看守さんに渡しておきますから一気に食べないで下さいね」

「おおっ！チーズ！いや、おおきに、トッテイ」

真っ白な歯を出して爽やかに微笑んだマーリスは、へらへらと頭を下げてポケットからメモ帳を取り出した。

「チーズをネタに新しいジョーク思いついた、なあ聞いて聞いて！」
「嫌よ！もう、姉さんったら自分で差し入れに来ればいいのに仕事
が忙しいからって…」

「何だか賑やか、ですね」

レニは騒がしいマールリスの独房を前に苦笑する。トレストウーヴェ
はレニの姿に安心して足早に彼の脇を過ぎ去った。

「あ、じゃあ私はこれで！ごきげんよう、レニ」

「あ、待つて！チーズのネタを…！」

「マールリス、今度は何のネタですか」

マールリスはレニの姿に目を丸めたが、すぐに目元を緩ませて新作の
ジョークを聞かせようとメモ帳をめくり始めた。

「待つて、兄さんに聞かせたい渾身のジョークは…」

「…それはいいです。それで、私に会いたかつたんじゃないですか
？」

マールリスは薄く笑んでメモ帳をしまった。そして俯いたまま告げた。

「あれから、メルデイスが死んで調度五年ほど経つかな…セイラン
のコアしか持つてへんトツテイはすっかりお姉さんなってしもたし、
まあ、僕もちよつと老いたかな」

「寒いギャグを言う辺りもですね」

「寒くないわ！…でも、僕はあの日、生まれ変わった気がした…」

「マールリス…」

「メルデイスが体を張って教えてくれた、人間には永遠ちゆうもの
はあらへんて」

レニは二三度頷いて俯いたままのマーリスを見つめた。

「僕は兄さんと違っていつしか老いて死ぬ。でも今はそれが幸せな
んや。独房出たらやりたいことだらけや」

「それは…よかったですね」

「あ、そうや！なんやったら兄さん、僕と相方なる？売れると思わ
ん？」

「思いません」

あつさりと断られたマーリスは不機嫌そうに唇を突き出して抗議し
たが、やがて笑顔になってそつと潜めた声でレニへと告げる。

「なあ知つとる？トレストウーヴェ、彼氏ができたんやで」

「それは、知りませんでした…一体誰が？」

「ほら、あのそばかすの彼、最近昇格して伍長なつたて。昇格に浮
かれて告白しよつたつて」

「えっ、リックさんが？」

驚くレニに大げさなほどマーリスは笑った。

「僕てつきり、まだメルデイスが好きやと思うてたんに、女の子は
強いね！」

「本当ですね」

ふと階段の上から、不機嫌そうな声が聞こえて、レニは立ち上がった。

「お、お迎えか」

「はい、では私はこれで」

「またええネタ浮かんだら呼ぶわ、ほなまた」

レニは呆れたように笑んで、独房を後にした。そして、自分と呼んでいた不機嫌そうな少年を見つめて、謝罪を述べた。

「すみません、つい長話しちゃって」

「遅い！アイツの最近話すことなんか九割は下らん、次から無視しろ、いいな！」

レニは思わず我慢していた笑みを堪えきれず笑い出した。車椅子に座っていた少年はムツとしてレニを睨んだ。

「何だ？」

「い、いや、すみません、やっぱり兄弟だなあって」

「フン、じゃあお前もそっくりだ、残念だったな、レニ」

レニは笑うのをやめ、車椅子を持った。不機嫌そうな態度を崩さない少年に、レニは一本の飴を差し出した。

「はい、どうぞ」

「…何だこれは、僕は人形だから食べられないぞ」

「いいんですよ、飴は簡単に腐らないんですから。飾っておいて下さい、ロイルさん」

少年、ロイルはレニを見上げて、鼻を鳴らした。

「あーあ、ヴァレスが余計なことするから死にぞこなった。最後格好つけた僕はどうしてくれる」

「中々様になってましたよ」

「しかもこの体、やたらとレインが介入してきて不便だ、もっとスラツとした青年の体をあの馬鹿な兄貴に作らせる」

「残念、ロイルさん、彼人形作り禁止されているんですって」

レニは彼をアクアドームの中央に連れて行った。トレストウーヴェはそんな二人を見つけて、手招きした。

「何してんのよー！ロイル、レニ！写真早く撮るわよー！」

レニとロイルは顔を見合わせ、レニは車椅子から手を離すと走りだした。

「ロイルさん、競争です！」

「何だと！？卑怯な真似をするな、レニ！」

「早く早く！」

カシャ、と軽快な音と共に、シャッターが切られた。

兵士が集めた写真に一際目立つ車椅子から転げ落ちたロイルの写真が刻まれた。

その中心にはやし立てる軍服を着たヴァレスの姿があり、その胸元にはピンク色のリボンがロザリオと共に輝いているのだった。

ダークプラント、それは人の心に根ついた負の感情。誰もが持っているものであり、憎悪を育てるか幸せな道へと進めるのかは、あなたの選択しだいかもしれない…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3438m/>

Dark plant

2011年11月16日17時02分発行